
大魔王が倒せない

はぐれっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔王が倒せない

【Nコード】

N2219W

【作者名】

はぐれっち

【あらすじ】

突如として現れた大魔王を自称する少女は瞬く間にある国を支配し、自由気ままな大魔王ライフを送り始める。そんな大魔王の最強バトルストーリー。

「1章：大魔王 対 勇者」

「2章：大魔王 対 大魔王導師」

「3章：大魔王 対 異邦人」

3章開始しました。2章から3章の間はちらつと番外編にも書かれていますのでそちらも参照してください。大魔王のひみつ（大魔王が

倒せない番外編)です。

<注意>

【残酷な描写あり、は保険ではありません。人体欠損系の描写があります。苦手な方はご注意ください】

大魔王があらわれた

「こんにちは。戦争をやめていただきたいのですが」

突如として戦場に現れた少女は涼やかにそう言った。

まさに激突せんばかりだった両軍は戸惑った。その少女がどこから現われたのかは誰も見ていない。気づけばこれから戦場の中心となるはずの場所に一人たたずんでいた。

とても綺麗な少女だ。髪と瞳は黒。腰まである黒髪を白いリボンで一本にくくっている。ドレスは基本黒だが袖や裾などのエッジ部分は白いフリルがしらわれていた。肌は顔と手足の一部しか覗いていなかったが、抜けるように白い。

ほとんどの者がその美しさに目を奪われた。

だがそれも一瞬だ。

戦争をやめろと言われて今更やめられるわけがない。戦場の真ん中に少女が一人立っている。それだけのことで止まるわけがなかった。

両軍が号令をかけた。兵たちが手に持った剣や槍を振りかざし突撃を開始する。怒号とともに雪崩のような勢いで両軍が激突する。この騒乱の渦の中で一人の少女などは嵐に翻弄される木の葉よりも儂い。そう思われた。

そこに雷鳴が轟いた。晴天の霹靂とはこのことだろう。雲ひとつない青空から突如としてそれは降り注いだ。

電撃が両軍合わせて2000名を一度にうちすえる。ひとたまりもなかった。

半数のものがそれで倒れた。なんとか耐えたものもすぐには動くことが出来ない。

まだ立っている者たちが空を見上げる。上空10m程の空間に巨大な光り輝く玉があった。その下では黒衣の少女が手のひらを上

して右手を上げている。あきらかにこの少女の仕業と見えた。

「私はやめてくださいと言ったんですよ？　なんだか聞こえていたけど無視されたという感じで気分が悪いですね」

少女があたりを見回している。頬を膨らませ拗ねているようだった。

「わかりました。そんなに戦争がお好きなら私と戦争しましょう。私が勝つたら言うことを聞いてくださいね」

独り言ではあるがその言葉は先ほどからの発言と同じくその場に
いる全員に聞こえていた。特に大きな声ではないが、自然と通る声
だ。

両軍共に戦争どころではなくなっていた。場はすでに少女に支配
されている。少女の言うように少女と戦う以外に道はなかった。

なんとか動けるものがよろよると少女へと向かう。だが兵たちを
待っていたのは再びの雷撃だった。

数人を除いてほとんどのものが地に伏した。

少女は静寂に包まれた戦場を見渡す。その立っていた数人と目が
あった。にこりと微笑む。

「降伏されるなら伏せてくださいね」

戦意など残っていない。なんとか今までの攻撃に耐えた者たちも
あわてて身を伏せる。

「さて、両軍の代表者の方、立ち上がっていただけますか？　お話
があります」

両軍から代表者と思しき人物がそつとあたりを伺いながら立ち上がった。どちらも全身甲冑を身にまとっている。電撃で所々焼け焦げているがそれほどダメージは無いようだった。

少女の攻撃はそれなりの手加減が加えられている。目的は電流による一時的な神経の麻痺だ。

「ではこちらに来ていただけますか？」

代表者たちはよたよたと少女の元へやってきた。兜の隙間から見えるその顔は青ざめている。

「こんにちは」

少女は何事もなかったかのように挨拶をした。

「私の勝ちですよ？ 戦争をやめてもらえますか？」

北側からやってきたマテウ国の代表者は思う。やめるものにもこれ以上の戦闘が無理だ。だが、この少女が求めるのはそういうことなのか？

即断が出来なかった。もう一人の男、セプテム国の代表者を見る。こちらにも迷っているのか反応しない。

「む？ 何か反応が鈍いですね。答えにくいことなんでしょうか？ では別の質問をしましょう。あなた達はどこかの国の軍隊でこれから戦う所だったんですよね？ 所属を見分けるにはどうすればいいですか？ その外套の色で区別出来るんでしょうか？」

代表者の二人は愕然とした。この少女は我々が何者かを理解しないまま攻撃を仕掛けてきたのか？

「あ、ああ、我々マテウ国のものは緑色を身につける。そいつらセプテム国は赤だ」

あれほどの攻撃を見せられた後に余計な事を言う気にもなれずマテウ国軍の代表者は問われるまま素直に答えた。

「なるほどわかりました。ではあの方たちはマテウ国の方だったようですね」

何か納得をしているが、それを見てマテウ国の代表者は嫌な予感がした。あの方たち。そういえば略奪に出た一部隊が帰ってきていない。

「ではマテウ国にしましょう。そちらの赤の方。セプテム国でしたか。あなたは撤収していただいてかまいませんよ」

「いいのか？ まさか油断した所を攻撃してくるなんてことは……」

雷撃はあたり一体に雨のように降り注いでいた。逃れることなどできないし、皆殺しにするつもりならとっくにしているだろう。そんな警戒すら無意味だったが思わず口をついた。

「そんなことはしませんよ。大魔王の名に賭けて誓いましょう」

二人は思っても見なかった名が飛び出したことに驚いた。人間は有史以来魔族と争いを続けているためそれなりに魔族については研究を進めている。それによれば魔族は小集団のコミュニティを魔王という名の頭領を中心に形成しており、それぞれのコミュニティ同士に緩やかな繋がりがあるとされていた。そしてそのコミュニティ全てを統括するものこそが大魔王とされていた。

なぜ、この場に大魔王が現れるのか？ マテウ国軍代表が考え込んでいるうちにセプテム国側は撤収を始めていた。少女が言うように攻撃はされていない。

「さて、あなたにはまだ話があります」

大魔王がマテウ国の代表者の方を向いた。

「先程言いよんでおられたのは、私の意図をわからなかったということでしょうか。ではこう言えばどうです？ あなたたちには恒久的に戦争をやめてもらいたいです」

恐れていたとおりだった。この場での戦闘をやめることは出来るだろう。実際にこれ以上の戦闘は無理だ。だが、戦争そのもの、戦略レベルの判断が現場指揮官に出来るわけがない。

「なぜだ？ なぜ戦争をとめようとする？」

「私はすぐその村はすれに住んでいるんですが、側で戦争されるのがとても鬱陶しかったからです」

「なに？」

「まあ、鬱陶しいぐらいならまだ我慢も出来ますが、略奪にやってきましたからね。戦争をしたいならやりたい人だけで勝手にやっていくださればよかったです……」

「ば、馬鹿な！ そんなことか！」

中立地帯での略奪は恒例行事だ。中立地帯には国からあぶれた者達がそこかしこに小集団を作っている。どこの国にも属さない者たちへの略奪行為を咎めるものはどこにもいなかった。そうされたくなければ国の庇護下に入り税を納めれば良いというのが国側の理屈だ。

「そんなことじゃないですよ。小さい子が泣いていましたよ。あなたたちの馬鹿な行いのせいで」

少女が呆れたように言う。

知ったことか！ マテウ国の代表者は激昂しかけた。中立地帯の子供が泣こうが死のうがどうでもいい。

だがここで怒りに任せて何をしようともこの戦況を覆す術がないことはあきらかだった。激情に身を任せこの少女に反論するのはただの自殺行為だ。

「あなたでは無理なようです。ではマテウ国の王様に話をしに行きましょう。そろそろ引越そうかと思っていましたので丁度いいです」

想定内の最悪の自体へと話が進んでいた。戦争の最終決定権は王にある。戦争をやめられるのも王以外にありえない。

「ま、待て！ 部下の狼藉の責任は私にある。私の身を持って償うことでは代えられないだろうか？」

「でも戦争はやめられないんでしょう？ あなたの先程からの態度を見ていると、略奪もとめられなさそうですか？」

略奪は戦争参加者の当然の権利とされている。一介の指揮官程度でどうこうできる話ではなかった。戦争をしているのは全てが貴族だが3等貴族と呼ばれる領地を持たない貴族たちの中にはそこらのゴロツキに等しいものたちもいる。反発は必至だろう。

「では行ってきますね。王様に会ってきます」

そう言つと少女はマテウ国軍に歩いて行く。マテウ国の代表者は何もできない。どうしようもない。

少女は陣の中程まで来てからふと立ち止まるとそばにいた兵に声をかけた。

「なんとなくこちらに来ましたが、マテウ国というのはこのまま北に行けばいいんですか？ 国王はどちらにいらっしやいます？」

「……北へ行けばマテウ国だ。街道沿いに北上すれば首都ベイヤーに辿り着くが、ベイヤーはほぼ国の中心部だ。ここからではかなりの距離がある」

逆らう気などまるで起こらない。問われるままにただ答えた。

「徒歩ではどれぐらいかかるでしょうか？」

「一週間というところか」

「そうですね。結構かかりますね。まあいいですのんびり行きます」

そう言いおいて少女はまた歩き出した。

その場にいたものたちはその美しい少女が立ち去るのを呆然と見ているしか出来なかった。

一週間が過ぎた。

今少女は首都ベイヤーにある王城内、王の私室にいる。

彼女はただここまで歩いてやってきた。制止する門番も、衛兵も、近衛兵も一切を無視してだ。ただ歩く彼女を誰も止められなかった。剣も槍も弓も触れることすら出来ない。少女が手刀を一閃するとそ

れらにはあっさり切り裂かれた。

魔法にいたってはあたる直前に掻き消える。為す術がないことを自覚した兵士たちはただ黙って見ているしかない。

少女の襲撃が騒ぎになる頃には王城の奥深く、王の私室へと侵入を果たしていた。

さすがに王を守護する近衛兵はたとえ攻撃が通用しなくとも傍観していることはない。その身をもって王の前に立ちはだかった。

それを邪魔とみた少女は電撃を放つ。弱めに放ったそれは人間の動きをしばらく止めるには都合がいい。近衛兵も王も全てがその場に崩れ落ちた。

「さて、お話があるのでやってきたんですが、ずい分なお出迎えです
すね」

「ふざ……けるな！ 貴様……何者だ……暗殺者か……」

王は息も絶え絶えながらも、気丈な姿勢を見せた。

「いえいえ、あなたにお話があつてきただけですよ。南の平原で隣
国と戦争をしてますよね？ あれをやめていただきたいと思いまし
て」

南のツトモス平原。隣国であるセプテム国との間にある中立地帯だ。その平原自体には特筆すべき点はなかったが、そこが中立地帯であり、隣国との緩衝地帯であることが重要だった。そこを得る必要は無いが、セプテム国に奪われてしまうわけにもいかない。

双方に同様の思惑があるため、定例行事のように小競り合いが行われていた。ある程度戦い深刻な被害が出る前に引く。茶番のようだが、今更やめるわけにはいかなかった。

「なぜ……貴様などに従わねばならぬ！」

「なるほど…… お願いでは駄目ですか。死んでも私の言うことなんか聞かないって感じですね」

少女は倒れ伏す王の元へと近寄ると、王が身につけていた緑色のマントを剥ぎとった。

室内で外套を着続けるといっても変な話だが、王権の象徴であるレガリアを目の届かない場所に置いておく気がなかった王はそのマントを常に身につけていた。

「これはレガリアですね？ レガリアの所有者が王だということですのでこれで私が王様です。これで私が戦争はやめましょうと言えばいいんですね」

「返せ！」

王が必死に腕を伸ばす。それだけはまずい。レガリアは王権そのものだ。それを奪われるということは、国がまるごと奪われてしまうということだ。

少女がマントの留め具になっている宝玉を中程でひねる。半球状の蓋が外れると内部にあった針の様な物が露出した。

先程から王はこの少女の正体をなんとか推測しようとしていたが、必死に行っていた思索は全て吹っ飛んでしまった。何故だ？ 何故知っている？

宝玉の中には受容器レセプタと呼ばれる針があり、それに血を与えることで所有権の移譲を行うことが出来る。少女の動きには一切迷いが無かった。その役割を知っているとしか思えない。

「ここに私の指先でも押し付けて血を与えればレガリアは保留状態に移行します…… 在位年数は？」

レガリア保有国ではレガリアの所持者こそが王となる。そこに血

筋や身分、能力は一切関係無い。そのためレガリアの所有権移行手続きに関する事は王族のみの知る最高機密に属した。上位の貴族といえどもこの事は知らない。王位の継承は血族間で行われると素直に信じられていた。レガリアは王のみが持つことの出来る強大な魔法具であるとは広く知られているが、実態がその逆であることを知る立場はかなり限定されることになる。

「ぼーっとしてないで質問に答えてください。移譲しちやいますよ？」

「……10年だ」

王はまとまらない考えに没頭していたが、ぼそりつつぶやくように答えた。

強制移譲はまずい。この国ではなおさらだ。そして少女はその事を知りながらなぶっている。王はそう考えた。

マテウ国は本来、極寒の地だ。1年のほとんどを雪と氷に覆われ、人が住むのはほぼ不可能に近い。そのマテウ国が年中快適な気温に保たれ常春の国と呼ばれているのはひとえにレガリア、春風の外套の恩恵だ。

「では10日というところですね。耐えられますか？」

レガリアは強制移譲中は保留状態となり全ての機能を停止する。その際、前所有者が再登録をすることで移譲の取り消しを行うことが出来る。保留状態は前所有者の所有年数を日数に換算したほどの期間だった。

「本来、奪われたレガリアを取り返しやすくするための仕様だと思っのですが、この国だとまずいですよね」

この国の者は皆等しくあたりまえのようにレガリアの恩恵を享受している。この国が本来極寒の地であったことなど誰も意識してはいない。そんなことははるか昔のおとぎばなしとしか思われていなかった。

「10日もあれば全滅でしょうか。冬の備えなんてまったくありませんから、1日も持たないかもしれませんね」

少女はさつきから同じ内容を繰り返して語っていた。要は正当な移譲をしなければこの国は滅ぶということだ。

王は考える。自殺をするというのはどうだ？ 所有者が死んだ場合、レガリアに登録された継承順位に従って所有権は自動的に移譲される。その際は保留状態にはならないので機能停止にはならない。だがレガリアがこの場にある時点でそれは意味がなかった。篡奪者は誰に継承されようが勝手に強制移譲を行えばいいのだ。宝物庫にでもしまいこみ厳重に保管していればよかったと後悔した。それならばこの化け物じみた少女がレガリアに興味を抱くことはなかったかも知れない。

王族にのみ伝わるレガリアの伝承に思いを巡らせるも結局移譲以外にこの国を守る方法を思いつけなかった。

「わかった……レガリアを……譲ろう……」

苦渋に満ちた声を絞り出すように王は言った。

「ありがとうございます。では一度お返ししますね」

そういつと少女はマントを王に手渡した。受け取った王は留め具の中にある受容器レセクタと呼ばれる針状の物に触れる。

「貴様……名はなんと？」

「ああ、移譲に名が必要でしたね。本名はすごく長いので……そうですね、大魔王と。私のエイリアスです。この世界でただ一つ私のみを指し示す言葉ですので名の代わりになるでしょう」

「……所有権を大魔王に委譲する」

特に複雑な手続きは必要としなかった。明確な言葉さえあればレガリアは処理を行う。特に何が起こるわけでもなかったがこれで移譲手続きは完了した。

王は黙ったままマントを差し出した。少女はにこやかにそれを受け取る。王はその笑顔に一瞬とはいえ状況を忘れ魅入ってしまった。

「それで……王となって戦争をやめさせ……どうするのだ？」

「戦争やめていただけならそれでいいのです。国家元首はあなたの上にかまいませんよ。今まで通りにお過ごしください。私は王の上立つ大魔王ということになります。何かしてもらいたいことがあれば言いますしそれには服従してもらいますけど、今のところ何もありません」

「戦争は我が国の思惑だけで止まるものではないぞ……」

「その場合は相手国の方にもお話をする必要がありますね」

お話。ぞっとした。セプテム国からもレガリアを奪うのかと思うと背筋が冷えた。いまだレガリアの複数所持を果たしたものはいい。それを行うというのか。

「さて、春風の外套なのでハルさんでいいですね。ハルさん、ユーザインタフェースを音声モードにしてください」

「……了解しました。ユーザインタフェースを音声モードに移行します」

王は目を見開き驚愕した。

「レガリアが喋るだど！」

「音声以外にもインタフェイスはいろいろありますよ？ ではハルさん、外見の変更は可能ですか？ ま緑なマントというのは趣味じゃないのです」

「はい、外套の範疇であるならどのような形態を取ることも可能です」

「では短めの白いケープをお願いします」

マントは瞬時に指示通りにケープへと姿を変えた。少女はそれを羽織るとその場でくるっと一回転してみた。

「どうです？ 似合ってるでしょうか」

王は薄れ行く意識の中で可憐に微笑む少女の姿を見た。

まるで人間にしか見えないな。

そう思ったのを最後に王は意識を失った。

しばらくして国中に高札が掲示された。

高札は雨に濡れるのを防ぐために簡単な屋根のついた板に文字を書いたものだ。それに大人の目の高さぐらいになるように棒に固定して地面に突き刺したり、街の中だと専用の掲示場がありそこに掲示される。高札は王国から国民への公的メッセージの発信手段であ

り、法令の掲示などに使われていた。街中では文字の読めない者のために役人を配置し読み上げさせることもしている。

マテウ国の首都ベイヤーの中心に位置する広場。その一角は戸惑いの声にあふれていた。

「なあ、みんな騒いでるけどこれ何が書いてあるんだよ」

「ああ、なんでも王様の上の位が出来てそれが大魔王なんだってよ」

「なんだそりゃ、大魔王っておとぎばなしかよ」

「そういや、魔族の王が魔王で、その魔王の上に大魔王ってのがいるって聞いたことがあるな」

「まさか、魔族に負けたのか俺たちは！」

「いや、負けるも何も攻めこまれた覚えがないが？」

「勇者はどうしたんだよ！ こないだ魔族領に攻め込むって出陣したばかりじゃないか！」

「大魔王が出てきたって言われても……突然だよな」

「別に今まで通りで変わりはないらしいぞ？」

「そうなのか？ 別に気にしなくてもいいのか？」

結局の所、平民にとって特に何も変わらないということがわかり騒ぎは自然と落ち着いていった。

大魔王によるレガリアの奪取とそれによるマテウ国の支配。それがこの国とこの世界そのものに巻き起こる騒乱と変化の始まりだった。

1話 勇者

世界を土地という基準でみるならそのほとんどが中央大陸に占められていた。世界のほぼ全てと呼んでもいいそれは超大陸とも呼ばれており、世界の土地の約9割の面積を有することになる。

だが人類の版図はここにはない。人類にとって中央大陸は全くの謎としかいいようがなかった。有史以来、幾度も調査の手を伸ばすも成果はほとんど得られていない。

人類の大半はその中央大陸をとりまく環状大陸を活動の範囲としている。では残り1割が全て人類のものかというところすら人類には許されていない。

魔族。人類に敵対する知的種族の為だ。

魔族が占拠する魔族領と呼ばれる土地が環状大陸を虫食い状に蝕んでいた。いつから人間と魔族の対立が続いているのかさだかではないが記録に残っている最初の記述では環状大陸にある1国が魔族領、魔族の住まう国とされていた。

それから歴史が進むに連れ魔族領は奇妙な形で人類の領土を浸蝕していった。ある日突然、人間の領土内に魔族領が現れるのだ。魔族領となった土地は魔獣が跋扈し、魑魅魍魎にあふれるためおよそ人の住める環境では無くなる。その繰り返しが進むに連れ人類は徐々にその勢力を減らしていった。世界創造を紀元とする創造歴一万年七千七百年の現在において環状大陸における魔族と人類の勢力比は7対3となっていた。圧倒的な劣勢である。

人類の勢力図は魔族領に分断され、文明が断絶された。今となつては魔族領を超えた先にどのような国が人が文化があるのか、極少数の命知らずの冒険家によるほそぼそとしたやりとり以外で知るすべはなくなっていた。

人類と魔族が覇を競う舞台である環状大陸であるがこれはおおよそ3つの地域にわかれていた。環状大陸は環状の名の通り中央大陸

の周りを円状に取り囲んでいる。一部に切り込みの入った円、この形を思い浮かべるとわかりやすい。これを3等分し、中央大陸を基準に、北大陸、西大陸、南大陸と分けると大体现状の大陸間の位置関係を表せている。

このうち、かろうじて人類側が優勢といえるのが北大陸だ。人類の国家は現在ほとんどがここに集中している。西大陸や南大陸には人類に似た亜人が住むとされているが大陸間の連絡はすでに途絶えているため今となってはそれも分からない。

北大陸は現在7つの主要な国家と魔族領、そのどちらにも該当しない小国家、中立地帯からなっている。

その7つの国家のうちの1つマテウ国の西端に接する魔族領に光輝の森と呼ばれる森があった。マテウ国内では魔族領の発見順に番号で呼ぶため第3魔族領ということになる。

この地を舞台に人類対魔族、その勢力図をわずかながらも書き換える戦いが起こりつつあった。

まだ薄暗い夜明け前の森の中、4人の男女が身を潜めていた。

「しかしあれだな、魔王の住む城だつーからどんなもんかと思えば、えっらいしょばいな。木造じゃねえか」

全身を白銀の甲冑に身を包んだ青年がぼやくように言った。彼の名はフォグ、マテウ国軍内での地位は王直轄の第一遊撃隊の隊長だ。巷では聖剣の勇者と呼ばれていた。その名の所以はもちろん腰に下げられた聖剣にある。

「そうですね。私の村の村長の屋敷でもあれよりはましでしたね」

そう答えるのは鬱蒼とした森に行くには不釣り合いな貴族然とした格好の男。今の言葉どおり地方の寒村の出身のため、貴族ではないが魔法使い故にそのような装いが許されていた。名をアイゼンという。

「あたしはあの冒険家の報告があやしいと思うけどねえ。魔王城をとうとう発見した！　ってどうなんだ？」

冒険家の発見報告に異議をとねだしたのが、軽装の皮鎧を着込んだ短髪の女だ。体格は華奢に見えるが、その手に持った自らの身長をも超える、度肝抜くようなサイズの戦斧を扱えるというならかなりの膂力をほこるのだろう。彼女の名はゲルン。全くそのようには見えないが一応貴族だ。三等貴族の中でも序列が百十位のためほぼ領地には縁がないが本人は、領地なんぞあつてもめんどくさくてしかたねーだろ！　と、どこ吹く風といった様子だ。

そしてもう一人、先程からの会話に加わってこない少女がいるのだが、彼女は寝袋に包まれ夢の中だ。

この四人が先程から森の中にある魔族の集落と思われるものの観察を続けている。

彼らは第一遊撃隊に下された勅令により魔王城の偵察にやってきていた。

「村つて程でもねーな。なんだよあれ掘っ立て小屋が五、六件建つてるだけじゃねーか。あれか？　ここは魔族の限界集落か？　若いもんは皆過疎の村を見捨てて出ていきましたっけか？」

その過疎のような村の中でもまだ立派といえなくもないのが魔王城と思しき建物だ。この建物だけが二階建てで、その広さは周囲の

掘っ立て小屋で換算するなら五件分はある。

「フーかよー、その冒険者はなんであれを魔王城なんて思ったわけ？ 確かに魔族集落の発見だけでもすげーとは思っけどさあ。話盛ってんじやねーの？」

「そうですね、この認識の齟齬が作戦行動に影響を与える可能性が……」

「いいって、いいって。余計なこと考えるだけ無駄無駄！ 敵は魔族なんだ。とりあえずぶっ殺せばいいんだよ！」

フォグはアイゼンの慎重論を適当に否定した。アイゼンもここは隊長に従うことにする。

「ではどうします？ 襲撃するにしても作戦は？」

「これぐらいの規模の集落ならよ、まとめてどかーんと吹っ飛ばすとかどうよ、魔法でなんかねーか？」

「そうですね、ここまでの戦闘ではあまりお役に立てませんでした。が建物ごと殲滅するということであれば魔族のスピードに翻弄されることもありませんしいけるかもしれませぬ」

「ゲルンはなんかないのかよ」

「ああ？ あたしが何か作戦立てて戦ったことなんかあつか？ あたしが馬鹿なんは知ってるだろうが！ 聞いてどうすんだよ、突っ込んで暴れりゃそれでいいだろうが！」

「いや、それはさすがにどうよ、お前一応軍人だぞ？ ちつとは頭使えよ」

「お祈り」

「え？」

いつの間にか寝ていたはずの少女が起きてきていた。真っ白い神官服をきた愛らしい少女だ。若くして中央正教の神官位に上り詰め、

街では聖女もかくやといった扱いを受けている。実際に聖人に列する動きもあるらしい。彼女は正式には遊撃隊の隊員ではなく、教会から派遣されている形になっていた。名はマキノという。

「朝になりました。お祈りの時間です」

そういつて彼女は自分の背丈ほどもある箱を展開し組み立て始めた。この箱には底に車輪がついていて、彼女はここまでこの箱をひっぱりながら運んできた。

「いやいや、こんなところかよ」

今までも半ば無理矢理、朝夕の礼拝に付き合わされて来た遊撃隊だが、魔王城を目前にしてまですることだとは思ってもみなかった。

「場所は関係ありません」

そういう間に組み立ては終わっていた。簡易聖堂と呼ばれるものだ。中央正教では祈りは聖堂で捧げると定められている。簡易聖堂は聖堂としての要件を最低限満たすものだがマキノのものは通常の物と比べてもやけに大袈裟に見えた。展開状態だと大人が両腕を広げた程の幅がある。平民の一般信徒の家庭にも聖堂はあるがこれよりもずっと規模は小さい。

「せめて朝飯食ってからにしね？」

ゲルンは少しひきぎみに言った。腕力でなら圧倒出来るはずだがどうも強く出られない。

「いえ、このような場所での祈祷では信仰が下がってしまいますの

で、信仰の強化のためには朝起きて直ぐのお祈りが効果的です」

「いやいや、俺ら徹夜してるじゃん？」

「徹夜明け一番の朝のお祈りでも代用は可能です」

この場にはマキノの謎信仰理論に反論出来る者は誰もいなかった。渋々、フォグとゲルンが聖堂に向かって祈りを捧げる。アイゼンは魔法を使うために悪魔と契約をかわしており中央正教の信者ではない。マキノは異教徒、無神論者には寛大で信仰を押し付けるようなことはしないのでこれが原因で揉める事もなかった。

「ゲルンさん」

マキノは優しく微笑かける

「は、はい」

対するゲルンはいたずらげられる直前の子供のような微妙な表情を見せた。

「三十点のお祈りです。少し良くなりましたよ、ぎりぎり、かろうじて、どうにか神に対しての礼を失しないものでした。この調子で明日以降もがんばってください」

ゲルンはほつと胸をなでおろす。

「勇者フォグ、二点です」

ゴミを見るような目というのが正ににそれだった。美少女の蔑みに性的興奮を覚えるような輩にとっては最高のシチュエーションと言えるかもしれないが、あいにく勇者にはそのような趣味はなかつ

た。今後のことを考えるならこれを楽しめるようになったほうがいいのかもしれない。

「なんでだよ！　ちゃんとやったじゃねーか！」

「言語体系が違うのでしょうか？　あなたがなにを言っているのかわかりません。勇者でさえなければバラバラにしてうちのポチの餌に混ぜてポチがたべる寸前に蹴飛ばしてやるところです」

「わけわかんねーよ、なんだその遠まわしな脅し文句は！」

「あなたが犬も食わない生ゴミ以下だというのはこの際置いておくとしても、聖剣の能力は使用者の信仰が影響するのですよ？　勇者としてあり続けたいなら信仰を疎かにすべきではありません！」

「わかつたよ、やり直せばいいんだろぅが！」

「やり直す？　……お祈りを……やり直す？」

マキノの目から光が消えた。

これはまずい、狂信者の、いや狂神官のスイッチが入りかけている！

フォグは慌てて謝罪の言葉を口にした。

「いや、すまん、ちゃんとやるから、な、怒るなよ、次はちゃんとやるから！　な！」

我を忘れかけてはいたがまだ聞く耳は持っていたようだ。マキノは謝罪を受け入れた。

「朝二度祈るなど言語道断です。いいですか、今から私が祈りを捧げます。低脳勇者でもわかるように子供用のお祈りをさらに簡略化したものをお見せしますので明日からはこれを行ってください！」

そういつとマキノは簡略化したという祈りを捧げた。その作法は折り目正しく、まさに神官というものだった

「ええ！ そつちの方が簡単じゃん！ あたしもそれ……」

マキノと目があったためそれ以上言うことができなかった。

「ゲルンさんは大人の女性用をちゃんとやってくださいね」
「はい」

ゲルンは素直に頷いた。

マキノはてきぱきと用の済んだ聖堂を元の箱型に戻していく。それが終わると全員で朝食を取った。

「さて、お祈りも朝食も済んだ所で今後のことを相談したいのですが」

「ああ、そうだったな、忘れるところだったぜ！」

ここで忘れて他に何をするのかと言いたくなかったがアイゼンは自重した。お祈り騒ぎの間にすっかり朝日が登ってしまっている。払暁が襲撃には適していると言われるがその期は既に失われていた。

「日が登ってしまった今から襲撃をかけるというのも間抜けな気もするのですが」

「まあ、もともと偵察が目的だしな。とりあえずこのまま様子を見てあそこに本当に魔王がいののか確認しても……お、なんか出てきたぞ」

魔王城から出てきたのは偉丈夫とっていいだろう戦士然とした

男の魔族だ。袖のない単純な白い貫頭衣を着ており、むき出しの腕には黒縄をより合わせたような筋肉が盛り上がっている。その手には背丈を超える槍が握られていた。

魔族は集団ごとにそれぞれ特徴があるが、この集落の魔族の肌はどうやら黒いらしかった。

「ふむ、なかなか雰囲気のある奴じゃないか。あれが魔王か？」

フォグがそう判断したのは、ここにやってくるまでに遭遇した魔族よりも格段に強そうに思えたからだ。

「魔王城を発見したって冒険者はあいつを見たのかねえ。まああれならわからんでもないか」

妙に冒険者に固執するゲルンだった。

「あれは、投槍だな。狩りにでも行くのか？」

魔王らしき魔族は館から出た後は何をするわけでもなくただ立っていた。しばらくすると周辺の小屋からも魔族が出てきた。これも男だ。そろそろと他の小屋からも出てくると館の前に集まり始めた。全員がその手に槍や弓を持っている。服装も似たり寄ったりだった。

「総勢十五名ですか。魔族の家族形態は知りませんが人間に当てはめるなら男が全員出てきたといった所でしょうね」

「全員、遠距離武器だし狩りに行くんだらうな。で、この中だとやっぱり最初に出てきた奴が一番強そうに思えるな。ゲルンはどうよ」

「ああ、間違いないな。あいつが魔王だ」

「……このあたりで一旦撤収しませんか？ 敵の構成もだいたいわかったことですし」

アイゼンはだんだん嫌な予感がしてきた。人払いの魔法をかけているので森の中にいる限りはまず気づかれることはないはずだが、それでも魔族が近くに寄ってくれば発見されてしまうだろう。狩りが目的だとしてもこちらに来ないとも限らない。

「そつだな一旦引き返して他の遊撃隊と合流すれば戦力的には……ン？」

「どうしました？」

「いや、今魔王と目があったような……」

四人は魔王に注目した。確かにこちらを見ている気がする。魔王だけでなく魔族全員がこちらを見ていた。フォグの目はまっすぐ魔王をとらえ、そして魔王もまたフォグをまっすぐに見つめていた。

「狩られるのつて……もしかして俺ら？」

魔王が槍を振りかぶった。最大限まで背をそらし力を溜める様は引き絞られた強弓を思わせる。槍の穂先はカタカタと音を上げ、徐々に早くなる振動はやがてヴウンという唸りをあげるにいたった。高速振動する穂先は白熱化し光を放ち始める。無理やり注ぎ込まれる力に耐え切れずこのままでは槍が持たない。誰もがそう思う瞬間魔王がその力を解き放った。

槍は空を裂いた。雷鳴の如き唸りを上げ瞬時に森に到達し、そして森が爆発した。

フオグ達のいた地点を中心に樹々は放射状に吹き飛んでいた。根こそぎだ。根っこからまるごと吹き飛ばされた樹々は、さらに他の樹々を巻き込んで被害を広げ、森の中に空白地帯を作り出していた。巻き上がった土砂が、一帯の視界を妨げる。爆発の余波はいまだおさまらず砂塵を攪乱し小規模な嵐さえ巻き起こっていた。

しばらくして砂嵐が、砂煙程度の規模におさまつてくるとぼんやりと爆発の中心に何かがあるのが見えてきた。魔族たちもこの間、黙って様子を見ている。

そこにあつたのは聖堂だった。

「げほっ、げほっ、なんだこりゃ、ひでえな、なんにも見えねえ」

「なんですか、あれは？ 魔王というのはここまでのものですか！？」

「いや、あたしはそれよりこの聖堂の頑丈さに恐れいつてるんだけど……」

「当然です！ 神の宿りし聖堂が魔王ごときに碎けるわけもありません！」

「ああ、いやすまんかった。これからは本当にちゃんとお祈りするわ。神様さまさまだな」

「しかし……少し疑問に思ったのですが……マキノさん、あなた礼拝の度に聖堂を手作業で展開してましたよね？ 今この聖堂が、勝手に私達の前に飛び出して勝手に展開したように見えたのですが……」

「神のご加護です！」

マキノは胸を張った。それは信仰にたいする一片の曇もない、信者とはかくあるべきという姿だった。彼女には神の使徒たる神官を害することなど出来るはずがないという狂信的な確信があった。

「でだ、どうすりゃいい？ マキノの信仰バリアーであれが防げるとしてもだ、あれを連発されりゃどうしようもねーぞ」

「そう何度もあの規模の攻撃はないと信じたいですね」

「今の攻撃は結構溜めがあった。接近してその暇あたえなきゃどうにかなるだろ。まあいつもの作戦でいくしかねーな」

「その場合はまた私の出番はないわけですね」

魔族相手に遊撃隊が主に取っている作戦というのはこうだ。気づかれる前に、アイゼンが魔法により攻撃。その後マキノが神聖魔法により魔族を弱体化させ、そこにフォグとゲルンが突っ込んで暴れるというものだ。気づかれてしまっている状態ではアイゼンの発動に時間のかかる魔法は使いづらいし、神聖魔法が発動してしまった後ではアイゼンの魔法は相殺されてしまうためすることがなくなってしまう。

「魔王は俺がやる。ゲルンは周りのやつを頼む」

「了解！」

「魔王を除いても14名は一人では多すぎるでしょう。私もいきま

す」
マキノが前線に出てくるのは珍しい。大抵の場合は神聖魔法「神の牢獄」の維持に努めて後衛に待機している。

「じゃカウントダウンな、3、2、1、GO！」

合図とともに3人が聖堂の影から飛び出す。まだ視界はよくないがまずは集落の方に駆け出す。

砂塵を抜けるとそこには15人の魔族全員の姿があった。この魔族の行動は、魔王の攻撃に全幅の信頼をおいていたがために致命的な油断となった。まさか無傷で切り抜けるとは思っていなかったの

だ。15人全員で行動しているのも生き残りがいた際に中途半端なことはせず全員で押し包み殲滅するためだった。

まずは戦斧を腰だめにしたゲルンが飛び出す。彼女は周り全てが敵といった戦に滅法強い。おあつらえ向きの状況だ。

「うらあああああああ！」

何も考えずただ戦斧を振り回す。初撃で3人の魔族が両断され吹き飛んだ。魔族側も驚愕から立ち直り一旦距離を取って手にした弓や槍を打ち放つ。だがそれは暴風のように無茶苦茶に振り回される戦斧に阻まれゲルンには届かない。

ゲルンに巻き込まれないように十分距離をとってフォグが出た。魔王を視認すると聖剣を鞘より抜き放ち振りかぶった。そのまま一気に距離を詰める。振りかぶっただけの聖剣が輝きを放った。これが聖剣の聖剣たる所以だ。この光は魔族の動きを一瞬だが止める。そしてその一瞬があれば魔族を屠るには十分だった。フォグは聖剣を手にして以来魔族には全く苦戦していない。この聖剣の力により魔族退治は害虫駆除程度にしか感じなくなっていた。

「死ねや、害虫が！ 人間様なめてんじゃねー！」

聖剣を魔王に上段から叩きつけた。動きを封じられた魔王を両断するはずの聖剣の軌跡。だが、それは魔王の右腕によって防がれた。上にあげた魔王の手首あたりで受け止められている。

「人間風情が、我が槍を防ぎ、我に一太刀浴びせる……これが勇者というやつか？」

「は！ 余裕こいてんじゃねー！」

フォグは聖剣に力を込める。聖剣のさらなる能力が発動した。剣

と手首の鍔迫り合いのようなものはあっさりとその天秤をフオグに揺らす。手首を切り飛ばし、後ずさった魔王の胸元を切り裂いた。

聖剣は魔族に対して異常なまでに効果のある対魔族専用の武装だ。魔族は触れただけでもただでは済まない。

「貴様……」

魔王は己の不利を悟った。一対一では対抗手段がない。聖剣の輝きは事前の覚悟さえあれば多少抵抗できるが一瞬動きが止まるのは避けられず、そして受けてしまえば問答無用で切り裂かれる。

魔王は部下を見た。数は魔族側の方が多い。見たところ飛び出して来た敵は三人だった。数で押せばなんとかなるだろうと期待したがそこには予想外の光景が広がっていた。

「……第五の御使いが鐘を鳴らす。汝信仰を示せ。イネレクの民は一番の歌謡いの舌を引き抜き御使に捧げた……」

「……第六の御使いが笛を吹く。汝信仰を示せ。イネレクの民は一番の鍛冶の右腕をもぎ取り御使に捧げた……」

マキノが歌うように神聖魔法の祈祷を行っていた。そこにあるのは理不尽で一方的なものだ。

ゲルンへの攻撃を無駄と悟った魔族はマキノを標的と定め矢を放った。が、当たらない。ゆっくりと無造作にこちらに歩いてくるマキノだ。狙いを外すなどありえない距離で放った矢はなぜか当たらない。

マキノは神聖魔法の発動に必要な呪文を唱える。経典にあるイネレクの民の章だ。驕り高ぶったイネレクの民に神の御使いが信仰を問いただし、民が信仰を示すために試行錯誤する。最初は工芸品や金品などといった物質的なものを捧げることから始まるが、徐々に苦痛や生贄を捧げていき、最終的には全ての民が身を投げ出すがそ

れでも神は許さないといい身も蓋もない話だ。

その故事になぞらえた現象が魔族の身におき始めていた。

舌が抜け、目が抉られ、腕をもぎ取られる。一人に起きる現象は一つのため壊滅にはいたっていないが、苦痛に身をよじれば、ゲルンの戦斧が襲いかかる。詠唱が進むほど苛烈な内容になっていくため後の方の現象の餌食となったものはほぼ即死だった。

「と、こんなものでしょうか。第十四の御使いまで詠ってしまいますよこの場の全員が死にかねませんし」

「マキノちゃん……」

ゲルンは呆れた顔でマキノを見つめた。今までは「神の牢獄」を使うマキノしか見たことがなかった。神の牢獄は一定範囲を神の恩寵で困り範囲内の魔族を弱体化させる神聖魔法だ。マキノの信仰が加わった神の牢獄は、弱い魔獣程度なら消しとばすが、それでも神聖魔法というのは怪我の治療や支援に使うものだと思っ込んでいた。

「で、魔王さんよ、お仲間は全滅だぜ！」

フォグが勢い込む。嵩に掛かって連撃を加えた。魔王もなんとか抵抗しようとするも、いちいち動きを止められるため完全には避けきれない。致命傷とはいえないが、それでも小さくない傷がだんだん増えていき、反撃もままならないまま魔王は地に膝をつきその動きを止めた。

「まあ、なんだ、最初の攻撃には焦ったが聖剣だけで方がついたな。精霊魔法も見せてやりたい所だったか」

フォグは聖剣を肩に担ぎ上げ魔王を見下す。勝負は決したとフォグが確信した時、日差しが一瞬陰った。

鳥だ。

空の彼方からあらわれた鳥はゆっくりと降下し魔王の肩に止まる。

「使い魔でしょうか？」

「うお！ アイゼンかよ、急に出てくんないよ」

聖堂の影にずっと隠れていたアイゼンがいつの間にかフォグ達4人の間に立っていた。

「大勢は決したようですので危険はないかと思ひまして」

「なんかお前、今回あんまり役にたつて無いよな？ 人払いの魔法も見破られたし、攻撃にも参加してないし」

「それはまあ、魔法使いという以前に参謀的位置づけでもありますし、いちいち前線に出なくてもいいかとは思つのですが」

苦笑気味にアイゼンは言うが、役に立っていないことは少し気にしていた。

「くくくつ、ははははははっ！」

魔王の哄笑が響き渡った。何がそんなにおかしいのか、死にかけの体を揺すつての大笑だ。

「ははははははっ、貴様らに面白いことを教えてやるう……マテウ国……貴様らの国だろう？ 落ちたぞ」

「は？」

フォグ達は何を言われたのか分からなかった。

「我らと遊んでいる間に、貴様らの国は落ちたといったのだ！ 残

念だったな！」

「負け惜しみにしちゃ、痛々しすぎるぞ、お前。魔王らしく潔く死ねよ」

「ああ、殺すがいい。しかし、大魔王とはな！ あれが何なのか……」

フォグは肩に担いでいた聖剣を振り下ろした。袈裟懸けに断たれた魔王の半身が地に落ち、肩の烏は一声鳴くと飛び立った。

「なんだよ、気分わりーな、こつちが負けてるみたいない感じじゃねーか」

「大魔王とは一体……。とにかく館を搜索しレガリアを破壊しましょう。そこまで出来れば残党は問題ないはずです」

館内の搜索はあつけなく終了した。入ってすぐの広間にご丁寧に鎮座していたからだ。レガリア、侵食の宝玉。人類を悩ませる魔族領発生の原因だった。侵食の宝玉は、時間と共に複製を産むというやっかいな性質を持っている。

聖剣の一太刀を浴びせると宝玉は簡単に壊れた。レガリアは破壊出来ないとされているのでこれは複製だと判断出来る。

搜索を終えた勇者フォグとその仲間たちは急いで国へと戻ることにした。

2話 邂逅

マテウ国の最高権力者が交代してから一週間が過ぎた。ほとんどの国民にとっては特にこれといった事件は起こっておらず、今までと変りない生活を過ごしていた。

少し変わった事があるとすれば、とても美しい少女を街で見かけるようになったことぐらいだろう。彼女は特に何をするわけでもないがベイヤーの街をうろろしている。

一番影響があったのは商売をやっている者達だ。この少女は気まぐれに店を訪れ物色し気に入ったものがあればそのまま持つていく。基本的には着の身着のままと言った様子で物をあまり持つていない様子はなく、あまり大きな物を持つていくことはないが、特に困ったのは食料品店や飲食店だ。

八百屋や菓子店では店頭で美味しそうなものを見つけてはその場で食べてしまう。飲食店ではメニューを見て内容を吟味して注文したあげく、舌鼓を打ち、礼儀正しく「ごちそうさまでした」と言うてそのまま立ち去る。

そんなことをされては困るので文句をつけるも少女はまったく聞く耳を持たない。暴力に訴えるにしても相手は少女だし気が引ける。そこで役所に訴え出ても役人も困った顔をするばかりでどうともしてくれない。明確な犯罪行為だというのに訴えは尽く退けられた。なぜならこの少女は大魔王でこの国で何をしようとして一切が免責されると言うのだ。

しかし商売人たるものこの状況をも利用できなくてはならない。彼らは大魔王には逆らわずに、「大魔王様のお気に入り!」「大魔王様御用達!」「大魔王様もご満足!」などと宣伝に利用することを始めた。

実際大魔王の趣味はなかなか良くお薦めに足るものだった。

大魔王は金だけは頑なに払おうとはしなかったが、店側がお薦め

文を書いて欲しいと言うと二つ返事で請け負うし、一緒に写真を取りたいという頼みも快く引き受けた。

それらの宣伝と共に謎に包まれていた大魔王という存在は徐々に知られていった。

まず非常に穏やかな気質らしいと言うことだ。誰に対しても丁寧な口調で話しかけるし、どんな暴言に対しても特に怒ることはしない。多少嫌そうな顔をすることもあるがそれで首が飛ぶというようなことはなかった。これは街で横暴な振る舞いをする貴族の連中と比べると天地の差がある。

ただ明確な挑戦に対する処置は果断だった。

この特に強そうにも見えない少女が大魔王だと知り名を上げようと挑んだものがある。貴族の冒険者で名をホルスと言った。実績のある冒険者で有名な所では第一魔族領の踏破によるティアル王国への行路の確立、最近では第三魔族領の魔王城の発見が挙げられる。その実力から勇者候補とされたが軍に束縛されることを厭い冒険者を続ける逸材だ。

街の広場で大魔王と対峙したのだがそれは戦いと呼べるものではなかった。大魔王は戦闘の開始と同時にホルスの左肩にそつと右手を寄せ、右下へ軽く手を振り切った。それは紙を引き裂くのももう少し手間がかかるだろうというくらいあっさりしたもので、内容物をまき散らして絶命したホルス本人も死の直前まで何をされたのかわかっていなかっただろう。そしてその後、

「そうそう、負けたと思っただら命乞いをしていただければ命までは取りませんよ」

と、物言わぬ死体に話かけた。どうやらどの程度やれば人間が死ぬかがわかっていなかったらしい。

この顛末を見学していたものがさらに驚いたのが、派手に臓物をぶちまけて死んでいるホルスを前にした大魔王には返り血の一滴も

ついでにないということだった。

そして明確な挑戦がないのならばどんな暴力にも特に反応を示すことはなかった。石を投げつけようが、矢を射掛けようが、剣で斬りかかるうが、魔法をかけようがまるで問題としない。それらは大魔王に痛痒すら感じさせることはなく反撃するまでもなかった。

結局のところ、喧嘩を売りさえしなければ危険はないということだった。逆にうまく利用すれば商売の役にも立つ。

その事が自然に広まっていくにつれ大魔王という存在は街になじみつつあった。

勇者フォグー一行は一週間程かけて首都ベイヤーに戻ってきた。荷物を打ち捨て、馬を乗り継ぐなどすればもっと早く戻れたのかもしれないが、聖堂を運ぶ関係上大型の馬車が必要になりあまり無茶な事もできなかった。他の荷物はともかく聖堂の放棄はマキノが頑なに拒否したせいだ。

途中国内で情報収集を行いながら戻ってきたが、国境近くでは大魔王の存在が知られていなかった。首都に近づくほど確かになってきた情報をまとめると、突然大魔王という存在があらわれ王の上に立ったが、今の所国民の生活になんら変化はないということになる。

「意味がわからん」

とぼやくのはフォグ。

「とりあえず王に謁見するのが早いのではないでしょうか」

アイゼンは御者席から返事をする。

街の入口で彼らは検問の順番を待っていた。検問の行列待ちはいつものことでこれは特にいつもと変わりが無いようだった。

「フーかよー、特に魔物の集団に占拠されてるとかじゃないんなら急いで戻ってきた意味ねーんじゃないの？」

ゲルンが馬車の中であぐらをかき、戦斧の手入れをしながら言った。

マキノはぐっすりと眠っている。フォグはこの女はお祈りしてるか寝てるかだな、と思った。

検問の順番が回ってくるころには日が暮れそうになっていた。軍関係者である彼らには別の入口もあるのだが、今更急ぐ理由もなということとで検問所を通ることにした。入出の管理が分かれると少しややこしくなるので出来れば検問所を通ったほうがいいという理由もある。寝ているマキノは馬車に置いておき、3人で検問所へ赴いた。

「これは、フォグさん。お帰りなさい。あれ、マキノさんは？」

検問所の女性兵士が親しげに声を掛けてきた。軍服姿ではあるが威圧感を与えない明るい感じの女性だ。

「よお、ダフニー！ ああ、マキノなら馬車で寝てるけどかまわんだろ？ さっそくだけでも、魔族に襲われたってほんとか？ そんな感じは全然ないんだが」

フォグは久しぶりに会ったダフニーに気軽に返事をする。ダフニーは少し困った顔をした。

「ええと、襲われてはいないのですが……」

「ん？ 大魔王つてのが来たんだろ？」

フォグは首をかしげながら問い直す。やはり何か思っていたのと違う。

「そうですね、大魔王様は確かにおられるのですが、別に襲われたということは……」

ゲルンがダフニーを睨みつけた。

「てめえ、どういっつもりだ？ 大魔王様だあ？ 何様づけしてんだよー！」

ダフニーは慌ててゲルンを黙らせようと口を抑えにかかった。

「ちょ、ちょっと滅多なこと言わないでくださいよ！ 誰に聞かれるかわかりませんよ！ もうこの国は大魔王様の支配下にあるんですから！」

「二人共落ち着いてください。……そうですね、まずは私達がいな期間にどうなったのか教えて下さいませんか？」

アイゼンが仲裁に入った。このままゲルンが騒いでいると話が進まない。

「えーと、襲われたとかはなかったようですね。2週間ほど前に突然大魔王様がおいでになられたようです。高札が立てられて、この国は大魔王様の支配下になったという御触れが出されました。レガリア、春風の外套は大魔王様がお持ちになられています。今のところ特に国の体制としては変化はありません。王はご健在で今まで通り

に政務についておられます」

ダフニーは一気に喋りきった。

実際は国王の周りにいた近衛兵は襲われているのだが、検問所の兵士にまでその話は伝わっていないようだ。

「……君臨すれども統治せずってやつか？」

「それはちよつと違うような気がします……」

「あたしら急いで戻ってくる必要なかったんじゃないか？　なんか思ってたのと違うしょー。それならせつかく魔王は倒したんだ。残党をきつちり処理して魔族領を開放したほうがよかつたんじゃないか？」

「まあ、そうは言いますがあの場では何もわかりませんでしたしね。確かに魔王の言葉に踊らされた感はありませんが」

「とにかくだ、一旦城に行くしかないな。現状の報告と今後について考える必要がある」

フォグは考える。魔王を倒したと思つたら大魔王があらわれた。魔族は敵だ。普段は向こうから積極的に襲いかかつてくることはないが、それでも突然魔族領を発生させ、人類の領土を奪っていく。故に魔族が特に何もしていないように見えるというのは、こちらが戦いを挑まない理由にはならない。そのうちいずこかに魔族領が発生するのだ。奪い返さねばならない。もし、それが大魔王という存在の元に行われているというならこれはチャンスだ。ここで人類の大逆転ということもあり得る。

「では、手続きはこちらでしておきますので、皆さんはお城に向かってください」

フォグ達はその言葉に甘え城に向かうことにした。

城の謁見の間。そこにフォグを隊長とする第一遊撃隊とゴドウィンという男を隊長とする第二遊撃隊の姿があった。

城に向かい謁見の申請を行うとすぐさま許可が下りたのだが、なぜか第二遊撃隊も呼ばれている。

今までの経緯は謁見の申請時にあらましは述べてあった。

彼らが膝き頭を下げた状態で待機しているとしばらくして王があらわれた。

「楽にするがいい」

王の指示に従い頭を上げる。少しおやつれになられたか？ とフォグは思ったが、さほど変わりがないような気もする。少なくとも敗戦国の王といった風には感じられなかった。

「まずは、勇者フォグ。大儀であった。魔王討伐に関しての論功行賞は春の大祭で行うこととする」

論功行賞は春と秋の大祭で通常行われていた。魔王討伐ともなれば大々的に行われるのだろっと思っていたが、今となってはどうなるのか。大魔王の支配下で魔王討伐の功績を讃えられるなど笑い話にもならない。

「そして勇者ゴドウィン。そちには、魔王亡き後の第三魔族領完全開放を命じる。開拓団300人を率いよ」

そして第二遊撃隊に命じられたのはフォグ達の残務処理だ。レガリアの破壊により魔族領としての勢力は消失している。そのうち蔓延っていた魔獣の類も自然といなくなるだろう。だが、魔族は別だ。その場に留まるかもしれない残党の殲滅が必要だった。

それと元魔族領は中立地帯ということになる。この領土をマテウ国に組み入れる必要があった。国の領土はレガリアの有効範囲とされている。この有効範囲を広げるにはレガリアの支配下におかれていない地域にレガリアの恩恵を受けている国民が長期的に暮らす必要があった。その為の開拓団だ。

衣食住が保障され一定期間暮らすだけの仕事なのだが、魔族の残党や、他国の侵略などで命の危機にさらされることもある。基本的にただの平民の集まりである開拓団に戦闘能力はないので襲われればまず助かることはなかったが、特に職能が必要ないのでそれなりに人気はある職業だった。

「以上だ。だが、皆聞きたいこともあるだろう。許す。なんなりと申せ」

フォグの目に何か言いたげなものを感じたのか、発言を許可した。

「では……大魔王……様とこの国の関係はどうなっているのです？
その、一体どのような方なのでしょう？」

フォグもこの場では言葉を取り繕う。

「レガリア、春風の外套の所持者だ。しかしそれだけだな。あやつは国政には口を出さんようなので今まで通りだ」

馬鹿な！ レガリアを奪われたということはこの国の全てを奪われたということだ。それが今まで通りだと！

「まあ、なんだあやつもあまり無茶はせん……と思う。今のところ無銭飲食ぐらいのものだ」

大魔王が無銭飲食って何だよ！

「どのような方が……あやつは……いやなんでもない」

王は少し顔を赤くした。

何赤くなつてんだよ！　ねえ、今何考えたの、ねえ！

王にツッコめるわけもなく、喉まで出かけたそれらのフォグは言葉を飲み込んだ。喉のあたりに何か詰まったようにすら感じた。

「他にないか？　ではこれで謁見を終わる」

王が退室した。

残された遊撃隊員たちは微妙な表情になっている。

「おい、ゴドウィン！　お前これでいいのか！」

フォグはゴドウィンに訴えかけた。一体俺達のいない間に何が起こっている？

「知らん。王命に従う。それだけだ」

言葉少なにゴドウィンが答えた。ゴドウィン。第二遊撃隊長、またの名を聖盾の勇者。フォグに比べて頭ひとつ大きい背丈に、筋肉で膨れ上がった大柄な体。殴り合えば確実にフォグが打ち負ける

だろう。その名を示す聖盾は謁見の間へは持ち込んでいないが、この武装も魔族に有効なものだった。

「クソっ！ おい、アイゼン、ゲルン、マキノ！ 行くぞ」

吐き捨てるように仲間達を呼びつける。その目にいつものフォグにはない光を感じたゴドウィンは思わず声をかけた。

「待て、どこへ行く？」

「大魔王だ！ この目で直接見る！」

「……なら、検問所の兵士に知り合いがいただろう、奴に聞け。大魔王の居場所を知っているはずだ」

なぜダフニーがと思いつつも忠告は素直に聞くことにしフォグ達は謁見の間を後にした。

その店は「アレがヤバイ亭」と呼ばれていた。最近注目の宿屋兼酒場だ。これまでは「まずネーミングセンスがヤバイ」とか「アレってなんだよ」とか散々な言われようだった。

木造2階建てで1階が食事も出す酒場になっており、2階が宿屋となっていた。名前以外の特徴としては街の郊外にあるせいか同様の店よりも広くゆったりとした空間を贅沢に使っており、知る人ぞ知る店だった。店名のアレさに加えて郊外ということもあってか客足は悪かった。

この店が注目を集めるようになったのは1週間前からだ。その頃に大魔王がふらりとあらわれ無銭飲食をしていった。それ以来何が

気に入ったのか大魔王は毎日一度はあらわれ、ご飯を食べたり、隅で寝転がったり、2階の宿屋の一室を占拠したりと好き放題し始めた。

大魔王がよくやってくるという噂が広まり始めるとあつと言う間に人が集まるようになり、繁盛するようになった。元々質の良い店だったこともあり常連客も増え始める。店にとってはいいことづくめだったが中には納得のいっていないものもいた。

「おい、こら、大魔王、いい加減に金払えよ！」

宿屋の一人息子デリク、今年14歳になる少年だ。デリクは金を絶対に払わない大魔王にいらいらしていた。

大魔王は窓際の4人がけの丸テーブルを一人で占領している、大魔王の好みはよくわからないがそこがお気に入らしい。店内はほぼ満席で、外にも幾人か並んでいるのだが、大魔王と相席になろうというものは誰もいなかった。

大魔王はいつも同じ格好をしている。今日も黒いドレスに、白いケープ、髪は無造作に白いリボンでくくってあった。そう何着も同じ服を持っている様にも思えないのだが、いつ見ても埃の一つもついていない。

大魔王は手にしたフォークを口に運ぶ。テーブルの上には大量の料理が置かれていた。

「オカミさん、この豚肉はおいしいのでもっと欲しいです。出来れば丸焼きでください」

妙なイントネーションで店主を呼ぶのは、女将さんと他の常連が読んでいるのを聞いて「オカミ」という名前だと勘違いしているからだ。特に誰も訂正しないし、結局似たようなものでこれで落ち着いていた。

「昼時で騒がしい店内でも大魔王の声は自然と必要な者の元へと届く。」

「あいよ！　こらデリク！　遊んでないで働きな！」

オカミ、ことリサが大声を張り上げる。こちらは大声を張り上げないことにはデリクの元に声は届かない。

「遊んでねーよ！　この馬鹿から金を受け取るのも仕事のうちだ！」
「そうです。働かざるもの食うべからずといえますよ？　あなたはその手にもっているお皿を私のテーブルにおいて他のお客さんにも料理を運ぶべきです」

「お前にだけは言われたくねーよ！　つーか、お前は客じゃねー！　なあ、お前大魔王なんだろう？　えらいんだろ？　だったら大金持ちだよな？　金持ってんだよな？」

「金？」

大魔王が可愛く小首をかしげる。デリクは顔を真っ赤にした。本人は怒りによるものだと思いたいところだろうが、どう見ても大魔王の魅力にやられているようにしか見えない。

「な、何、初めて、そんな単語聞きました、みたいな風にしてんだよ！」

どん！　と皿を置くとデリクは厨房に戻った。それ以上この場にいと何かおかしくなってしまうそうだ。

結局の所大魔王の集客効果は大魔王が食べる分の金額よりも遙かに上だ。女将も最初こそ戸惑ったものの今では逆に有難がっていた。デリクが大魔王に絡み続けるのは、気になった娘に何かとちょっかいをかける子供のようにしか見えていなかったし、今ではこのや

り取りも店の名物として集客の一助になっていた。

いくら大魔王が寛大で何を言っても怒らないといっても、ここまでの勢いで大魔王に絡める人間はそうはいない。

「なんだかわかりませんが勝った気分がしますね」

大魔王は豚肉のささったフォークを片手ににこりと微笑んだ。

そんな大魔王のいつものやりとりを離れた席から食い入るように見ている者達がいた。

フォグ達勇者4人組だ。4人ともフード付きのコートを着こみ顔が見えないように工夫していたが傍から見るとかなり怪しい。しかし昼時の混雑のせいかわりに注目するものは誰もいなかった。

彼らはダフニーに大魔王の居場所を聞いてここにやってきた。ダフニーが言うには、最近は街の外からやってくる人達の中にも大魔王を一目見たいと言うものが多く、何度も案内するうちに各時間帯における大魔王の居場所を把握するに至っていた。

「ええつと……俺、何がなんだかわかんないんだが……」

「私に聞かないでください」

「あたしにも聞くなよ、わかんねーから」

「豚肉おいしそうですね」

ああ、と3人がマキノを見やる。

「お前はなんかあいつと気が合いそうだな」

3人を代表してフォグが言った。

「しかし思っていたのとは随分違いますね。女性ですか、随分と愛らしい……」

「くおらあ、鼻の下伸ばしてんじゃねーぞ、ありゃ敵だろうが！」
「ですが、彼女を殺せますか？ どう見ても普通……とはいえない
ぐらいの美少女ですが、人間にしか見えませんよ」
「っーか、全く強そうに見えねー。素手でもひねり潰せるだろあれ
なら？」

4人はテーブルの上で顔を付き合わせばそばそと喋っていた。

「……俺は勇者だ。あいつが大魔王だと言うなら俺の敵だ、戦うし
かないな」

「止めはしません。ですが、どうしましょう。まさかこんな所で戦
うわけにもいきませんし」

「ダフニーに聞いた所、大魔王は広場で戦うらしい。なのでそれは
問題ないはずだ。……よし、俺が大魔王を誘い出す。お前らは先に
広場に行って準備をしておいてくれ」

「わかりました」

3人が席を立ち、勘定を済ませ先に店を出ていった。ここは街の
郊外なので広場までは歩くと20分はかかる。準備も考えると1時
間は要るか？ と考えフォグはその場でじっと待つことにした。

その間も魔王は豚肉やら牛肉やら鶏肉やら羊肉やら蛙肉やら蛇肉
やらを食べ続けていた。肉ばっかかよ！ 野菜も食えよ！ バラン
ス考えろ！ とツツコミたくなるぐらい大魔王を凝視していたフォ
グは時間が来たと判断して立ち上がり大魔王のテーブルへと向かっ
た。

「おい」

「なんでしよう？」

大魔王が側に立つフードの男を見上げた。全身をコートで包んで

いるため何者かはつきりしないが、隙のない身のこなしが戦いに身を置くものだと思わせる。

「お前が大魔王と言うのは本当か？」

「はい。そうですが、何か御用でしょうか？」

フォグはフードの付いた外套を一気に脱ぎ捨てた。何か面白そうなことが始まったのか？ と店中の客が注目し始める。そこにいたのが白銀の鎧を着た聖剣の勇者であるとわかった時、店は一瞬静まり返った。その一瞬が過ぎた後、店内が爆発したように騒がしくなる。

「おいおい、あれ勇者様じゃねーか！」

「え、いろいろあつて忘れてたけど、勇者ってどうなったんだっけ？」

「ばかやろー、出陣式やつてたろうが。つーか、聖盾の勇者とか、聖棍の勇者とかいろいろいるだろ！」

「で、なに大魔王ちゃんに何か用かよ」

「まさか、戦つとか？」

「いやいや、前の馬鹿がやられるとこ見たけどあれ見た後、挑む奴はいねーだろ？」

「じゃ、告白すんじゃね？」

「おお、そつちの方がまだありそうだな！」

喧騒の続く中、デリクが大魔王とフォグの間に飛び出した。両手を広げ大魔王の前に立つ。デリクは大魔王の素性について詮索したことはないが、言葉通りに大魔王だとは思っていなかった。ふざけた態度がまかりとおることと、その美貌から王族に連なるやんごとなき方ではないかと夢想したこともある。彼としては深窓の姫君を守る騎士のような気分だった。

フォグは訝しげな顔をした。

「お、おい、勇者のにーちゃん、こいつになんの用だよ！ こいつは大魔王とか言ってるけど、悪いやつじゃねーんだ、いや、金払わないから悪いのかもしれないけど、別に人に迷惑かけたりしてねーよ！」

フォグはまだ用件は何も言っていないのだが、早とちりしたデリクは喚いた。

フォグはこれからという所を騒がれ、喚かれたことに苛立った。邪魔だといわんばかりにデリクを押しつける。デリクは立っていらぬ尻餅をついた。それを見た大魔王の眉が一瞬動いたが、それに気づくものはいなかった。

「勝負しろ！ 俺は聖剣の勇者フォグ。王直轄部隊、第1遊撃隊の隊長だ！」

大魔王はフォグの名乗りをろくに見ていなかった。席から立つと、デリクの手を取り立ち上がらせる。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ、べ、別になんてことねーよ」

大魔王の顔を今までになく間近に見て、デリクは真っ赤になった。手まで取られているし、それに何かいい匂いもする。どうしようもなく恥ずかしくなった。

大魔王はフォグの方を振り向いた。

「勝負ですね。では広場に行きましょうか。ここでは狭いですし汚れてしまいますからね」

大魔王は、女将のリサにごちそうさまでした。大変美味しかったです。と挨拶をして店を出た。フォグはそれに黙って続く。

大魔王は店を出た後ゆっくりと広場に向かって歩き始めた。かなりの鈍足だ。フォグは後ろについて歩いてきたが歩幅をあわせるのに苦労した。

このペースじゃ20分以上は楽にかかるな、とイラつき始めると大魔王がこちらを向いた。

「大魔王と勇者が戦いの場にのこのこと連れ立って歩いて行くというのはおかしいと思いませんか？」

何を言い出す？ とフォグが疑問に思うと大魔王の顔が目前にあった。今の発言中のどこかで間合いを詰められたようだがその瞬間が分からない。

大魔王がフォグの襟元を掴む。細く白い手だった。織手とはこのようなものを指すのかもしれない。

「ですので、あなたは先に行って後からゆっくりとあらわれる大魔王を迎え撃つというのはどうでしょうか。いいですね、そうしまし
よう」

と言うと一人で勝手に納得した大魔王はフォグを片手でぶん投げた。広場の方に向かって。

「うわあああああああああああああああああああああー！」

フォグは叫び続けた。視界が真っ赤に染まり、回転し、自分がどこにいてどうなっているのかまるで分からない。

真っ赤な視界に広場の噴水が目に入ったような気がした。時間感覚が間延びしていく中、一部冷静な自分が益体もない計算を始める。一瞬見えた広場の様子から半分ほどの距離を飛んできていた。大雑把に考えて広場までの距離が2kmとするとここまで約1秒、秒速1キロメートルとすると……音速を超えていた。マッハ3ぐらいだ。このまま地面に激突すれば即死だ。どんどんと時間が遅くなっていく、視野も何故か妙にくっきりと、拡大して見えるようになってきた。いや、これは単に広場に近づいてきているだけか。はっきりと、仲間たちの姿が見えた。

広場で人払いを行っているアイゼン。

ははっあいついつもあんなことばっかしてんな。

戦斧を手に仁王立ちするゲルン。

お前格好良すぎるだろ、そんなんだから男にもてねーんだよ。

何かよくわからないお祈りをしているマキノ。

ちゃんとお祈りにつきあつてやりやよかつたよ、真面目にやんなくてごめんな。……って、ちげーよ！ なに別れの言葉みたいなこと考えてんだよ！

愛すべき仲間たちの姿を見かけた瞬間、思考がさらに爆発的に加速した。

ちくしょう！ こんなとこで死ぬるかよ！ 全力で考えるん

だ！

生死の境で過去の記憶が高速でよぎって行く。その中にフォグは活路を見出した。

精霊魔法だ！　こんな時こそ精霊の加護を使わなくてどうする！？　風か？　土か？　炎か？　水か？　いやなんでもいい、っ
ーか全部だ！

「精霊達よ！　なんでもいいから助けやがれー！」

まず風の精霊が動いた。小さな少女の姿をした精霊が逆風を吹かせた。これで速度が落とせる！

次に水の精霊が動く、妖艶な美女の姿の精霊が広場の噴水を操った。水が飛び出しフォグを包み込む。これでなんとか耐えられるか！
そして土の精霊が動いた、小太りの親父の姿の精霊が広場の石畳を泥状に変えていく。いいぞ、泥ならばつかってもなんとかかなりそうだ！

最後に炎の精霊が動いた、蜥蜴の顔をした青年の姿の精霊がその筋肉質の腕を大きく広げ、そこからゆっくりと腕を組んだ。そして黙ってこちらを見つめている。少し困り顔だ。

お前もなんかしろよ！　なんで黙って見てんだよ！

炎の精霊にツツコミを入れてる間にフォグは広場に激突した。激突の恐怖が紛れたという意味でなら炎の精霊も多少は役に立ったのかも知れない。

3話 対決

轟音と共に広場の中央から盛大な泥飛沫が跳ね上がった。泥は上空高く舞い上がり周囲一帯に泥の雨を降らせる。

幸いアイゼンが広場の人払いを行っていたおかげで怪我人は出なかった。ただ街の人間にとってはいい迷惑であることは間違いない。屋台などは広場の端にまで移動していたのだが、それでも食い物などは泥をかぶってしまい売り物にならなくなってしまった。

街の人間は特に説明をうけないまま人払いをされていたのでこの大爆発を見て、ああ、だから人払いをしていたのかと納得した。

街の人間以上に驚愕しているのがアイゼン達だ。何か叫び声が聞こえたと思ったら突如広場が泥だらけになって爆発したのだ。

呆然としていたが、あの叫び声がフォグのものだったのではないかと思に至るとアイゼンは動転した。慌てて広場の中心を見る。

泥の中に砕けた噴水の破片がそこそこに埋まっていた。その破片を押しよけるように水で出来た玉がゆっくりと浮かび上がってきた。

「フォグ！」

水球の中にいるフォグを確認し、恐慌状態になったアイゼンが泥の中に飛び込む。体は泥の中に腰まで埋まってしまった上に、焦りも手伝い中々前に進めない。落ち着きをなくしたアイゼンだったが、がむしゃらに手で泥をかき分けながらなんとか水球に辿りついた。

「み、水が！ このままでは息ができない！」

水球に完全に包まれているフォグをはっきりと確認し、さらに狼狽するアイゼンにマキノの一言一言ゆっくりと発するような落ち着

いた声がかげられた。聖職者として人々に広く訴えかける日常で身についたものだ。

「アイゼンさん、落ち着いてください。それは水の精霊によるものです。精霊の加護を受けている勇者に危険はありません」

マキノの声でアイゼンは少し冷静さを取り戻した。だが、どうしていいのか判断がつかない。

「とりあえず上がってこいよ！ 多分精霊がうまくやるだろ」

ゲルンもやってきてアイゼンを促す。この調子で泥に侵入した所で身動きできない人間が増えるだけだ。

アイゼンは泥から抜け出すべく引き返した。帰りが比較的楽になっていたのは泥が固まり始めていたからだろ。アイゼンが抜けだす頃、水球もその全体を表した。中には頭の後ろで手を組み、頭を臍に近づけた胎児のようなフォグの姿があった。頭と体の中心部分を守るためにこのような態勢になったのだろう。

程なくして水球が破裂し中のフォグを吐き出した。もうすっかり硬くなった地面の上にフォグが落ちた。げぼっ、と少し水を吐き頭を上げる。

「……死ぬかと思った……つか、俺死んでんじゃね？」

意外に元気そうだった。だが、勇者といえども精霊の加護を持ち、貴族の体をもつフォグでなければ切り抜けることは出来なかっただろう。

「大丈夫ですよ。神の国はあなたがやってきたとしても受け入れ拒否です。追い返しますから」

「そうそう、俺は神の国に受け入れられない……って、結構ひどい事言ってるねーか？」

「よかった……無事だったのですね……」

アイゼンが安堵の余り膝から崩れ落ちた。

「無事……じゃねーよ。体中がいてえ。まあ精霊のおかげで助かった」

風の精霊が不安そうにフォグの周りを飛び回っていた。水の精霊が大破した噴水から溢れ出る水を癒しの雨と変えてフォグに降らせる。土の精霊は泥と化した広場を石状に戻していた。石畳から泥になったはずだが、石畳そのものには戻せないらしい。炎の精霊は腕を突き出し親指を立てていた。

「グツジョブ！ じゃねーよ！ お前結局なんもしてねーだろ！」

精霊はフォグ以外には見えていないので何の事か、仲間達には分からなかった。たまに何も無い空間にツッコミ始めるのはフォグの奇癖だ。

「一体何があったのですか？ わけがわからないのですが」

「大魔王にぶん投げられた……」

「はあ？」

全員の声が揃った。投げたということはあの酒場から？ 俄には信じられることではない。

「とにかくだ、大魔王がやって来る。とろとろ歩いてたから30分はかかるだろ。それまでに戦いの準備を整える！」

「作戦はどうします？」

「いつも通りだ。アイゼンお前はとにかく最大威力の魔法をぶっぱなせ。その後マキノが神の牢獄、俺とゲルンで突っ込む！」

「地霊爆を仕掛けましょう。30分あればかなりの数を用意できます」

「まかせた。マキノ、回復させてくれ！ 精霊だけだと時間がかかる。奴が来る前になんとか全快したい」

普段ならこんな時、あれこれ文句を言うマキノも今回ばかりは素直に祈禱を始めた。フォグの信仰度ではあまり神聖魔法は効かないのだが、マキノの手によればフォグの回復程度はなんとということもなかった。

神聖魔法による回復は朝夕の祈禱を行った状態にまで回復させるものだ。つまりお祈りにより健康な状態の自分の状態情報を神に提供していることになる。その際適なお祈りではその情報伝達が不十分になり回復魔法はうまく効果を発揮してくれない。ただそれは普通の信者に普通の聖職者が回復魔法を使用した場合であってマキノなら話は別だ。彼女はフォグをよく知っている。朝夕どころか常に見続けていた彼女は神になりかわりフォグの状態情報を無意識に維持していた。

ゲルンは何をするでもなく立っていた、戦う前からこの有様の広場を見渡し言い知れぬ不安を感じていた。

1時間が経つころようやく広場に大魔王がやってきた。30分かるといふ目算だったがそれ以上の時間が経過している。

大魔王は小さな女の子と手をつないでいた。反対側の手にはソフ

トクリームを持っている。女の子も同様にソフトクリームを持っている。お揃いだ。二人はソフトクリームをちびちび舐めながら楽しそうに広場にやってきた。

フォグ達が黙ってみてみるとそのままどんどん近づいて来る。広場の中心にある壊れた噴水のあたりまでやってきてようやく足を止めた。位置的には、大魔王、フォグ達、噴水が一直線に並んだ形になる。彼我の距離約10メートル。

「なんだ、それはっ！」

対面したフォグが叫んだ。アイゼンも氣勢を削がれる。まさか子供ごと魔法に巻き込むわけにも行かない。

「ソフトクリームですよ。牛乳で作ったお菓子です。おいしいですよね？」

「ねー」

大魔王が話しかけると、女の子がうれしそうに返事をする。

「さて、これから勝負をするのです。ライサさん、お家はわかりますか？」

「うん、広場まで来たらわかるよ！」

「では、ここは危ないので広場の中には入ってこないくださいね。まっすぐ帰るんですよ？」

「うん！ じゃーねー、大魔王のお姉ちゃん、またねー」

「はい、またお会いしましょう。あ、私のソフトクリームをあげますよ。よければ持って行ってください」

女の子は思わぬ戦利品に目を丸くした。お礼を言うとソフトクリームを両手に元気よくかけていく。大魔王は女の子が広場を出、角

を曲がって見えなくなるまでその姿を見守っていた。

「お前のことだ、ソフトクリームでも舐めながら戦うのかと思ったがな！」

フオグは無視されているような気がしたので無理やり話しかけた。

「そんなことはしませんよ？ あれ、それは私があなたを嘗めているのと、かけていたりします？」

「かけてねーよ！ なんだよお前は！ どんだけ時間かかってんだよ！」

「それはそうと勇者さんも無事たどりつけたようで何よりです。適当に広場の方に投げたあとで弾道計算を忘れていたことに気づきました」

フオグが精霊魔法を使わなければ広場を超え街を飛び出すところだった。広場に着地させるつもりなら放物線を描くように山なりに放り投げるべきだったが、投げた後に気づいてもどうしようもない。大魔王は追いかけて広場に叩き落とそうかとも一瞬思ったよ。うだがそれだと結局一緒に着いてしまおうと思いき自重していた。

「では……いつ始めますか？」

「今からだ！」

フオグ、ゲルンは大魔王から一度距離を取った。壊れた噴水ギリギリまで飛び下がる。アイゼンとマキノは援護のため噴水の後ろに回り込み隠れた。彼らの魔法は敵の視認は必要ない。事前に準備は済ませてあった。

大魔王の周りの石畳が次々と爆発した。

アイゼンの地霊爆だ。地面を爆破し指向性を持った石礫を敵に叩

きつける魔法だ。地味な魔法にも思えるが生身でまともに食らえば原型を止めることは出来ない。噴水を中心に戦場になりそうな場所にこの魔法が大量に仕掛けてあった。破裂し砕けた石弾の全てが一斉に全方位から大魔王に襲いかかる。

だが大魔王は全く意に介さない。ただその場に立ち続けていた。

「こういう場合少し困りますね。食らってもなんともないものをわざわざ躲すのも受け止めるのもなんだか違う気がしますし、かといってただ食らうのも癪ですし」

石礫は大魔王に触れることがなかった。石礫が互いに干渉しあい、ずらし、そらし何故か大魔王にあたらない軌道をとっている。膨大な量の石礫の弾幕の中に凪いだ海のような静寂の空間が作り出されていた。

結局大魔王は無傷で地霊爆を切り抜けた。噴水の陰からその様子を見ていたアイゼンは青ざめた。十分に時間をかけて用意した必殺の布陣だ。この初撃で終わるとすら自負していたがその自信は木っ端微塵に砕かれた。

「こんな感じだと、スマートでしょうか」

大魔王がしたのは数度石礫を弾き返したただけだ。それがどのような計算の元にか散弾のような石礫の軌道を狂わせた。

マキノが神聖魔法、神の牢獄を唱える。これ自体には攻撃力は無い。一定範囲内の魔族の力を抑えるだけだ。だがこの魔法が大魔王に聞いているとはとても思えなかった。大魔王の様子は少しも変わらず、どんな些細な影響も感じていないことをうかがわせた。

ゲルンが飛び出した。戦斧を叩きつける。ゲルンの闘法は我流であり、その太刀筋は無茶苦茶だ。ただ膂力にまかせて重量をぶちかます。今まではそれでもうまくいっていたが、我流は我流。基本的

な動きがなっていない。通常の流派ならあるはずの体の中心線を守るための動きが技に含まれていない。

戦斧が届く前に大魔王は動いていた。蹴りだ。ただの前蹴りがゲルンのから空きのみぞおちを撃ちぬいた。その衝撃は革鎧越しに肋骨を折り、内蔵を押しつぶす。血反吐を吐きながらゲルンは吹っ飛んでいった。

同時に突進を開始していた、フォグが肩に担いだ聖剣を発動する。その輝きはあたり一帯を白く染めたが神の牢獄が効かない相手だ、素直に通用するとはフォグも思っていない。

さらに地を蹴り加速したフォグが聖剣の光の中から飛び出した。大魔王に真正面から斬りかかる。

しかし大魔王は無造作に左手を斜め後ろに付き出した。

「ちよつと面白かったですけど、それをやるなら聖剣を囷にするぐらいの思い切りが欲しいところですね」

大魔王の手には白く輝く聖剣の刀身があった。大魔王の目前にいた勇者は見る間に色をなくし、透明な水と化すと、ばしゃんと音を立てて石畳に広がった。

大魔王の斜め後ろから斬りかかったフォグはそのままの姿勢で硬直していた。聖剣を掴んだ大魔王の手がびくともしない。押そうと引こうと微動だにしなかった。

フォグは聖剣で目眩ましをした隙に水の精霊の力で分身を創りだし突撃させた。地の精霊で大魔王の足元を泥凪化し動きを止め、自らは風の精霊で急制動と急加速を駆使し大魔王の背後に回りこみその首を取った。つもりだった。

だが、大魔王は分身は無視し、泥凪化した地面の上には普通に立っている。一寸足りとも沈み込んでいなかったし、聖剣の一撃は軽く掴み取られてしまった。聖剣の魔族への特効もまるで通用していない。

どうすればいい？ 聖剣を手放して一旦距離を取るか？ いや、聖剣は絶対必要だ！ これが魔族攻撃の要なのは間違いない！ 本当にそうか？ 今も素手で掴まれているのにダメージを与えていない！

それは一瞬の間のことだったが、ぐるぐると空転する思考に囚われていたフォグの耳にみしりっという不吉な音が届いた。

「あれ、案外もろかったですね」

聖剣がひしゃげた。じつくりと力をかけられた刀身が半ばから折れ曲がっている。大魔王の掴んでいる部分などは小枝のような細さにまで圧縮されていた。

「まったく使いこなせてませんよ、これじゃあ強度が下がるのも仕方ないですね」

大魔王が呆れたように言う。

「まあ、これはこれでもらっておきましょうか。珍しいですし」

大魔王の足が跳ね上がった。聖剣を掴んでいる側、左の足刀がフォグの脇の下に入るとあっさり肩口を抜け顔の高さまで上がる。白銀の鎧は紙1枚程の抵抗も見せなかった。

伸びきった膝を折り曲げ足の裏でフォグを噴水まで押し飛ばすと、ゆっくりと足を揃えた。その一連の動作で大魔王の体軸がぶれることはない。

「下着が見えてたら恥ずかしいですね」

切断された右腕付きの剣を片手に恥じらっていても、そんなもの

は誰も注目していなかった。

フォグの絶叫が響く。肩から溢れ出す鮮血は噴水の水と混じりわずかに薄めながらあたり一面に広がっていく。

「フォグ！」

ここまでの闘いを呆然と見ていたアイゼンとマキノが慌てて駆け寄った。

「大分手加減というものを覚えたのです。そちらの人も死んでいないと思いますよ」

大魔王が右手でゲルンを指さした。こちらも噴水に激突していた。噴水は先程からの何度もの衝撃ですでに原型を留めていない。

アイゼンは死に物狂いで倒れこんだフォグの肩口を押さえた。噴き出す血で真っ赤になっている。

マキノは大魔王の指摘を受けゲルンの様子を見る。ゲルンは肋を何本か折って内蔵を痛めたようだが命に別状はなさそうだった。

水の精霊が癒しの雨を豪雨のように降らせているおかげでフォグの朦朧としていた意識は回復しだした。出血も大分抑えられてきたが即座に回復できるわけではない。ここまでの大怪我となると神聖魔法でもそう簡単に回復することは出来なかった。

「何をやってるんですか？ 腕ぐらい生やしてかかってきてください
い」

「ふっ、ふざけるな！ 腕が生える人間などいるか！」

アイゼンに支えられたまま頭を起こしたフォグはなんとか言い返したが、見るからに生気がない。瀕死の重傷であることは間違い無いだろう。これ以上の闘いは無理としか思えなかった。

「失礼ですね、普通の人間の腕が生えないことぐらいは知ってます。でも、勇者だったならそれぐらいしててください」

大魔王が拗ねた。ほおをふくらませて子供のようだ。

「わかりましたよ。じゃあこれを返しますからくっつけてください。それぐらいなら出来るでしょ？」

と言つて大魔王はフォグの右腕を放り投げた。聖剣は握られたままだ。結局そんなに興味がないのだとしたらフォグは一体なんのために右腕ごと奪われたのか。意味がわからなかった。

右腕の切断面は恐ろしく綺麗だった。だが、だからと言ってくっつけて動くようになるものでは当然ない。

放り出された右腕を前に呆然とするフォグを見て大魔王はため息を付いた。

「それも無理なんですか？」

壊滅だ。遊撃隊はすでに戦闘を行える状態ではなかった。近接戦闘を行える二人はすでに身動きがとれない状態になってしまっている。後衛の二人でこれ以上の戦闘続行は不可能だろう。誰もがそう思った。

「そうそう、いつも戦いの前に言うのを忘れるんですが、負けを認めてくださったら命までは取りませんよ。今回は死ぬ前に言えてよかったです」

「負けを認めたら……どうなる？」

「別になにも。好きになさったらいいと思いますよ。生き恥を晒すつもりはない、一思いに殺せ！ ということでしたら殺しますけど」

フォグは考える。命を助けると言うのだ。その誘いは素直に受けられない。そして情報を集める。今回は相手の事を何も知らなかった。今まで戦った魔族の延長上でものを考えていた。それでは駄目だった。こいつは何か根本的に違う。まずはこいつがなんなのか徹底的に調べるのだ。再挑戦はそれからでも遅くはない。

「食べてくれ、という方もおられました但それにしますか？」

武器だ。聖剣以上の武器がいる。あれはこいつに通用しない。いや、他の勇者の武器はどうだ？ 遊撃隊の隊長で組んであたるってのはどうだ？

フォグは結論を出した。とにかくここは生きて帰る！ 後はそれからだ！

「わ、わかった、俺達の負けだ、助けて……」

負けと言い出した時点でマキノがゆらりと立ち上がった。ゲルンの応急処置は終えたらしい。

そしてフォグの元へとやってきた。

「負けた？」

マキノが感情が一欠片も感じられない声でささやいた。フォグを見下ろす。

フォグは身をすくめた。マキノの目に光が感じられない。これは……まずい。

マキノが大きく足を振りかぶった。そして、フォグの肩口を思いっきり蹴り飛ばした。フォグの絶叫が再度広場に響き渡った。

4話 決着

「マキノさん！ やめてください！」

アイゼンがマキノを止めようと後ろから近づき羽交い絞めにしたが、マキノの蹴りは止まらなかった。

フォグは悶絶しごろごろと転がる。

「勇者が負けるなど認められると思っっているんですか？ 勇者とは聖遺物に選ばれたもの！ つまり神が選んだ！ つまりあなたが負けるということは神の選択を冒瀆するものだと言うことです。わかっているんですか、いえ、わかっているじゃないんでしょうね、だからあっさりと負けたなどと口にできる。腕が無くなったぐらいでリタイアですか？ 神舐めてんですか？ まだ2本の足と、一本の腕があるでしょうが！ それも無くなったなら噛み付いても戦えよ！ なあ！ それに何聖剣壊されちゃってんの？ はあ？ そりゃあんたの信仰が足りないって馬鹿でもわかるように教えちゃってるじゃない。ねえ、満足？ 自分の無能さを世間にひけらかして満足？ 神が全知全能ではないとは広く知られた事実ですがそれでもこれはヒドイ。こんなのを選んじゃうなんて！ ああ、今私は神を疑ってしまいました。それもこれも全部あなたのせいですね？ ひどいですね、中央正教の神官に神の正気を疑わせるなんてね！ この駄勇者！」

マキノが一気にまくしたてた。フォグは涙目で怯えている。苦痛より何よりマキノが怖かった。完全に狂神官のスイッチが入っている。

何かわからんが俺はもうダメだ、とフォグが打ち砕かれようとした時、マキノは一転聖職者の穏やかな笑顔を見せた。

「すいません、少し言い過ぎましたね。でも私はフォグさんには期待しているんですよ。負けたなんて言うのは作戦だったんですよ。そう言つて敵の油断を誘うつもりだったんですよ。でも、それならそうと相談してくださいね。うっかり本気にしちゃうじやないですか。そんなことないなんてわかってますけどね。さあ」

とマキノが手を差し出した。

「勇者ならまだ戦えるはずですよ！　ここで不屈の闘志と共に絶望的な闘いに身を投じてこそ勇者ですよ！　勇者とは勇気ある者のこと！　この場面こそ勇気を示す最良の舞台ですよ！　敵の強さなんて関係ありません。敵が弱ければ闘い、強ければ尻尾を巻いて逃げ出すなんて勇者のすることではありません。弱い敵を鬪るなんてことはこれらの十把一絡げの冒険者共にまかせておけばいいのです。勇者は本当の強者にこそ立ち向かうもの！　誰もが逃げ出す巨悪に立ち向かうもの！　この神の恩寵の行き届かない世界の端々まで救済の光を届ける世界の守護者ですよ！　人類の救世主ですよ！　さあ！　立ち上がるのですよ！」

フォグはマキノの手を取るとふらふらと立ち上がった。マキノの言葉がするりと心に入ってきて、なんだかまだ戦えるような気がしてきた。

「さあ、聖剣を手取るのです。魔族に対抗するすべに乏しい人間に与えられた神の恩寵ですよ。一振りすれば魔物の動きを止め、二振りすればその生命を止めると言われる斬魔の剣ですよ！　その聖剣はあなたにしか使えません。そうあなたは聖剣に選ばれたのです！」

フォグは残った左手で聖剣を手取る。ひしゃげた聖剣をもった

フォグはこれぞ敗残兵といった姿だった。

「さあ、戦うのです！ あなたには貴族の体と精霊の加護と聖剣があるのです！ 貴族の鋼の如し体は魔族如きの攻撃は物ともせず、精霊はあなたを癒し、守り、援護し、聖剣は国中の信仰を束ね神の敵を討つのです！」

フォグはふらふらと大魔王に向かって歩いて行く。うつろな顔をしておりそこにまともな意思の影は見られなかった。

「大丈夫ですか？」

これにはさすがに大魔王も少し可哀想に思ってしまった。大魔王としては手加減の幅にぶれがあったりはするが積極的に殺したいというわけでもない。このあたりで終わってくれるのを望んでいた。

勇者が聖剣を振りかざす。信じがたいことにひしゃげた聖剣はそれでも輝きを失ってはいなかった。

「ちょっと可哀想になってきたのでとりあえずその聖剣、それはもうやめにしましょね。ハルさん、聖剣のリンクを解除してください」

『了解です。魔力供給ポートの拒否リストに聖剣のオブジェクトIDを追加しました』

大魔王がそう言うとしガリアが応えた。聖剣は次第に輝きを失い、鈍色のするただの鋼の剣になってしまった。

「そもそもこの国のレガリアを持っている私には聖剣の魔力供給の遮断が可能ですので聖剣で闘いを挑むのは不向きでしたね」

大魔王はレガリアと聖剣のリンクを切り離した。レガリアはその莫大な能力を維持するために国民全てから魔力の徴収を行っている。これは誰にも気づかれることなく行われていることで、見えない税とも呼ばれていた。

聖遺物である聖剣は神聖魔法で動いており、その源は神への信仰だ。聖剣の能力は使用者の信仰が反映されるのだが、個人の信仰などたかが知れている。そこでレガリアと聖剣をリンクし、国民の信仰をまとめて聖剣に流しこみ使用者の信仰の代替とすることでその力を発揮していた。

「これで頼みの綱もなくなったことですがどうしますか？」

フォグは意識を取り戻した。急速に覚めてきた頭で先ほどの自分が自分でないような状態はマキノによる軽い洗脳のようなものではないかと思いに至りぞっとした。

聖剣との同調が解けた際に霧が晴れたように感じたので、聖剣を通じてなんらかの操作を行っていたのかも知れない。そう考えるとますますマキノが不気味に思えてきた。

「あ、いや、俺は、もう……」

マキノの方を振り向く。天使のような微笑をしたマキノがいた。あれは多分怒っている。さっきからずっと狂神官のままだ。

「俺はちょっと休憩する！ まだ負けてないが休憩だ！ マキノ！
しばらくまかせた！」

苦しい言い訳だがどうだろう？ 内心ビクビクしながらマキノを見た。表情は変わらない。フォグは勝手に大丈夫だと判断してアイ

ゼンの元に向かった。

「おい、アイゼン。広場の端に行こう。ゲルンを担いでくれ」

「ちよつと！ マキノを一人にして大丈夫ですか！」

「いけるだろ、大魔王にちよつかい出さなきゃ大丈夫なはずだ」

「……わかりました。とりあえずゲルンさんをほうつておくわけにも行きませんし」

アイゼンはゲルンを抱き上げると、フォグと共に広場の端に向かった。

広場の端に辿りついたフォグは地面に座り込んだ。アイゼンはゲルンをそつと地面に横たえる。

「フォグ、怪我は大丈夫なのですか？」

「ああ、水の精霊がどーにかしてくれたみたいで大分ましになった。マキノに蹴られた方がよっぽど痛かった」

マキノの方を見ると大魔王と対峙していた。あれ、さっきまであんな感じじゃなかったような？　と思うとゴロゴロという音が聞こえてきた。音のする方、広場の入口を見やるとマキノの聖堂が一人で勝手に動いているのが見えた。今回は持ってきていなかったはずだ。

「え、え？　どうなってんの？　あれ聖堂だよな？」

「そうですね……呼び寄せたんでしょうか？」

「何のために？」

二人は顔を見合わせる。この状況で考えられることはそうない。まさか私の聖堂自慢を大魔王相手に始めるわけではあるまい。

「ちよっかい出す気だ！」

マキノの元までやってきた聖堂が自動展開した。フォグ達の見慣れた、旅の間祈りを捧げていた見覚えのある形になる。

「なあ、前から思ってたんだけどさ……マキノってたまにすごく怖くね？ マジキチじゃね？」

「まさか！ 中央正教の12神官に選ばれ、街に出れば聖女と敬われ、ご老人方には拝まれてしまい、お祈りマキノンという愛称で広く親しまれている彼女が！」

「……いろいろツツコミどころはあるがあいつの他に11人も似たようなのがいるとするなら中央正教って怖いよ……」

「ちなみにあなたの想像は大体当たっています。中央正教においてそこらの宗教団体にありがちな組織腐敗の類は皆無と言っていいでしょう。下の方はそれほどありませんが、組織上部の人間は似たり寄つたりの狂信者です」

「それがマジキチだろうが！」

「中央正教は他のおためごかしの宗教とは違い、現世利益がありませんからね。神の存在を信じやすいのです。そのせいで修業が進み、神の存在を間近に感じるようになればなるほど、その信仰を深めていくわけで、トップの教皇ともなるとそれは凄まじいまでの信仰なのでしょう」

「げえっ……あれより上がいんのか？」

フォグはげんなりした。こうやって話していてそれなりに体力は回復したようだ。それでも、もう一度戦えと言われると尻込みしてしまうだろう。

「で、マキノは何してんの？　ここでお祈りはないと思うが、ってなんか取り出した？」

マキノは聖堂の中から持ち手の付いた薄く黒い板のようなものを取り出した。

「あ、あれは！」

「知っているのかアイゼン」

「斬れない鋸！　聖遺物の一つです！　まさかマキノさんが持っているとは……いえ、レプリカでしょうか」

「何だよそれ、わかるように言えよ」

「中央正教の始まりの伝説に関わる聖遺物です。切れ味の悪い鋸で体を切断するという拷問に使用するのですが、あれは神の子を拷問するのに使われたという代物です」

「で、凄い威力でもあるのか？　だったら普段から使えばいいのに」「いえ、そういう話は聞いたことがないのですが……」

その使い道はすぐに判明した。マキノは右手に持ったのこぎりをそつと左手首にあてた。何度か位置を微調整し満足のいく箇所を探しあてたのか、一切の躊躇なくのこぎりを引き始めた。

「ちよつ！　なにやってんのマキノー！」

フォグは見たものをそのまま受け入れることが出来なかった。意味が分からない。ここで自分の手首を拷問する意図が分からない。

「あれも祈祷の一種ですね、神の子の故事の再現です」

最初のうちは、ぞりぞりと音を立てていたが、次第にグシユグシユと血と肉を攪拌し、骨に達したのかゴリゴリと聞くものを不快にさせる音色を奏でた。

「痛い、痛い、見てるほうが痛い！　ねえなに、あれ何！？　ほんと、マジキチじゃねーか、どーなってんのよ！」

「多分ですが、トランス状態だとすると本人は痛みを感じていないのかも……」

「いやいや、そういう問題じゃねーだろ！」

ぼとりと音を立てて左手首が落ちた。斬れない鋸という割には案外早い。

マキノは左腕をふり聖堂に血を振りかけ詠唱を始めた。

こんな悠長なことをやっていて大丈夫かとフォグは思ったが大魔王に動きはなかった。マキノは神の加護を信じているため何の迷いもない。何者も自分を傷つけることはないと硬く信じている。しばらくして聖堂に変化があらわれた。

「え？　少し大きくなった？」

気づいた後は劇的だった。あつという間に周囲の石畳やら噴水やらを取り込んで聖堂は大きくなりつつ上げんばかりのサイズとなった。これではもう教会そのものとすらいえる。

「はあああああ！？　なんじゃそりゃ！　ねえ、なんであんなことできるのよ！」

「あ、あれは！」

「また知ってんのか？ アイゼン」

「首の聖堂です！ 聖地の一つ、カルリーヨにある神の子の頭を納めてあるという聖堂ですよ！ 拷問によりバラバラにされた頭が保管されているというのですが……まさかそれを召喚？ いえ複製でしようか」

その聖堂を前にマキノが朗々と歌い出した。澄んだ声音が響き渡る。一枚の絵画のような光景だった。左手からは出血を続けていたが、地面に広がるそれすらも彩りの一部となっていた。

光の柱が幾本も天から降ってきた。その光景はますます宗教画じみてきたが、それすら序の口だった。

その光のなか何かが降りてきた。翼を持つそれらは、悠然と羽ばたきゆつくりとあたりを睥睨しながら降りてくる。それが10体。

その姿は異形だ。それは二足歩行の白い鱈とも、手足の生えた蛇ともとれる姿だった。体長は3m程だ。尻尾まで含めた全長は5mを優に超える。全身は白い鱗に包まれているが、その下にうねる筋肉を隠そうともしていない。顔はほとんどが口で、巨大な顎から伸びる上下の牙は口内には収まらず貫通している。顔の側面におまけ程度にしか見えない小さな瞳がついていた。

巨大な4枚の翼が背から生えているがこれが物理的に意味のあるものかはわからない。羽ばたきと浮遊にあまり関連性は見えなかった。

胴体の延長ともいえる極太の尻尾の先端は瘤を寄せ集めたひときわ大きなものになっており、それは顎と並びこの異形の主要な武器であることを想起させた。

武器はこの異形の肉体以外にもある。手に持つ槍がそれだ。それは槍と呼ばれる程複雑な構造ではなかった。ただの鉄の棒の先端を尖らせただけのものだったが、その大きさから想像される用途は槍と同様のものだろう。

「あれは……」

「どうせ知ってんだろ？ アイゼン？」

「業天使と呼ばれる神の尖兵です。そしてマキノさんの祈祷は、見捨てられし神の子の歌！ 時の権力に捕まり衆人環視の元での拷問で死に追いやられた神の子が死の間際に歌ったという！ そして業天使の持つ槍は、神の子を貫きし槍！ 神の子が死ぬまで突き立てられたという聖遺物の一つです！」

「え？ その槍何本もあるように見えるがレプリカかなんか？」

「槍は100本以上現存していますよ」

「どんだけひどい目にあってんの神の子って!？」

その天使達が歌い続けるマキノを囲むように地に降り立った。異形ではあるが、その内から発する神気がただの魔獣の類ではないことを強く訴えかける。それらはマキノの前に頭を垂れた。

「なあ……アイゼン、勇者っていらなくね？」

「えーと……」

アイゼンは口を濁した。

「あれどう考えたって一体でも俺より強いじゃん！ 何あの数！ あいつらマキノノ尊敬しちゃってるよ！ つーかあいつ神に溺愛されてねーか？ 俺なんて精霊に好かれてるつつても、思春期になった幼なじみがちよつと意識し始めちゃった、ぐらいの好意しか受けてねーぞ！」

「またわかりにくい喩えを」

「あいつ一人で魔族でもなんでもやれるって！ もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな！」

「いや、そうは言いますがマキノさん左手を犠牲にしていますよ、これをそう何度も使うのはさすがに無理なのは？」

「あいつならまた生えてきてもおかしくねーよ」
「それはないでしょうが……。しかしこの後はどうなるのでしょうか？ 私もこの魔法が最終的にどのような現象を引き起こすのかまでは知らないのですが」

「準備は終わりましたか？ もう随分待っているんですが。そろそろお腹が空いてきました」

大魔王のお腹がくう、とちいさくなつた。大魔王はそつとお腹を抑える。そんな姿も愛らしかった。

遠くから、お前はさっきまで肉ばっか食ってただろうが！ という声が聞こえてくる。

マキノは大魔王は無視して歌い続けている。

天使達は一斉に立ち上がり大魔王を睨みつけた。が、大魔王を視認した瞬間微妙に揺れた。何かに一瞬驚きそれを押さえ込んだような感じだ。

この天使達は戦力としてここにいるわけではない。単純に戦力として使用しても一騎当千を誇るだろうがここでの役割は神力の補給にある。マキノの準備している神聖魔法に必要な量の神力を提供するために呼び出されたのだ。

「ん？ どこかでお会いしたことありましたでしょうか？」

大魔王が首をかしげながら天使たちを見た。思い出そうとした所、マキノが歌い終わったのか静寂が訪れる。マキノは右腕を伸ばし天を指さした。大魔王は思考を中断しマキノを見る。

「神雷」

鼓膜が破れるほどの轟音が鳴り響いた。発生した音圧だけで周囲の瓦礫をことごとく吹き飛ばし、閃光は大魔王に容赦なく打ち付けた。それは神の怒り。古来より神罰として知られるその雷霆は神に逆らいし民を、腐敗した街を、驕り高ぶる国を尽く塵の一片すら残さず消しさつてきた。神の最大級の怒りに触れた者は魂すら消し飛び一切を無へと帰順させる。

その雷霆はマキノの怒りに同調していた。すなわちここではマキノの怒りが神の怒りだ。雲ひとつない空から降り注ぐ光線にも似た雷はその全てが収束し大魔王を打ち続けた。この雷は自然に発生するものとはわけが違う、その全てに敵を打ち滅ぼし物質の最小単位まで撃ち砕くべく神意が込められていた。

それは何度も何度もマキノの気力が尽きるまで行われた。神力自体は天使10体分、人間に比べれば無尽蔵といえる程の膨大な量を行使用することが出来たがそれを使う側はあくまでも人間だ。やがて限界は訪れる。

マキノが天を指していた腕をそつと下ろす。

あたりには帯電し砕けた瓦礫が粉塵となって舞っていた。マキノには大魔王が完全に塵ひとつ残さず消滅したという確信があった。それが神罰の当然の結果であり疑う余地などない。それが信仰だ。だがその信仰は終わりを告げようとしていた。

「うるさすぎですよ、ちょっと腹が立つてきました」

大魔王が粉塵の中から悠然とあらわれ、マキノの方へと歩いてきた。

無傷だ。無傷どころか粉塵の中から現われたというのに埃一つ付いていなかった。

マキノの心にこの現実がゆっくりと染み渡っていくと、これまでの人生の中で初めて確信にゆらぎがあらわれた。口を開こうとしては、何度も閉ざした。何を言っているのか、わからない。

大魔王が近づいていくと天使の半分が迎撃の様子を見せた。残りマキノの守護に回る。

無造作に近づいていく大魔王の心臓に向けて天使の槍が5本同時に突き出された。大魔王はそれを手のひらで受ける。槍は天使と大魔王の力の衝突に耐えられず全てが蛇腹のように変形した。

意味をなくした槍を捨て天使はさらに同時に跳びかかった。左右端の天使は尻尾を叩きつけるべく回転し、残りは顎を人が丸呑み出来るくらい大きく開け食らいついた。

大魔王は右手で作った手刀を軽く、内から外へと振った。それだけで5体の天使は上下に分かたれその場に崩れさった。天使の鱗は人の作りし武器は一切通用しないとされているが、それは武器ではない大魔王の手刀の一閃であっけなく両断された。

マキノはその光景を呆然と見ていた。そして槍が折れ曲がり、天使が倒されることに、信仰を揺らされた。

「あ、ああああ」

マキノの口から意味のある言葉は出なかった。ゆれて、ゆれて限界が訪れた。

守護にまわっていた天使が一齐にマキノを睨みつける。そこに敬愛の色は一切なかった。侮蔑し見下すそれだった。

信仰が一定値を下回ったと判断した天使の行動は素早かった。ずぶり、とマキノの太ももに槍が刺さる。愕然と目を見開きマキノが見上げると、他の天使が槍を振りかぶっていた。

マキノは神聖魔法を除けば極普通の少女の体力と能力しか持っていない。人外の膂力で振るわれる槍を回避する手段は持ち合わせていなかった。ぎゅっと目をつぶり槍に貫かれるその瞬間を待ち続け

る。

さくつ、と音を立てて槍が地面を貫いた。

「マキノっ！」

フォグは飛び出した。おかしな成り行きにいつまでも呆然として
いるわけにもいかない。

風の精霊に頼み追い風を限界まで吹かせ、地を蹴って加速した。

天使の直前で手に持った聖剣を投げつける、一瞬ひるんだ隙に左
腕でマキノを抱えさらに加速した。

限界を超えた急加速に靱帯が耐え切れず嫌な音を立てたが、構い
はしない。そのまま広場の反対側まで走り去りしゃがみ込んだ。

「フォグさん……」

「おい、しつかりしろ、なにやってんだよ！」

「私は……」

「いいからとりあえず逃げるぞ」

マキノを抱きしめたままフォグは立ち上がる。振り向くとそこは
は予想外の光景が合った。

大魔王が残りの天使を潰していた。それは文字通りの意味で、上
から頭部を押さえつけ、胴体にめり込ませ地面に叩きつけることで
上下に押し潰していた。

そうやって一体ずつ潰されていくのを見る度にマキノがびくつと
震えた。

残りが2体になった時点でフォグは大魔王に声をかけた。

「待つてくれ！ もうそれ以上そいつらは殺さないでくれ、これ以上はマキノが耐えられん！」

「いいですよ」

大魔王はその動きを止めた。そして天使に話しかける。

「そういうことです。大人しくしててください」

天使は素直にその動きを止めた。大魔王を相手にこれ以上戦う気は無いらしい。それを確認すると大魔王はフオグ達の元にやってきた。

「天使は中々面白いと思いましたがよ。それでどうするんでしょうか？ あなたは確か休憩されていたと思ったのですが？」

「ああ、降伏する。助けてくれ」

「わかりました。その変わりと言ってはなんですがこの広場は責任を持って元通りになおしてくださいね」

「え？」

「だってこの惨状はほとんどあなたたちのせいですよ？ 私は物が壊れるようには動いていません」

木っ端微塵になった噴水、爆発し泥濘化した石畳、突如としてあらわれた教会、血まみれの地面、惨憺たる光景だった。ただ、被害は全て広場の中で収まっており広場外への影響は一切なかった。

「そもそも、勝負を挑まれたのもよく意味がわかりませんが。宿屋の子を虐めたのでちょっと腹が立って受けてしまいました」

「お前は魔王だろうが！」

「ええ、ですが何故大魔王だと勝負を挑まれたり、殺そうとされた

りしなければならいんですか？」

「お前が魔族の頭なんだろうが！」

「魔族？ なんですか？ それは？」

「はあ？ とぼけんな！ 魔族領を広げて次々に人間の領土を侵攻してるだろうが！」

大魔王は本気でわからないと言った様子になった。

「魔族領？ 私は魔界17国の全てを支配するという意味で大魔王を名乗っていますがその魔族領というのは何か関係があるのでしょうか？」

「え？ え？ なにそれ？ ちょっと待って！ 何お前、魔族と関係ないの？」

「魔界の私と同じような者は魔人と呼んでいますですがそれが魔族なんでしょうか？ でも魔人は魔界から出てこれませんよ？」

「待って、待って、ちょっと待って！ なんかわからん！ 一旦整理させてくれ！」

「わかりました。私も勝負を挑まれば逃げることはありませんけど、何かの誤解の末というのは困ります」

大魔王はフォグと抱きかかえられたままのマキノを見た。二人共かなりの大怪我をしている。

「もう一度聞きますけど、その怪我は生えたり、くっついたりして治ることはないんですね？」

「ああそうだよ！ レガリア、救済の王冠ならどんな怪我でも治ると聞いたことはあるがあれは他所の国の話だ」

大魔王は少し考え込んだ。やがて答えが出たのかアイゼンの方を向いた。

「アイゼン……お前、いつつも何か終わった頃にそれとなくいるのな」

「仕方ないじゃないですか、闘いが始まってしまつとあまり役に立たないんですし」

「魔法使いさん、アイボンさんですか、何か地面に書けるような道具をお持ちではないでしょうか？」

フォグは確信した。こいつは名前を間違えて覚えて以後絶対に訂正しないやつだと。

「あ、はい、石灰を固めたものならありますが」

アイゼンは上着の内側からチョークを取り出し大魔王に手渡した。大魔王は受け取ったチョークで石畳になにやら図形を書きだした。まず、大きく円を描きその内側に同心円状に何個も円を描いた。

その円と円の間には文字のようなものを書きだす。魔法使いのアイゼンも見ることがない文字だったが、何らかの儀式に使うものなのだろうとは推測した。

ひと通り書き終えると、満足そうにうなずきチョークをアイゼンに返す。そして

「アイボンさんはその円の前あたりにしばらく立っていてください。定期ポーリングに引つかかて、連絡がいくはずです」

「ポーリング？ なんですか？」

大魔王はそれには答えなかった。きつとめんどくさかったのだらう。

しばらくすると円陣が揺れ始めた。ふるぶると弾力を増し、揺れながら盛り上がってくる。やがてそれは人程の大きさになってその

形を整え始めた。

醜い、猫背の小汚い男があらわれた。まぶたがないため眼球がむき出しなのがグロテスクだった。他の特徴として背中にある大きな瘤から生えているこれも大きな手だ。この男には計3本の腕があることになる。白いコック帽に白衣、両手に包丁、背中の手には大きな鋏が握られていた。

大魔王はこの男を知っているのか紹介を始めた。

「人間研究家のネルデフォウスという方です」

「人間料理研究家の間違いじゃないのか！」

「いえいえ、この方は普段から「人間大好き！」と」

「それも違う意味にしか聞こえんな！」

「お医者さんみたいなものですよ。両手に持っているのはメスで背中のはコックヘルです」

「それは包丁と鋏だ！」

ネルデフォウスは眼球をぎょろりと動かしまわりを見渡した。そして大魔王に向き直り跪く。

「これはこれは、最近お見かけしないと見えばこのような所におられたのですか」

見た目とは違い意外にしっかりとした男らしい声が聞こえてきた。

「お久しぶりです。さっそくですが、こちらの方の怪我を治したいんですが可能でしょうか？」

「ふむ、欠損部位は残っておりますか？」

怪我の状況を軽くみてとり尋ねる。

「その辺に転がってると思いますよ」

これですか。と、両手の包丁に突き刺さった、フォグの右腕と、マキノの左手首を見せてきた。フォグにはこの男がいつのまに動いて回収してきたのかまるで分からない。

「って、粗末に扱うなよ！」

とこれもツツコンでいる間に右腕が接合されていた。マキノを見ると同じように左手首が元に戻っている。他にも細かい傷や、切れた靱帯、刺された太ももなど目に付く傷はほぼ修復されていた。信じがたい能力だった。

「ありがとうございます。ではまた」

と大魔王が言うとネルデフォウスの姿が崩れ落ちた。砂と化し広場にばらまかれる。これも片付けるのかよとフォグはうんざりした。

アレがヤバイ亭に戻ってきた勇者一行と大魔王は現状について話をまとめていた。

「つまりだ、魔界から出てきたのはお前一人ってことなんだな？」

「はい、魔界は神が作ったとされる結界で囲われているため、一定以上の強さの者は出入りすることが出来ません、私は十分に強くなつてその結界を打ち破れるようになりましたので人間界に来てみた

のです。ですので私以上に強いが、ゴミのように弱くないと結果を通ることは出来ませんので、我々が人間に直接干渉することはまずありえないでしょう」

「大魔王とか紛らわしいんだよ！ 魔族の奴らも魔王とか名乗ってる奴がいるんだ！」

「そう言われましても、魔界にも魔王はいますよ。17の国をそれぞれ支配しているのが魔王です」

「だったらそういう事情は先に言っとけよ！」

「聞かれませんでしたよ？ 魔族という方のことも知りませんでしたし仕方ないじゃないですか」

大魔王はちよつと拗ねた。

そして思い出したようにマキノに言った。

「マキノさん」

「は、はい」

マキノがびくつとしながらもおそおそと答える。大魔王に対してはかなりの苦手意識が発生していた。マキノはあれからずつとぼーっとしており、時折思い出したように涙を流していた。

「気を落とされることはありません。あれは人間であるあなたが使用した結果ですからそれが直接神の能力に対する疑念にはなりません。人の身であれほどの事が出来るというのはなかなかないと思います」

「そうなんでしょうか……」

「それにあの天使の人たちには以前あったことがあるのを思い出しました。その……神ですか。多分私は会ったことがあります。あまりあなたを責めないように言っておきますので元気を出してください」

い
「

マキノは信じられないものを見るような目で大魔王を見た。確かに神に会ったことがあると言われても俄に信じる事はできない。マキノも今まで神が側にいる感覚を覚えることはあったが、直接会うことが出来るなどと思っていなかった。

大魔王はこれで話は終わりだといわんばかりに、料理を注文し始めた。

フォグ達は席を立つと再度広場へ向かった。広場再建の見積もりをするためだ。修復のことを考えると頭が痛くなった。

幕間 魔族

一匹の烏が空を飛んでいた。それは昼夜をおかず飛び続け魔族領に必要なメツセージを伝えている魔族の通信網の一部だ。

マテウ国の第3魔族領の魔王にメツセージを伝えたのもこの情報網の一部だ。

それは一定間隔で世界を巡り様々な情報を収集していた。マテウ国のレガリア奪取劇もそこには含まれる。

烏達は一定の行路を巡回し、中継地点で別の烏と情報伝達を行う。そしてその情報を各魔族領に伝えていく。情報としての即時性はそれほどでもないが、情報の複製と拡散による頑健な情報網を構築していた。

その烏は情報網の終端の一つ、魔族国家エルシアへと辿り着いた。魔族国家エルシア。全ての魔族を牛耳る魔族の総本山だ。

その首都、王城の一室へと烏は向かう。こちらの王城は森の中にある木造建築の魔王城などとは違い石造りの立派なものだ。もともと人間が建てたものだが遙か昔に攻め取った後そのまま利用している。街も道路も全て人間が作ったものだ。もともと魔族には大した文化などなく人間のものを奪うことで成り立っていた。

烏はある部屋の円卓の中央の止まり木に掴まると、一声鳴き帰還を報告した。

円卓の周りには7つの影があつた。円卓であることから上下関係のない闊達な議論の場かと言えばそうでもない。これも人間の残したものを再利用しているに過ぎなかった。この中で一人だけが一際大きな玉座に座り6つの影を見下ろしている。この男こそが魔族を統べる王、大魔王だった。

烏はその場にいる全員に収集した情報のイメージを伝える。それは各自の脳内で映像、音声を伴い再生された。全員がその情報の咀嚼を行ったと見て取ると大魔王が言った。

「ふふつ、面白いでは無いか。この私を差し置いて大魔王とはな。中々笑わせてくれる」

魔族の王が苦笑した。それほど面白そうでもない。ここで激昂するのもプライドの問題があるのかも知れない。

「これは、あの時の娘ではないか？ 我らを散々引つ掻き回した、ヤツの娘だ」

竜が言った。竜といつてもここにいるのは本人の姿を投影した影だった。本体ならこの部屋には収まりきらないだろう。

「忌々しい。しかし、この娘が何故生きている？ 死んだと報告を受けたぞ、シオドア！」

獣が吠える。狼の獣人だ。足は狼そのものの足を二足歩行に適應させたかのように太く長くなっている。手は五指を揃え人間のような形態だ。全身は獣毛で包まれている。

「正確には魔界に落ちた、だな。死んだかまではわからんが魔界に落ちたなら死んだと見做していい。貴様も当時それで納得したはずだ」

シオドアと呼ばれた剣は応えた。その剣は円卓に突き刺さっている。一々こんな使い方をされては円卓を作った職人も可哀想だろう。

「ヤツはどうなったのかな。俺その時までここにいなかったんだけど」

本が喋った。革製の装丁の大きめの本だ。それがひとりでパラパラとめくれその音で会話を行っている。どこで音を捉えているのかはよくわからない。

「ヤツならこの地下に封印中だよ。さすが人類最強の勇者様だ。そう簡単には殺せない……って聞いたんだけどさ、ホントのことどうなのよ？ 殺せないってことはないだろ？ 生かしく理由あるのか？ メレーヌ」

石がゴロゴロと唸った。これはただの手のひら大の石だ。見た限りなんの特徴も感じられない。

「……どうだっていいでしょ」

メレーヌと呼ばれた人形が不機嫌につぶやいた。等身大の少女を模した人形だ。人形故の美しさを醸し出している。

この場にいる者達はその本当の姿を表してはいなかった。この場にいるのは、影やら、使い魔やら、代理の者だ。それらが代わりにこの場で意思を伝えている。

「で、どうするのだ？ 大魔王よ。俱に戴ける天ではあるまい？ 消してくるかね？ 儂が出れば直ぐに終わると思うが」

竜が大魔王に具申する。許可さえあればいつでも出向くつもりなのだろう。

「面白い見物かもしれんが、たかが小娘、我らの敵ではあるまい。辺境でおままごとをやっているうちは放っておけばよい」

「それよりどうすんだ！ アルベリクの奴死んじまったぞ？ レガリアも壊されちゃった！」

獣が言う。

「ふむ、レガリアは増えるとは言っても、そう簡単に次を産むわけではないからな。マテウ国の侵攻はどうするか」

大魔王が答える。

「マテウ国に侵入したレガリアは後2個だね。持ってるのはユーア
ンとグスムントだ。こいつらを動かすかい？ 周りの人間を蹴散ら
せば領域拡張が出来ると思うけど」

本が言う。

「そうだな。それはそれで進めるとしよう。次に宝玉が増えればそ
れはその時に決めるとするか」

そう言うで大魔王は唐突にその姿を消した。話は終わりらしい。
その場にいた者も次々に消えていく。最後に残ったのは人形だ。
人形はゆらりと揺れたと思うとその場に崩れ落ちた。震えている。
そして狂ったように笑い始めた。
それはある一点に思い至ってしまったからだ。

「魔界から生きて返ってきた」

人形と剣はかつてあの娘を直に見ている。剣がどう思ったか知ら
ないが、人形と他の者の見解はまるで違った。

他の者は魔界に落ちたなら死ぬと思っていた。

人形は魔界に落とせば結界に阻まれこちらに戻ることはないと思
っていた。人形は知っていた。その時点の娘の力は結界に阻まれる

ほどであったことを。神の結界は一方通行だ。魔界に強者を封印し続ける事を最優先しているため魔界に入ること自体は誰にでも出来る。人間程度なら封印の対象外と見なされ出てくることも可能だろうが、一度くわえこんだ獲物を逃すほど魔界の環境は甘くない。

「はははははっ、馬鹿かあいつら！ 儂が出れば終わり？ 放っておけ？ わかってない、まるでわかってない！」

ならば、あの娘は神の結界に打ち勝ったということだ。どれほどの力があればそれが可能だというのだ。それとも神となんらかの交渉が出来たとでもいうのか？

人形はよろよると部屋を抜け、バルコニーへと出た。夜だ。中天にはトカゲの形をした月が出ていた。

人形はトカゲの月を見上げて両手を天にかざした。

「ネルデフォウスよ！ メレーヌが求め訴えます！ その姿をお見せください！」

そのトカゲがメレーヌをぎよろりと見た。そのトカゲの月光がだんだんと凝り集まり人の姿を取る。

ぼんやりとしているがとても美しい姿の男だ。

「人形姫よ、いろいろと端折りすぎだ。陣もないし、生贄もない。まあそれで出てくる僕もどうかと思うけど。君の魔力は強大で独特だ。一目でわかるから、マーカーとしての陣はいらないんだが、生贄は欲しいな。あれは報酬の一部だよ」

「申し訳ありません。焦っていたものですから。生贄については後日必ず。新たな魔法の契約をして頂きたいのです」

「ふーん、言ってみてよ。どんな魔法が欲しいの？」

「マテウ国の大魔王の動向を常に監視する魔法です」

とたんネルデフォウスは大笑いを始めた。ぼんやりとした姿が腰を折りこらえきれないというように体を振るわせる。まさかこんな反応をされるとは思っていなかったメレー又は戸惑った。

「……そんなにおかしなことだったのでしょいか」

メレー又には意味がわからなかったが、悪魔の行動にはさして意味のないことも多い。気にしては魔法使いなどやっていられないと気を持ち直した。

「いや、いい、君いいよ。願ってもないね。おあつらえ向きってやつかな。いいよ！ それならただでもいいよ」

ただという言葉にメレー又は警戒を深めた。悪魔は基本的には嘘を付かないとされている。だが、ただは怪しすぎた。なんだかんだと魔法契約に条件を付けてくるのが常であるからだ。

「いやいや、そんなに警戒しなくてもいい。本当にただだよ。僕は
大魔王様のお側に侍る大義名分が手に入るならそれで十分だ。契約
なしで人界にありつづけるのは難しいしね。君の魔力でそれがかな
うなら素敵だ！」

メレー又はいまのネルデフォウスの言葉に疑問を覚える。大魔王様？

「ん？ なにかしゃべりすぎちゃったのかな？ でももう駄目だよ。
今更この契約を取り消すなら、他の全ての魔法の契約を解除させて
もらおう」

「な！」

メレー又は言葉を失う。何かとんでもない間違いを犯した気がした。

「監視するなんて言うんだ。大魔王様と敵対しているのかもしれないけど、大丈夫。契約は守るよ。そこは安心していい。ふふふつ、この間なんて久しぶりに会えたと思っただらあっさり消されちゃったからね。悲しかったよ。僕も大魔王さまの前でことで、ちよつとはりきつちゃったからなあ。もうちよつと時間をかけて治せばよかった。せつかく居場所がわかったけど、用もないのにこのこと出て行けないし、いやあ、よかった。本当に感謝しているよ。そうだ、君と契約している全ての魔法の魔力消費量を1割引いてあげよう。せめてものお礼だ。それと今回の魔法は実損分の魔力だけでいいよ」

「その……こちらのことを大魔王に伝えるというようなことは……」

それが一番の問題だった。大魔王に脅威を感じ、その動向を監視しようとしているのだ。こちらの情報が筒抜けなどということになれば目も当てられない。

「大丈夫。わざわざそんなこと言わないよ。まあ大魔王様に聞かれてしまうと答えないわけにはいかないけど、接触しなければ気づかれることはないしね。もちろん僕程度が大魔王様に気づかれないうることはないんだけど、大魔王様は普段、周囲をことさら気にしておられないので、余程目立つことをしない限り大丈夫だ」

メレー又は大魔王を名乗る娘の力の一端を感じた。ネルデフォウスはメレー又の契約している中でも最強の悪魔だ。これまでこの悪魔の魔法を使い縦横無尽の活躍を繰り返してきた。

だがネルデフォウスは大魔王の臣下としか思えない言動をしている。

「まあ大魔王様に挑むなら挑むでいいよ。君がどんな華々しい散り方をするのか見せてもらおう」

ネルデフォウスは徐々にその姿を薄れさせてゆく。その姿が完全に消えてなくなったときメレー又は絶望に包まれた顔を上げた。

「いいだろう……こうなったら人類最強の勇者でもなんでも……」

悲壮な決意を固めたメレー又を月だけが見ていた。

1話 職安

「すいません、魔法使いになりたいんですが」

職業安定所の受付カウンターにやってきた少年はそう言った。

カウンターで頬杖を付き、暇そうにしていたベティは何かの冗談だろうかとそのままの姿勢で少年の顔をまじまじと見つめたが、何も分からない。人好きのする素直な笑顔だった。

栗色の髪に黒い瞳。身長は女性としては背の高めのベティと同じぐらいだった。服装はお世辞にも綺麗とは言えない様子でかなりくたびれている。

初っ端に突飛なことを言っただけで興味を惹きつけるつもりなのかとも思ったがそういう感じでもない。

いつまでも頬杖をつきっぱなしなのはいくら客があまりこないからと言ってもゆるみすぎだと思い直し背筋を伸ばした。

「エントリーシートはご記入いただいていますか？」

営業スマイルを向けながらとりあえず通常業務を遂行することにしてみたがずっと圧迫され真っ赤になっている頬はごまかせないし、ほとんど眠りかけている所をばっちりと見られていた。今更どう取りつくるおうと遅い。

エントリーシートは職安に用意してある定型書式の書類だ。少年は既に記入してあるエントリーシートを差し出してきた。

白い。ほとんどなにも書いてない。名前と年齢しか書いていない。それによると名前はアル、年齢は15歳。このシートだけで職を紹介するのはさすがに厳しいだろう。

「聞き違いだったら申し訳ありませんが……魔法使いになりたいと

おっしやられました？」

ベティは寝ぼけていたのかも知れないと聞き直してみた。

「はい、聞き違いじゃないですよ」

キラキラした目が眩しい。

「あー、ここ職業安定所なんですよ。大変申し訳ないんですが魔法使いといった職業の斡旋は行っていないのですが……」

どう言ったものかよくわからなくなってきたベティは多少口調が崩れてきた。怒ったり馬鹿にしたりしないだけえらいんじゃないかなあ私、とベティは思う。

「え、そうなんですか？ ここにすればいいとケインさんに聞いてきたんですが。デーン開拓団のケインさんご存じないですか？

紹介状も書いてもらっただんですが」

「紹介状を見せてもらってもいいですか？」

ベティは紹介状を受け取るとさっそく見てみた。

デーン開拓団のケイン。この職安で紹介した者だ。開拓団は、勇者らが制圧した魔族領に一定期間住み着き領地の占有権を得る職業だ。特に職能がいらないうことでそこそこの人気職だが、命の危険もそこそこある。

紹介状には「こいつ15歳だけど職についてないんだってよ、なんか紹介してやれよ」といったことが大体そのまま書いてあった。馬鹿にしてんのか！

「あのお、ケインさんが魔法使いになるならここへ行けと本当に言

「つたんですか？」

「だとしたら今度蹴ってやる！」

「いえ、ケインさんは仕事を探すならまずここへ行けど。魔法使いになりたいというのはここに来るまでに思ったこととして」

「はあ、とベティはため息をつく。この子にはまず常識からきちんと説明なくては駄目だ。」

「この国の法律はご存知ですか？」

「……いえ、全く知りません」

「15年この国で暮らしてるんですよね？」

「違いますよ？」

「だったらなんでこの国の職安に来てるんですか！」

「思わずツツコンでしまった。サービス業にはあるまじきことだ。」

「ああ、つい先ほど国民になりました」

「移民してこられたんですか？」

「そういうわけでもないんですが」

「ベティは首をかしげた。さっぱり要領を得ない。」

「住所はどちらになるんでしょうか」

「そういえばエントリーシートに書いてなかった。」

「この街に来たばかりなんです。元いた場所もまだ番地とかないみたいなんですよ」

ますますわからない。区画整理でも最近あったらどうか？

「まあいいです。とりあえずはアルさんがマテウ国民であるという前提でお話させてもらいますと、この国には14歳で職につかなければならないという法律があります。特に罰則はありませんが皆さんこれを守っておられます」

この国では14歳になった時点で職に就かねばならないという決まりがあった。普通は14歳になるまでに決まってしまう。ほとんどの者が家業を継ぐからだ。継がないにしても継ぐのが嫌だという確固たる意志があるのなら別の職業について自分なりに調べ道筋をつけているはずだ。

だがこの少年は15歳にもかかわらず職についておらず、職安にやってきてそれも魔法使いになりたいという。それは魔法使いについても職安についても何も知らないということを表していた。

職安は魔法使いなどというエリートを斡旋するための場所ではないし、そもそも魔法が使える時点で引く手数多、職にあぶれるはずもない。

「つまり、アルさんがマテウ国民だというのなら、今すぐにでも職を決めていただく必要があるのです」

「では、魔法使いでお願いします」

「だーかーらー！ 魔法使いはそもそも職業じゃないっーの！」

思わず地が出たがもういいやと半ば開き直った。

「いいですか、まず魔法使いという職業はありません。魔法を使って何かをする仕事ならわかりますが、魔法使い自体は職業じゃない、ここまではわかっていただけますか？」

「わかりました。では魔法を使う職業というのはどんなものがあるんでしょうか」

「ふっ！ やつとまともな話になってきましたね！ そうですね、魔法は基本的に武力として扱われています。ですので警察、軍隊、警備会社などでしょうか」

「じゃあ、それを紹介してもらえば！」

「すとーつぶ！ いいですか、紹介することは簡単です。実際これらの職なら常に人手不足ですので未経験も可です。けどその場合単純な労働力として雇われるだけです。魔法を一から教えてくれたりはしませんよ。魔法が必要な部署は最初から魔法を使える人を雇います」

「じゃ駄目じゃないですか」

アルはあからさまに落胆した様子を見せた。

「そうですね。最初からうちじゃダメだって言ってるじゃないですか。で、他に魔法使い関係ですと、宮廷魔術師とか魔法学院の教師とかですね。宮廷魔術師は宮廷にいらっしゃるんでしょうね。教師は魔法教えてるんでしょう」

このあたりの説明は本人が良く知らないせいかすごく投げやりだった。

「後は強いていうなら、冒険者とか修練者とか。でもこれは職業と言えるほどのものじゃないですね。魔族領を探索したり、魔物を退治したり、遺跡を探検したりするらしいですけど、その日暮らしのヤクザ稼業って感じででしょうか。定期収入がありませんしあまりお勧めは出来ません」

「冒険者って魔法を使うんですか？」

「ああ、これはですね、我々のような平民が冒険者をするなら魔法

は必須のようですね。そもそも冒険者のほとんどは貴族です」

「そうなんですか？」

「ええ、貴族は我々平民の100倍近い身体能力を持つという話です。まあ本当に100倍かどうかは知りませんが、それぐらいすごい強いよ、ってことです。で、そんな身体能力がなくても冒険者をやるならそれを補うだけの能力、つまり魔法が必要になるというわけです」

「つまり、僕でも魔法が使えるなら冒険者になれるということでしょうか？」

なぜか冒険者に食いついてきた。これはあまりよくない流れだなあと思いつつもそこは真面目に説明する。

「なるのはなれると思いますよ。というか、冒険者なんてのはみなさん勝手に自称されてるだけです。国が認定している職業一覧で当てはめると日雇い作業員となります。それに冒険者なんて言いながらもほとんどは、ならず者とかゴロツキとかそんな感じですよ。組合だか互助会だか作って徒党を組んだりしてますけどマフィアと変わりないような……まあうちとも日雇いの仕事なんかは融通し合ったりはしてるんですが……」

最後の一言は余計だったがベティはそのあたり正直者だった。

「ええっと、冒険者は貴族がほとんどと言うことですがゴロツキなんでしょうか？」

「貴族といいまして、領地を持たない3等貴族がほとんどですね。このあたりの人たちは意識は平民とそう変わらないです」

「すいません、3等貴族ってなんですか？」

「えーと私もあまり詳しくはないんですが、1等が自治権のある領地を持っている貴族ですね。2等が領地はあっても自治権が無い。

3等は領地そのものがないってことだったと思います。3等の場合は一応貴族の身体能力はあるというだけで、貴族様！ って感じの雰囲気の方たちじゃないですねえ」

貴族様！ で手を組み天井を見上げたベティを見てその年でそれはないんじゃないかなとアルは思ったがそんなことはもちろん口には出さない。

「……要は下っ端の貴族ということでもいいんでしょうか」

途中でよくわからなくなったアルは大雑把にまとめた。

「いいですけど、貴族様にそんなこと絶対に言わないでくださいよ！ で、さっきの続きですが冒険者の組合はあることはあるんですが、入ってなくても冒険者を自称してる人は結構います。あ、組合に入るのはお勧めしませんよ！ 組合にも色々あるんですが大抵はならず者の集まりですし、みかじめ料とか取るところとかもありますし、足洗うのも大変ですよ！」

「え、でもさっき付き合いがあるようなこともおっしゃってたようにな……」

「ま、まあ色々あるんですよ。魔物相手の仕事とかは彼らに一日の長があるといえますか……どうしてもということでしたら比較的穏当な組合を紹介することも可能ですが……と、というか冒険者がどうこうじゃなくて魔法使いの話じゃありませんでしたっけ？」

「そうですね。ではその、職業とかはおいておいて魔法を使えるようになるにはどうすればいいんでしょうか」

「それを……この私に聞きますか……うーん、正直わからないです。魔法学院なんてのがあるくらいですから教えているんでしょうけど、魔法学院なんて所に縁がないものですからどうやって入学するのかもサッパリです。後やはりお金はかかると思えますよ。失礼ですけ

ど、アルさんお金はそんなに持ってないですよね」

「そうですね……わかりました。ありがとうございます。世の中そんなに甘くないってことですね。勉強になりました」

と言ってアルはそのまま帰ろうとした。

「ちよつ、ちよつと待ってください！ 魔法使いはともかくとして、職の当てはあるんですか？ アルさん今無職ですよね？」

「あ、そうでした、すっかり忘れてました、明日のご飯にも事欠く身でした」

忘れんなよ、餓死しちゃうだろ！ と、ベティは思った。

「とりあえずですね、日雇い作業員で登録しませんか？」

「ああ先ほどの話で出てきましたね」

「とりあえず、今のアルさんは住所不定無職という非常に危うい立場です」

「はい、そうですね、そう言われると危機感がつのりますね」

「で、とりあえず日雇い作業員でもなんでも職業につけば、就労者番号を発行できます。就労者番号があれば職安を通して身分証明が可能です。すぐには無理ですが真面目に仕事をしていただければそのうち様々な保証も受けられるようになりますよ」

「わかりました。ではそれをお願いします」

ベティはさつそく就労者番号の発行手続きを行った。未記入の就労者証明書には予め就労者番号が振ってある。就労者証明書にアルの名前を記入し、エントリーシートには就労者証明書に書いてある就労者番号を書き写す。それぞれに職安の判子を押して出来上がりだ。後はこの番号で照会して管理する。

「お待たせしました」

出来上がった就労者証明書は名刺大のカードになっていた。それをベティはアルに手渡した。

「再発行は手数料がかかりますので無くさないようにお願いします。さっそくお仕事を探されるなら、入り口入ってすぐが日雇い、もう一つ奥が短期、長くて1ヶ月程度のお仕事に掲示板に貼り出されています。こちらのお仕事を希望であれば、募集用紙の右上の数字を控えて、就労者証明書と一緒に受付にお持ちください。壁面に並んでいるキャビネットの中には長期のお仕事が入ってますが、こちらは職業更新が必要になります。まあその場合もとにかく受付に来てください」

アルは礼をいい、さっそく掲示板を見に行った。結構な時間を受付のベティと話をしていた気もするが、暇そうだったのでいいのだろう。アルの他には誰も掲示板を見ているものはいなかった。

明日のご飯もないというのは本当なのでとりあえずなんでもいいからやってみるかと思当に物色してみた。引越しの手伝いなんかによさそうだと見ていると、受付から「アルさん！」と大きな声がかけられた。

「なんででしょう?」

受付に行くとベティが一枚の紙をぴらぴらと振っていた。

「これ! これどうですか?」

募集用紙を見てみた。どうやらこれから貼り出す分らしい。内容は屋内清掃とあった。アルは掃除なら得意な方だな、ずっとやって

たしと思つても何故これを薦めるのかといぶかしく思った。

「掃除ならやれると思いますけど、これがどうかしましたか？」

「この依頼者です！ この方はキャシーさんと言うんですが魔法使いですよ！ うまく話せば魔法について教えてくれるかもしれないん」

アルはそれはいい、なんとか話してみようとこの仕事を請けることにした。

「どうだった？」

職業安定所と隣の建物の間の陰に隠れていた少女がアルに声をかけた。巨乳だ。

下世話な話だがまず目がそこに向かってしまつのは仕方がない。顔立ちも平均以上の可愛さだし、金色の髪はさらさらと腰のあたりまで真っ直ぐ流れていてとても綺麗だ。胸を含めた全身のスタイルもよい。だがこの少女を一言で表すなら先の言葉になつてしまう。本人としては常に劣情のまなざしを受けるこの特徴を疎んじてもいた。

だがこの少女の今の状態は酷い有様で胸がどうかいってる場合でもなかった。元はエプロンドレスだったと思われる服が血と泥で汚れており、所々すり切れ、破れ、千切れ、穴が開いている。扇情的にも見えるが、それよりも痛々しさを感じさせた。まるで襲われた後のような姿だが、本人はいたって元気そうだ。

さすがにこの状態で天下の往来に身を晒す勇氣はなかったのこ

うやあって建物の隙間に身を隠していた。

「日雇い作業員ていうのに登録した。これから屋内掃除の仕事に行くよ。リーリアはどうする？ 就労証は持つてるんだっけ？」

「私は侍女で登録してますよ。立派な勤労少女です」

リーリアと呼ばれた少女は懐から自分の就労証を取り出した。片手を腰に当て胸を張りアルに自慢気に付き出す。

胸ばっか見るなとかいう癖に無意識に強調しちゃうんだもん
なあ

アルは口に出すのは自重した。

「ふーん、じゃ二人で行ってもいいのかな。その場合は給金は一人分なんだろうか。募集は一人だったし」

「確かにねえ。余分な報酬は用意してないかも」

「まあお金もいるんだけど、魔法について聞きたいんだ。これから行くのは魔法使いの家なんだよ」

「え？ 本当に職安で魔法の事聞けたの？」

「なんだよそれ、さてはわかってたんだな。受付のお姉さんにすっごい変な顔されたよ」

「それより、私の服どうにかしてよ。いつまでもこんなの嫌だよ」

「僕お金持っていないし無理だよ。それにリーリアの服まで僕が用意するのか？ 出来れば自分でなんとかして欲しいんだけど」

「私もお金持っていないし、うちまで遠いしどうしろって言うのよ！」

二人は一文無しだった。

アルはシンプルなズボンとシャツを着ている。手にはスタ袋を持っているが中に入っているのは、少量の食料と火起こしの道具、ナ

イフ、毛布が1枚ぐらいのものだった。

リーリアはぼろぼろの服のみでポケットに入っているのは先ほど見せた就労証だけだった。身分証明に使うことが多いのでこれだけは持ち歩いていたようだ。

「まあ余裕があればリーリアの服のことも考えてみるよ。これから街で生活するならとにかくお金はいるし、この仕事をしてみる。今更森に戻る気もないし」

「その仕事いくら貰えるの？」

アルは紹介状を確認した。

「えーと、1万リル。作業内容は屋内清掃としか書いてない。あまりお金を詳しくないんだけど、1万リルってどれぐらいの価値なの？」

「1万かぁ、古着なら結構買えるかな、そこらのお店でお昼食べるとだいたい1000リルぐらい？ 宿屋素泊まりで3000リルかな」

「なんでまず服の話なんだよ。でもそうなると1万リルで二人が1日過ごすのは厳しいのか？ ……ねえ、例えばだけどき、そこらへんで野宿するとどうなる？」

「巡回員に見つかったら街追い出されると思うよ。せつかく取った就労証も取り消されるかも」

「うーん、あ、本で読んだんだけど、こういう大きな街の周辺だと貧民街みたいなのがあるんじゃないの？」

「ちよつと！ 女の子をどこに連れてく気よ！ なんでそんな危ない所！」

「あるの？」

「……確かベイヤー街だと、北側の壁の外側にあるって聞いたけど、

そんなとこ行くの絶対やだからね！」

「まあ、リーリアはともかく僕も荒事は得意じゃない。最悪街の外で野宿か」

「私も得意じゃないよ！ え？ やつと街まで来たのにまた野宿するの？」

「まあ、1万リルでもいいからとにかく手に入れよう」

「はあ、この格好で街を歩くの嫌だなあ……」

リーリアは自分の様子をあらためて確認してため息を付いた。これはひどすぎる。この街までやってくるのに2週間近くこの格好で過ごしているが慣れるわけもない。

ここまでは道中出来るだけ人目につかないようにしてきたが、街についた以上そういうわけにも行かない。

リーリアにとってはご飯よりも泊まる所よりもまず服だった。

「毛布でも被る？」

アルの提案にリーリアは少し考えこんだが断念した。毛布を被ってうろろろするのも目立って仕方がない。

二人は魔法使いの家に向かうことにした。

2話 訪問

二人は散々迷った挙げ句ようやく魔法使いの家へたどり着いた。何しろ初めて来た街だし土地鑑もない。おまけに大きな街が物珍しいアルはキヨロキヨロと拳動不審だし、リーリアは格好を気にしてこそそそしている。

道を聞けばよかったのだが、それは人前に出るのが億劫なリーリアが嫌がった。紹介状には住所の補足として「アレがヤバイ亭のすぐそば」とあったので最近有名なこの店の場所はそこの人に聞けば簡単にわかったことだろう。

結局、街路標識や案内板の地図を駆使して魔法使いの家に辿り着いたのは夕方になる頃だった。

「やっとついたね」

「アル君迷いすぎ」

「……リーリア、地図にある矢印と説明文を見て説明文の方に進んだ君に言われたくないよ。ああいう表記は矢印の先に目的地があると普通は思う」

リーリアは地図の読めない女だった。

魔法使いの家はごく普通の佇まいの平凡なものだった。石造りで道に面した側が狭く奥行きがあり2階建てになっている。このあたりには似たような住宅が立ち並んでいた。

魔法使いの家と聞いて、怪しげな煙がもくもくと湧き出る不気味な森の奥の一軒家のような物を想像していたアルはその普通さに少し落胆した。

「魔法使って普通の家に住んでるんだね」

「私も魔法使いの知り合いはいないけど、平民ならこんなものじゃ

ないの？」

「なんかどの家も狭くない？ 何人も住めなさそうだけど」

「これはねえ、奥にびよーんと伸びてるのよ、だから中は結構広いらしいよ？ なんでも道に面してる広さで税金が変わるんだって」

リーリアは自慢気に言った。何かとアルに大して上位に立とうとする。

ふーん、そうなんだと頷きながらアルは魔法使い宅の扉の前に立ちノッカーを数回叩きつけた。

はい、と気楽な感じの声が聞こえた。中でがたがたと音がする。声が出てからしばらく立って扉が開かれた。いくら奥行きが長いといっても時間がかかりすぎだろうとアルが思っていると扉から顔を出した若い女性と目があった。

女性はまずリーリアを見た。驚きが素直に顔に出ている。次にアルを見て、最後にもう一度リーリアを見ると何か納得したのか、静かに扉を閉ざした。

「え？」

二人は顔を見合わせた。意味が分からない。

アルがノッカーをドンドンと叩く。

「すみません！ 職安の紹介で清掃の仕事をしに来たのですが！」

再び扉が開かれた。半開きだ。扉の隙間から女性が顔を出している。

「いくつか言っていていいかい？」

「なんなりと」

「確かに清掃の依頼はした。期限は3日以内だったから今日来るのは別にいい。けど夕食時にくるのはどうだろう？ それと君らの格好。物乞いかと思ったよ。君の格好も酷いが、特にそっちの娘！ 熊にでも襲われたのか？ 私は掃除を頼んだんだが、君らがやると余計汚れるようにしか思えない！」

言い切った。少し息が切れている。

アルの顔に理解の色が見えた。なるほどと頷き女性に話しかけた。

「仰る事はごもつともで言い訳のしようもないんですが何とか仕事をいただけないでしょうか？ こちらの勝手な都合で大変申し訳ないのですが今日の食べ物にも困る身の上です。どうしてもお金がいくらです」

「なんだい、それじゃ本物の物乞いじゃないか」

そう言うと二人をじっくりと見る。アルは言い方こそ下手に出ているが立ち姿は堂々としたものだ。物怖じする様子がない。

一方、リーリアは服装の指摘で受けたショックから立ち直れず泣きそうな顔をしていた。

女性はリーリアを見つめた。憐憫が表情に出ている。同じ女として思う所があったのだらう。しばらく考えこんだ後、ため息を付いてから言った。

「とりあえず風呂に入れてやる！ 服も貸してやるから元気だせ。あと男物はないから君は我慢しな」

女性は扉を全開にし二人を中へと誘った。ようやく女性の姿がはつきりに見える。

威圧感のある美人だった。

肩の辺りまであるプラチナブロンドの髪は自然にうねり獅子を思

わせる。肉感的な体を包む、胸元の大きく開いた赤いドレスは返り血を浴びたようでもあり、その攻めてくるような美貌に気圧されずに立ち向かえる男がいるとしたら余程の勇者だろう。背丈はアルより頭一つ分高く、スタイルの良さと合わせて圧倒的な美女を作り上げていた。

この女性こそがこの家の主、魔法使いで名をキャシーといった。

部屋に一步足を踏み入れたアルは、なるほどこれは掃除を頼みたくもなるはずだと思った。

足の踏み場もないとは正にこの事だ。物が溢れかえっている。ゴミとそれ以外の区別がつかない。重要そうな物もそうでない物も一緒くたに渾然一体となっていた。

隣のリーリアはこの有様を見て呆然としている様に見えたが、先ほどのシヨックからまだ立ち直れていないだけかも知れない。

「ここは何の部屋なんでしょうか」

「見てわからない？ 居間だよ。応接室も兼ねている」

「ここにお客さん通すのでしょうか？」

「ん？ 君らは客じゃないぞ？」

「はい、それはわかってますが」

「風呂は一番奥だ」

「ありがとうございます、では早速」

アルはゴミだかなんだかよくわからない物をかき分けて奥へ行こうとした。

「待て待て、ここは普通女の子が先じゃないのか？」

「はあ、そういうものなんでしょうか。じゃあリーリア先に行つてよ」

と話を促すもリーリアは上の空だ。

「服は適当に見繕つて置いておく。終わつたら寢室に来てくれ。そこが一番ましな部屋だ」

「じゃあとりあえず寢室までは一緒に行きましようか」

がさごと荷物をよけながらアルたちは進んだ。よけてもよけても奥の何かがずり落ちてくるためちつとも前に進まない。これを片付けるとしたら1万リルは安いんじゃないかともアルは思う。

居間を出ると長い廊下が続いている。廊下に面して部屋が4つあり一番奥の部屋が風呂だった。寢室はその隣だ。居間を含めて1階には5部屋があることになる。2階も同じ様子なら全部で10部屋ということだ。外見の印象よりも居住空間は広がった。

その廊下も居間程でもないが物に溢れていたため、アルたちは足で荷物をどかしながら寢室まで進んだ。

「風呂とトイレは隣だ。ああ、そうだ。お湯がないな。少年よ、廊下の突き当たりから裏庭に出られる。マキが積んであるから風呂釜に突っ込んで火を起こしてくれ。少女はとりあえず風呂に行つて水で体を洗い流せ」

「すみません、掃除に来たのにお風呂まで使わせてもらつて」

呆然としていたリーリアがやつと口を開いた。

「ああ、さつきは部屋が汚れるなんて言つてすまなかつたな。見てのとおりこれ以上汚れようもない状態だ、あまり気にしてくれるな」

「じゃお湯をわかしてきます」
「じゃあ、一通り終わったら寝室にきてくれ」

と言つてキャシーは寝室に入つていった。リーリアも風呂に入つたので、アルは裏庭に出た。

裏庭まではさすがにゴミで溢れているようなことはなかった。ハーブが植わった花壇もあり、手入れもされているようで、ここだけはキャシーの家の中でもまともな雰囲気だった。アルはさっそく風呂釜の隣においてあつたまきを風呂釜に入れ、自前の火起こしの道具で火をつけた。

薪が燃え始めた所でアルは壁に背を預けぼーっと裏庭を眺めた。風呂が沸いてリーリアが入浴をすませるまではそれなりに時間がかかるだろう。

裏庭は隣家の裏庭にもつながっているし、向かいの家の裏庭も見えている。それなりに開放感があつた。

なるほど、他所に迷惑をかけないように外から見るところはちゃんとしているのか。

そう思うと、キャシーの人となりがなんとなくわかつたようにアルは思った。

夕焼けで赤くなつた空を見上げるとあちらこちらの家から煙があがっているのが見えた。そういえば夕飯時だと言つていたなとアルは思った。

アルが入浴を終え脱衣所に出てくるとキャシーが男物の服を持っ

て立っていた。

「よお！ 探したらあるもんだな。男物もあつたよ。なんだろな、賭けで身ぐるみを剥いだか、やってきた男が忘れていったかそんなもんだと思うが」

「それはありがとうございます」

アルは丁寧に頭を下げる。今までの服はずっと旅で着続けていたのでかなり汚れている。せっかく風呂に入ったのにあれをもう一度着るのは気が進まないと思っていたところだった。

「しかし、なんだな、君はまったくこういう場面で物怖じせんな。少しは恥ずかしがるとかないのか？」

とキャシーは全裸のアルを上から下までゆっくりと見た。意外に引き締まった体をしている。

「恥ずかしいんでしょうか？」

「いや、立派なものだよ」

何が、とは言わなかった。

アルはさっそく借りた服に着替えた。単純な作りの貫頭衣だ。穴の開いた布に手と頭を通し、腰のあたりを紐でくくるだけだ。それだけのものだが、今までの薄汚れた服に比べるととても清潔で気持ちがいいものだった。

「すっきりした気分です。ありがとうございます」

アルはもう一度お礼を言った。

「まあいいさ。そんなものでよければやるよ。使い道もないしな。じゃ、寝室に行こう。簡単なもので悪いが食事もある」

「何から何まですいません。そういえば夕食時ということでしたね」
「ああ、まあたいしたもんじゃない」

二人は連れ立って隣の寝室へと移動した。

そこには見違えるように綺麗になったリーリアがベッドに腰掛けていた。アルが入ってくるのをみて少し照れたような顔をする。

入念に梳かされた金髪は窓からの夕日を受けて輝いていた。服はキャシーのものを借りたのだろう、同じような胸元の開いた赤いドレスだった。こぼれ落ちそうな双丘の創り出す谷間がアルの視線を釘付にする。服の丈はキャシーに取っては際どいミニスカートになる所だが、リーリアにとっては膝上ぐらいまでを隠すぐらいになっていた。ちらりと見える白い太ももも艶かしい。

アルは黙って隣のキャシーの胸を見た。そしてもう一度リーリアを見る。

大きさは同じぐらいか？　だが、リーリアには若さがある。内側から弾けるような瑞瑞しい弾力を感じさせる。一方キャシーの方はリーリアと比べれば少し垂れ気味な気もする。だが問題ない範囲だろう、それも艶熟を感じさせる彩りのひとつだ。どちらが上とも言いがたい、甲乙付けがたいな……。

「アル君！　何考えてんの！」

リーリアは顔を真っ赤にして、両腕で胸を抱くように隠しながら叫んだ。

「要約するとどっちが大きいかな？　ということを考えていた」

「あはははは！　少年！　君は素直でいいな！　私は好きだぞ」

「ちょ！ 何言ってるんですがキャシーさん！ アル君もジロジロ見ないで！」

「そうだな、少年。私のならいくらでも見ていて構わないが、常識的にはあまり不躰にジロジロと女性の胸元を見るものではないな」

「そうですか。勉強になります」

アルに反省の色はほとんど見られなかった。

「キャシーさん！ 借りておいてこんなことを言うのもなんなのですが、もう少しおとなしい服はないんでしょうか！」

照れたり、真っ赤になったり、怒ったり忙しいなあとアルは思った。口には出さない。

「ああそんな感じのものしか持っていないな。それより胸周りのサイズがあうことに驚いたよ。丈が違うのは当たり前としても腰回りが余っているのは少し癪だな」

「はあ、それはどうも」

リーリアも褒められたのだからなんだかよくわからなくなってとりあえず頭を下げる。

「そっぴや前の服はどうしたの？ 捨てたの？」

「捨てないよ！ あれ10万リルもしたの！ 私の一張羅！」

「いや、あれは直せないだろう？ そうですよね？」

とキャシーに話を振る。

「そっぴやなあ。あれはもう一度買ったほうが早いんじゃないか？」

まあ、とりあえず夕食にしよう。パンとスープぐらいしかないんだがな。キッチンから持ってくる。キッチンもあまり片付いていなくてな。最近はここで食べているんだ。折りたたみの椅子が隅にあるから3脚分用意しておいてくれ」

キャシーはそういつて食事の準備をするために寝室を出ていった。

「アル君……掃除しに来てご飯食べさせてもらうのもなんだか悪い気がするんだけど……」

「まあそうだけど渡りに船ってやつだよ。お金もないし、残ってる食料は干し肉が一欠片だけだ。どっちにしろ今日をなんとか過ごさないと明日以降ますます困ることになる。貰えるものはもらっておこう」

「アル君は度胸あるよね……」

「そうかな？」

「……アル君も着替え貸してもらえたんだね。よかったよ、私だけ貸してもらうのも気が引けるし……そーゆー格好も似合ってるよ」

「リーリアほどひどい格好じゃなかったけどね、まあリーリアもそういうのも似合ってると思うよ。わかりやすいしね」

「何が!？」

リーリアは似合ってると言われて少し頬を赤くしたが続く言葉に落胆する。褒めるならちゃん褒めて欲しい。

アルはそんな会話を続けながらも椅子の準備をしていた。ベッド脇にあるそう大きくもないテーブルの周りに椅子を設置する。

キッチンからキャシーがパンの入った籠と、トレイに乗った3人分のスープを持ってきた。

「こんなもんしかなくて悪いね」

リーリアは食事の前の祈りを捧げ、残りの二人は黙ってそれを見ている。祈りが終わった所で3人で食事を始めた。

「ああ、パン！　パンよ！　おいしいよ！　ねえ、アル君！　パンだよ！」

「見りゃわかるよ。悪かったね、干し肉ばかりで」

「……どんな食料事情だったんだ？　その……この娘のはしゃぎっぷりは……」

キャシーはとても可哀想なものを見る目でリーリアを見ている。

「1日に干し肉を一かじりずつで過ごしてきました」

「……パンぐらいなら遠慮するな、もっと食っていいぞ……」

「あの……ここまで何から何までお世話になりっぱなしなのですが、僕達職安から紹介されて掃除の仕事に来たんですけど……」

「まあ食事やら何やらは報酬の一部ということでもいい。給金も二人分出そう。もともと何日かに分けてやってもらうつもりだったから、二人なら早く終わるだろうしこっちが払う分は変わらんとと思う」

「それはありがとうございます。それで仕事内容はどのような感じでしょうか」

「そうだな、この家の中を整理してゴミとそうでないものに分けて、ゴミはゴミ捨て場に持って行ってもらう。ゴミがどうかわからんものは聞いてくれ。一応捨てる前の最終確認はするから常識的に判断して分別してくれればいい。それで、仕事は明日からかな。今日は泊まっていけ。その様子だと泊まる所もないんだろう？」

「そのお申し出はありがたいんですが、本当にいいんでしょうか？　自分で言うのもなんなのですが、こんなどこの誰ともわからないような二人を出会っていきなり家に泊めるというのは？」

「うーん、じゃあ、就労証を出しな」

二人は言われた通りに就労証を出してキャシーに見せた。

「うん、おっけ！ 一応確認はした。後はまあ、私の人を見る目の問題だろう。君らなら大丈夫だ。アル君にリーリアちゃんだな、よろしくな！ 私はキャシーだ」

キャシーは二人と順に握手をした。

「でだ、このうちには今使える部屋はここしかないのだな。幸いベッドが大きいしここで3人で寝ることになるが構わんよな？」

とキャシーは平民の常識で言った。この家には部屋もありベッドも複数あるため当てはまらないが、平民は普通家族で大きめのベッドを共有して一緒に使っている。家族でなかったとしてもそれほど抵抗はない。

「はい、いいですよ」

アルの常識も似たようなものだった。昔住んでいた場所では母親と一緒に寝ていたのでそういうものかと思っている。

「え！ ちょっと！ なんでそういうことになるんですか！」

リーリアは少し違った。彼女の家は裕福で子供の頃から一人部屋を与えられ、プライベートの守られた空間で寝起きするのが当たり前だった。

「いや、そう言ってもな。使えるのはこのベッドだけなんだが」

「リーリア、わがまま言うなよ……せつかく泊めてもらえるのに。野宿は嫌だってあんなに言ってたじゃないか」

「え？ え？ わがままなの？ いやそういうことじゃ？ え？
おかしいですよ？」

「嫌ならリーリアは床で寝ればいいんじゃないか？」

「ちよっと！ それどういうこと！ なんでキャシーさんと寝るの
よ！」

「寝るって……なんかいやらしい言い方だな」

「ちがーうー！」

リーリアの叫びが夕闇の街に響き渡った。

3話 掃除

「あなたはなぜ床で寝ているのでしょうか？ お仕置きされているのですか？」

そんな声でアルは目覚めた。

眼の前にはまだ夢を見ているのかと目を疑うような美しい少女の顔があった。少女はアルの側にしゃがみ込み上から覗き込んでいる。

え？ 誰？

キャシーから家族構成を聞いた覚えはないが勝手に一人暮らしだと思い込んでいたアルは混乱した。

昨日はどこで寝るかで散々揉め、結局アルが床で寝る以外の選択を頑なに拒否したりリアのせいでこのような状況に至っていた。夕食後は特にすることもなく早めに寝たのだが、それまでの間に3人以外の気配を感じたことはなかった。

「おはようございます……君……キャシーさんの妹さん？」

「さて？ キャシーさんとはどなたのことでしょうか？」

黒衣の少女は可愛らしく首をかしげる。まだ寝起きで頭のはつきりしないアルもなんだかおかしな気がしてきた。

「……どこから来たの？」

家の中でする質問じゃないなあ、とアルも思ったが思わず口をついた。

「その窓からです」

「泥棒!？」

「まさか盗んだりはいしませんよ。私は朝の散歩をしていて家と家の間をたまたま通った所、床で寝ているあなたをみかけて何故床で寝ているのか聞いてみたくて入ってきたのです」

「え？ 駄目だろ？ それは？」

「駄目なんでしょうか？」

会話がかみ合っていない。

「それでああなたが床で寝ているのはどうしてなんですか？ ベッドが嫌いなんでしょうか。私もたまに外で寝転んだりするのでその気持ちはわからなくもないですよ」

「あー、ベッドで寝ようと思ったんだけど、その女の子と一緒に寝るのは嫌だと言われて仕方なくだよ」

言ってるうちになんだか負けたような気がしてきたアルは少し落ち込んだ。

「閨を共にするのを断られたということは……振られたのでしょうか？」

思わず、振られてないよ！ と反論しようとしたが、それを抑えるように少女の手が頭に伸びてきてなでられた。慰めているのだろう。

「勝手に人の家に入ってこないでよ」

「ここはあなたのお家ですか？」

「違うけど」

「ではあなたと私の立場は同じなのではないでしょうか？」

「僕はこのうちの主人のキャシーさんに泊めてもらってる。勝手に入ったわけじゃない」

「では私もキャシーさんに許可を得ればいいのですね。そちらの方ですか？」

少女は立ち上がりベッドの方に向かう。そして、おお！ という声を上げた。口を丸くしている。

「大きいですよ！」

何が？ とアルが上体を起こしそちらを見ると少女はネグリジェ姿のリーリアを指さしていた。その先には仰向けながらも重力に逆らう見事な膨らみがある。普通彼女程の大きさでこの状態なら押し潰されるように広がるものだが彼女の胸はネグリジェを形よく押し上げていた。

ネグリジェもキャシーから借りたものだ。キャシーとおそろいで無闇に扇情的な作りになっている。ベビードールと呼ばれるものに近い。ちなみにアルの格好はそのままだ。男物の寝間着はなかったらしい。

「プルンプルンですよ！」

少女はあつさりとしリーリアの胸に手を伸ばし胸を左右からそつと押さえ離れた。反動でたゆん、と揺れる。少女はそれだけでは飽きたらず驚掴みにするとムニユムニユと動かし始めた。柔らかな塊が少女の小さな手の中には収まりきらず自在に形を変える。

なにやってんのこの人！

と思うも目が離せない。

「んっ……アル君……やめて……んん……」

なんだか悩ましげな寝言まで言い始めた。

なんで僕がやってることになってるんだよ。

「ほら！面白いですよ！」

少女は嬉々としてリーリアの胸を弄んでいる。

僕この状況でどうしたらいいんだろう……。

「おはよう少年。なんだ我慢しきれなくなったのか？ こんな状況で勇気があるな……って誰だお前は？」

キャシーが目覚めてにやつきながら言ったのだが途端に表情を変えた。

「おはようございます。あなたがキャシーさんでしょうか。それともこのむにむにの方がキャシーさんでしょうか？」

いい加減しつこいよ。というかりーリアもさっさと起きろよ。

少女はリーリアを揉みしだきながらキャシーに挨拶をしていた。

「私がキャシーだが……ああ、お前は大魔王か。私のうちにまで来るとはな。うちにたかりにきてても大したものはないぞ」

「大したものはさっきから触ってますよ」

「……いい加減やめてやってくれないか……おもちゃじゃないんだ、それは」

少女は素直に言うことを聞いた。たつぷり堪能したようでも満足そうだった。

「何しに来たんだ？」

「……揉みに？」

少女は自分でもよくわからないという態度を見せた。最初の理由はもうすっかりどこかへ行っている。

「なんか僕が床に寝てるのが気になって聞きに来たそうですが、お知り合いですか？」

「……間近で見るのはこれが初めてだが……この国で一番えらい人間だ。いや、人間なのか？ 大魔王様らしいぞ」

「大魔王様という割には存在な扱いですね。こんな口の聞き方でいいんでしょうか」

本人の前で言うようなことではなかったがキャシーの態度から許される気がしたアルは思ったことをそのまま言った。

「ああ別に口の聞き方は気にしないという噂だな。実際本人も気にしてない感じだしな」

「ええ好きなように話してくださいませんか」

「その……魔族なの？ そうは見えないんだけど」

大魔王などと言われてそのまま信じることは到底できない。アルの知る魔族は全員が黒い肌をしていたし、魔王も見たことがあったがとても威圧感のある存在だった。とてもこのような少女がそれら

の上に君臨しているものとは思えない。それに大魔王は魔族領の奥深く、魔族国家エルシアからは滅多に出てこないはずだ。

「魔族じゃないですよ。多分あなた達が大魔王と聞いて想像する存在と私は異なるものです」

アルはそれを聞いて少し納得した。彼の知る魔族とはやはり違うと思ったからだ。

リーリアがようやく目覚めた。目を擦りながら上体を起こす。キヨロキヨロとあたりを見回し場の微妙な空気に戸惑った。

「おはようございます。……おっぱいさん？」

大魔王の挨拶に、リーリアが泣きそうな顔でアルを見た。

「アル君……目が覚めたらよくわからない美人さんがいて、私のことをおっぱいって言うんだけどどうしたらいいんだろう？」

「笑うしかないんじゃないか？」

アルは投げやりに応えた。この状況をうまく説明する解答を持ち合わせてはいなかった。

朝の食卓。寝室に設けられたそれはせせこましいことになっていった。本来ダイニングテーブルとしての用途など考えられていない小さなテーブルの上にパンがありそれを4人で囲んでいる。

あれから、着替えるからとアルは廊下に追い出されついでにキッ

チンから食事を運ぶ役目を任された。キッチンも散々な状態だったがなんとかパンを発掘すると寝室に戻って来た。

「堅いですね」

大魔王がパンに文句を付ける。

「勝手に食べといて文句を言うんじゃない。まあ賞味期限ぎりぎりではあるだろうな。いい加減部屋を片付けないと生活もままならなくなってきた」

キャシーがぼやく。

「え？ パンおいしいですよ？」

リーリアはなんでもいいようだ。本来もつと豪華な朝食も食べていただろう裕福な家庭で過ごしていたはずだが、ここ最近の旅でなくてもおいしく食べられるようになっていた。

「今朝からさつそく掃除を始めればいいんでしょうか？」

「そうだな、じゃ朝食が終わったら早速やってもらおうか。ゴミと思われるものは一旦裏庭に出してくれ。ある程度たまったらゴミ捨て場を持って行ってもらおう」

「わかりました。ゴミ捨て場はどこなんでしょう？」

「ああ、忘れていた。困ったな。北壁の外だ。そっちはゴミ目当てにかスラムが出来てるからな。子供二人だと危ないかもしれん。少量のゴミなら業者が定期的に回収しているんだが、大量に出そうだからな。どうしても直接捨てに行く必要がある」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。僕……いや、リーリアはとても強いです」

「強くないよ!？」

リーリアが即座に言い返す。そんな理不尽なことを言われても困るといったところだ。

「まあ今日のところは一旦ゴミをまとめよう。運ぶのはそれからだな」

掃除は一階の廊下から始めた。昨日はアル達も相当汚れて臭っているためあまり気にしなかったが結構生ごみの類もあるようだ。生ごみであればわかりやすいのでそれらをまとめ裏庭に出す。

このあたりは侍女をやっていたというリーリアもてきぱきとこなしていった。

何故か大魔王もそのまま居座りゴミを運んでいる。何をどうしろとも言っていないのだが、何をするかはわかっているようだ。

掃除を始めるとそこら辺に転がっているものはもう全てゴミと判断してもいいと思えてきたので途中からはペースがあがり、昼には廊下の片付けは終わった。

昼時になると大魔王はご飯を食べに行くと言って窓から出ていった。まだ居間はゴミで溢れかえっているのでそのほうが手っ取り早いのだろう。

アル達も昼食を食べると、居間に手をつけた。こちらは若干判断に困るものもあつたがやはりほとんどはゴミだ。アルとリーリアは協力して手早く裏庭にゴミを運んでいった。

夕方になる頃には居間にあつた荷物はほとんど運び出せていた。居間を整頓するにはもう少しかかりそうだが一山は超えたというところだ。裏庭には大量のゴミが山と積まれていた。

「調子にのって運びだしたのはいいけど、これを持っていくのは大変だな」

アルがゴミの山を見上げる。

「手押し車か何かで運べばいいのかな？」

リーリアも呆れたように裏庭を見渡す。ほぼ裏庭いっぱいになっていた。これ以上ゴミをここに集めるのは無理だろう。

「今日はここまでだね。お疲れ様」

「うん、アル君もお疲れ」

アルはそこで何かに気がついたような顔をした。

「どうしたの？ アル君？」

「……魔法のことをすっかり忘れていた！」

「で、あらたまつてなんだい？」

今日の掃除を終え、一風呂浴び、夕食を終えた所でアルがキャッシュに相談があると話しかけた。

「実はキャッシュさんの家の掃除依頼を引き受けたのには、お金に困っていたというのもあるんですがそれ以外にも理由があるんです」

「ふむ」

「キャッシュさんは魔法使いなんですよ？」

「ん？ どこで聞いた？ 隠してはいないが、公言しているわけで

もないんだがな」

「職安のベティさんから聞いたんですが」

「ああ、あいつか。あいつは私の姪だよ。なるほどね」

姪と言われてアルは訝しげに思った。どう見ても姪と叔母というほど年齢が離れているように思えない。どちらかと言えばキャシーの方が若く見えるくらいだ。

「まあ魔法使いではあるんだがな。そう言えば私の職業を言ってなかったかな？ 彫金細工をやっている。アクセサリー作りだ。世間一般的にはそれで通っている」

「魔法使いになりたいんです。職安では魔法使いのなりかたは教えてもらえませんでした。魔法使いの方なら何か教えていただけませんか。じゃないかと思っただんです」

「そりゃ、職安で魔法使いにはなれんだろうさ。んー、しかしどうかな、魔法か……。教えてもいいんだが、只というわけにもいかないんだ。魔法の知識はそう世間に広まっているわけじゃない。そこそこ値が張るんだよ。秘伝だからね。多分君たちの今回の仕事の給金じゃ払いきれるかどうか。せつかくお金を得る機会を得たんだ。また無一文に戻るのもどうかと思うが」

「そうなんですか……」

「アル君、もうやめとこうよ。掃除でお金結構もらえるしさ。これが終わったら私の街に行こうよ。私も実家に顔を出したいし。お金があつたら馬車で行けるよ」

「……何かお金以外で支払うことは出来ませんか？」

「ちよつ！ なに考えてんのアル君！」

リーリアが慌てた。アルは不思議そうな顔をする。

「何って……もしかして体で払うとか言うんでも思っただのか？ そんなわけないだろう」

凶星だったのかリーリアが顔を真赤にした。

「体か……悪くはないが……」

「キャシーさんも乗らないでください！」

「まあ半分冗談だ。しかし君の様子を見るに体以外で支払えそうなものもなさそうだが」

半分だけなの！ とさらに騒ぎそうなりリーリアを押さえてアルが言った。

「そうですね……では、こういうのはどうですか。僕達の身の上話です。なぜ僕達があんな格好で旅を続けてここにやってきたのか？ 興味はありませんか？」

「ほう？」

キャシーの興味を引けたようだ。

「……確かに気になるところではあるな。これまで話を促してもそれとなくかわされてきた。出会ってすぐに言われても興味を持たなかったかも知れないが……2日も一緒にいてそれなりお互いのことを知るようになるよ、そこに興味が行くのは確かだが……これは計算のうちかね？」

「そうですね、それもありましたが、あまりおおっぴらにすることもないとも思っていました」

「ふむ……まあいいよ。魔法について教えてやるっ」

「いいんですか！」

「ああは言ったが別に魔法の情報の値段なんて適当だしな。前に教えてやった奴からそれくらいぶんどったというだけのことだ。私の胸三寸というやつだな。それにどこまで教えるかにもよる。とりあえずは基本的なことは教えてやろう」

「僕の話はいいんですか？」

「それは後でもいいよ。魔法講座の基本が終わったら聞かせてもらおうか」

アル達はそろって居間へ移動した。この方が何かと都合がいいという話で、ここで魔法講座が始められた。

マテウ国側の命名によると第3魔族領と呼ばれていた森、その奥深く魔王城のあったあたりから少し離れた川沿いに一件の小屋が立っていた。

そう大きいものでも無い。木造の小屋で平民なら4、5人が暮らせるぐらいのものだ。

中に入ると目につくのは一面を覆う本棚だ。そこには本がみっしりと詰まっていた。どれもかなり読み込んだものか手垢に塗れている。内容は人間の文化や、戦争、戦闘に関するものが多かった。

他にあるのは大きめのベッドや、ダイニングテーブルなどありきたりのものだ。

人が住んでいる気配はないが、住まなくなってからそう時間が経ってないのかそれほど荒れてはいない。住人が出て行く前に整頓したのか整然とした室内だった。

そこに一人の男が立っていた。伶俐な美貌を持つ痩身の青年だ。黒いマントを羽織り、右手には節くれだった木の枝から作られた杖

を持つている。左手に持つのは人間の子供だ。裸の赤ん坊の首根っこを掴んでいる。およそ人の情を持つものが出来る持ち方ではなかった。

男は部屋の中を見回すと子供をゴミのように放り投げた。この男に取って必要なくなっただということなのだろう。赤ん坊はまだ生きてはいるのだろうか、ほとんど動くことはなかった。このままここに放置されるのならもう幾許の寿命も残されてはいないだろう。

開け放された扉から一人の少女が入ってきた。まだ幼い少女は男に報告を行った。

「この魔族領は既に崩壊しています。魔王アルベリクは勇者の手で倒されました。すでに人間による入植が行われています」

「人間風情に倒せる魔王か、不甲斐ないな」

「テオバルト様も人間では……」

途端、杖が振るわれた。男が容赦なく少女の顔を殴りつけると少女の口の端が切れ血が垂れ落ちた。

だがそれだけだ。貴族でない人間の全力などたかが知れている。少女にとってそれは常のことであり特になにも感じないし、失言をしたとも思っていない。戯れに殴り飛ばそうが全く動じる所のないそれは男にとって頑丈なおもちゃに過ぎなかった。

「前のが失敗したからな、次を育てさせようと思っただが無駄足だったか。前のはどうした？ 勇者とやらに殺されたか？」

「いえ、人間に保護されたようです。最初の勇者は一度帰還し、別の勇者が残党の殲滅にやって来ましたが、その折に人間に保護されたようです。その後の消息は不明ですが、首都の施設を紹介したものがおりますので恐らくはそちらへ向かったのでしょう」

「生きているなら回収しよう。あれは中途半端だが、その状態で身体各部、特に脳がどうなっているか見ておくのは研究の一助になる

だろう」

「では首都ベイヤーへ向かいますか？」

「そうだな」

男は小屋を出た。しばらく往くと小屋が突如として炎に包まれた。

男はそれを確認もせずそのまま立ち去った。

開拓団からの定期連絡が途絶えたとの報を受け急使が走った。

辿り着いた彼らが見たのは全てが焼き払われ一切が灰と化した荒野だった。

彼らは魔族領全域の完全焼失と開拓団300名、勇者率いる第2、3遊撃隊の8名の全滅を報告した。

4話 講義

多少は片付いた居間に3人は集まった。応接室としても使っているというところでソファとローテーブルがある。そこにアルとリーリアが並んで座り、向かいにキャシーが座った。

テーブルには、いっぱい満たした水差しとコップが用意してある。長い話になると思ったのかキャシーが運んできたものだ。

「まあこの後その辺についても話してもらえるのかもしれんがまず聞いておこうか。何故魔法使いになりたい？」

「……力がいらいます」

「それは、剣や槍では駄目かね？ そこらの道場で教われればそこそこは強くなれると思うが」

「キャシーさんから見て、僕が剣を習ったとしてどれくらい強くなれると思いますか？」

「ふむ、中々締まった体付きをしていたな。それなりに鍛えていたのか。でもまあ、そう言われるとな、平民がどれだけ鍛えたとしても貴族には到底及ばんし……街の力自慢といった所がせいぜいだろうな」

リーリアは、え？ どこで見たの？ と言おうとしたが、アルの真剣な様子に押し黙った。とても口を挟めるような雰囲気ではない。

「それでは駄目です。話にもならない」

「貴族にでも挑むつもりか？ それはやめておいたほうがいいと思うが……そういうわけでもないのか」

「貴族なら倒すのに力はいらなんでしょう。肉体的に及ばなくても策を弄すればどうとでもなると思います。彼らは少々頑丈なだけ。ただの人間です」

「ほう、大きく出たな。まあ平民が力を得るには魔法が手っ取り早いだろうがな。しかしな、ただの人間が覚悟もなしに身につけるようなものでもないな。魔法は確かにアル君が求めるような力だよ。それは剣や弓と同じ様な武装と言える。ただし、剣や弓と違ってその武装は目に見えない。想像してみてくれ、見えない剣を身につけた極普通の平民のふりをした奴が街に紛れ込んでいる。これがどれだけ危ないことかはわかるだろう？　こんな奴がほいほいいてみる治安の維持なんて出きっこない。だから魔法使いにはそれなりの自制心やら克己心やらが求められるし、軽々しく魔法を使うやつを制裁する自浄作用も求められる」

「そう簡単には魔法は教えないということでしょうか」

「そうだな、魔法を使えるかどうかは、知識の有無だけだ。誰にでも使える可能性はある。だからこそ魔法を教えていい相手は厳選する。……普通はな。まあ金があるなら魔法学院に行けばいい。あそこなら誰にでもとは言わないが、条件さえ合えば教えてくれる」

「僕では無理ですか？」

「無理ってことは無いんだが……私がアル君を魔法使いにするのは難しいな。こればかりは相性がな。普通は弟子にして様子を見たりする、魔法を伝授するに相応しい相手かをな。こう言うてはなんだが君とは出会ってまだ2日目だ。まだ判断は付きかねるね」

「……僕に魔法を使う資格がないというならそれはそれで構いません。なら僕は魔法に打ち勝つ方法を知りたい。魔法使いを倒す方法を知りたい！」

今までのアルにはなかった熱のこもった口調だった。目には奇妙な光を帯びている。様々な感情が垣間見えた。

「なるほど。だが別に魔法使いを倒すのは難しくはないぞ？　例えば私とアル君が今からヨーイドン！　で、戦いを始めればまず私が負けるな。けど知りたいのはそんなことじゃないよな。まあいいさ、

まずは基本的なことを教えようか」

「まずは魔法の種類から入るのがわかりやすいか。横軸に契約魔法、神聖魔法、精霊魔法の3種。これらの違いは魔法の覚え方の違いだな。次に縦軸、因果魔法、奇跡魔法の2種。これはどういった原理で魔法現象を発生させるかの違い」

「まあ覚え方の違いはそう重要じゃないな。どれも魔法としては同じ原理だ。なので魔法の原理から教えるでしょう」

「因果魔法はこの世界のルールから外れない範囲で現象を起こす。奇跡魔法はこの世界のルールから外れたように見える現象でも起こせる。まあこの2つも究極的には同じ原理だとされている。要は火のない所に煙を立たせるのが奇跡魔法だ。それに対して火のある所から出てきた煙が自分の都合のいいようにたまたま動くのが因果魔法というところか」

アルとリーリア、二人が揃って首を傾げる。よく分からないらしい。

「因果魔法てのは偶然こうなりましたってことだ。確率の操作といつてもいい。全体のエネルギーの総和は変わらないことなんだが……」

さらに首をかしげる二人。

「まあ絶対に起こりつこないことは起こせないってことだ」

「え？ それはおかしくないですか？ 物を燃やす魔法とか、怪我を治す魔法があると本で読んだことがあります。そんなことがたまたま起こるんですか？」

「起こるんだ。すごく低い確率でね。物が勝手に燃え出すことはある。例えばこの机だが、この机が勝手に燃え出すことは理論上はありえる。ただ一生この机を見張っていても燃え出すことはないだろ

うがね」

そう言って目の前の机をキャシーは指さした。

「怪我にしてもそうだ。切り傷が出来たとしよう。別に魔法を使わなくても怪我は治る。何故だと思う？」

そう言われるとアルには分からない。

「これも簡単に言うのだ、体を作っている細かい部品が傷口に集まってきてその部分を作り直している。でだ、たまたま何故か傷口に作りなおす部品が集まってきた、というのもありえないことじゃないだろうか？ 魔法はそういう状態を作り出せる。でもこれも程度問題だ。大怪我になればなるほど、魔法でも治療は難しくなる」

「これらは物質の性質を知るとよくわかるのだが、その物質の性質を超える変化を起こすことは基本的には出来ない」

「例えばこの水だな」

そういつてキャシーはコップに口をつけた。

「水は冷たくなれば凍るし、沸騰させれば蒸発する、といった性質を持つがこの性質は因果魔法では変えられない」

「え？ え？ どういうことなんですか？ もう全然わからないんですけど」

リーリアが混乱した。話についていけない。

「まあ、今のところは、簡単に起きそうな事は魔法で再現しやすい。起きなさそうなことは魔法で再現しにくい。という当たり前のことを言っていたただけだな」

「で、次は奇跡魔法だが、こちらについてはあまり気にしなくてもいいな。普通は使わないし、使えない。先ほど説明した因果魔法で出来ない、正に奇跡を起こすことが出来る。これも、物質を非常に細かく分けていくと出てくる最小単位のふるまいに対する確率操作ということ、規模の違いらしいんだが、目に見える現象は全然違うな」

「魔法の種類についてはこんなものか。では次は魔力についてかな。魔法を使うには魔力を使う。この魔力というものは何にでもある。この机にもあるし、私にも、アル君にも、リーリアちゃんにも何にでもある」

「魔力は存在力とも我力とも呼ばれる。魔力の多寡はその存在の力強さそのものだ。存在感と言うやつだな。同じような体格の人間がいるとして、一方が武術の達人だというならその達人の方が魔力が多いな。ほらそーゆー達人には強者の気配というか物々しい雰囲気があるだろう？ 気の強いやつもそうだ。逆に気弱で自己主張に乏しい奴は魔力が少ないから魔法使いには向かない」

「だからまあ、アル君もリーリアちゃんも魔法使いに向いているな」

「え？ 私がですか？」

「顔が可愛くてスタイルがよくて胸も大きい。存在感はあるだろう？」

そう真っ直ぐ言われてリーリアは照れた。

「で、この魔力だが半分以上失うと存在が維持できなくなると言われているな。人間なら死ぬし、石なんかだとボロボロと崩れて砂みたいになる」

「半分までなら大丈夫だ。自然に回復してそのうち元の状態に戻る」

「だからまあ最大限注意する必要があるんだが、この魔力量と言うのは客観的に定量化する方法が存在しない」

「魔力が減っている人を見ても、最近この人疲れてるのかなあ、と

感じるぐらいのものだし、本人もそうだな。疲れたなあ、ぐらいのものだろう。減ってるのは存在感というか人間力というかそんな感じのものだ。人間そのものが希薄になる。ああ体が透明になったりとかそういうことじゃないぞ。気配とかそーゆーものだ」

「だから、「なんだこの強大な魔力は！」なんていうのはないな。別にどんな大魔法使いを見たって魔力量なんてわからんよ」

急に演技がかった大声を出されたリーリアはびくつとした。アルは特に変わりなく、なにやってんのこの人、という生暖かい目で見つめていた。

「まあ、あまり魔法は使いすぎると言うことだ。限界はやってるうちになんとなくわかるがギリギリまで使うもんじゃないな」

「魔力がその存在を定義する。人間が人間でいられるのは人間であろうとする魔力が存在するからだな」

「その説明ですと、人間が死ぬというのはどういうことなんですか？」

「まあ生物と元生物のただの物体をわけるのが、生物の魔力と言うことだな。なので死体には当然、死体という存在の魔力が存在する。まあその死体も放っておけば土に帰るわけだ。それも死体という状態をだんだん維持できなくなるからだな、その際にも死体という存在の魔力が失われていつているわけだ」

「それは……この家があんな状態だったというのと同じようなことでしょうか？」

「む？ そう言われると忸怩たるものがあるんだが、ま、そうだな、誰も何もしなければあんな風にどんどん汚くなっていくが、このように掃除をすれば綺麗になる。例えるならこの場合、アル君とリーリアちゃんがこの部屋を元の状態に維持しようとする魔力ということになるな。この例えでいうなら、死ぬというのは、アル君とリーリアちゃんがいなくなっって誰もこの部屋を片付けなくなっって、限界

まで部屋が荒れる、という状態かな」

「でも、普通はあんな状態にはならないよな」

アルはぼそりと誰にも聞こえないようにつぶやいた。

「まあ、このへんはなんとなくいいんだがな。別にこのあたりのことを知っていた所で魔法を使うにはあまり関係がない。一応これで原理的な所と魔力については話したわけだが……えー、コホン。ここでお知らせがある」

キャシーはあらたまつて咳払いをし、イタズラでも思いついた子供のような、にやついた顔をして言った。

「実は人間には魔力を操る術がない、よって人間に魔法は使えない」

「へ？」

二人は間抜けな顔をして言った。多分このような顔を見たかったのだらうキャシーはそれに十分満足した。

「うんうん、初めて聞いた奴は大抵そんな顔をする」

「まあ考えてみればあたりまえの話だ。リーリアちゃん、魔力を操ってみたまえ」

「え？ そんなこと言われても出来ませんよ！」

リーリアは戸惑った。急にそんなことを言われても出来ないもの

は出来ない。

「まあそうだな。実際私も魔力なんぞ操れんし、そう言われても困るな。アル君はどう思う？ 魔力を操るとしてどうすればいいと思う？」

「何か強力にイメージするとか、精神集中するとか？」

「まあ世間的には魔法使いはそんな感じのことをやっているように思っているのかな。でも心に思ったことで物理的に干渉するなど出来るはずもない。そんなことが出来るなら、思春期の少年の周りなど大変なことになるな」

キャシーはにやりと笑う。

「でだ、最初の話に戻るんだが魔法の横軸の3種。契約魔法、神聖魔法、精霊魔法だ。これらは全て他力本願だな。要は何かをお願いしてやってもらうわけだ」

「精霊魔法は生まれついているものだな。何故か精霊に好かれ、精霊と意思を通わせることの出来る存在がたまに生まれてくる。こいつらは精霊に命令して様々なことをやらせることが出来る。好かれ方は様々だ。特定の精霊にのみ好かれる奴もいるし、複数の精霊に好かれる奴もいる。聖剣の勇者は4元素の精霊を使役できると聞いたな」

「神聖魔法は中央正教の神職が使うものだ。神様をお願いして色々やってもらうってことだな。これは中央正教で司祭やらになる修行をすれば使えるようになる」

「そして契約魔法。普通は魔法使いとはこれの使い手を指す。これは悪魔と契約して力を貸してもらおうという魔法だ。君らが使えるようになるとしてもこれだな。精霊魔法は生来のものだし、神聖魔法は子供の頃からの修行が必要だ。今更無理だろう。それらに比べれ

「ば契約魔法はまだ可能性がある」

「私は子供の頃から教会でお祈りしてますけど神聖魔法は駄目なんでしょうか」

「それはだな、神聖魔法をかけてもらう側としてはいいんだが、使う側としては駄目だな。なんでも特殊な祈禱を長年続けて初めて神の力を借りられるようになるらしいな。そんな修行はしていないだろう？」

「はい……普通のお祈りしかしてません」

ちよつと残念そうだった。その心の内には怪我したアルを祈りで癒す神官服を来たリーリアがいたようだ。

「それはそうと神聖魔法は色々制限があるんだ。さつきも言ったように信者にしか有効では無いとかな。なので神聖魔法の癒しなんかは私には効かない。まあ悪魔と契約してる時点で信者じゃないからな、当然なんだが」

「アル君も食事の時に祈りをしていなかったから信者と言っわけでもないんだろう？」

「はい。では僕も神聖魔法では怪我を治してもらったりは出来ないと言っことでしょうか」

「そうだね。まあ今からでも入信して毎日お祈りを捧げればいいんだろうが今更だな」

「で、契約魔法だが、これは悪魔を呼び出す儀式をして契約をする。儀式の方法は一門の秘伝だな。門外不出だ。ぶっちゃけこの契約の儀式さえ知っていれば魔法使いになれる。なのでそう簡単には教えない」

「でだ、魔法使いの実力とは即ち契約している悪魔の実力だ。本人の力は一切関係ない。まあ魔力は本人のものが使われるからそこは関係あるか」

「なので強力な魔法使いとは、強力な悪魔と契約しているものを指

す。そのために必要なのは交渉力だな。そして悪魔は基本的にメンクイだ。なのでまとめると強い魔法使いとは、見目麗しく社交的な奴ということになる、私のようにな」

「え？」

「いやいや、そこで疑問を持たれると悲しくなるだろ」

「いえ、キャシーさんはお美しいとは思っていますが、なんだか思っていたのと少し違いました」

「魔法使いというのは精神修行をしたり、魔法の研究をしているわけじゃないんだ。日々コミュニケーション能力を鍛え美貌に磨きをかけている。魔法の研究なんてしたところで、自分で魔力を操れない以上興味本位の暇つぶしにしかならんよ」

「だからな、魔法学院なんて行ってみろ、美少年、美少女のバーゲンセールだ。一山いくらうてぐらいにうじゃうじゃいるぞ」

「悪魔と契約し、美貌でたぶらかして有利な条件で契約を結ぶ。契約は魔法一つずつというのものもあるし、定期的に契約を更新する悪魔もいる。いろいろだな。何にしる、悪魔の性格やら趣味嗜好を把握し交渉する実力。これがイコール魔法使いの実力だ」

「悪魔つてのも結構ややこしくてな、悪魔同士でも上下関係やら、交流関係やら、敵対関係やらがある。それらの把握も重要だ」

「で、私がアル君に魔法を教えるのが難しいと言ったのはつまりだな、私の契約している悪魔は全て男だ。私の知っている儀式を教えたとしても、男の悪魔は普通男とは契約しないな。まあ、男色の悪魔もいないことはないが、私は知らない」

「逆にリーリアちゃんなら向いてるな。あいつらおっぱい大好きだからな、リーリアちゃんなら二つ返事で契約するだろう」

「え？ いや、その、それはなんかいやな感じがするんですけど」

リーリアは困った顔をした。おっぱい見て大喜びで契約する悪魔なんか嫌過ぎる。

「だから、アル君が魔法を使いたいなら、女の悪魔を呼び出す儀式が必要だ。まあ、アルくんも中々の美少年だとは思うので見た目は問題ないと思うんだが」

「そ、その女の悪魔って響きがその、いやらしい感じがするんですけど……」

リーリアがおずおずと問う。頭の中では何故か全裸の女悪魔が惱ましげなポーズを取っていた。

「……何を考えたかはわかるがあいつら実体はこつち側に出てこない。姿を表すときもなんだか、もやっとした影のような感じだな。まあ依り代を準備したりすればその限りでもないが。だからリーリアちゃんが心配するようなことはないよ」

キャシーはさもわかっているというように頷いた。リーリアもそれを聞いて安心したようだ。アルはそんな二人を見て不思議そうな顔をした。

「で、それとは別の話だが、私は何歳に見える？」

アルは少々困った。女性の年齢を当てろというのは色々と考えてしまう。だが答えないことには話が進まないのです若干低めに答えることにした。

「20歳ぐらいでしょうか？」

「ハズレ。リーリアちゃんはどつ思つ？」

「25歳ぐらいでしょうか？」

リーリアは正直だった。

「それもハズレ。正解は今年で60歳だ。月の物もとつくにあがっちまってる」

「え？」

二人は同時に驚きの声をだした。見た目からはまったく想像出来る事ではない。

「これは悪魔契約の副産物だな。悪魔契約で悪魔好みの肉体年齢が維持されるようになる。ただこれは見た目だけでね。実際体力は衰えるし、老眼にもなる。寿命も伸びたりはしないので不老不死ってわけじゃない。まあそれもあって掃除を頼んだりもしてるわけだ。流石にこの年になると片付けるのも一苦労でね」

「それは……」

リーリアが物欲しそうな顔をした。女なら誰でも羨ましいと思うだろう。

アルは年齢だけの問題じゃ無い気もするなあと思った。

「だからあまり若いうちに悪魔契約をすると困ったことになる場合もある。見た目が子供のまま変わらなくなったりな」

「さて次に具体的な魔法の使い方だ。アルくんの目的にも関係あるだろう。魔法使いと戦うならな」

「魔法は悪魔に具体的に何をしたいのか伝える必要がある」

「そのために必要なのが、魔器だ。魔器は様々な形態を持つ。私が持っているのは指輪だな」

キャシーは左手の甲を見せた。人差し指、中指、薬指にそれぞれ1つずつ大きめの宝石のついた指輪を付けていた。

「これは悪魔ごとに別の魔器を使っているんだが、複数の悪魔と一つの魔器で契約しているものもいる。この辺は交渉次第だな。あまり多くなっても面倒だしな」

「この指輪の場合は音声を悪魔に伝えてくれる。これは魔器によって異なる。何か図形を書いて魔器に見せるといやり方もあるし、匂いに反応する魔器や、温度に反応する魔器など様々だな。だから、魔法使いとの闘いで注意する点はまずはここだ。魔器はかならず具体的な何かに反応して悪魔に伝達する。注意深く見れば必ず魔法を使う予兆は発見できるはずだ。心のなかで思うだけで発動する魔法なんてのはないからな」

「私の場合は呪文を唱える。だがここで一つ注意点だ。呪文を他者に知られるのは非常に不味い。なぜならこの魔器は単純に音声に反応するだけだ、私じゃなくてもいい。つまり目の前のアル君が何か呪文を唱えたとしても、私の魔力を使って魔法が発動される。この場合はアル君が魔法使いである必要はない。ただ該当する呪文を唱えればいい」

「ああ言い忘れていたな。魔法を使うのは悪魔だが、その際には魔法使いの魔力が使用される。なので凄い悪魔と契約したとしても、魔力量がないと宝の持ち腐れなんてこともある」

「呪文の話に戻ると、呪文の場合は普通暗号化する。他人が聞いてもわからないようにね」

「例えば暗号化していても、全く同じように復唱すればいいんじゃないんですか？」

「そうだな。だから暗号化にはめくり暗号を使うことが多い。私の場合は使い捨ての暗号鍵を契約更新毎に100用意している。一回使う毎に暗号方式が変わるからな。理論的には解読不可能だ。まあ100ともなると全て覚えられなくてメモに取ってあるから、このメモを奪われてしまうとまずいことになるな。その場合もメモを失ったことに気づけば契約を更新してその暗号鍵を破棄すればいいんだが」

「まあその辺の工夫は人それぞれだ。呪文と手印を組み合わせたり、歌ったり踊ったりな」

「後、重要なのは悪魔は一度に一つしか魔法を使わない。これは魔法使い同士の戦いでは特に重要だ。魔法使いのアル君とリーリアちゃんがいるとしよう。この二人は同じ悪魔と契約している。この場合先にアルくんが魔法を使うと、リーリアちゃんはアル君の魔法が終わるまで魔法が使えない」

「なのであまり人と契約していないレア悪魔は重要だな。出来れば自分以外と契約していない悪魔が望ましい所だが、まあ普通は無理だな。なので普通の魔法使いは複数の悪魔と契約するな。魔法を使おうとしてその時たまたま他の人が使ってた、じゃ困るからな。保険が必要だ」

「どの悪魔と契約しているかという情報はかなり重要だ。悪魔同士の人間関係というのか悪魔関係もあるしな。友達同士の悪魔なんてのもいる。防御魔法を使っても、相手の悪魔に気をつかって防御を解除したなんて例もあるらしいぞ。それとは逆に敵対してる悪魔同士だと対抗意識のせいか必要以上に張り切って威力が上がるなんてのもあるな。そーいった悪魔同士の関係を熟知するのも魔法を効果的に発動するのに必要だな」

「そういえば先ほど話しに出た魔法学院、ここの魔法は少々特殊だな。学校として魔法を教える以上は全員がばらばらの魔法をそれぞれ覚えるということであればあまり教える意味が無いだろう？　そこでここでは悪魔のグループと契約をしている。悪魔側が同じ魔法体系を使用するグループを形成するように綿密な交渉をしたんだな。一度に一つしか悪魔が魔法を使わないなら授業もままならない。そこで、悪魔側も同じ魔法を使えるものを組織化したというわけだ。なので魔法学院に行けばそれなりの魔法をシステムチックに教わる事が出来るようになってる」

「後はそうだな、魔法を使う方法がもう一つある。古代遺物の中には魔法が使える魔導具があるのでこれを使う。有名なところではレ

ガリアがそうだな。各国の国王が持つてる。これは持つてるだけで特定の魔法が使える。こいつはかなり強力で個人が太刀打ち出来るようなレベルのもんじゃないな。レガリア以外でもあるらしいがそんなに世に出回るもんでもない。これを探すのは無謀だろうな」

「ふう、結構喋ったな。魔法の基本的な所はこんなものか。まあこれで魔法が即座に使えるようになるものでもないが、結構貴重な情報だとは思うぞ。普通は知らんしな。こんなこと」

「ありがとうございます。参考になりました」

「そうか？ ならいいんだが」

「その例えはなんですが、魔法使いと戦う場合、呪文使いなら大声で妨害するというのはありなのでは？」

「少し厳しいな。よっぽど大きな音を立て続けないと妨害は無理な気もするが」

「魔器を破壊するというのはどうでしょう」

「魔法使いと戦うなら常套手段だが、それは相手も気をつけるだろうな。それに隠し持っていることもあるだろう。壊したと思って油断したらドカン！ なんてのもあるかもな」

「魔法を使う前に倒すのは」

「結局それが一番だとは思う。魔法を使うにはどうしてもタイムラグがあるからな。まあその辺も戦闘専門の魔法使いなら対策は考えていると思うが」

「魔法使いとはどれぐらいの悪魔と契約しているものでしょうか？」

「うーん、普通は2、3体と言ったところじゃないか？ あまり多くても扱いきれないしな」

「一体の悪魔はどれぐらいの魔法を使えるんでしょうか？」

「それも悪魔によるが……10程度かな。悪魔は大体専門にわかれている。炎の悪魔なら炎を操るのが得意で炎の魔法で契約する。炎の魔法とか言ってもそんなにバリエーションはなかったりするしな。一体あたりが扱う魔法はそう多くはないな」

そこまでを聞いてアルは黙考し、少し経った後更なる質問を口にした。

「……万の魔法を使うというのはありえるでしょうか……」

「ン？ 万つて一万つてことか？ いやそれはないな、そんなもの扱いきれるわけがない。ああ、待てよ何かで聞いたな。……ああ、あれか！ 『テオバルトと千柱の悪魔』そういう童話だかお伽話だかに出てくる奴が確かそんな感じだったな。あらゆる悪魔と契約し万の魔法を使いこなすとか。まあお伽話のことだしな、実在の人物だとしてもとつくの昔に死んでるだろうさ」

「……テオバルト……」

「おいおい、真に受けるなよ。そんな奴がいるわけがない。そんなことを吹いてる奴がアル君の敵だとしてもだ、そりゃハツタリだ。断言してもいいよ」

「……そうですね。わかりました。色々ありがとうございます。結局僕が魔法を使うのはすぐには難しいと言うことですね」

「そうだな。地道に系統の似た魔法使いを探して師事するしかないだろうな。悪魔の好みの傾向はわかりやすいからな。アル君に似た姿の魔法使いを探すのが早いかもしれない。後は魔法学院か。あそこは容姿選考があるが、アル君ならいけるだろう。ただ金がいるから無理だろうな。授業料は馬鹿高い。平民じゃまず無理だ」

「まあ直ぐに魔法使いになれないとして、対魔法使いのアドバイスなんだが……気をしつかりもて」

「はい？」

「魔力は存在力とも言ったよな。だから魔法を食らっても諦めるな。結局最後にモノを言うのは根性だ。魔法に対抗するのは気合だよ。直接魔法をかけられたとしてもだ、強力な自我を保っていればなんとかなる場合もある」

「はい、ありがとうございます」

そこで一旦の区切りが付いたのかキャシーがコップに手を伸ばす。アルとリーリアも同じように水を口にした。

そしてアルが姿勢を改めてキャシーをまっすぐに見た。

「それでは僕達の話をしてもいいでしょうか？」

「ああそういう話だったしな。じゃあ聞かせてもらおうか、二人のボーイミーツガールストーリーをな！」

「いえ、そんな大げさなもんじゃないので拍子抜けされるかもしれませんが……」

無闇に大きくなっている期待を前に若干押され気味ではあったが、アルがこれまでの話を語り始めた。

5話 出会い

月明かりの元、少女が穴を掘っていた。

乾燥し堅くなった地面はそう簡単に掘れるものではないが、少女は指先を鉤のように曲げ安々と大地を抉っていく。

森の中は樹木の密集度が高く穴を掘れる広さを確保するのは難しかったが、そこは切り立った崖の側のためか樹木はまばらで平らな地面が露出している。

少女は一心不乱に機械的に同じ動作を繰り返す。穴は徐々に広がっていき、やがて人が入れる程の大きさになった。

成人男性が横たわるには少し窮屈なそれは見るものにその用途を簡単に想像させるだろう。これは墓穴だ。

中天に達した月が優しく少女を照らす。

無表情だがとても綺麗な少女だった。その無表情もいつかその笑顔を見てみたいと思わせる愛らしいものだ。

目的の大きさの穴が掘れたのか少女は動きを止めた。その様子はひどい有様だ。

ボロボロと言っている。エプロンドレスと思われるものを着ているが、そこら中が血と泥で汚れているし、千切れ、破れ、穴だらけだ。そんな状態ではあるが腰まである金髪だけは汚れもなく月の光を受け輝いていた。

どうすればこんな状態になるのかといえば、その答えはすぐそこにある。切り立った崖だ。崖には何かが何度もぶつかりながら落ちてきた後があったし、所々血が跡を引いていた。この崖から落ちてきたのだということは容易に想像が付く。

少女はゆっくりと土まみれの、爪の隙間にまでびっしりと土の詰まった手を顔の前に持ってきて呆然と見つめた。その目には光が取り戻りつつある。

しゃがみ込んだままの少女の隣で栗色の髪の子少年が腕を組んで墓

穴を見下ろしていた。簡素なくたびれた服を着た少年は墓穴を見て、まだ浅いかなと考えていた。

手を突っ込めば肘までが入る深さだ。人を横たえるには十分だがここは森の中で、あまり浅いと野生の獣に掘り返されてしまうだろう。それではわざわざ墓穴を掘る意味が無い。

さてどうしたものか、もう少し掘ってみようかと考えていると少女の方から音がした。少女を見るとぶるぶると震えゆっくりと口を開こうとしていた。

「あ……う……私は……何を……ここは……」

不明瞭な小さな声だったが、少女が声を出したことに少年はひどく驚いた。だがすぐに冷静さを取り戻すと「困ったな」と対して困っているようには聞こえない声でつぶやいた。

少女は混乱の極みにあった。何がなんだか全くわからない。しゃがみ込み、ただ呆然と土だらけの手を見つめ、先ほど少年から聞いた話を何度も思い返している。

ひと通りの説明を終え、自分の役目は終わったと言わんばかりの少年は墓穴をどうするかを考えていた。さらに倍も掘れば十分だろうか。1mも掘ればさすがにそこらの獣は手を出すまい。方針が決まったのでさっそく続きをやってもらおうと少年はいまだに呆けた状態の少女を見た。

「もう一度説明しようか？」

あまりにも反応がないため先ほどの話をよく理解してくれなかったのかと不安になった少年は訊ねた。

「……待つて、私に話させて。順を追って整理していくから！」

少女が少年を見上げて言うと、やっと口を開いてくれた事に少年はほっとした。少しはまともに物を言える状態になったらしい。

「いいよ」

「君は森の中を歩いていて。すると崖の下に倒れている女の子を見かけた。近寄って確認してみるとその女の子は死んでいた。君はその少女を可哀想だと思った」

「うん」

「君はその女の子をそのまま放って置けなくなった。可哀想な少女を葬ってあげようと思った。田舎育ちで弔い方なんてろくに知らないけどその少年はお墓を作ってあげようと思った」

「うん」

「ここまでではわかるの。ここまででは！」

少女は立ち上がった。本人は凄惨な剣幕で必死に訴えているつもりだが、そんな表情も可愛らしくあまり切羽つまったようには見えな

「でも少年は自分で墓穴を掘るのが面倒だった。それに土を掘るような道具もない。そうだ、本人にやらせればいい。少年はそう考えると、少女を動けるようにした。そして少女に命じ穴を掘らせた。少女は穴を必死で掘り続け人が入れる程の穴を掘った所で気づいた。私はなんでこんなコトしてるの！」

「うん、わかっているじゃないか。どこがわからなかったの？」

「わかったけどわからない！問題はその少女が私ってことよ！」

え？ なに？ 私死んでたの？」

「死んでたつていうか今でも死んでるんだけど」

「はい？」

「僕死体を操れるんだよ。何故かはわからないんだけど。人間にこの力を使ったのは初めてだったんだけどこんなことになるとは思わなかった」

「はい？」

「今まで僕が操った死体は簡単な命令に従ってくれるぐらいで自意識なんてなかった。だから穴を掘ってた君が急に喋りかけてきた時はびっくりしたよ」

「なんなのそれ！ 全然わかんない！」

「……うーん、今思うと試したことがあるのは、動物ばかりだったから自意識があったとしてもそんなのわかんなかったか。何でも試してみないと駄目だな」

「……私どうしたらいいのよ！ ねえ、なんにもわかんない！ ねえどうしたらいいの！」

少女は混乱のあまり叫び始めた。じわじわと不安が押し寄せてくる。この少年の言うことが本当なら自分は動く死体だ。周りの状況を見るに自分が死ぬほどの大怪我をしたようにも見える。しかし服はボロボロだが体には傷一つない。それはこの混乱の中、一筋の光明に思えた。

「ねえ、私怪我してないんだけど！ ほら！ 服は凄い汚れちゃってるけど！ だから私崖から落ちたのかも知れないけど、奇跡的に無傷で助かったんじゃないの！」

「……僕の力は死体を操ることなんだけど、その際には死体はちゃんと動けるように再生するんだ。ほら、腐乱死体を動かさうったって筋肉が腐ってたら動きようがないだろう？」

腐乱死体。その言葉に少女がビクツとした。自分は腐っていたのだろうか。

「私……どんな状態だったの？」

「聞かないほうがいいと思うけど？」

「いいから」

「死後そんなに経っているようには見えなかったな。全身骨折していたのか、そこら中がぐにやぐにやだった。頭蓋が陥没して、顔は……」

「もういい！ やめて！」

「自分が聞かせろっていったんじゃないか」

少年は不満気に言った。

「顔……顔も怪我してたの？」

「うん、元の顔がどんなかわからない状態だったけど……可愛くてよかったよ。ん？ でも僕は君の怪我をする前の顔を知らないんだから、本当に元に戻っているのかはわからないのか？」

少年の自問自答を聞き少女は焦った。

「鏡！ 鏡はないの！」

「そんなの持っていないよ」

「じゃ、水！ 川とかないの！」

「あつちに……って、月明かりしかないのに走るなよ！ 危ないだろ」

少女は少年の言葉を最後まで聞かずに走りだした。少年も慌てて後を追う。森の中に突入するというのに何も考えていない速度だ。足を引つ掛けなかったのは運が良かったのだらう。少女はあっさり

と川に辿り付いていた。少年も少し遅れて少女のそばにやってくる。

「今日は天気がいいのか特に明るいな。で、どう？」

少女は河縁にしゃがみ込み川を覗き込んでいた。月明かりが反射する穏やかな川面がなんとか鏡の代わりになっている。そこにあるのは少女が毎日のように見ていた、平均よりは上なんじゃないかと密かに自惚れている顔だった。少しほっとして息を吐く。

「大丈夫……おかしくなっていない……」

「それは良かったけど、あんまり勝手に動かないでよ。離れすぎると困ることになる。……いや、僕からしたその方が良かったのか？」

「まあいいや。じゃ戻ろうか」

「……なんで？」

「なんでってこんなところでずっとぼーっとしてるつもりか？ これからどうするんだよ」

「どうしたらいいの？」

「知らないよ。わからないなら当初の予定通り君がああ穴に横になつてくれればいいよ。土は僕にかけてあげるから」

「なんで！　なんで私がお墓に入んなきゃならないの！」

「そう言われても、僕は親切で言ってるんだ。あんな所にほつたらかしておいたら獣に食い散らかされると思ったからせめて埋めてあげようと思ったのに」

「私生きてる！　生きてるよ！」

「うーん、確かに意識のある君を無理やり埋めてしまうのは抵抗がある。だからここは君が自ら埋まってくれれば問題ないんだけど」

「問題ある！」

「困ったな。君死んでるのに」

先程から何度も死んでると主張され少女は不安になった。もしか

したら本当にもう死んで少年の言うように生きた屍なんていう魔物のような存在になってしまったのかも知れない。少女は自らの胸をそっと抑えた。確認する。そこには確かにいつものように脈打つ鼓動があった。

少女は勢い良く立ち上がった。

「ねえ！ 私の心臓動いてる！ はら、ドクンドクンって！ 元気いっぱいだよ！ 頑張ってるよ！ これ！ 死んでないよ！ ほらほら！」

そう言っただけ少女は少年の手を取るとふくやかな胸に押し当てた。

「ねえ！ 動いてるよね！ 私死んでないよね！」

「……えーと、やわらかいね」

少女は困り顔の少年をまじまじと見た。両手でしっかりと少年の手をつかみぎゅっと自分の胸に押し当てているのに気づくと大慌てでその手を放り出し離れた。

「きゃー！ 変態！ エロ！ 痴漢！」

少年に背を向け、胸をかき抱き大声で叫ぶ。

「自分で触らせておいてそれは無いと思うなあ」

「もう嫌！ 私帰る！」

少女はそのまま少年の方を見もせずにごくかへ行くこととする。

「帰るのはいいけど君はどこから来たんだ？」

「え？」

「崖から落ちたみたいだけどその辺の事は覚えているの」

言われた瞬間目の前が真っ白になった。そして思い出した。少女は水をくみに出かけた。一人では危ないと言われ二人で出かけ、帰り道で崖から足を踏み外した。もう一人に押されたのだ。重い水桶を持っていた少女は簡単にバランスを崩し崖に落ちた。最後に見えたのは自分と同じようなエプロンドレスを着た少女の微笑だった。

「え？ アレ？ 私崖から……」

確かに落ちていた。それをはつきりと思い出した。足を踏み外した瞬間に死んだと思いい气了失った。その後気づけば土を掘っていたのだ。气了失ったのは不幸中の幸いだったのだろうか、痛みに苦しんだ記憶はなかった。

「そもそも君は誰で、なんでこんな森の奥深くにいたんだ？」

「え……私は……」

第3魔族領開拓団。それを率いるのは第2遊撃隊と出発直前になって割り込んできた第3遊撃隊だ。第3遊撃隊は開拓団とは別に自分達専属の従者を求めた。

募集人員は10名。仕事内容は第3遊撃隊隊員の身の回りの世話ということと特に難しくもないし、勇者の従者ともなれば箔が付く魔族領が危険とはいえ勇者の側なら安全だと思われる。応募は殺到した。

厳正な面接が行われ最終的に見目麗しい10名の乙女達を選出された。少女もその一人だ。

「えっと、私は勇者様の従者で……」

道中は何台もの大型の馬車を連れ、まるでパレードのようだった。それなりに裕福だった少女にとっても見たこともないような豪華な内装の馬車はともゆっくりと進む。少女はその間ほとんど何もしなかった。遊撃隊員1名ごとに馬車が用意されそれぞれ二人の従者が付く。隊員は4人なので、従者は二人あぶれることになる。少女はその二名のうちの一人だった。あぶれた彼女ら二人にも専用の馬車が用意され特に何をするともなく過ごした。

何日もかけてやっと森に辿り着くとそこからは徒歩だ。従者ということで大量に持ってきている荷物を運んだりするのかと思えばそれは開拓団の人間が行う。従者は勇者達の後をぞろぞろと付いて歩くだけだった。

勇者はさすがに強く、時折現われた魔族の残党を苦もなく倒していった。魔王城とされる館のある集落に辿りつくところを拠点とすることになった。

畏が仕掛けられていないか入念に調べたあと、使えそうな建物はそのまま使い、後は天幕などを設置し生活環境を整える。簡単な柵や鳴子なども用意し敵の襲撃に備えた。

「私何の役にも立ってなかったから……」

それまで特に従者としてこれといった活躍をしていない少女は、勇者様になんとか尽くそうと料理をふるまうことにした。開拓団の中にも料理の担当者はいたがとりあえず食べられればいいというものだった。これまでの道中では難しかったが拠点を構え落ち着いた今なら遊撃隊員の方だけでももう少し凝った料理を作れるはずだし、少女にはその自負があった。

その旨を申し出ると料理に不満のあった遊撃隊員達は二つ返事で承した。

少女は料理の準備を始める。食材はふんだんに持ち込まれていた

し、調理器具もそれなりのものがあつた。ただ、料理をするには肝心の水がない。この集落には井戸の類がなく近場の川まで水をくみに行っていたらしい。水をくみにでかけようとするに従者仲間の少女が声を掛けてきた。森の中は一人では危ない、それに二人の方が効率がいい。そう言われると断る理由もなく同行することになった。

「なんで……」

なんで突き落とされたんだろう。事故などではなかった。今思えばわざと崖の方に誘導した節も感じられる。明確な殺意とともに体を押されたことをはっきりと思い出すと少女の体は震え始めた。

「もういや!」

少女は取り乱しそのまま駆け出した。また森の中へと入っていく。今度は少年も追わなかった。

どれだけ走り続けたのか少女は森の更なる奥へと足を踏み入れていた。いつまでも走り続けられるわけもなく少女は全力疾走をやめとぼとぼと歩いている。無闇に走り続けてもどこに行くあてもないし今自分がどこにいるのかも分からない。

行くとすれば開拓団の拠点ぐらいしか思いつかないが崖から落ちてしまった今、どうやって戻ればいいのか分からない。

あの崖を登ればすくなくとも水をくみに出かけた道のどこかには戻るはずだがとても登れそうには無い。それならば崖沿いに歩いてなんとか崖上に戻る方法を模索すべきだったが時既に遅い。完

全に迷子だ。

自然に涙があふれ出てくる。止まらない。

明らかかな殺意を向けられそして殺された。何故なんだろう。そんなに嫌われるようなことをしたんだろうか。少女は考え続ける。

あの少女は名はなんといったのか。それも覚えていない。ほとんど接点はなかった。最初から遊撃隊の側に仕えていたはずだ。彼女ら従者の間には仕える隊員に応じて序列が出来始めていた。筆頭はやはり聖棍の勇者ヴァルターに仕える二人だ。後は順に魔法使いセルジュ、短槍使いのエーヴェルト、司祭ギヤリの従者と続く。その例で言えば少女は専任の担当者がおらず最下位に位置するだろう。

あの少女は勇者に仕えていた。なので嫌われるほどの接触はなかったはずだ。水をくみに向かう道中そんなそぶりはまるでなかった。普通に会話をしていたし、これから仲良くなれるのだと思っていた。

どこかで獣の遠吠えが響いた。少女は身をすくめる。ここは最近まで魔族が支配していた土地だ。レガリアの破壊により魔獣の類は自然といなくなると聞いていたが、完全にいなくなるにはまだ時間がかかるだろう。魔獣でなくてもただの獣に襲われても少女には対抗する術はない。

少女は半ばやけになっていた。もうどうでもいい。死んでいるというのだ。何に襲われようともう一度死ぬだけなんだろう。だがそんな考えはあっさりと翻ってしまった。

少女の体がぐらりと揺れた。立っていられなくなり樹木に身を預けた。体に力が入らない。

「え？」

樹にもたれかかったままずり落ちると意図せずしゃがみ込んでしまった。立ち上がれない。まるで足がなくなつたかのようだ。

慌てて手を伸ばそうとするもそのまま地面に倒れこんでしまった。少女は慌てた。だんだんと力が入らなくなっていく。なんとか手

を胸に伸ばし鼓動を確認するとひどく弱々しく、先ほど心臓の頑張り具合を誉めたたえていたのが嘘のようだった。

嫌だ死にたくない！

泣き続けぐしゃぐしゃになった顔をさらに歪め必死に土をかく。それしか出来なかった。

もう指先ぐらいいしか動かない。呼吸もその頻度を緩めていく。体は酸素を熱烈に求めているが呼吸器系の麻痺が進みそれもままならない。

叫ぶことも出来ずそのまま息絶えようとしたその時声がかかった。

「このまま放つところかと思ったんだけど、さすがにそれは寝覚めが悪くなりそうだ」

少年が少女を見下ろしていた。しゃがみ込むと少女と目線をあわせる。泣きはらした少女の顔を見、少年は少しドキリとした。

「落ち着いてよ。大丈夫。僕が側にいれば元に戻る」

「ほんと？」

ぐずりながらも声が出た。呼吸が元に戻っている。

「ああ、大丈夫だよ。すぐに戻る。だから安心して」

程なくして少女の鼓動は力を取り戻す。くにやりとして力の入らなかつた手足の感覚も戻ってきた。

「僕の能力には有効範囲がある。正確な所はわからないが、1 km ぐらい離れた所でこうなったのかな」

少女はゆっくりと上体を起こした。もうほとんど回復したらしい。

少女は樹にもたれかかると大声で泣いた。号泣だ。先程から泣き続けていたがさらに涙が溢れてくる。死の恐怖とそこからの回復による安堵。わけのわからない状況、知り合いに向けられた明確な殺意。色んな思いがごちゃまぜになり心のなかを吹き荒れる。

その姿は少年の心を打った。飄々とした体の少年ではあるがほぼ初めて見る女の子の涙に動揺した。多少泣いたぐらいでは動じないだろうがこの慟哭といっていい少女の姿には参った。

少年はおおずと手を伸ばし少女の肩にそつと置いた。

「なあ……悪かった。君の境遇は僕のせいだ。出来る限り君に協力すると約束する。勝手に骸に戻すようなこともしないし、君の望むようになるよう努力しよう。だから泣かないでくれ。大丈夫だ。僕が側にいればこんなことはもう起こらない」

少女は泣き続けた。少年は優しく声をかけ、辛抱強く泣きやむのを待った。

やがて気力が尽きたのか少女は泣き止む。泣いたおかげでかある程度の心の整理はついたようで少し落ち着きを取り戻しつつあった。

「そついえば自己紹介をしていなかったな。僕はアルだ。この森を出て旅に出るつもりだったんだけど、いきなり君を見つけてこんなことになってしまったわけだ。それで君の名前は？」

「……リーリア……」

「そつか女の子らしい、いい名前だね」

アルはあまり常識的なことは知らなかったが、本をよく読んでいたので女の子の名前の末尾がリアになることが多いことを知っていた。

「とりあえずさっきの穴の所まで戻ろうか。大したものじゃないけ

ど荷物が置きっぱなしなんだ」

少年は立ち上がった。リーリアに手を差し出す。リーリアは手をとろうとして直前でためらった。そういつて墓穴に埋めるつもりなのではないかと少し思ってしまった。

「ん？ ああ、さっきも言ったようにもう君を屍に戻すようなことはしない。元々は君のためと思ってやったことだ。君の意に沿わないことはしないよ。いきなり信用はできないかもしれないが、僕がその気ならいつでも能力を解除して君を屍に戻すことが出来るんだ。それをしていないんだから、とりあえずそこは信用してくれてもいいだろう？」

つまり面倒になつてリーリアを屍に戻すならわざわざ墓穴に埋める必要などないということだ。それは理解できたので、少女は少年の手を取り立ち上がった。

「じゃあこれからどうするかはまだ決めてないけど、よろしく」

つないだ手はそのまま握手となった。

「……よろしく……」

リーリアは泣きすぎて枯れた声でぼそぼそと返した。まだ何がどうなっているのか全然理解していない。そもそもこのアルという少年が謎だった。森から旅立つとか死体を操るとかわけが分からない。ただ、それでも泣き続けるリーリアに優しくしてくれたアルのことは少しでも信用してもいいと思った。

6話 野族

かなりの距離を移動していたのか、墓穴のある崖下に辿り着くには時間がかかった。途中川に寄り手と顔を洗った事もあるが、月が常に無いほど明るいとはいえ鬱蒼とした森の中を移動するのに手間がかかったせいだ。リーリアのように勢いに任せて駆けるわけにもいかない。

リーリアは自分がどこにいるのやら見当もついていなかったが、アルはこの森には詳しいらしく特に迷うこともなかった。

「よかった。荷物は置いたままだ」

アルが荷物を前にいう。只のズタ袋だ。中には数日分の食料として干し肉が入っている。匂いを嗅ぎつかれば獣に奪われている可能性もあった。

「さてどうしようかな。今夜はとりあえずここで野営するしかないんだけど。困ったことにそんな装備の持ち合わせがない」

そのアルの言いようにリーリアは訝しく思った。リーリアは森に入ってから拠点まで2日はかかった。なのでその間に野営は経験している。アルがどこから来たのかは聞いていないが、今ここにいるということから考えるとアルも森を出るには何度か夜を迎えるはずだ。野営のことを考えていないはずがない。

「野営のこと考えてなかったの？」

「ああ、僕一人ならなんとかなるんだ。でも今は君がいるからね」

そう言うと荷物から一枚の毛布を取り出した。

「こんなものしかない」

「えーと、一人で野営って危険じゃないの？ その……普通は不寝番みたいなのがいると思うんだけど」

一人で夜の森で寝るなど自殺行為にしか思えない。

「ああ、それも君を見つけるまでは問題なかったんだ」

と、アルは少し離れた場所を指さした。リーリアがそちらを見ると何かの塊のようなものがある。よく見てみるとそれは二匹の狼の死骸が重なりあったものだった。

「元はアレを操って護衛してたんだ。何かあれば起こしてくれるし、野生の獣ならまずあれにわざわざ近づいてくることはないよ」

「狼も操れるの？」

「うん、動物なら大抵大丈夫。でも脳があまりにも小さいの言うこと聞かないけどね。あまり原始的なのは駄目みたいだ」

しかし狼は今のところ動く心配がない。見たままの通りあれは死骸だ。

「なんで今は動いてないの？ まさか時間がくると死んじゃうとか……」

リーリアは先ほどの息苦しさ脳裏に蘇ってきて嫌な気分になった。

「僕が一度に操作出来るのは大きめの成人男性ぐらいのサイズまで

だ。だからリーリアを操るのに狼二匹に対しての能力は解除するしかなかったんだ。だから解除しない限りはリーリアは大丈夫だ」

と言って狼の元に歩いて行く。アルが手を触れると狼が動き始めた。

しかし、操るとは言うがそうは見えなかった。リーリアも別に操られているような気はまるでしていない。狼もその動作をいちいち操っているわけではなく勝手に動いているように見えた。

「リーリアと狼一匹ならギリギリでいけるみたいだな」

狼に一言二言話しかけ、連れて戻ってきたアルは毛布を地面にひいた。幸い現在は中立地帯となっているこの森にも、マテウ国の常春の余波があり気温はあまり下がることはない。周囲の環境さえ許せばそこらに寝転がって眠ることも可能だ。

「じゃあこれからの事は明日考えるところで、とりあえず今日は寝よう。もうかなり夜も遅いし」

そう言ってアルは毛布の上に横たわった。狼は少し離れた位置で寝そべっている。

「えーと……私はどうしたら……」

リーリアは困った。寝る場所がない。

「毛布はこれしかないよ？」

リーリアは大きく息を吐いた。特大サイズのため息だ。見ず知らずの男の側で眠るなんて耐えられそうになかったがここで毛布を譲

れとまで図々しいことも言い出せない。仕方なくリーリアはアルの隣に寝そべった。背を向けて横になる。毛布の下のごつごつした地面が直接感じられるようであり意味がないようだったが、何もないよりはましといったところだろう。

こんな状態で眠れるのかとリーリアは心配したがそれは杞憂に終わる。すぐにまどろみ始めた。

翌朝二人はこれからのことについて話しあうことにした。毛布の上座ったまま向き合っている。

「さて今後どうするかなんだけど、リーリアはどうしたい？」

「え？ 私？」

「うん、まず君がどうしたいかから考えよう。僕の話は後回しでもいい。現状僕から離れると君は骸に戻る。僕が好き勝手にやれば君はそれに振り回されることになるしね。僕も反省はしてるんだ。だから君がしたいように言ってくれればいい」

「その……私も昨日は混乱してて……でもこうやって生きて話してられるのもアル君のおかげだから、別にアル君が悪いつてわけじゃないと思うんだ。その、昨日はいろいろと……ごめんね」

「いいよ。気にしなくて」

「それで……私勇者様の従者をやってるんだ。崖から落ちたのも水をくみに行った帰りで……みんな心配してるんじゃないかな……」

「勇者と言つと今、魔王の館のある集落にいるのか……そこから来たの？」

「うん」

「じゃあとりあえずそこに向かうか。まあ、旅立ってすぐに戻るの

もなんだけどね。ちよつと間抜けだな」

アルは頬をかいだ。少しばつが悪そうだ

「いいの？ でもそうしたら、アル君旅はどうするの？」

「もともと母さんだけの事だったんだ。母さんが死んだ今あそこに留まる意味がないと思ったから旅立とうと思った。けど、別に今すぐじゃなくてもいい」

リーリアには少し意味がわからなかった。けれど死んだという言葉葉にすこしぎくりとさせられる。

「その……お母さんって……」

「勇者に殺された」

リーリアが衝撃に目を見張った。まさか勇者様が人殺しを。俄には信じられない。

「ああ違つんだ。母さんは魔族なんだよ。だから仕方ないんだ。勇者は……それが使命なんだろう」

アルの目には諦めがあった。本当にどうしようもない思っているようだ。

リーリアは座ったままの姿勢で思わず後ずさる。魔族。最初からおかしいとは思っていた。つい最近まで魔族が支配していた深い森の中を一人で旅をする少年。しかも死体を操るなどという謎の能力を持っている。疑ってしかるべき状況だ。素直に考えればこの少年が魔族だと簡単に答えが出る。

「おーい。何か誤解してるだろ。僕は魔族じゃないぞ。人間だ。ほ

ら肌が白いだろ？ この森の魔族の肌は黒い。見たことないか？」

そういえば、と思い出す。森の中を勇者一行は魔族を倒しながらやってきた。その際に見かけた魔族は全員真っ黒な肌をしていた。だがそれだけで警戒を解くことはできない。この少年は確かに怪しい。

「どう思われようといいんだけどさ。僕は物心ついたころにはもうここにいたんだ。そして魔族の母さんに育てられた。事情はわからない。多分さらわれて来たんだろうな」

あの男に。最後にそう言ったようにも聞こえたがはっきりとはしなかった。

「でも、今君に危害を加えてるわけでも無いんだ。そう怯えないでくれよ」

「それは……わかるけど」

「もう少し僕のことを言っておくと、魔族に育てられたと言っても関係のあったのはほとんど母さんだけだ。他の魔族には無視されるかいじめられるかそんな感じだった。だから魔族のことも実はよく知らないんだ。まあそれ以上に人間についても知らないんだけど。人間については本で読んだぐらいだな」

「お母さんは優しくしてくれたの？ その……魔族なの？」

「優しくかったよ。いつかは人間の世界に戻るべきだと思ってくれたのかな、人間の言葉の読み書きも教えてくれたし。他の魔族とも僕のことでしょうっちゅうもめてたけどいつもかばってくれた。いじめ殺されるようなことがなかったのも母さんがいてくれたからだし」

「お母さんを生き返らせようとは思わなかったの？」

思わず口をついたがリーリアは後悔した。そこまで踏み込んでい

いとは思えない。

「うん。そもそも僕のが生き返らせるとかいうものじゃないしね。リーリアみたいになるなんてわかったのは今回が初めてなんだ。これがリーリアだけに起こることなのか人間なら誰でもこうなるのかも分からない。まあ今後人間に使うことはないと思うけどね」

「ごめん、変なこと聞いて」

「いいよ。でもどうだろうな、もし自意識を持った状態で復活するってわかってたなら。……それでも使わなかったと思う。やっと母さんは休めたんだ。このまま眠らせてあげたい」

しみりとした雰囲気になってしまった。それを破るようにアルが慌てて言う。

「ああ、話がずれたな。で、どうする。開拓団に行くかい？」

「ほんとにいいの？ 私が開拓団に戻ったらアル君どこにも行けなくなっちゃう」

「構わないよ。別にあそこにずっといるわけじゃないだろう？」

「うん、出発前に聞いた話だと最短で一ヶ月、長くても半年って話だったよ。それで中立地帯はマテウ国の領地になるって」

「そうか、なら全然問題ないよ。それからはどうするんだ？」

「街に戻るかな。実家に帰ると思うけど……」

本来の目的は勇者様にお近づきになり、そのまま仕えることだったがそのまま言うのは何故か躊躇われた。

「うん、僕も街に行きたいと思っていたんだ。リーリアが一緒なら都合もいい。僕は人間社会の事は本で読んだだけなんだ。色々常識的なことを教えてもらえると助かるし」

「でもアル君から離れられないっていうのはどうするの？」

それが問題だった。四六時中一緒にいるわけにも行かないだろう。有効範囲は1kmというのが何かのおりに離れ離れになってしまふことがないとも限らない。

「そうだな。しばらくは一緒にいるしかないね。でもそれはある程度時間が解決してくれると思う。僕のこの能力は少しずつ成長している。最初は10mも有効範囲はなかったんだ。だから有効範囲はそのうちもつと広がると思う。まあ先の事はわからないし、まずは開拓団だな」

そう言うところアルは立ち上がりリーリアに手を差し出した。こういう所作はごく自然で気遣いに溢れている。アルの先ほどの言葉からすると母親から学んだものなのだろう。リーリアも素直に手を握って立ち上がった。

撤収はすぐに終わった。毛布をズタ袋に突っ込んだぐらいのものだ。墓穴は放置することになった。埋め戻すのも面倒だしこんなところ穴があつた所で誰に迷惑を掛けるものでもない。

二人が崖沿いに歩き始めると、今まで彫像のようにぴくりとも動かなかつた狼がその身を起こし、後について歩き始めた。

まず二人は崖の上へ移動する必要があつた。この森は緩やかではあるが全体で高低差が100mほどあり裾野が広い山のようになつていた。そのため崖のようになっていて箇所が結構あり直線的に移動するのが難しい。開拓団の拠点はほぼ森の中央、山頂部分に位置している。

崖に登るのは無理なのでかなりの距離を歩くことになる。

「すぐそこだと思ったんだけど結構かかるね」

「リーリアはかなり落ちてきたんだ。戻るのは大分かかるね」

朝出発し既に昼を過ぎているが、まだ崖の上までも辿りついていない。

二人はとりとめもない会話をしながらゆっくりと歩く。リーリアはあまり体力には自信がない方だったのだが、特に疲れることもなく不思議に思っていた。

「それは僕の能力のせいだな。最適な状態で動くように体を再生するみたいだし」

リーリアは少し複雑な気分にはなったが現状の疲れ知らずな状態は便利でありそれは受け入れた。

「アル君てさあ何歳なの？」

不思議に思っていたことを他にも聞いてみた。見た目は自分とそう変わらないように思えるが童顔なだけかもしれない。それに喋り方があまり子供っぽくないようにも感じる。

「15歳ぐらいだと思っ」

「私16歳！」

「なんでそれだけで微妙に自慢気なんだ？ 1歳しか変わらないじゃないか」

「1歳だろうとんだらうと私の方がお姉さんということですよ！」

そんなことでムキになるのがお姉さんなのか？ と思ったが口に

は出さない。それに15歳というのも大体これぐらいだろうと言っことだ。誕生日も知らないし本当の所何歳なのかは分からない。だがそれを言つとリーリアはまた失敗したと思つてしまつたろう。

「そのお姉さんはなんでこんな森にやつてきたんだ？ 開拓団なんてつまらないだろう？」

開拓団などという名前だが別に開拓は行わない。ただ居続けるだけだ。リーリアのような少女が好む職業とも思えない。

「えーとね……勇者様なの」

リーリアが少し照れたように言う。

「ああ、そういうえば勇者の従者だとか言つてたね。何？ その勇者が好きなの？」

「違うの！ 本当はね、第一遊撃隊のフォグ様なの！」

バタバタと手を振りながら慌てて言う。

「何が違うんだ？ そのフォグつてのが勇者なんだろ？」

「えとね、今この森に来てるのは第二遊撃隊と第三遊撃隊なの。でね私は第三遊撃隊の従者なの」

「ん？ よく分からないな。第一遊撃隊つてのは来てないんだろ？」

「そうなんだけどね、とにかく勇者様にお近づきになれば、そこから第一遊撃隊のフォグ様にもつながらんじやないかと思つてね、その……」

「はあ……何だそれ？ えらく遠回りだな。そのフォグつてのが好きなら、そつちに直接行けばいいじゃないか」

「い、いきなりは無理！ そ、それにフォグ様に会える機会なんて

滅多に無いし。だから他の勇者様の従者でも、なればお見かけする機会も増えるんじゃないかなあって。第一遊撃隊では従者の募集なんてしてなかったし……」

「まあリーリアがそうしたいんならそれでいいよ。何か手伝えることがあるなら僕も協力するよ。フオグってのと仲良くなればいいんだろう?」

「ほんとに!?!」

「ああ、別に急ぐ目的もないしね。最終的には結婚出来ればいいのか?」

「け、けけけ結婚て! そのそりゃ最終的にはそうなのかもしれないけど、その、まずは自然に話せる感じからですね、そのお友達ってゆーか……その……」

リーリアが顔を真赤にしてすごい勢いで話しているがアルは途中から聞き流している。

そんな話をしながらも歩き続け崖の上へと辿り着く頃には陽が落ちようとしていた。

「ここまで来ればもう一息つてところだな」

「夜になるまえにこれでよかったね」

後は道なりに進めば開拓団の拠点に行ける。そう二人が思った時前方に人影が現われた。

5人だ。道を塞ぐように扇形に展開している。アルが後方を確認するとそちらには3人。囲まれていた。

全員が同じような格好をしている。胴を覆う革鎧と手足を部分的に覆う装甲、機動性を重視した装備だった。アルとリーリアが大した武装をしていないのを見て舐めているのか武器は手にしていない。剣は腰や背に帯びたままだ。

下卑た面をしている。アルはそう思った。

「リーリア、念の為に聞くけど、開拓団の知り合いか？」

「わ、わかんない。けど開拓団の人たちはこんな感じじゃないよ」

しかし開拓団以外の人間がここにいる筈もない。まだここは魔獣がうろつくような魔境だ。盗賊の類もわざわざこんな所へはこないだろう。

「何か用かな？ あなたたちに見覚えは無いんだけど」

とりあえず声をかけてみた。

「はっ！ 見覚えなんかあるわきゃねーだろーが！」

前方の5人の中央の男が一步踏み出し脅すように喚いた。リーリアは驚きアルの腕にしがみつく。柔らかい胸がアルの腕に押し付けられ形を変えた。

「見た感じ盗賊の類か？ 見ての通り僕らは大したものを持ってない。一番価値のあるもので乾し肉の塊ぐらいだけどこんなものが欲しいのか？ それで良ければ譲るからここを通してくれないか？」

「ガキが！ 舐めてんじゃねーぞ！」

まあそうだろうな。とアルは思う。そんなものが目的のはずもない。まず盗賊がわざわざこんな所で獲物を物色しているはずがない。盗賊がこんな所までやってくる理由としてまずあげられるのは開拓団の存在だろう。開拓団は勇者を除けば戦力は無いに等しい。陽動等で勇者をおびき出すことが出来れば勝算は十分にある。最長半年をここで過ごすつもりでやってきている開拓団だ。物資を全て奪うことが出来るなら相当な利益になるだろう。だがそれならその盗賊

団はかなりの規模になるはずだ。この程度の少人数ということはない。ならばこいつらは、別働隊か偵察隊、見張りというような役割の小集団だ。この行動はこいつらの独断だろう。僕達がここに来たのは偶然が重なったことだ。なら目的は……。

そこまで思索を進めた所で鈍い音が大地を揺らした。

中央の男が剣を抜き大地に斬りつけたのだ。その剣は刀身を全て大地にめり込ませている。ずっと無視している体のアルに業を煮やしての行動だ。その膂力は人間業ではない。

「貴族か？」

「ア、アル君、野族だよ。どうしよう……」

野族とはその身を犯罪者へと墮とした貴族の蔑称だ。世界中のどの国でも魔族以上に恐れられていた。貴族の身体能力を持ち、人の欲望で襲いかかってくる。魔族も恐れられてはいるが基本的には魔族領から出てこない。しかし野族はどこにでも現れ思うがままに暴れた。

リーリアはすでに絶望していた。ただの盗賊相手でも勝てるとは思えないが、野族を相手にどうにかなるとは全く思えない。

「隊長、遊んでないでさっさとやりましょうぜ」

部下と思しき男が欲望にぎらついた目でリーリアを見て言う。

中央の男が隊長か。アルは全員を見渡した。武器は全員剣だ。野族なら当然なのだろう。貴族や野族は基本的には飛び道具を用いない。彼らの移動速度では飛び道具などまどろっこしいだけだからだ。弓を引いて放つ暇があるなら、敵に突っ込んで武器を振り回せばそれで済む。

「目的はリーリアか、けどこんな臭い女でいいのか？」

「く、臭くないよ！ え、もしかして腐ってるの！？」

「服が臭うよ。血肉が付着したまま乾いてるし」

「え、嘘！ わかんないんだけど！」

「慣れちゃったんじゃないか？」

野族の隊長が地面に埋まった剣を抜き、アルに突きつけた。

「黙れガキ、てめえは黙って女をよこせばそれでいいんだよ！」

アルはその剣先を見つめながら冷静に語りかけた。

「何故僕を殺さない？ その剣で僕を貫けば終わりだ。その後女を連れていけばいい」

「お前は人質だよ、その女を手懐ける為のな！ 女に抵抗されるとむかついて、つい殺しちゃうしな。おい、女！ お前は今から俺ら全員の相手をするんだ。逆らうならその男を殺す！」

「アル君……」

リーリアは不安にかられアルを見つめた。もうおしまいだ。どうしようもないと思いアルを見たのだがアルはいつもの生意気な顔のままだ。怯えている様子はまるでない。

「大丈夫だよ」

そう言われてもリーリアには全くそのようには思えない。

「早くしろ、腕の一本も落としてやろうか、ああ！」

野族が焦れて叫ぶ。

リーリアは観念してアルの腕を放した。どんなひどい目にあうの

かは想像もつかなかったが、アルが怪我をするのを見過ごすことは出来なかった。短い付き合いだったがそれでも今まで十分自分を気遣い優しくしてくれたと思っっている。

リーリアは野族に向け足を踏み出した。

隊長の淫靡な期待に満ちた左手がリーリアの胸に伸びる。触れようとした瞬間にそれは起こった。

リーリアの右手が隊長の左手首に上から絡みつき、左の掌が下から隊長の肘を押さえた。そのまま強く引いてテコの要領で肘を砕き、同時に隊長の左膝を右足で蹴り折る。ここまでは正に一瞬の出来事だ。簡単に言くと伸ばしてきた腕を掴んで引つ張り、体重が一方の足にかかった瞬間に膝を蹴り、ついでに肘を折ったということだ。

膝を砕いた時点で勝負は決していたが攻撃はまだ終わらなかった。右足を戻すと同時にリーリアの左膝が跳ね上がる。膝を折られ前のめりに倒れてきた隊長の顎を粉碎した。舌が血の糸を引いて飛び、だらし無く開いた口からは砕けた歯がぼろぼろとこぼれ落ちる。止めとばかりに右肘を側頭部に叩きつけると頭蓋の砕ける音がし隊長は森の中に吹っ飛んでいった。何かが潰れる音と、木がへし折れる音、木が倒れ森を揺らす音が続けて聞こえた。

「え？」

アルを除いて全員が驚愕に動きを止めていた。中でも一番驚いているのはリーリアだろう。体が勝手に動いて野族の隊長を粉碎し、何がなんだかわからないうちに右肘を振り切った止めのポーズを取っていた。その動きについていけず乱れ浮いていた金髪がふわりと下りてくる。

「リーリア、僕が常識に疎いって話をしたと思うけど、こういう場合はどうしたらいい？ 殺しちゃっていいよな？」

「う、うん盗賊は死罪だし、殺してもお咎めはないけど……」

リーリアはぼーっとしたまま聞かれたままに応えた。

「よしやるっ」

狩られる側にまわった野族達はもろかった。普段その圧倒的な身体能力で敵を蹂躪する戦い方しか知らない彼らにとってそれ以上の力を振るい、術技を行使する相手を前に為す術がなかった。

単純に振り回した剣は簡単にそらされ、懐に入れられ、そのまま投げ飛ばされる。地に投げ倒された彼らを待つ運命は、全力の踏み下ろしでの顔面の破壊だ。

突き込んだ剣は手首を打たれ簡単に落とされた。落とした剣は馬鹿みたいな力で蹴られて彼らの胴に突き刺さる。革鎧など何の役にも立たない。

背を見せ逃げようとした者はたちまち追いつかれた。後ろから眼窩に指を引っ掛けられ、そのまま引き倒される。これも踏み下ろしの餌食だ。

終わってみれば圧勝だった。1分もかかっていない。この結果にリーリアはますます呆けた。

「え？ なにこれ？」

リーリアは悲壮な決意を固め、野族に身を任せようとしていた。それがいつの間にか死屍累々といった有様だ。わけがわからない。

「ちょっと複雑な気分だな。僕がやるよりずっとうまい。これはあれかな、外から見てるから体重のかけ方やら、姿勢が本で見たイメージ通りに出来るからかな。思ってた以上だ」

「へ？ どういうこと？」

「ああ、ごめん。今のは僕が直接リーリアを動かしたんだ」

「ほえ？」

変な声が出た。

「言っただろっ？ 死体を操れるって。今のがそうだよ」

「はい？」

「今までは、狼とか猿とか動物しか動かしたことがなかったんだけど、やっぱり人間はいいね。自分の体と同じ感覚で動かせる」

そういうとアルは森の中へ入っていった。そして男を一人ずるずると引きずってくる。最初に吹っ飛ばした野族の隊長だ。

「さすが隊長って所かな？ 殺したつもりだったんだけど」

「えっと……生きてるの？」

見るも無残な状態だった。ぴくぴくと痙攣している。生きているのかもしれないが、死んでいないだけというように見えた。

「こいつどうしたらいいと思う？」

「わかんないよ、そんなの！」

「生きてるなら話を聞こうと思ったんだけど、この状態じゃ無理だな。僕が想像するにこいつらはもっと大規模な盗賊団の一部だ。多分開拓団を狙っているんだろっ」

「え？ それまずいんじゃないの？」

「うん、開拓団に伝えないとね。とりあえずこいつは開拓団に引き渡そうか」

このまま引きずって連れていくんだろっか？ リーリアが疑問に思うといつのまにか側に狼が現れていた。

狼は野族の隊長の襟首を啜えるとそのまま引きずり始めた。そういえばずっと付いてきてたんだって、とリーリアは今まで目立つことのなかった狼を見た。こうやって忠実に言うことを聞いているのを見るとなんだか可愛く見えてくる。

「じゃ行くっか」

そう言ってアルは歩きだした。

リーリアはそのままついていこうとしたがある疑問からその歩みを止めた。

なんだかすごく重要なことを適当に流された気がする。

「アル君」

「なに？」

「私を……直接操れるってどういうこと？」

「そのままの意味だけど、より詳しく言うと感覚の同調と筋肉の操作が出来る」

「感覚の同調って……」

「リーリアが何か触った感じがわかったりとか、何かを殴ったらその反動を感じたりとか」

「操作って……」

「全身を自由に動かすことが出来る。感覚の同調と合わせればかなりの事が出来るね。まあ男女の違いがあるから誤差はあるんだけど人間同士だと余計な事を考えなくていいから楽だ。そーいや胸の感じはすごいね。すごい揺れてた。びっくりしたよ」

「あ、あああああ」

リーリアにはそれを大したことのないように言うアルが信じられなかった。全身の感覚を隅々まで探られ、自由に操作される。アルがその気になればリーリアには抵抗する術がない。健康な15歳の

少年に思うがままに操られてしまつという状況からは卑猥な想像し
が出来なかった。

「ア、アル君……へ、変なことしないよね？」

リーリアは自分を抱きしめる。身を守ろうと全身をすくめた。

「ん？ ああ何を心配してるのかと思つたらそんなことか」

アルはリーリアの心情を察した。確かに全身の自由を奪われたり
するのは年頃の少女としては不安なことだろう。

アルはリーリアを安心させるために爽やかな笑顔を浮かべて言っ
た。

「大丈夫だよ！ 僕、死姦には興味ないから！」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。しかん、シカン、死姦？

「ええええええー！？」

乙女としてはかなり複雑な心境になってリーリアが叫んだ。夕闇
に沈む森にその声は反響した。

7話 第3の勇者

暗い森の中、アルとリーリアが歩いている。

既に陽は落ち、残照がかるうじて地平の端をぼんやりと赤く染めている程度だ。森の中は夜と言ってもいい。まだ月も出ていないためこの時間帯の方が深夜よりも暗い程だろう。

リーリアは闇におびえ、アルの腕にしがみついておっかなびっくり歩いていた。

アルはというとこんな状況でも夜目が効くのか迷う所がない。目的地である開拓団のある集落をまっすぐに目指していた。

「ねえアル君。何か明かりとかないのかな？」

リーリアは少し落ち着きを取り戻していた。先ほどの発言は安心させるための冗談だと無理やり自分に言い聞かせている。

すっごい爽やかに言われたのがむかつくけど。

「ないよ。元々暗くなったら適当に寝ればいいと思ってたからね。そんな用意はない」

二人の後ろを大きな塊を啜えて引きずる狼が黙ってついてきている。その大きな塊は時折耳障りな唸りを上げた。

「ねえアル君。薄情なようなんだけど……この人置いて行かない？」「なんで？」

「怖いよ！ なんでこんな森の中、明かりもなしで、うーうー、唸ってる人引きずりながら行かなきゃならないの！」

「でもなあ、こいつらが開拓団を襲うかもしれないって説明するな

ら、連れていくのが手っ取り早いだろう?」

「そんなのなくても話せばわかってくれるよ! 勇者様だし」

本心ではまったくそんなことは思っていないが、この状況が嫌だったのでリーリアは適当なことを言った。

「まあ説明の役にはあまり立たないかもな。喋れる状態じゃないし」

そういつて狼がずるずると引きずっている塊を見る。野族の成れの果てだ。頭蓋が陥没し、顎が砕け、全身の骨が折れている。引きずられたせいで露出している肌は地面にすりおろされ赤い肉が剥き出していた。赤くないところは紫だ。呼吸がうまく出来ていないせいだろう。

死んでいるようにも見える状態だが、喉のあたりからはヒューヒューという甲高い喘鳴が聞こえ、時折唸りをあげることから生きてはいるのだろう。平民ならとっくの昔に死んでいるはずだが、貴族の身体が無理やり命を繋ぎ止めていた。

アルは振り返りにしたことについてはなんとも思っていない。

リーリアも野族については同情する気にはなれなかった。各地での暴虐無人な振る舞いは事実として広く伝えられている。ただの盗賊ならまだ同情の余地はあるのかもしれない。だが、彼らは貴族として平民を守る義務を捨て、身勝手に己の欲望を満たすだけのためにその生まれつきの強靱な肉体を行使している。平穏な暮らしを望み営む者から彼らは敵視されていた。

「そうだな。あまり時間をかけるとその間に襲撃されていたら意味ないし……どうした?」

狼がくわえていた野族を放し唸りをあげていた。見ているのは森の奥だ。警戒しているように見える。

「どうしたの、ベアくまちゃん」

「ちよっと待て！ 名前をつけたのか!？」

森の奥を見ようとしたアルは、即座にリーリアの方を見た。

「え？ 可愛いでしょ？」

アルはため息をついた。

ちゃんと説明しとけば良かったのか？ いや、でもこいつが最終的にどうなるかなんて僕の今までの話を聞いていれば分かりそうなものだけだな。

「いろいろ言いたいことはあるが、まずその名前はなんだ？」

「うちで飼ってる犬の名前」

「……せめて、ウルフおおかみ、じゃないのか、そこは？ それに飼ってる犬と同じ名前にするなよ、区別がつかないだろ」

「うちには、ベアくま以外にも、トリバードが3匹いるけど特に困ってないよ?。」

どうやって呼びわけてるんだよ

「念のため聞くけど、そのトリバードとやらは鳥か?。」

「猫」

「なんでだよ!。」

「ベアくまちゃん、アルくんが人のペットの名前に文句つけるよ。センスないよね!。」

「ああ、もう。というかね。その狼は使い捨てなんだよ。いちいち名前なんてつけるもんじゃない」

リーリアは信じられないものを見るような目でアルを見た。

「ちょっと！ 可哀想なこと言わないで！」

「そう言われてもな。そもそも二匹いたうちの二匹しか再利用してないんだ。残してきた一匹は可哀想じゃないのか？ それに森が出る時には連れていけない。街には狼なんていないだろう？」

「……犬だって言うとか？」

「一目でバレるよ……」

ベアくまと呼ばれた狼は言い合う二人を交互に見ていた。困っているようだ。先ほどの警戒行動も忘れている。

「ああ、こんなことを言っている場合じゃない。さっき何かに反応してたよな？ なんだったんだ？」

思い出したようにアルは狼を見た。狼もそれに応じ再度森の奥を見る。

「何かいるのか？」

「ねえ、アル君！ アル君は操ってる人の感覚がわかるんだよね？ だったらさ、ベアくまちゃんの耳の感覚ってわからないの？」

「そうだな、一応やってみるか」

そういうとアルは森の奥を見て精神を集中させる。

だがこの試みはうまく行かなかった。これは人間と狼の耳の構造が違いすぎるからだ。聴覚に特化した犬型の獣と人間ではそもそも耳の筋肉の数すら違う。それに音を分解して解釈するのは狼の脳の

機能だ。鼓膜の振動を同調したとしてそれを分析出来る能力が人間にはない。

「駄目だな。雑音しか聞こえない……そうだ、リーリアでも試してみよう。いいかな？」

「え？ いいけど、耳だけだよ。変なことはしないでね」

再度聴覚に集中する。人間同士のせいか相性がよかったのか音は普通に聞こえてきた。それならばと戦闘中のように能力の強化を行う。

風に揺れる草木、虫の音色、地をゆく獣の足音、鳥の風切り音、夜行性の動物のかすかな鳴き声、森の中には様々な音が満ちていた。それら一定のパターンで奏でられる森の音色はノイズとして全て無視する。

すると静寂の中、人の気配が感じられた。それらは最大限隠密性を維持するべく身動き一つしていないが、微かな衣擦れ、呼吸、心音をリーリアの耳は捉えていた。

2人。狼が見ていた方に一人。反対側の森に一人。感覚を強化された聴覚はその位置を正確に捉えた。

さらに感覚を広げていくと驚くべき情景が脳裏に描かれた。

「え？ え？ なに？」

リーリアはその感覚に戸惑った。人の群れだ。開拓団を窺える位置にかなりの数の人間がいた。数が多すぎてその全貌が捉えられない。それは開拓団を囲むように布陣していた。それらは今アル達を見張っている二人ほどの隠密性を持った集団ではなかったが、それでもこのまま近づいていたとしたら気付けなかっただろう。

「遅かったかな。開拓団が囲まれてるよ」

「それって……野族？」

「多分そうだろう。遠巻きに見ているって感じか。開拓団ってかなり追い詰められてないか？」

アルは少し考え込んだ。かなりの数の野族がいた。現在地と開拓団の間しか感覚は捉えていなかったがわかる範囲で野族は密集していた。この調子なら開拓団の周囲はどこも似たようなものだろう。開拓団の包囲は既に完成してる。そこには勇者もろとも完全に殲滅するという意思が感じられた。もう終わっているとしたか思えない。

ただの盗賊ならともかく野族ならある程度の数であれば勇者といえど押しつぶせるだろう。

「リーリア。開拓団は放つといて森を出ないか？ 集落に行つて巻き込まれるとまずいと思うんだけど」

「……駄目だよ！ 行つて教えてあげなきゃ！」

リーリアは逡巡した後そう言った。野族は怖いがそれでも開拓団を見捨てる事は出来なかった。短い間とはいえ旅を共にしてきた仲間たちだ。

「教えても教えなくてもさほど状況に変わりはないと思うんだけど……逆にそれがきっかけになって一気に攻めてくるなんてこともあるかもな」

「でも！ 勇者様は強いからなんとかしてくれるよ……」

あまり自信がないのかリーリアの声はだんだん小さくなり、語尾などほとんど聞こえなかった。勇者が魔族を圧倒するのは知っているが野族が相手となるとどうなるのかはわからない。

「勇者……ねえ。まあいいや。よし、じゃあこの野族はここに置い

ていこう。もしかしたら今見張っている二人が回収に来て、僕らを追わないかもしれない。この二人が本隊と連絡して、僕らに目を向けるとさすがにやっかいだろうし」

まあそんな間抜けじゃなさそうだけど。

口にはしなかった。気休めでも言っておけばリーリアも安心するだろうという単純な考えだ。

「いいの？」

リーリアが不安そうにアルを見た。勢いで開拓団に向かうべきだとは言ったが、同じ感覚を共有していたのだ。開拓団を包むように布陣した無数の野族の脅威は肌で感じていた。

「いいよ、リーリアが行きたいっていうなら付き合う。そう言っただろう？」

「……ありがとう」

二人は開拓団の拠点、魔王の集落に向けて歩き出した。

何の妨害もなく集落の入口まで二人は辿り着いた。

集落の周りは1m程の感覚を空けて杭が打ち込まれていた。柵のつもりだとしたらあまり意味はないが、杭の間は細い糸で結ばれており、間には木の板が何枚か通してあった。触れるとぶつかり合い音がなる仕掛けだ。

それでもあんまり意味はないよな。飛び越えるかくぐるかすればいいし。こんな程度のものならなくてもいいのに。

アルが馬鹿にしたようにその柵もどきを見てみると、カランカランと音がして、どてつと何かが倒れる音がした。ちらりと横を見ると無様な格好でリーリアが転がっている。

「何をやっているんだ？ 確か水をくみにここを出たんだよな？」

「暗くて見えないよ！」

「見えなくたってそれぐらい覚えてないか？ それに何勝手に行こうとしてるんだよ」

「え？ だって早く伝えないと！」

アルは鳴子の仕掛けを軽々と飛び越えた。

「わかったよ。ほら立って。一緒に行こう」

リーリアの手を取り立ち上がらせる。

「しかし誰も様子を見に来ないな。ますますこの仕掛の意味がないと思うんだけど」

「どうなんだろう。私もこの仕掛が鳴ったの初めて見たんだけど…」

…」

実際は自分で鳴らしたわけなので少々バツが悪そうにリーリアは言う。

「で、伝えるというのは勇者でいいのか？ 開拓団の団長とかでなくって」

「うん、ディーンさんはおじいちゃんて戦うとか無理だし、野族がくるって言ってもどうにもならないと思う」

「そうか。所でリーリアは服の替えはないの？ 勇者の所に行く前に着替えるとか」

「いいよ。まずは勇者様の所に行こうよ、あっち。あの大きい天幕の所」

そういつてリーリアが先導する。周囲ではいたるところで篝火が焚かれ、大小様々な天幕を照らしていた。既に寝ているのか人の気配は特に感じられない。

勇者がいるという天幕は確かに大きく豪華だった。周辺の小屋を圧倒するサイズだ。天幕とはいうもののしつかりと大きな柱が立てられており分厚い布で全体を覆っている。布には所々に紋章や風景、人物などが描かれている。芸術作品の一種にも見えた。

「これは凄いな。その魔王の館より豪華なんじゃないのか？」

アルが2階建ての粗末な建物を指さす。

「うん、勇者様は1等貴族で凄いいお金持ちらしいよ。凄く内装に凝ってるんだって。見たことはないんだけど」

そう言った時かすかに心が傷んだ。勇者様の天幕の内装が凝っているというのは一緒に水汲みに言った従者仲間からの情報だったからだ。

「こんなものを持って来たのならそりゃ、こっちに住むよな」

「でも、ギャリさんとセルジュさんはあっちの2階建ての館に住むって聞いたよ」

「魔王の館か。そいつらは勇者の仲間？」

「うん、第三遊撃隊の隊員で司祭さんと魔法使いさん」

「そもそも遊撃隊つてのがなんなのか聞いてないんだけど」

「王様直属の部隊で4人組なんだよ。すごく強くて魔族領を取り返すにいくの」

「なんで4人なんだ？ もっと大勢で行けばいいだろう？」

もっともな疑問だ。一応理由としては最小単位の二人編成を二組束ねて可用性を上げたということになっている。遊撃隊の主な任務は少数精鋭による魔王の暗殺。5人以上では隠密性に劣り、指揮統制も若干ながら乱れやすい。

もっともらしくそう言われてはいるが、実際の所は伝統的に勇者は4人組ということになっており、それが踏襲されているだけだった。

「よくわかんないけど、普通の貴族が魔族と戦っても負けちゃうから少数精鋭だつて聞いたことあるよ」

「そういうものか。じゃあ行こう。とりあえずリーリアが説明してくれ。僕もこの人たちと多少の面識はあるけど勇者とは会ったことが無い」

「う、うん」

二人は天幕へと近づく。だが近づくと共にリーリアの足取りは重くなりやがて止まってしまった。最初はかすかに聞こえたその音が近づくに連れはつきりとしてきた為だ。

嬌声が聞こえる。あたりをはばからない艶めいた女の喘ぎ声が天幕の中から漏れていた。

リーリアは顔を真っ赤にしてアルを見た。

「ア、アル君！ ここここ、これって……」

「邪魔しないほうがいいんじゃないか？」

「ど、どうしよう。早く伝えないといけないのに!」

「だったら入れば？ 緊急事態なんだしちゃんと説明すれば問題ないんじゃないか？」

「む、無理！ だって、中でその……」

「なら終わるまで待つしかないだろう？」

そんなことを言い合う内に一際高い声が響き渡り、あたりが静まり返った。中でごそごそと音がしたかと思うと天幕の中から上半身が裸の男が姿を表す。

女のような顔をした男だった。肩まである金髪と合わせると顔だけを見て男だと判別するのは難しいだろう。だがその鍛えられ引き締まった上半身が男であることを強烈に主張する。その顔に不釣り合いなような鍛えられた身体も全体としてみれば調和がとれていた。とても美しい貴族の戦士だ。

外で騒いでいる者達を不審に思い、様子を見に出てきたといった風だった。

「あ、あの勇者様」

リーリアが顔を伏せながら言う。勇者の汗だらけの上半身が天幕の中でその事を想像させた。

「リーリア！ 無事だったのか！ 崖から落ちて死んだと聞いたぞ！」

勇者は驚きの声を上げ、そして微笑みかけた。安否を気遣う様子が感じられる。

「え、と、落ちたんですけど、あまり怪我をせずに無事でした。戻ってくるのに時間がかかってすいません」

本当の事は言えないので実は死んでいたなどという事は伏せた。それ以外は本当なのでそれほど疑われることはないだろうとリーリアは考える。

「いや、よかったよ！ ん、その君は？」

「崖の下にいたリーリアを保護したものだ」

アルがぶつきらぼうに答えた。

「そうか、連れてきてくれてありがとう。心配していたんだよ」

アルはその爽やかな笑顔にすこしいらついた。心配していたという割には探そうとしていた風には見えない。すごく軽い感じが癢に障った。

「でも、そうならヘルミーネの報告はおかしいな？ おい、ヘルミーネ！」

勇者が天幕に呼びかける。少しして女が出てきた。裸の上に薄い布をかぶり、くるまっただけの姿だ。あまり隠れていない上気した肌と、整っていない息遣いが生々しく情事の後を感じさせる。

その後からもう一人。こちらは男だ。筋骨隆々の大男。この男も上半身は裸で体液に塗れていた。

リーリアはそれまで名前も知らなかったヘルミーネという女と目を合わせた。

ヘルミーネの目に浮かんだのは怯えと怒りが混ざったものだった。ヘルミーネが少し後ずさった。

「ヘルミーネ。崖から落ちて死んだリーリアを見たと言ったな？」

勇者がヘルミーネを問い詰める。

「はい！ 確かにそうです！ 確実に死んでいました！ あんなくちやぐちやの状態で生きているわけがありません！ あの高さから落ちて死なないわけがないです！ なんで……なんであなたが生きてんの！ おかしいでしょ！ ねえ！ どうして！ 化けてでてこないですよ！ あたしの邪魔をしないで！ ねえ！ 死んでないならちゃんと死んでよ！ ふざけないで！ あたしの居場所はここなの！ あんたなんかに奪われるわけには行かないのよ！」

ヘルミーネは必死に言い募った。興奮のあまり早口になっている。彼女は確かに崖から落ちたリーリアを見ている。そして崖下で血の花を咲かせ、動かなくなったところまで確実に視認していた。側に寄って生死を確認したわけではないが、誰が見てもこの状況で生きていたとは言わないはずだ。

勇者への返答は途中からリーリアに対する罵倒へと変化していた。混乱のあまり周りが見えなくなっている。

「おい、おちつけヘルミーナ。生きてたってんだから、それでいいじゃねーか。それとも何か？ 死んでた方がいってことか？ ああ？」

大男がヘルミーナを脅すように諭した。ヘルミーナも自分が言うてはならないことを喚いたことに気づき口を閉ざす。

「ちようどいい！ おい巨乳！ 今から2回戦目だ。次はお前の相手をしてやる。それしか能がないんだからよ、せいぜい楽しませるよ」

何を言われたのかリーリアには解らなかった。なんでエーヴェルト様に巨乳呼ばわりされているんだろ？ 相手って？

「エーヴェルト。初物は私が頂くと決まっていますでしょう？ いつからあなたにそんな権利が？」

勇者がエーヴェルトと呼ばれた男を、底冷えのするような座った目付きで見た。

「す、すまねえ。つい、調子に乗っちゃまった。許せよ。そいつはお前のもんだ。取ったりしねーよ」

エーヴェルトは即座に己のうかつさに気づいた。勇者にこの手の冗談は通用しない。それを身をもって知っているエーヴェルトの変わり身は早かった。

リーリアは自分のことが話題になっていることがうまく頭の中でつながらなかった。まったく想定外の状況だ。

「あまりふざけないほうが身のためですよ。さあ、リーリア。行きましょう。随分と汚い格好ですが、脱いでしまえば関係ありませんね。服ならヘルミーナの予備がありますし後でそれを着てください」「

そう言っただけ勇者は手を差し出し一歩近づいた。リーリアは後退り同じ距離を保つ。

「ちょ、ちょっと待ってください！ なんの話が知りませんがそんな場合じゃないです！ 野族が！ すぐそこまで野族が来てるんです。それを伝えるに急いで戻ってきたんです！」

「ああ、彼らですか。知っていますよ」

「へ？」

リーリアは間抜けな声をあげた。既に知っていると言われるとは思っていないかった。

「この場にいるのは我々だけです。開拓団の皆さんは物資と共に安全な場所で待機していますよ。第二遊撃隊が守っています」

なるほど。これは罠なのか。そして、勇者はあの野族の群れを遊撃隊4人で撃破出来ると思っっている。勇者とはそこまでのものなのか？

「なので我々は彼らが襲いかかってくるまで十分楽しんでいればいいですよ。リーリア、あなたを一目見た時に思いました。なんて美味しそうなんだろうって！ あなたが死んだと聞いた時はとても落胆しましたが……失ったと思っっていたものがこの手に戻ってきたんです。期待も最高潮というものですよ！ もう我慢できない！ さあ！」

ようやくリーリアの頭の中がまとまった。そして馬鹿みただと思っただ。従者など名ばかりで彼らが求めていたのは慰安婦だったのだ。身の回りの世話をさせたいだけなら開拓団の中からいくらでも集めればいい。彼らはわざわざ自分たちの好み合う女性を選別して連れてきたのだ。

リーリアともう一人、道中で別の馬車にいた二人は特にお気に入りということだったのだろう。勇者の言動から察するにおいしい物は最後に味わう性質らしかった。

リーリアとて子供ではない。慰安婦そのものを否定はしないが従者として集めたというのでは話が違ふ。騙し討ちに等しい。

「違います！ そんなつもりじゃ！」

リーリアは大声を上げた。自分が馬鹿だとは思ったが、こんなことを当たり前のように言う勇者達も馬鹿だと思えなかった。

「そんなつもりも何もここまで来て何を言っているんです？ 皆それはわかって来ているんですよ？」

そんなことはない。そう言おうとしたが口がうまく動かない。詰め寄る勇者の情欲に濡れた目を前にして足がすくむ。

射すくめられ身動きの取れないリーリアが取り乱しそうになった時、リーリアと勇者の間にアルが割り込んだ。

その存在などすっかり忘れていた勇者はアルを訝しげに見た。勇者の頭の中にはもうこの後のリーリアとの睦み合いしかない。それを邪魔された勇者はいらだたしげに言った。

「おや、あなたまだいたんですか？ さっさとどこかへ行ってください。目障りです。それとも何か報酬でも期待しているんですか？ そんなものあるわけないでしょう？」

アルを馬鹿にし見下す。アルは勇者とか言った所でさっきの野族と変わらないと思った。

「リーリアは嫌だと言ってるんだ。振られたんだよ、色男」

アルは侮蔑を隠そうともせず言った。無性に腹が立つ。

勇者は無言だった。表情を無くして呆然と立っている。何か言い返してくるかと待ち構えていたが、特に動きが見られないと見てアルは行動を起こした。

リーリアの方に振り向き手を取るとそのまま森へと向かい始めた。

「行こう。リーリア。こんな奴らほつとけばいい。開拓団も逃げるなら大したことにはならない」

「う、うん」

少し戸惑いながらもリーリアはそれを受け入れた。このままここにいて勇者達の玩具になるつもりはない。

「聖棍よ！」

勇者が聖棍の名を叫ぶと同時に突風が吹き荒れた。

思わぬ突風に身をすくめ、顔を伏せると前方で何かの降り立つ音がした。アル達が顔を上げるとそこにあつたのは半ば予想通り、勇者の姿だ。

その右手には白い棍が握られている。棍などというと大層なものと思われるかもしれないが実質それはただの棒だ。長さは勇者の身長を少し上回る程度、2mほどだった。

「随分と大人気ないな。それ勇者の武器ってやつだろう？ いきり立ってるようだけど平民相手にむきになるってのはどうなんだ？」

「そ、そうですね。貴族には、勇者には国民を守る義務があるはずですよ！」

「ええ、そして守るからには国民は勇者に尽くすべきだと思いますよ？ なのでリーリア。あなたが戻り我々に尽くせばそれで問題ありません。その身の程知らずは叩き潰しますがそれも勇者の娯楽

として許容される範囲でしょう。我々はそれが許される程度には国民に尽くしているのですから」

アルは勇者が本気で言っていると感じた。宣言通り確実に攻撃を加えてくることだろう。

視線を一瞬後ろにやる。天幕の前の男女は動いていない。今のところ様子を見ているようだ。ならば勇者を打ち破りそのまま森へ突っ込めば逃げられるかも知れない。

勇者は余裕なのか一瞬視線を切ったアルを見下すように見ていた。棍を手慰みにか指先でくるくると回転させている。

「お前のくだらない思想なんてどうでもいい。リーリア。前に言っただよな。母さんの事は仕方ないって。あれは撤回する。こんな奴らが仇だと思うと我慢出来ない。ぶっ飛ばしていいか？」

「う、うん、やっちゃえ！ こんな人勇者の資格ないよ！」

勇者がアルの母親を殺した。それは仕方ないことだとリーリアも思っていた。しかしこんな勇者としておかしい人間に殺されたのが仕方ないなんて思えなくなった。それはアルも同じ気持ちだろうと思う。

「平民ごときに勇者の資格を問われたくはありませんが……」

勇者が言い終わる前にアルがわずかに前傾姿勢を取った。攻撃の前兆と捉えた勇者が棍の先を僅かに下げ迎撃の態勢をとろうとする。その一瞬にリーリアが動いた。

勇者の視界からはまるでリーリアが消えたように見えた。リーリアを全く警戒していなかったこともあるがその速度は貴族の目を持つとしても捉えきれないものだった。

リーリアは間合いを詰めながら両手を地に付けしゃがみ込み、右

足を外から回すようにして足払いを放っていた。

さすがに勇者ともあるうものが両足もろとも刈られるようなことはなかったが、前に出していた左足を弾き飛ばされた。まるで鉄塊でもぶつけられたような感触に勇者の意識が足元へと集中する。この時点でほぼ勝負は決まっていた。

リーリアは足払いの勢いそのままに回転して右足で踏み切り、そのまま飛び上がった。回転の勢いを殺さずに威力をのせた左足の蹴りが勇者の顔面を捉える。

勇者はその間、棍で蹴りを受けようと動き出していたが間にあわなかった。上下の揺さぶりに全く対応出来ていない。

顔面を蹴り飛ばされ勇者の足が地を離れた。それでも勇者はなんとか反撃しようとした。だがそれも失敗に終わる。リーリアの足払いから続いた攻撃は終わっていなかったのだ。回転の勢いを余すことなく利用するための右足の蹴りだ。左足が宙にある間にすでに右足は左足を追いかけるように跳ね上がっていた。水平に振られた右足が棍を弾き飛ばす。

勇者の顔が絶望に歪んだ。彼の闘法は棍に依存している。攻撃も防御も棍を中心に組み立てられているため棍を失えば為す術がない。左足から着地したリーリアはまだ宙に浮いている勇者に接近する。このまま攻撃してもはじき飛ばしてしまうだけでさほどダメージが与えられない所だがその解決法は簡単だった。

右腕で背を抱くように抱え、左の掌を腹部に叩きつけた。挟み撃ちだ。逃げ場のない衝撃が身体の中心で弾ける。十分に威力が浸透したことを確信すると、リーリアは勇者を天幕の方に投げ捨てた。

天幕がその場にいた男女を巻き込んで崩れ落ちる。アルとリーリアのその後の行動は迅速だった。勇者がどうなったかは見もしない。

リーリアは落ちた聖棍を手にして、アルを背におぶると一心不乱に森へと駆け出した。

「おい！ 野族共！ 勇者は丸腰だ！ 襲うなら今だ！」

アルはそう叫んだ。次にリーリアに言う。

「すまないがこのまま森を抜けるまで全力疾走だ。一気に行く」

闇の森をアルを背負ったリーリアが一気に駆け抜ける。夜目の効くアルが補助するため暗闇はさほど問題ではない。野族の間を途中通り抜けたが相手も何がなんだがわからなかったのかぼかんとした顔をして二人を黙って見送った。

二人は一直線に移動する。崖も川も勢いにまかせて飛び越えた。リーリア自身はめまぐるしく変わっていく風景にあわてふためき、混乱したままだったが、身体はそんなリーリアを無視して限界までその能力を行使する。

あつと言う間に森を抜けそこでリーリアはやっと止まった。

「なんていうのか、その……こんだけ無茶苦茶やってるのに全然疲れてないんだけど……」

リーリアがぼやいて森の方に振り返った。アルもようやくリーリアの背から降りる。

「まだ油断するな」

リーリアが「なんで？」と聞こうとした時、聖棍がかたかたと揺れだした。勇者の叫び声が聞こえたような気もしたが、かなりの距離だ。聞こえるはずもない。

「そいつは呼ばれたら飛んでいくみたいだ。そのまま抑えて」

リーリアは手をすり抜け飛んでいこうとする聖棍を必死に抑えた。かなりの力でリーリアの手を逃れようと蠢くが、握り続けているうちに次第に弱まっていきやがて沈黙した。

「よし、終わったみたいだな」

「え？」

目論見通り野族は勇者に襲いかかったのだろう。あの場にいたのは勇者を含めて3人。あの状態の勇者を中心に戦っても勝ち目はないだろう。天幕の中や、他の建物に従者や勇者の仲間がいたのかも知れないがそれでも結果はそう変わらないと思われる。

彼らがどうなったのかアルは特に興味もなく、その事をわざわざリーリアに説明する気もなかった。

「とりあえず難は逃れたということだよ、じゃあ行こうか。ここからは普通に歩いて行こう。あれを人に見られるのも困るしね」

「これどうしたらいいの？」

リーリアは手にした聖棍を振った。

「持っていくのも面倒なことになりそうだな。その辺に捨てていこう」

「え？ 大丈夫？ これ一応国宝みたいなものだったと思うんだけど」

「見た目ただの棒だしいいだろ。それに多分勇者が呼んだら飛んでいくし」

多分死んでから呼ばれることはないと思うけど。

それはリーリアには言わなかった。

「そ、そう？ だったらいいけど」

リーリアはあっさりとその場に投げ捨てた。

「それよりリーリアの服をどうするかだな。今更取りに戻るわけにも行かないし」

「もういいよ……なんとか街に行ければ……」

「お金は？」

「え？」

リーリアは着の身着のままなため金品の類は身につけていない。アルも魔族の集落では人間の金は必要なかったので持っていなかった。

「まあいいや。とりあえず街に行こう。ベイヤーってどこに行きたいんだけど行き方わかる？」

「うん。ここからだ東だから真っ直ぐ道に沿って行けばいいと思う」

「じゃあ行こう」

「あれ？ 何か忘れてない？」

「ん？ なんだ？」

リーリアの疑問に答えるかのように、森からすごい勢いで何かが飛び出してきた。

「ベアくま！」

「ああ、お前か……」

それはアルが使役していた狼だ。全力で追いかけてきたのかかな

り息が上がっている。

「一緒にくる？」

「街までは無理だろ？」

「街の外にいればいいじゃない、ねえ一緒にいこうよ」

アルはこんなことで押し問答するのも馬鹿らしくなったのか黙って歩き始めた。リーリアもそれを肯定と見て取って狼を引き連れアルの後を追う。

二人と一匹は明るい月の照らす中、東へと歩き始めた。

「と、まあこんな感じの事があったわけなんですけど」

アルはこの街までやってくるまでの事をキャシーに話し終えた。

「なんといいのか……つまらん」

「え？」

まさかつまらないと言われるとは思わなかった。ここまでの話はリーリアにしてみれば大冒険だったのだ。

「私の想像していたのはこうだ。性欲を持ってあます健康な少年のアルはある日、男好きのする魅惑的な肢体を持った美少女リーリアを見かけ、辛抱たまらなくなり、その獣欲を迸らせて思わず襲いかかってしまった。リーリアがボロボロになるまでその身体を貪り尽くした後、我に返ったアル少年はとても反省し、なんとかその罪を償

おうとリーリアと……」

「ちよちよちよ、何言ってるんですか！」

リーリアが慌てて口をはさむ。

「お気に召しませんでしたか」

アルはいつも通り冷静に返す。

「ああ、いや半分冗談だよ。概ねは理解できた。しかしなんだな、その能力か？ それは私の知る魔法にはないものだ。どちらかというと悪魔そのものが行使する能力に近いように思う。アル君は人間だよな？」

「はい。悪魔というのがどのようなものか知りませんが、魔族ではありません」

「ふむ。魔族がそのような力を使うといったことも聞いたことがないな」

「そうですね」

「その能力はあまりおおっぴらにはしないほうがいいな。わかるだろ？」

「そうですね。死者が蘇ったように見えるというのが、とてもまずいということ、常識に疎い僕でもわかります」

「さて、しかしこうなると先ほどの魔法講義と釣り合う話かという微妙な感じだな。どちらかと言えばもらいすぎな気がする」

「そう思ってくださいなら、掃除の報酬に多少色をつけていただければ」

「そうかね。ではそうするとするか。じゃあ明日からもよろしく頼むよ」

キャシーはそう言って話を切り上げようとした。話をしているう

ちに夜も更けている。そろそろ寝よつと言つことだろう。

「あ、あの！ 私の事なんですけど……その、元に戻ることは出来ませんか？」

リーリアがずっと気になっていたことについて訊ねた。ずっとこのままなのか？ というのは意識を取り戻して以来、常に頭のどこかある不安だった。

「ふむ。アル君の話が本当なら、元に戻るといふのは骸に戻るといふことだが……。そうだな、先ほどの話で言えば、今のリーリアちゃんはリーリアという存在の魔力が失われた状態だな。そしてアル君が操作するリーリアという存在の魔力で生きていることになる。これをなんとかリーリアの存在として定着させる事が出来ればあるいは。とは思うがその方法は見当もつかないな」

「そうですか……」

そんな簡単に答えが見つかるとも思っていなかったためリーリアの落胆はそれほどもなかった。何か方法があるのかも知れないと前向きに考える。アルと一緒にいてくれるなら今のままでもそれほど問題ではないのだ。それに完全に元に戻ったのならアルと一緒にいる理由も特にはなくなってしまう。そう考えるとリーリアは少し複雑な気分になった。

8話 夢

これは夢だ。

母さんが愛おしげに僕を見詰めている。

母さんが優しく僕に微笑みかけている。

母さんが僕の頭に柔らかい手をのせて撫でてくれる。

母さんの優しく甘い匂いに包まれて僕はとても幸せな気分になる。

だからこれは夢だ。

最近の母さんはとても遠い所を見ている。僕が側にいても見向きもせずに虚ろな瞳を宙へ向けている。

たまに僕の方をとろんとした目でみて「テオ様」と呼び掛ける。

そんな母さんは少し嫌だったけど、それでも僕は話しかけてくれたことに嬉しくなつて「違うよ、僕はアルだよ」と返事をする。

すると母さんは何かに気づいたような風で、よそむきの顔をつくつて「あら、アルのお友達かしら？」と言う。

僕は悲しくなるけど、それはもういつものことだから何も言い返さない。

だから母さんが僕の手を優しく握り外へ連れていってくれるなんて夢でしかない。

僕は母さんの優しい顔を黙って見上げる。

僕は母さんの腰のあたりまでしか背がなくて、だからこれはとても昔の夢だ。

母さんは僕の手を引いて森の奥へ歩いて行く。

一人で行ってはいけないといつも言われていて、僕はいついっけをちゃんと守っていたから、初めて行くそこに何かがあるかなんて知らなかった。

段々まわりが明るくなって行って、木が光るなんて珍しくてはしゃぐ僕を母さんは黙って見つめていた。

でもそんな楽しい気分もすぐになくなってしまふ。光る木に囲ま

れてぼつかりと空いた空間にあの男がいるのを見てしまったから。まぶしいぐらいに輝く広場の中でその男の周りだけが闇に沈み込んでいるようだったけど、母さんは遠くから見えた時から早足になって僕をひっぱるように連れて行く。

「天才様！」

母さんがさっきまでの僕よりもしゃいだのような声を出す。ひどくいやな気分になる。

男を見上げると目が会った。とても冷たい目で僕を見ているようだったけど、僕自身じゃない何かを見ているようで心が通じあう気がまるでしなかった。

「始める」

母さんはそんなどうでもよさそうに声をかけられてもとても嬉しそうで、それが逆に心を感じさせなくて怖くなる。

母さんは地面に作らみたいびつな図形の前に立つ。光る石がいっぱい並べてあってそれが大きな円を作ってる。中には大小様々な石が文字の様な形に置いてあるけれど、それは僕がいままでに読んだ本には出てこないものだったから、本当に文字かはわからなかった。

中心には人のかたちをした何かが積まれている。人間なのか魔族なのかはわからないけどとても生きているようには見えなかった。ゴミのようにおかれた、黒や紫や灰色でまだらになった腐った肉には蛆がたかっついていて、そいつらだけが眩しいぐらいに白かった。

見ていると気分が悪くなってきて、僕は母さんに「もう帰ろう、こんなところいやだよ」と言っただけど母さんはぶつぶつと何かを言うだけで僕の方を見てもくれなかった。

母さんの視線がだんだんと上に向いて行って空を見上げた。僕もつられるように天を見上げる。そこには金色に光る細長い龍がいた。

そういえば今月は龍の月だ。その龍がこちらを見ているような気がした。天高くにいるそれがどれくらい遠いところにいるのかはわからないけどにらみつけるような目がこの広場をじっと見ていると思えた。

「姉さん！ 私よ！ デリアよ！ お願い！ 出てきてちょうだい！」

母さんがまるで空の龍に語りかけるように訴える。その声は龍に届いたんだろうか。円の中で何かが変わったように思えた。

僕はその光景を呆然と見つめていた。死体が段々と茶色くなっていく。死体を貪り尽くすように蠢いていた蛆たちが次から次へと茶色い蛹になっていく。やがて腐った肌は蛹で埋め尽くされた。

ピチツという小さな、何かが破れるような音がする。蛹が割れる音だ。まばらに聞こえてきたその音は、だんだんと切れ間がなくなっていくって一つの鳴り続ける大きな音になった。

ここまでくると僕にも次にどうなるかはわかった。

蠅だ。

一斉に羽化した蠅が飛びたつて広場の対して大きくない空間をまっくろにした。蠅はしばらく飛び回ったあと円の中心、積み上げられた死体の上にあつまると人の形になる。

一目見た僕にはそれが死そのものに思えた。蠅がよせ集まったそれはとてもみにくくて、でも悩ましげに身をくねらせるその姿から僕は目を離せなくなった。それは真っ黒な蠅の集まりで濃淡のない影のようだったけど、どこか母さんに似ていた。

蠅の羽音が声になって広場を震わせる。そいつは母さんの呼びかけで出てきたようだったけど、母さんの方を見ずに不吉な男の方を見ていた。

「テオバルト！ 貴様！ まだ繰り返すというのか！」

蠅は怒っていた。僕はその炎のような怒りに身をすくませたけど、男は何も感じていないようだった。

「出来るまでやる」

なんの話なのか僕にはわからなかったけど、男にとってはそれはあたりまえのことのようだった。

「姉さん、何を怒っているの？ ほらテオ様と私の子、アルよ！
こんなに大きくなったの」

母さんは僕の後ろにやってきてそつと手を僕の両肩に置いて蠅に紹介する。

「何を……何を言っている！ わからないのか？ それは5人目だ！
！ お前の子なんかじゃない！」

蠅の羽音ではとても人の声には聞こえなかったけど、それでもそこには悲しみがあつたような気がした。

「ふふつ、姉さんこそおかしいわ。どこから見ても私とテオ様の子供じゃない。ほら、目元なんてテオ様そっくり！ 鼻は私似かしら？ 肌は私と同じで、青みがかつた艶のある黒よ、これならいずれ氏族の元に帰ってもおかしくなんてないわ！」

僕は母さんを見上げた。母さんは僕に微笑みかける。僕は僕が母さんの本当の子供じゃないなんてことは知っている。だからそんなことは言っただけでほしくなかった。

「テオバルト！ デリアを解放しろ！」
「成功すれば解放する」

男はまったく動じず、すぐに返事を返した。それ以上何も言う気がないようだった。

蠅が怒りのあまり激しくふるえた。そして僕の方を初めて見た。蠅で出来たうつろな目が僕を捉える。僕の足が勝手にガタガタとふるえだした。

「どこから攫われて来たかは知らんが……恨むならその男を恨むがいい！ 死霊の王の力！ くれてやるう！」

蠅が人の形を無くして一気に弾けた。蠅の群れが一斉に僕に襲いかかってきて目の前が真っ暗になる。

何もわからないまま僕は蠅にたかられる。蠅が口の中に入ってくる。鼻に、耳に、目に入ってくる。蠅が身体中を這いまわり、穴と穴とから入ってくる。

僕は手を振り回した。立っていらなくなって地面を転がり回った。叫ぼうとして開けた口にはさらに蠅が入ってこよよとする。

僕は……。

そこで目が覚めた。

アルは一瞬どこにいるのかわからなくなったが、すぐにここがキヤシーの家の寝室で昨日と同じく床に寝ているのだと思いだした。

叫んだりはしなかったが、かなりうなされていたようで体中汗まみれになっている。

上体を起こし大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出す。さすがにすぐには無理だったが、何度か深呼吸を繰り返すことでなんとか落ち着きを取り戻すことが出来た。

嫌な夢だった。5年ほど前のことだろうか。妙にはっきりとした夢だった。

テオバルト、どこかで聞いたと思ったがやはりあいつか……。

テオバルトと千柱の悪魔。キャシーに聞いたとき微かに記憶を刺激されたがようやく思い出した。

ならばあの蠅は悪魔で、あれは悪魔契約の儀式だったということか、とアルは思い至る。

死霊の王か……。この能力はやはりあいつが……。

あの後どうなったのかは覚えていなかった。気がつけばアルは自宅に戻りベッドで寝ていたし、母親もいつものように朦朧とした状態だったのでそんな儀式があったようには思えなかった。

その後しばらくは声が聞こえていた。それは能力のありかたについてアルに何度も質問を繰り返し、辟易しながらもアルはそれに応え続けた。

声が聴こえなくなった時アルは能力を把握していた。

夢の内容がだんだんとぼやけていく。結局何があったのか詳細は思い出せなかったが、テオバルトの名だけはしっかりと心に刻み込んだ。

アルは窓の外を見る。夜明け前だ。わずかに明るくなりつつある。立ち上がると寝具を畳んで部屋の外へ出た。そのまま廊下を進み裏庭に出る。

今更寝る気になれなかったアルは軽く身体を動かすことにした。旅にでる前は日課のようにしていた練習だ。

裏庭にはゴミの山があったが、真っ直ぐ進めるほどの広さがあればよかった。

呼吸を整えると右足を前に出し腰を落とした。体重は後ろ足に多めにかける。左手は拳を作り甲を下にして前に突き出す。右拳は腰のあたりだ。

フツ、と息を吐きながら左足を前に進め、右拳を左腕の上をこするようにながら前に打ち出す。左手は同じ勢いで腰まで引いた。拳は縦拳と呼ばれる手の甲が横を向く形だ。

その状態から右手を胸の前を通して回転させ右甲を下にする。最初の構えと逆の形になった。

アルはこの動作を左右交互に続けた。真っ直ぐに進んで行き、庭の端にたどりつくのと両手を交差させて頭の上になり、その状態で振り向いて最初の構えに戻る。このただ振り向くという動作にも意味は込められており、一つの動きで受けや投げとして応用が利くようになっていた。

今度は庭を逆方向に進む。アルは庭の端を何度も往復した。打ち出す度に角度を調整し、体内の感覚に注意を払う。足元から伝わる力が途切れない動きを求めて何度も愚直に型を繰り返す。

汗だくになってきたため少し休もうと、両足をそろえ終了の型を取ろうとしたときアルは視界の端に黒い影を捉えた。

裏庭にやってきた時にはなかったそれが気になり振り向くとそこには黒衣の少女、大魔王がいた。

「懐かしいですね。久しぶりにその動きを見ました」

「なんで毎朝ここにいるんだ？」

アルは大魔王だというのだから敬意を払うべきと最初は思っていたのだが、昨日しばらく一緒に過ごすうちにそんな気はなくなっていた。

「最近はこのあたりが私の朝のお散歩コースです」

そう言いながら大魔王は近づいてくる。

「私のお父さんがその技を得意としていました」

お父さんと言われても面識もないし、そもそも大魔王のことがまだよくわかっていない。

「大魔王の父親というと先代大魔王とか？」

「お父さんは人間ですよ？」

「いや、そんなあたりまえみたいに言われてもこっちは何も知らないんだけど」

「それは独学ですか？」

話しの流れをぶちきって大魔王は次の話題を振ってくる。大魔王は自分がしたい話を勝手にしてくるだけだった。

「本で読んだんだ。それで見よう見まねでやってる」

「それなら大したものですよ。大きな破綻はありませんでした」

「あんたはこの技を知っているのか？」

「知ってはいますよ。ただ習ったことはありません。お父さんは女の子は拳を使うもんじゃないうって手刀や掌の技しか教えてはくれませんでしたか……盗み見て勝手に覚えました」

大魔王は照れるよう舌を出して言った。アルには今の話しのどこに照れる要素があったのかわからなかったが、大魔王はこういうものだと大体わかってきていたのでそれは気にしないことにした。

「その私から見てあなたの場合は、少し腰を落す事を意識しすぎで

すね。それでは居着いてしまいますよ」

そう言っただ魔王は先程アルが行なっていたのと同じ構えを取った。黒いドレスのスカート部分が足を完全に隠しているためよくわからないが、腰を落とし、左手を前に出し、右手を腰だめにしたその構えはとても様になっている。

アルは自分の構えと比べてどうなのか考えてみたがよくわからなかった。確かに構えだけを見ても、たまたまいから大魔王が自分の何歩も先にいるのはわかる。

だが自分がどう駄目なのか客観的にわからなかった。

大魔王は考えこむアルを見て微笑を浮かべた。

「では、大サービスです」

そういうと、大魔王はスカートをたくし上げた。すそからくると巻きあげていき腰のあたりでうまく挟み込んで固定する。

黒い下着と肉感的な白い太ももとの対照が眩しかった。

「なんで黒なんだ！」

アルは混乱して突っ込みどころを少し間違えた。

「これは闇の下着です。ちなみに私の着ているドレスは闇の衣といまして、合わせて大魔王の正装らしいです。ふふっ、光の玉があれば闇の衣をはぎとることができますよ。挑戦してみますか？」

「いや、じゃなくて何してんだよ！」

「だから大サービスです」

「いや、サービスなのかも知れないけども！」

「ん？ ああ、なるほど。なにを考えられたのかはわかりましたが、私のサービスは特別に足元を見せてあげようということですよ。特に

股関節の角度が重要ですのでよく確認してください」

「えーと、いいのか？」

「はい、近づいてよく見てください」

そう言われると確かに好奇心を刺激されたアルは大魔王の足元に近づき黒い下着を間近で見た。近くで見ると細かな意匠がレースで施されており、薄っすらと素肌が透けて見えている。これ大事なところも見えるんじゃないか？ などと目的を見失いそうになったが、大事なのは股関節の角度だ。だがそれは太ももと股の境目を必然的に見てしまっし、そうなるかと下着の中心部分も目に入る。

いや、これで見えても僕が悪いわけじゃ……。

「アアアア、アル君！ なにしてんの！」

裏口の扉の前でネグリジエ姿のリーリアが裏声で叫んでいた。

リーリアは今信じられないものを目の当たりになっている。アルがスカートをたくしあげた大魔王の側にしゃがみ込み下着を凝視しているという、どうしてそうなるのかわからない光景だ。

「大魔王の股間を見ていた」

アルがリーリアの方を振り向いてひどく真面目な顔で答えた。

「なんで！」

見たままの光景をアルが説明した。その通りだがそれはリーリアの求める答えではない。

リーリアは大魔王に早足で近づくとたくしあげられたスカート部分を引っ張り出し元の状態に戻した。

「大魔王さん！ 何があつたか知りませんがアル君は多分悪気はないんです！ 許してあげてください」

「ちよつと待てリーリア。それじゃ僕が悪いように聞こえるんだが」「悪い！ どんないきさつがあつたつて今のはアル君が完全に悪いよ！」

「なんか納得がいかないんだけど」

アルがぶつくさ言いながら立ち上がった。

「おはようございます。お、リーリアさん」

「今おっぱいって言おうとした……」

リーリアが半閉じの目で大魔王を見る。

「えーと大魔王さん。というかですね、お名前はなんとおっしゃるんですか？ 自然に大魔王さんと読んでましたが、それもどうかと思つたんですけど」

「私の名前はすごく長いので誰も覚えられないと思つのですが」

そう聞いたリーリアは確か王族なんかはすごく長い名前が付いてたなあと思いだした。だが、それはそれで別に問題ないはずだ。

「あの、名前が長くても、ファーストネームとか愛称とかあると思つんですが……」

すこし自信がない感じでリーリアが言うと、大魔王は驚いた顔をした。

「ああ！ 名前を聞かれると教えるのが面倒くさいので大魔王と名

乗っていたんですが、それでよかったですね！」

「そんなに嬉しそうにされるほどすごいことを言っただけもなかったんですが」

大魔王は満面の笑みを浮かべている。

「そうですね、では。私のファーストネームは、パエリアと言います」

「え？」

リーリアは何かの聞き間違いだろうかと思った。そんな名前の料理があったような。確か海沿いの街の名物料理だったはずだ。

「パエリアさん、ですか？」

「はい。お父さんが付けてくれました」

「その……名前の由来なんかはあるんでしょうか？」

「はい。お父さんが好きな料理の名前です！」

大魔王がはつらつと応える。父親の話題をするのは嬉しそうだった。

やっぱり……お父さん適当すぎますよ……。

「この街ではパエリアと言う料理を出しているお店はないようでしたのでいつかは食べに行きたいと思っています。どんな料理が楽しみにしているんですよ？」

「そ、そうですね、食べれるといいですね……」

そんな会話をアルは黙って聞いていた。確かに女性の下着を穴が開くように見つめている所を見られたのはバツが悪い。このままそ

れは忘れてくれないかと思っていた。

「それはさておきアルさんは悪くないのですよ。私が技について教えていたのです」

軌道修正されてしまい、アルは苦々しく思った。

なんでだ！ この流れならパエリアとかいう料理の話だろう？

「技って？」

「リーリアがたまにやるやつだよ、ほら、膝折ったり、投げ飛ばしたり」

「私はやってないよ！ あれアル君のせいだよ！」

「いやね、僕が練習したら、大魔王がその技に詳しいっていうから教えてもらってたんだよ」

「だったらなんでパンツ見てるの？」

リーリアが疑いの目でアルを見る。論理が大跳躍しているように思えた。

「立ち方を教えてもらってたんだ。それには股関節の角度とかが重要なんだよ」

「……それ、アル君の立ち方をパエリアさんが見てアドバイスしたらいいんじゃないの？」

「あー！」

「なるほど。そうすると私は下着の見せ損ということですね」

何かを納得した大魔王はぽんと手を打った。

損とか得とか関係無く、のりのりで見せつけてたくせに……。

「では、損した分はそうですね、ちょっとだけ遊んでもらいましょうか」

「あ、遊ぶって？」

リーリアがまた余計な方面に先走る前にアルがさえぎる。短い付き合いだがこのいう場合に、どういう反応を返すかは大体わかっていた。

「それはいいけど、大魔王ってのはすごく強いつて聞いた。僕じゃどうしようもないんじゃないか？」

「ああ、それなら心配いりませんよ。はい。力を抑えました。これで私はそこの町娘と同様の力しか持ちあわせていない状態です。ふふっ、私を押し倒してしまうチャンスですよ？ どこからでもかかって来てください」

なんでパエリアさんはアル君に対してこう、挑発的なんだろう……。

アルは大魔王を戦うつもりで観察した。普通に立っている。隙だらけだ。どこに打ち込んでもあたりそうな気がする。ならとりあえず攻撃してみる。

そう決めたアルは先程まで練習していた技を繰り出していた。左足を踏み込み右拳を突き出す。

大魔王はその拳が伸びきる前に動いていた。左の手刀がアルの首に上から軽く落とされる。ただの手刀がからみつくようにくっついて拳の起動をそらした。大魔王は一歩前進しアルの空いた胸に右掌を軽く当てた。同時に大魔王の右足はアルの左足首の後ろに回り込んでいく。勝負としてはここで終わりだ。

「飛んでみましょうか」

そういつと大魔王は胸に当てていた右掌を下に滑らした。そのままアルの足の間に右手を挿しれると全身を使って右手を振り上げた。アルの身体がふわりと浮く。そう大した勢いでもないがそれでも空中にいる間は身動きがとれない。泡を食っている間にアルはゴミの山に突っ込んでいた。

「ええ！？ ちょっと待ってください！ さっき普通の女の子の力だつて言つてませんでしたか？」

リーリアが疑問を呈した。普通の女の子だというなら自分が正にそうだと思っているが、あんなことが出来るとはとても思えない。

「そうですね。今のは技ですね。うまく身体を使うことで今の程度の力は発揮できます」

アルがゴミの山から出てきた。そうダメージはない。軽く浮かされただけだった。

「私への攻撃で今の選択は間違つてはいません。どうするか迷つたならまず一番自信のある技で挑むべきです」

「でも簡単にそらされ懐に入られた」

実力差があるとはわかつていたがここまで簡単にあしらわれるとは思っていなかった。アルは少し悔しそうだ。

「それは練度の問題ですね。ちゃんと習得すれば今ぐらいの邪魔は無視して攻撃を入れる事ができます。あの技の特徴は愚直なまでの直進性です。ちょっとやそつとでそらされるようなもんじゃ本来な

いのですよ？」

「どうすればいいんだ？」

「型の反復練習しかないでしょう。完全な型があるとして、それにかに近づけるかがポイントです。それさえ出来るなら他の技は一切必要ないとすらいえますよ。私のお父さんなんかはいろいろな技を習得していましたが、ほとんどこの技で片付けていました。まあ普通はそれができないから様々な技があり、それを連携し、くらまし、不意を討つわけです。ですが私のお薦めはやはり一つの技を心に極めることですね。極めるとはいかなくてもこれという技が一つあれば、他の技もそれなりに出来るようになっていきますよ」「なるほど、勉強になったよ」

武術の本は繰り返しすり切れるほど読み頭に入れてある。自分でも何度も繰り返し様々な技を練習していた。だが自分の身体をイメージ通りに動かすのは難しい。その為伝統ある武術の独習はまず無理だ。師による外から見た矯正が必要になる。

それが、リーリアを外から見ながら操作することでうまく噛みあつてしまった。自分のイメージしたとおりに自分の身体を動かすのは難しいが、自分のイメージしたとおりに他者を直接動かす、外部からの視点で動作を修正しイメージにあわせるのは容易だ。これがリーリアの強さの根底にあった。

だが、これでは常にリーリアを戦わせることになってしまつし、それはアルの本意ではなかった。自分自身ももっと強くなる必要があると決意を新たにす。

「……リーリアにもさっきの技の型を教えてやってくれないか？」

アルがしばらく考えた後に大魔王に教えをこつ。

「え？　なんで？」

「もちろん、僕も教えてもらおうよ。でも、やはり外からどんな姿勢になっているのか確認するのも重要だ。大魔王を見て文句言われるなら、リーリアならいいだろう?」
「なんで私ならいいの!」

リーリアが文句を言っている間に、大魔王はいつのまにかリーリアの後ろの回りこんで腰を両手で掴んでいた。

「左足を一步前に出してください」

「え?」

リーリアは少し考えて言われたとおり足を前に出した。先ほどの光景は衝撃的だった。いくらなんでも女性の股間にあれほど顔を近づけるといふのはありえない。しかも話を聞いてみれば大魔王が自らあの状況に持っていったと言う。また同じことになるんじゃないかと思うと、ただ断るのもためらわれた。

大魔王はつかんだ腰を下に押し下げ落とさせる。右足を外側に捻り、腕の角度を調整した。随分と窮屈な姿勢だった。

「こんなところでしょうか。では最初の話しの続きなんですけど、ここです。後ろ足の付け根。腰を落としているつもりでもこの部分の折りたたみが甘くなっていますね。これでは後ろ足をつっぱらせて体重を支えているだけです。移動に制限が出てしまいます。体重は全体の構造で支えて分散させる必要があります」

大魔王とアルはしゃがみ込みリーリアの股関節を注視している。ネグリジェはかなり透けているため大魔王のようにたくしあげる必要はなかった。

リーリアは顔を真っ赤にしてうつむく。下着も透けているのだが、ネグリジェの上から見ると重なりあってモアレ状になり微妙に陰影

がわかるかどうかという程度になっている。

あ、あれ？ 私、朝起きたらアル君がいないから探しに来ただけだったのになんでこんなことしてるんだらう？

「お前ら何やってるんだ？」

キャシーが裏口の扉にもたれかかり腕を組みながら、呆れたように言った。

朝食の準備が出来たと言いに来たのだが、そこにあっただのは妙な態勢でふるぶると震えるリーリアの下半身を見つめ続ける二人の男女が、股間を指さしながらうなずいたりしている姿だ。しかも一方はこの国の最高権力者である所の大魔王。

どんなプレイだと呆れるのも無理はなかったがそういうキャシーも扇情的な寝間着姿だったので、裏庭のゴミの山と4人を合わせて傍から見るとますますよくわからない光景と化していた。

中天を少し過ぎた陽が照らす中、ガタガタと妙な震えかたをする馬車が走っている。大型の屋根の付いた馬車だ。2頭のこれも大型の分厚い筋肉に覆われた力強い馬に牽引されている。

第3魔族領と首都ベイヤー間には大して重要な土地もなく道はあまり整備されていないが、それでもある程度踏み固められ道として機能しているためそうひどい状態でもない。もっとも馬車などは元々揺れるものだが、それでもこの馬車の状態は異常だった。

4輪のうち右前方の車輪が歪んでおり一回転する間にかかなりの上下動がある。それに加えて左後方には車輪そのものが無かった。そ

こは妙な生き物が支えている。

蟊蛙だ。大人が一抱えに出来るかどうかというサイズの大型の蛙が馬車を支えていた。それは馬車とどう結合しているものか、半ば引きずられており、時折思い出したように低く跳ねる。それもこの馬車の妙な挙動に一役買っていた。何をどう考えればこのような利用法を考えるのかはわからないが狂気の沙汰としか思えない。

馬車はボロボロで今直ぐにでも瓦解しそうだった。

近くで見るとボロボロなのは馬車だけではなく、御者や肝心の馬もそうであることがわかる。

体中に穴を開けた御者が、腐肉と血を滴らせる馬に機械的に鞭をくれている。打たれる度にどす黒い血と肉片が撒き散っていた。

とても生きているようには見えない。事実彼らは動く死体でしかなかった。生前に行なっていた動作を馬鹿みたいに繰り返している。御者は鞭を打ち続け、馬は前へと駆け続けた。

それは馬車の中でもそうだ。眼窩から眼球を溢れ落とした商人が、計数器を何度も操作する。傭兵と思しき戦士は欠けた身体で無様に剣を振り回していた。おかげで馬車の中は無残なものだ。商人の扱う商品だったものが、荷箱や粉類の入った袋などが切り刻まれ内容物を散乱させている。

だがそれを咎めるものは誰もいない。激しく揺れる馬車の中で死者による奇妙な踊りは延々と繰り返されていた。

「テオバルト様。馬車はもう限界です。後1時間も持たないかと」

動き続ける死体から少し離れた席にまだ幼い少女とテオバルトと呼ばれた男が座っていた。

「構わん。首都にはもう着く」

テオバルトは言葉少なに答えた。彼らは魔族領からベイヤーへと

向かうため、たまたま目についた馬車を奪い取りこっやって利用している。

魔法による安全な高速移動の手段というのは案外少ないためだ。それは悪魔が提供する能力のほとんどが攻撃的なものだからに他ならない。悪魔がどういった思惑で人間に力を与えているのかは定かではないが、ほとんどが破壊や殺戮のための力をさずける。

そのため高速で物体を移動させること自体は出来ても、安全性には疑問が残る。高速で物を飛ばすとしてもそれは攻撃の手段だ。自らを砲弾にしても待ち受ける運命は自滅しかない。

空間跳躍と行った高度な魔法もあるにはあるが、これは通常の物理的手段では再現出来ず奇跡と呼ばれる部類に入る。そう簡単に使えるものではなかった。

「見えてきたようです」

馬車の行く先に一際高い塔がいくつか見えてきた。城壁都市であるベイヤーの城壁に等間隔で配置されている監視塔だ。

少女の発言と同時に馬車がかくと一気に傾いた。暮蛙がとうとう耐えられなくなってへしゃげて潰れ、負担の増えた左前方の車輪もはじけ飛んだからだ。

馬車の胴体が斜めになり地面を削る。一気に負荷が増えたため馬車はみるみるうちに速度を落としていった。

「これではすぐに馬がつぶれてしまいますが？」

斜めになった車内で少女は平然と言った。そこには暮蛙を支えに使うなどという発想に対する疑問ものせられている。

テオバルトは少女の言葉に杖で殴りつけることで答えた。適当に振り抜いた杖が少女の頬を打つ。

「お前が支える」

少女は切れた口の端を拭い、何も答えずに馬車から飛び降りた。馬車に並走し車体に近づくと軽々と馬車を持ち上げそのまま支える。

持ち直した馬車はそのまま走り続けた。

首都までは後わずかの距離だ。少女の見据える先には街道の交差する辻が見えた。そこにはこれから夕方までになんとか首都に辿り着こうとする人々が集まって来ていた。

9話 買い物

「大型ごみの廃棄許可を取ってくるが君たちはどうする？」

朝の食卓でキャシーがアル達に聞いてきた。

大魔王はひとしきりアル達に技を教えたら満足したのか、散歩の続きに出かけたので既にここにはいない。

「そうですね。一旦裏庭のゴミを捨ててしまわないと、これ以上掃除も出来ませんし……とりあえずうちの中でやれるだけやってまとめておくというぐらいでしょうか？」

「まあそうだが別にそんなに焦らなくてもいい。昼には帰ってくるからそれまでは街にでも遊びに行くというのはどうだ？」

「それいいよ！ こないだは格好ばかり気になってるくに街なんて見れなかったから！」

リーリアは乗り気だったが、アルは若干顔をしかめた。

「その格好ならいいのか？ ボロ布を着てるような状態よりはましだとは思うけど」

そういつてリーリアを見る。リーリアはキャシーから貸してもらった胸元の大きく開いた真っ赤なドレスを来ていた。街に出れば注目の的だろう。

「うう、これはこれで……嫌かも……」

リーリアはキャシーを恨めしそうに見た。

なんでこんな挑発的な服しか持っていないんだろう。

「でだ、2日分の給金を先に渡しておこう。リーリアはどうも私の服が気に入らないようだからな。二人で4万リル。服を買おうぐらいならなんとかなるだろう?」

「いいんですか?」

とアル。まだ1日しか働いていない。金だけ持って逃げるつもりはないが、先にもらってしまうのも気が引ける。

「いいよ。別に。全部やってもらおうと思うとまだまだかかりそうだしな。後か先かだけの話だ」

そういつてキャッシュは胸元から財布を取り出した。

「なんでそこから出てくるんですか!」

「リーリアちゃんもやってみるといい。そこらの親父ならほいほい負けてくれるぞ? ポイントは見えそうで見えない感じだな。相手が乗り出すようにしてきたらまず成功だ」

キャッシュは財布から紙幣を4枚取り出すとアルに手渡したが、渡されたアルは戸惑った。

「ん? どうした?」

「いえ……お金を見るのが初めてだったもので。こういったものだったんですね」

アルの知識は殆どが本で得たものだ。お金と言われて想像するのは絵本か何かで見た、宝箱からあふれるような金貨の山だった。

「ああ、それは1万リル紙幣だ。他には5千リル紙幣や、2千リル紙幣なんてのもあるな」

「これただの紙切れじゃないんですか？」

アルが疑うように言う。こんな紙に価値があると言われても俄には信じがたい。

「そうだな、それを窓の外、明るい所に向けてみてくれ。何か見えないか？」

言われたようにしてみた。すると紙幣の中央部分の空白に薄っすらと人の顔が見える。

「これは……」

「透かしだよ。そんな感じで明かりに透かしてみると模様が浮かぶ。それは今の王様の顔だな。というわけでそれはただの紙ってわけでもない。簡単に偽造されないようにそんな仕組みが施してあるんだな。ちなみにその透かしの技術は非公開でな、作り方を漏らしたり勝手に透かしを入れた紙を作ったりすれば極刑になる」

「あの……金貨とか銀貨とかは使わないんですか？」

「ああ、一応流通はしているんだがな、都市部では紙幣が多いな。

田舎では、今のアル君のような気持ちの人が多いのかな、紙幣は信用されないことが多いが」

田舎者扱いは少々癪に感じはしたが、アルは納得するとズタ袋に紙幣をしまい込んだ。

「他にも細かい単位の硬貨なんかがあるんだが、その辺は実際に買物するときにでもリーリアちゃんに聞いてくれ」

「わかりました」

「買い物ならまかせておいて！ これでも商人の娘だからね！」

リーリアが豊かな胸を張り自慢気に言う。それをアルは不安気に見つめた。

「あーそうそう、リーリアちゃん。値段を聞かれたらはずきりと断るんだぞ」

キャシーが思い出したように言う。

「キャシーさん……やっぱりこの格好はそーゆー風に見えるんですね……」

リーリアがじろりとキャシーを睨む。キャシーはとぼけるようにアルに声をかけた。

「いや、格好もそうだがこの場合問題は中身だろう？ なあアル君？」

「そうなんですかね」

「いやいや……ちょっと前から思っていたんだが蛋白が過ぎないか？ 女の私から見てもリーリアはなんかすごいぞ。これまで二人きりだったんだろう？ どうかしてやるうとは思わなかったのか？」

「まさか、そんなこと思わないですよ」

そう言われてリーリアは少し心が沈んだ。確かにアルからは、大抵の男から受けるような邪な視線を感じることはなかった。だからと言って邪険に扱われたわけでもなく十分優しく紳士的でもあった。だが、こうまで女として無視されているような状況はどうだろうかとも思う。自分でもそれなりに可愛い方だとは自負していたので全く相手にされていないというのは、やはり自分が死んでいるのが原

因なんだろうかと漠然と不安になる。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

物思いに耽っていたリーリアが視線を上げると、目の前に心配そうに見ているアルの顔がある。

「ううん、大丈夫。なんでもないよ」

「キャシーさん、せめて上に何か羽織るものでもないですか？」

アルが気を回してキャシーに求める。キャシーも少しからかい過ぎたと思ったのか素直に羽織れるものを持ってきた。黒い薄手のストールだ。

「キャシーさん、一応これも借りますけど、あんまり変わらないよ
うな気もします……」

リーリアは早速羽織ってみた。胸元のあたりが隠れるように軽く結ぶ。だが結局はその見えない部分をなんとか見てみたいと思わせる演出にしかなくなってしまった。

アルとリーリアはまず広場に向かうことにした。キャシーに服屋などいくつかの店の地図を書いてもらったのだが、どこに行くにしてもまず街の中心である広場に行くのが早い。

この街は大雑把に言うと中心を南東にずらした3重の同心円状になっている。一番外側に城壁がありその周りを川を利用して作られ

た水堀が囲んでいる。

そのすぐ内側にもう一つ城壁があり、次は街の中心部から少し南東にいった丘の上の王城でその周りも城壁と堀に囲まれている。

広場は街の中心にあり、ここから大通りが放射状に伸びて各城門につながっている。広場は普段は街の憩いの場として、時には大規模な宗教儀式や公開処刑などにも使われることがあった。

「僕は魔法使いに付いては大体わかったから、この街には特に用はなくなっただけで、リーリアは何かあるか？」

アルが広場へと歩きながらリーリアに話しかける。

「私も特にはないよ」

「じゃあこの後どうする？ リーリアの住んでた街へ行く？ どこにあるんだっけ？」

「ここからだ、さらに東。そんなに遠くないよ。駅馬車で半日つてところかな」

「駅馬車って？」

「街の間を行ったり来たりしてる馬車。一人5千リルぐらいかな」
「結構するんだな、いや、それが妥当かはわかんないんだけどね。なんとなく」

「どうなんだろ、護衛の人とかもいて、盗賊とか魔獣とかから守ってくれたりとかもあるんだけど」

「街に帰ったらリーリアはどうするんだ？ 勇者の従者はもう無理だろう？ 侍女をやったんだったらそれをまたやるの？」

「……侍女ってあんまりやってないんだよね……」

リーリアは少し言い淀んだ。アルは訝しげな様子でリーリアを見る。

「え？ 前に、侍女だ！ って自慢してなかったか？」

「あはは、実は実家で侍女ってことにしてただけだったり……。結構あるの、14歳で職につかないといけないからそういうことにしておくのが。一応花嫁修業ってことで家の手伝いみたいなことしてただけで……」

「実家に帰ってそれをまたするの？」

「多分。でも、もう家を出してもらえなくなるかも。勇者の従者になるってのも結構反対されてたのを無理に押し切るような形で出ていったから……。あ、アル君はどうするの？ 魔法使いになりたいって言ってたんだから魔法で何かしたかったんでしょ？」

「魔法使いの師匠を探すって言っても漠然としすぎてどうしようもないし、しばらくはリーリアの街にでも住むよ、日雇いの仕事でもしながらね。僕の目的は焦るようなものじゃない」

「私のお父さん交易やつてる商人だし顔も広いからどこかで魔法使いの話聞いてるかもしれないよ。家に帰ったらちよっと相談してみよう！」

「うん、なんの当てもないからね。お願いするよ」

大通りを歩いているため元々賑やかではあったが、広場に行くにつれさらに騒々しくなっていく。

派手な格好をした美少女のリーリアはもちろん注目を浴びているのだが、不安感よりもアルが隣にいることによる安心感が勝っていたためあまり不快に感じることはなかった。

アルは殺意にも似た嫉妬と羨望の入り混じった視線を受けていたが、いつも通りだ。全く動じる所がない。

広場は円形の広大な空間で中心には噴水があったのだが今は修復中だ。噴水以外も大魔王との戦闘でひどい有様だったがほぼ修復は終わっていた。

その修復中の噴水のあたりに人だかりが出来ていた。何かを大勢の観客が取り巻いている様子だ。

「アル君、あれなんだろう」
「気になるならちよっと見ていこう」

二人は人だかりを押しの中が見える所まで進んだ。アルはなんとなくそんな気がしていたので見た瞬間ため息がもれた。そこに居たのは大魔王だった。

大魔王はぼーっとつたっており、その隣には男が二人両膝をついて座っている。いわゆる正座なのだが、リーリアにはそれが拷問でも受けているかのように見えた。その二人の対面には職人のような格好の男が仁王立ちしている。

「アル君！」

「どうした？ 知り合いか？」

「勇者様……フォグ様とアイゼン様だよ！」

「あれがか？」

アルの目からみてそれは随分と情けない姿に映った。両膝を付き、両手は膝に置いてうつむいている。先程から、正面の男に罵倒されていた。

「で、あつちの怒ってる人がドレイクさん。私の住んでる街で有名な芸術家さん」

「なんで怒られてるんだ？ ……まあリーリアに聞いてみましょうがないか」

「うん。わかんない」

様子を見るにこの噴水を壊したのがこの二人だということらしい。

「おい、聞いてんのか！ お前らが壊したこれはな！ 三人の女神

が柱となつて天盤と呼ばれるこの、俺達の世界、大地を支えている姿を表したもんだ！ 俺様の一大傑作よ！ それをだな壊したってことは、ええ！ 世界全体を壊したにも等しいってことだよ！ わかつてんのか！」

この広場にあつた噴水は一般的な、中心部から水が吹き上がるものではない。柱に支えられた大きな円盤が上にあり、その円盤の縁から水が流れ落ちてくるというものだった。

この円盤が大地で、円盤の端が世界の果て、水が海を表していた。勇者たちは黙って耐えている。壊したのには大魔王も関わっていた気もするが責任の一端は確かにあるため言い返すことが出来ない。

「三人の女神という方はいませんでしたよ」

「ああ？」

大魔王が空気をよまずに口を挟んだ。

「天盤の下を見たことはありませんが女神という方はいませんでした。天盤は天軸という柱が貫いているんですよ。ですので天盤の上も下もあるのは天軸です」

ドレイクは大魔王のホラとは思えない妙な自身に満ちあふれた発言に気圧された。ここまで真っ向から見たと言われてしまえば反論できない。

「おめえ、見たってどうということよ、どうやって天盤の下に行くってんだ？」

「天軸の周りは巨大な穴になっているのです。その穴を落ちてもいいですし、天軸は内部が空洞になっていて出入りできまして、中には昇降施設がありますのでそれを使えば簡単に行けますよ」

「天軸つてどこにあんのよ？」

「中央大陸の真ん中ですね。ここからでは遠すぎてその姿を確認出来ませんが、近づけばすぐわかりますよ」

話がすっかり忘れてしまった。世界の真の姿という話題は、芸術家としての好奇心を疼かせたようだ。

見向きもされなくなった勇者たちはこっそりと立ち上がり人の輪を抜けだそうとしている。

「なあ、リーリア。憧れてる勇者つてのはあいつだろ？ いいのか？ 今なら話しかけたり出来るんじゃないか？」

「え、いいよ別に」

アルが思ったより、リーリアの態度はそっけないものだった。

「直接声をかけるのが恥ずかしいなら僕が呼んできてやるよ」

アルはリーリアがかなり遠回りな方法で勇者に近づこうとしていたの思い出す。それをまどろっこしく感じていたので、ここは一つ協力してやろうと思った。

「いいって！ もう行こう！ 早く買い物して帰らないと、キャシーさん戻ってきちゃうよ！」

リーリアは慌てて、今にも勇者に声をかけに行きそうなアルの手を取り人ごみを抜けだした。

アルはリーリアに黙って従った。少し怒っているようにも見えず、ただの照れ隠しなのかもしれないとも思ったアルは無理強いするのはやめておいた。

リーリアは店につくまでその手を掴んだままだった。

その店は古着を中心に扱った古物商といった店だった。そう大きくもない店内には古着が山のように積み重ねられている。店主が面倒くさがりなのかはわからないが、この店では商品の品質は関係なく重量で価格が決められていた。

どこで仕入れてきたのか、汚れたままのものがほとんどだ。洗濯をするのも面倒らしい。だが玉石混交とはこのことで、中には掘り出し物もあるようだった。

アルは様々な商品があふれる店内を物色し、比較的ましな状態の麻で出来た上下と、靴、マントなどを選んだ。次の街までは馬車で移動すると決めていたが、何があるか分からないので予備も考えてそれぞれ何着か余分に籠に入れる。

「アル君、マントなんているの？」

「便利じゃないか？ ここに来るまでだけでもそう思うことはあったじゃないか。厚手のマントなら毛布がわりにもなるだろう？」

「別に次の街まですぐだから、野宿とか考えなくてもいいと思うけど？」

「近いつて言っても街の外に出るんだ。魔獣が出ることもあるって話だろ？」

魔獣は基本的には彼らにとって居心地のいい魔族領から出てくることをあまりない。だが、人肉を好む類の魔獣は越境してやってくるものも多かった。

それ以外にも旅の危険としては、盗賊や、野族の襲撃もある。

アルは自分たちだけならなんとか逃げ延びることも可能だと思っ

ているが、そうなるとやはり徒歩で移動するはめになることもある。そういつた可能性を考えるとあまり呑気にしているのもどうかと考えていた。

「リーリアはそれでいいの？」

リーリアの手には服の山をひっくり返してひっぱり出してきた女物の服が1着だけあった。

「アル君は適當すぎると思う」

「別にそこそこ丈夫そうであまり汚れてなかったらなんでもいいよ」「試着もしないの？」

「大体サイズがあつてるならいいよ」

「そう、じゃ私はこれを試着してくる」

そう言うところリーリアは一室しかない試着室へと入っていった。

アルは服以外にも、古くなったズタ袋の代わりになるような大きなめの鞆も探して籠に入れる。

「なあ、にいちゃんよ」

「はい？」

店主がアルに声をかけてきた。だらしない感じの服装に、無精髭、髪も整っていない小太りの中年だ。この店の店主として相応しいとも言える。

「あの子は貴族か？」

「いえ、そんなことはないですがなにか？」

「いや、あの子に似合いそうなもんはうちにはないんじゃないかねーかと思つてよ、もっといいもん買つてやつたらどうだ？」

「そう言われましてもね、お金ないですし。その、そんなに目立ってましたか？」

「ああ、いや。こんな店に来るような子じゃなさそうだったからな、びっくりしちまったただけだよ。ま、せいぜいましなもんでも探してくれ」

店主はそう言つと奥に引つ込む。変わりにリーリアが試着室から出てきた。

ゆつたりとした白いワンピースを着ている。

「どつ？」

「リーリア、僕が言うのもなんだけど、ずいぶんとやぼったくないか？」

身体のサイズに全くあつていないぶかぶかの服に見えた。身体のラインが出ないことを優先したのだろう。

「い、いいの！ これで！ これぐらいで丁度いいの！ ……えつと……アル君はさっきのみたいな方がよかつたの？」

最初は威勢がよかつたが、段々自信がなくなってきたようだった。上目遣いにアルを見る。

先ほどまでの身体にフィットし胸元の開いたドレスがよほどいやだったのか、反動でこんな服を選んだとアルは解釈した。

まあ、本人がいつて言ってるならそれでいいか。

「いや、別にそれでいいんじゃないか」

「そ、そう……」

なんだか元気がなくなつたようにも見えた。

他にも似たようなサイズの女物の服を選び会計を済ませる。全部で10kgほどになった。1kgが千リルという価格付けだったので1万リルを支払う。

リーリアは先ほどのワンピースにその場で着替えて帰ることにした。他にも深めの麦わら帽子を被りあまり顔が目立たないようにもする。

アルも同じく着替えた。麻のシャツとズボンだ。これで街の住民と比較しても違和感はなくなった。貫頭衣を着ているような人間はあまり見かけなかつたので、アルもそれなりに目立っていることは自覚していた。

当初の目的は達成出来たので二人はキャシーの家に帰ることにし広場を目指して歩き始めた。

「後は食料品……は旅にでる前でいいか」

「なんか慎重だよな。馬車で半日だって言ってるのに」

「あつて困るもんでもないだろ」

「で、また乾し肉なの？ もう本当に飽きたんだけど」

リーリアが憎々しげに言う。心底嫌になつたらしい。

「すぐ齧れるから楽だと思っただけだな。保存食って他になにかある？」

「ドライフルーツとかいいよ！」

「それはお菓子だろ？」

「ええ！ いいと思うけどなあ。他だと、豆煎餅とか？ 豆を押しつぶして固めたやつなんだけど結構おいしいよ」

そんなたわいない会話をしながら広場を通りかかる。先ほどの人だかりはすでになく、ドレイクにこき使われている勇者たちの姿が

そこにはあった。

首都ベイヤーには主要な門が7つある。それは街の中心の広場から、大通りが放射状に伸び城壁に至る部分に存在する。8方位に対応した名称がついているのだが、南東門は存在しない。広場から南東に進むと王城があるためだ。

この門のうち北側だけは他のものと比べて少々特殊な位置づけとなってしまう。北門の外側にはバラックが立ち並び、瓦礫とゴミと糞尿が散乱している。スラム街と化していた。

本来この国ではこのような状況はありえないことだった。マテウ国は他の国と比べても特にレガリアの恩恵が大きい。気象の完全制御により旱魃は発生しないし、大規模な自然災害も起こらない。そのため農業による食料生産はかなりの規模で安定しており、国全体がとても裕福な状態だ。

どんな仕事でもよければ働く口はあるし、例え働けないとしても社会保障、福祉が充実しているためある程度の保証は受けられる。

だがスラムは発生する。住人がこのような環境に甘んじる理由は様々だ。難民もいれば、ただまっとうな社会生活に背を向けた者、業病により街中にいられなくなった者、ここで生まれ育つたため外の世界を知らない者。

生活環境があまりに異なるため今更単純に街へと受け入れることも出来なくなっている。この国が抱える大きな問題の一つだった。

そんなスラムの中をアルはゴミを山積みにした台車を引きながら歩いていった。リーリアはいない。北門の詰所で廃棄許可証を示し通行しようとした際に女が行くのは危険だと諭されたためだ。リーリアは詰所でアルが戻るまで待機することとなった。

迷うことなくまっすぐと進むアルをみすばらしい格好のスラムの住人が遠巻きに見ている。

アルの行く先には大きな穴があった。この街がここに出来るまえからあるという巨大な穴だ。底なしというわけではないが、覗き込んでもあまりに深くその全貌を知ることが出来ない。

この穴の中心には塔が立っている。塔の最上部には入り口があり、不安定で心もとない吊り橋がかけられていた。

この塔は古代の遺跡とされているが踏破したものはいないため、なんの為の施設かは判明していない。ただ勇者の武具がここから発見されているため神域の類と思われる。

特に侵入は制限されていないため命知らずの冒険者がたまに挑むことはあるがほとんどは戻ってこない。生きて聖なる武具を持ち帰れるものこそが勇者ということなのだろう。

アルは穴の縁まで進むと台車を傾けゴミをばら撒いた。危ないのあまり近づかず周辺に置いていけばいいと言われていた。

引き返すアルの後ろでは、スラムの住人たちによる争奪戦が始まっている。彼らがどうにかするのでこの様な段取りになっている。必要なものを奪った後はいらぬものは穴の底へと蹴落とすのだろう。

本来神域と目されていた塔の周囲をごみ処理施設として利用しようとしたのは、数代前の国王だという。街の発展と共にふくれ上がっていくゴミの処理方法として塔の周囲の穴に目を付けた。今のところこの穴があふれるような自体には至っていないが、それも時間の問題だろう。それは次代への課題として後回しにされていた。

アルは背後の様子にはまったく目もくれなかった。この程度の距離なら問題ないとはわかつてはいたが、リアと離れたことには不安を覚える。軽くなった台車を足早に引いていた。

リーリアは詰所でお茶を飲んでいた。

北側の門は周囲の状況からゴミ処理場への通用門としてしか利用されておらず、検問所としては機能していない。通行税の徴収も行なっておらず基本的には暇な部署だった。

リーリアの前にはお菓子が山積みになっている。お茶うけとして出されたものだが少し張り切り過ぎなんじゃないかとリーリアは思っていた。

テーブルの対面には暇そうにしているまだ若い門番が鼻の下を伸ばしてリーリアを見つめている。

アル君早く戻ってこないかなあ。

当初はついていくつもりだったが、女が行くのは危ないと言われたためここで待機している。こんなことならキャシー宅で待っていたらよかったのだが、そうになるとアルの能力の有効範囲に不安が出てくる。結局最大限近い位置にいるしかなかった。

「ねえ、さっきの彼氏？」

「え、ち、違いますよ。仕事仲間です。そんなんじゃないです」

急に振られた話に慌てて返事を返す。リーリアとしてはあまり話をしたくはなかったが、一応もてなされているような状況なのであまり無下な態度も取れない。

「へえ、じゃあ俺でも可能性あるかなあ」

門番の男はあからさまな笑みを浮かべていた。下心しか感じられない。

「あ、う、すいません」

リーリアがどう対処したらいいのか悩んでいると詰所の入り口から声かけられた。

「あ、ほら！ お客さんですよ！」

リーリアは助かったとばかりに門番に促す。門番は隠そうともせず舌打ちをし、立ち上がると応対に出た。

「なんすか？ ゴミ捨てに来たんなら許可証いりますよ？ 持ってます？」

その対応は公務員としてどうなんだろう……。

リーリアは入り口の二人を見た。やってきたのは若い男だった。中肉中背で取り立てて特徴がない、3日もすれば忘れるような印象の男だ。

「ああ、違ってますよ」

と言う男とリーリアは目があつた。

「そちらの彼女に用事が。依頼主の方からなんですけど」
「え？」

リーリアは目を丸くした。まさかここで自分が呼ばれるとは思っていなかった。自分を指さしながら、

「私ですか？」

と問いかける。

「はい」

「えーと、依頼主というとキャシーさんですか？」

「はい、キャシーさんが言い忘れたことがあるので伝えて欲しいと」

リーリアはなんだろうと思いつつ立ち上がり男の元へと近づいた。

「なんででしょうか？」

「あー、ここじゃちょっと……外で話せませんか？」

と男は門番の方を見る。何か言いづらそうにしていた。

「わかりました」

リーリアは門番にちょっと出てきますね、と言って男の後をついて詰所を出た。

キャシーさんが言い忘れたことってなんだろう？ もしかして捨てちゃいけないものでも混ざってたのかな？

男はゆっくりとリーリアの前を歩いている。しばらくして、門からは少し離れた建物の隙間に入っていった。

リーリアも特に疑問にも思わずついていく。男があまりにも人畜無害に見えたせいもあった。

少し薄暗い路地だ。人通りはない。ここにいたってリーリアは若干の不安を覚えた。

「あの……それで何でしょうか。アル君にも関係あるなら戻って来てからでも……」

最後まで言い終わることは出来なかった。後ろから何者かに抱きすくめられ何か口元にあてがわれる。リーリアは一瞬で気を失っていた。

「お疲れ様です」

特徴のない男が、やはり特徴のない口調でリーリアの背後の男に声をかけた。

背後の男が口元に当てていた布切れをしまい、リーリアを石畳に横たえる。

「随分と簡単にいったな」

こちらの男は頬に傷のある見るからにチンピラといった風情の男だった。

「素直な娘ですね。まるで疑われていませんでした」

「で、どうよ、こいつは？」

「ええかなりの上物ですね。高く売れるでしょう」

「ああ、さつきちょっと触ったんだがたまんねーな、特にこの……」

とリーリアの胸に手を伸ばす。触れる直前、男は殴り飛ばされていた。壁に激突してずると腰を落とす。

「あなたは馬鹿ですか？ 仕入れたばかりの商品に手を出す商人がどこの世界にいるというんです？」

「てめえ！」

足腰の立たなくなつた状態でいきがった所で何ほどのこともない。特徴のない男はさらに蹴り飛ばした。

「最近軍の質も落ちてきたんでしょうか。あなたに取つてこれは軍事行動の一巻で、私はその上官にあたるのですよ？ 任務遂行の障害になるなら……」

「わかつた、余計なことはしない」

特に脅そうとはせず淡々と事実を述べただけだという風だったがそれが、逆に男を怯えさせた。

「では商品の箱詰めと行きましょう」

二人の男はリーリアを、用意してあつた木箱に入れた。木箱は予め台車にのせてある。

「ではあなたはその木箱を隠れ家に運んでください。私はあと二人ほど目星をつけている少女がいますので、尾行して行動パターンの把握に務めます。今回のノルマはそれで達成出来るでしょう。わかっているとは思いますが……」

特徴のない男はチンピラ風の男を静かに見つめた。

「あ、ああわかつてるよ。もう手は出さねえ」

「そうですね。ならいいです。行ってください」

二人はそれぞれの目的のため速やかにその場を離れた。寂しげな裏路地にはなんの痕跡も残つてはいなかった。

10話 嵐

馬鹿過ぎる。リーリアはどん底まで落ち込んでいた。なんだってこのこと見知らぬ人物について行つたのだろう。

それにまんまと誘導されていたことにも気づいた。あの男は依頼主と言つた。キャシーの名を出したのは自分だ。相手はそこから話を合わせてきた。ということは、何らかの仕事で門までやってきたことぐらいしか知らず適当に鎌をかけてきたということだ。

路地に入つた途端後ろから誰かに抱きつかれ、変な匂いのする布を口にあてがわれたと思うと意識がなくなった。そして気づいた時にはここで横たわつていた。

周囲は薄暗く周りの様子はあまりよく分からない。

同じように連れてこられたのか数人の少女がめそめそと泣いていた。あまり大声で泣くと見張りの男が大声でがなりたてるため皆、涙を押し殺している。

目の前には鉄格子があつた。牢屋の類だろう。気を失つてからどれぐらい経つたのかはよく分からない。ここには窓がないため昼なのか夜なのかもわからなかつた。

幸いそう遠くへ連れてこられたわけではなさそうだ。それはリーリアにだけはわかることだつた。今生きているということはアルとそう離れているわけではないということだ。建物の中なので少なくとも首都から出たわけではなさそうだとわかる。

でもどうなんだろう。アル君は私を見つけてくれるかな……。

それがわからない。感覚の同調と操作が出来るといふのは身を持って知っていたがそれはアルが見ている前でのことだ。離れていても場所がわかるなんてことは聞いていなかった。

大丈夫。私がいなくて気づいたらアル君がなんとかしてくれる。

大した根拠はなかったがアルを信用していたリーリアは多少冷静さを取り戻した。そしてアルが助けに来てくれるとしても、自分は自分で最善を尽くすべきだと考える。

あたりを見回す。そう広くはない。10歩も歩けば端から端まで辿り着く正方形の部屋。その一面が鉄格子になっている。見える範囲には窓がなく、頼りない蝋燭の炎が鉄格子ごしに照らしている。リーリアはここは地下なんだろうと判断した。

全体的に灰色の石のようなもので出来ている。床も壁も天井もそうだった。

部屋の隅にはトイレと簡単な洗面設備がある。衝立もあったのでそれには少し安心した。

鉄格子の向こうでは男が一人椅子に座ってこちらを見張っていた。鉄格子の扉を見る。外から錠前が付けられているのがわかった。

鍵がかけられている。

外の様子はそれぐらいしかわからなかった。もう少し動けば廊下の先も見えるのかもしれないが、今はまだ目立ったことはしたくない。

次に牢屋の中を見る。リーリアを合わせて8名、全員が女だった。皆しゃがみこんでいる。年齢は上が20歳ぐらい、下は10歳ぐらいまでと幅広かった。

皆さらわれてきたのだろう。それぞれがこれからの境遇に思いを巡らせ絶望に沈んでいた。

話しかけるのもまずいかな。

見張りの男をさりげなく見てみた。頬に傷のある男だ。油断なくこちらを見ている。リーリアは野族みたいだと思った。暴力沙汰に

身を置き続ける者の独特の匂いのようなものを感じる。手は腰の剣をいつでも抜けるように隙なく構えられていた。

その剣呑な雰囲気には怯えながらも観察を続ける。何かないかと男の身体を見ていると剣とは反対側の腰に鍵がぶら下げられているのに気づいた。

鍵を奪うことは出来ないかと考えてみたが、すぐに無理だと諦めた。鉄格子越しに手を伸ばしたとして、まったく届く気がしない。今わかるのはこれぐらいのことだった。

リーリアは次にこの状況について考えてみた。女ばかり8名が集められている。いかがわしいことしか思いつかないが、今のところ何をされたわけでもなかった。周りの様子を見るに他の少女達も同様のようだ。となると今目の前にいる男がそういう目的で集められたわけでもなさそうに思える。

牢屋を用意していることにしろ、気を失わせる薬品が使用されたことにしろ、なんらかの組織的な行為に思える。そう考えると思いつく答えは一つだった。セプテム王国の人らしい部隊。

拉致国家、奴隷王朝、誘拐王国、様々な悪名で呼ばれるセプテム王国。その所業としか思えない。

他の国ではともかくマテウ国では奴隷は完全に禁止されている。歴史上も奴隷制が行われたことは一度もない。それはそもそもが奴隷など使わなくても十分に裕福だったということもあるが国の雰囲気として常春の、のんきなこの国には制度として見合わなかったということだ。

国の政策、指向はレガリアに多大な影響を受ける。セプテム王国は建国当初から常に奴隷労働を前提としていた。レガリアの能力を最大限有効活用すると自然とこうなる。

レガリア、支配の王錫。対象に絶対の忠誠を植えつけ掌握するこのレガリアに一度でも支配されれば逃れる術はない。レガリアの効力は国内のみなので、国外に出ればその支配から逃れることは出来

るが、支配された時点でそもそも国外に出ることが出来なくなる。セプテム国側は、本人の意思でこの国に留まり、忠誠を誓っているのだからとやかく言われる筋合いはないと放言している。他国もそこにレガリアが関わっているのが自明だとしてもどうすることも出来なかった。

セプテム王国はレガリアで支配した奴隷を使い捨てることによって発展してきた。そこには一切躊躇はなく完全に道具として割りきっており、減ったならば補充すればいいと考えている。その補充方法の一つが人さらい部隊だ。他国へと何食わぬ顔をして侵入し、密やかに人さらいを行う。この事は広く知れわたり警戒されてはいるが、事前に十分な調査と計画を立てて行われる少人数を対象とした拉致を防ぐのは中々難しい。セプテム国と国交のある国はほとんどなくマテウ国も例外ではない。一度拉致されてしまえば、外交交渉で取り戻すのはほぼ不可能で今までに戻ったものはなかった。

リーリアはセプテム国の悪行を思い出すと、ますます絶望的な気分になった。それならこれはそこのチンピラの仕業ではなく、国家ぐるみの犯罪的行為ということだ。

人さらいは、商品の目利きをする奴隷商人と諜報部隊で構成されていると言われている。素人のリーリアにはそんな輩を出し抜いて脱出など出来る気がしなかった。

人さらい部隊は、高名な科学者、芸術家、商人、政治家などの有能な人物や、見目麗しい男女を狙うとされている。多少強引にでもさらってしまえば確実に支配出来るので、国家の振興には有効な手段として認識されていた。

セプテム国が相手なら国に連れ帰られるまではひどい目にあうことはないだろう。人さらい側からすれば、下手に手を出して自暴自棄になって暴れられるのも厄介だ。国に帰れば従順な奴隷へと変えることが出来るのだから焦って事を起こす必要はない。

それに、とリーリアは思う。このまま連れて行かれればアルとの距離が離れて自分は死んでしまうだろう。他の娘達には悪い気もす

るが綺麗なまま死ぬると思うと少し心が安らいだ。

アル君は私のことどう思ってるんだろう。

勝手に生き返らせたことに責任を感じているのか、何か目的があったらうにそれを置いてでも付いて来てくれると言う。だがそれは義務のようなものにも思える。

リーリアは旅の間にアルの真摯さというようなものを十分に理解した。ちゃんと気を使ってくれるし、つっけんどんに思えることもあったが優しい言葉もかけてくれるし、それを態度で示してくれる。ただリーリアは壁のようなものも感じてもいた。仲良くはなった気はするが、ある一定以上の距離からは踏み込んでこないような印象だ。女としてはあまり見てもらえていないと感じていた。

死体は嫌だとか言ってたのは冗談じゃなかったのかな……。

たまにアルが顔を赤くするようなことがあったので、女が嫌いだとか興味がないとかではないはずだ。なら何が駄目なんだろうかとリーリアは考えに耽る。胸が大きい娘は好きじゃないんだろうか。確か小さい方が好みだという男性も少なくない数があると聞いたことがあった。それか魔族の間で育ったということだから魔族の女の子がいいんだろうか、などと詮なきことを考えていると泣きたくなってくる。

私がいなくなったら、アル君は自由になれるかな。

ますます悲観的な考えが浮かんでくる。今はアルを自分が縛り付けているとしか思えない状況だ。あまり気にしていなかったがよく考えるとアルが可哀想にも思えてくる。

私なんかと会わなければよかったのに。

リーリアは自らの胸をもみしだきながら思った。

「え？」

思わず目を疑う。自らの右手が胸をぐにぐにとまさぐっている。絶望のあまりにおかしくなったのかと思うと、右手はそのままゆっくりと上半身を這い上がってきた。首筋を通って行き、口のあたりにやってくる。口を塞ぐようにする。

『おい』

口が勝手に動いた。囁くような声だ。思わず周りを見渡すも誰も気づいてはいないようだった。

『僕だ。いいか、突然で混乱したかもしれないがまずは落ち着いてくれ。それまではこのままの姿勢だ。落ち着いたなら左手を握ったり開いたりしてくれ』

リーリアはものすごい勢いで左手を開け閉めした。

『元気そうだね。というかその勢いじゃ落ち着いているようにも思えないけど。僕に話しかける時は小さな声で喋ってくれればいい。声にならなくても口の動きでだいたいわかる。周りには誰がいるのか？』

「う、うん。女の子がいっぱい。牢屋の中にいるんだけど」

リーリアは意識してささやくように応えた。

『そうか。じゃあ、わかっていることがあつたら教えてくれ』

安心した。今確かに自分が何か絆のようなものでアルと繋がっていると感じられた。もう大丈夫だと思つたらリーリアの身体から一気に力が抜ける。

気を落ち着かせるとリーリアは周囲の状況と考えたことをアルに伝えた。

『セプテム国か。初めて聞くが無茶苦茶だな』

「アル君……さっきはびっくりしてたから気にしてなかったんだけど、最初に胸揉んでたよね？」

『ああ、それは感覚の同調を確かめていただけだ』

アルは当然のことのように言った。その後一気に説明を始めたのは何かごまかそうという意味も若干感じられる

『でだ、よく聞いてくれ。感覚の同調は聴覚と触覚のみだ。だからそちらの様子が僕には直接分らない。これは気をつけて欲しいんだけどこれから戦闘中には絶対に転げないでくれ。今の僕には上下の感覚がわかりづらい。接地面の感触でなんとなくはわかるけど、転げてしまうと立ち直るのに時間がかかる』

「え？ 戦つって？」

『リーリアが戦うしかそこから逃れる術はない。僕も今街中を探してはいるが、組織的な誘拐だというなら簡単に行き先がわかるような証拠は残っていないだろう。リーリアがそこから出てくるしかない』

「む、無理！」

『やるんだよ。僕がサポートする。大丈夫。こないだ大魔王に技を教わっただろう？』

男は牢の入り口の前に椅子を置いて座っていた。牢屋はほぼ正方形で一面が鉄格子になっておりその左端に扉が付いている。中には女が8名。トイレが右奥にある。

女達は全員が平民と聞いていたため、見張りなどは特に必要ないと思われたが念には念をとということで、交代で見張りが一人以上立てられることになっていた。

この牢屋の鉄格子はかなり頑丈に出来ている。時には貴族を捕らえる事もあるからだ。貴族の力を持ってしてもびくともしない強度を誇っていた。

中にいるのは様々なタイプの美少女達だ。男にはその基準はよくわからなかったが、依頼主の付けた細かな条件に合致する少女が厳選されているらしい。

全員がうつむき座り込んでいる。先程は大声で泣き叫ぶ者もいたから大声で怒鳴りつけた。そのせいかしくしくと押し殺すように泣くばかりになったのだがそれでも鬱陶しいものだ。

特にすることもないため男は少女達を物色する。やはり一番は最後に連れてきた金髪の少女だと思った。体型に合わない大柄な服を着ているため見た目からはわからないが、後ろから抱きすくめた時の感触は最高だった。あの奴隷商人の邪魔がなければその場で襲いかかっていたかもしれない。組み伏せ、その可憐な顔を絶望に歪ませることを想像すると自然と身体の一部が熱くなった。

男が注目していると少女は奇妙な行動を取り始めた。右手で胸を揉みしだいた後、口を抑え、左手を開けしめしている。男がその様子を見つめると少女は背を向けてしまった。

気でも触れたのかと思うと少し不安になる。多少反抗的なくらいなら問題ないが、完全におかしくなってしまうとレガリアで支配し

たとしても使い物にならないことがあるからだ。この中でもかなりの上物の少女の商品価値が下がってしまったとなると男の責任も問われるだろう。

しばらく見ていると少女は立ち上がった。部屋の右側へと歩いて行く。男はトイレへ向かうのかと思ったが、少女は奥へは向かわずそのまま右端まで行った。

何をするのかと男が見ていると鉄格子を両手で掴む。

「えい！」

可愛らしい掛け声と共に少女が力をこめ鉄格子を左右に引つ張る。何を馬鹿なことをと呆れて見ていると信じがたいことが起こった。男は思わず腰を浮かせる。

鉄格子はぐにやりと歪んでいた。

「な！」

男が思わず声を漏らした。見たままのことが信じられない。この隠れ家には設計段階から関わっている。この鉄格子がそんな簡単に変形したりするものではないことは何度も確かめていた。

「アル君、鉄格子はちよつと動いたけど通るのは無理だよ。鉄格子の間隔が狭いし」

『そうか。じゃあ次の手だな』

「みなさん、ちよつと後ろの方についてもらえますか？」

少女は独り言をつぶやいている。やはりおかしくなってしまったのか、一人で会話をしているように見えた。

金髪の少女の言葉に反応してしゃがみ込んでいた少女達は立ち上がり壁側へのろのろと歩き始めた。

何をやる気かわからないがこれはまずいと判断した男は牢屋の右端へと走った。少女の前へと向かう。だが鉄格子の前へ辿り着いたときには少女はそこにいなかった。

男が駆け出すと同時に、滑るように移動して牢の扉の前で構えを取っている。腰を落とし右手を腰のあたりまで引いていた。まさか、と思う。何をやるつもりなのかはわかったがそんなことが出来るとはとても思えない。

爆発でも起こったかのような音がした。扉を殴りつけた音だ。音と共に錠前と蝶番ははじけ飛び、鉄格子で出来た扉は廊下の壁に轟音を立ててめり込み、地下全体を揺らした。

『やはりね。扉が一番もろいと思ったよ』

そう言う少女は悠々と牢屋の外に出てきた。

「だったら最初からそうすればよかったのに」

『見張りが扉の前にいるって聞いたからね。フェイントはかけておいたほうがいいだろう？』

「今の勢いだったら、扉ごと倒せたような気もするけど」

『武器を持ってるんだらう？ 邪魔される可能性もある』

「あ、みなさんはもう少し待っていてくださいね」

少女が牢屋の中に声をかける。呆然とした男はそれをただ黙って見つめていた。

少女が歩いてくる。剣の間合いまでもう少しと言う所で立ち止まった。

『相手はどんな様子だ』

「剣を構えてる。あと5、6歩ぐらいの距離」

『肌も強化されているから多分切られても大丈夫だけど、攻撃された

らリーリアの判断で避けてくれ』

「そんなの無理！」

『大丈夫だって。そして殴れる距離まで近づいたら合図をしてくれ』
「う、うんやってみる」

またぶつぶつと何事かをつぶやいている少女が不気味に思える。

男は剣を中段に構えた。廊下は狭く横に振り回すには適していない。取れる攻撃手段は突くか、振り下ろし、振り上げぐらいのものだろう。

中段はそのどれかに派生するためのものだったが、この選択は相手に剣を突きつけ、これ以上こちらに来てくれるなという守りの姿勢でしかなかった。先ほど扉をぶち破った攻撃を見ている。あんな力で殴られて生きていられるとはとても思えなかった。

少女も突き付けられた剣を前に戸惑っていた。攻撃されたならば避けるつもりだったようだが男は防御を固めることを優先している。

「ど、どうしよう。剣をまっすぐ向けられてるんだけど」

『相手までは6歩ぐらいか、天井の高さはどうだ？』

「私二人分ぐらいかな？」

『よし』

そう言うと少女の姿が消えた。天井とそして背後で軽いトントンという音が立て続けに鳴った。男は咄嗟に振り向こうとした。

「アル君、今！」

少女が何かを叫びながら拳を繰り出す。拳は男の背中側にめり込み腎臓と周囲の器官を破壊し、男の意識を刈り取った。

「みなさん大丈夫ですか？」

リーリアが牢屋の中に声をかける。皆あつげにとられたような顔をしていた。

連行用にかロープがあつたので、これで男を縛り付ける。意識が戻った所で動きようもなさそうだったが念の為だ。

「もうちょっと待っててくださいね。廊下の先を見てきます」

牢屋から廊下に出た位置から左を見ると、同じような構造の牢が2つあつた。廊下は行き止まりになっている。

右側を見るとすぐに階段があつた。急勾配の木製の階段だ。ほとんど梯子に近い。

階段を登ってみるとすぐに天井にぶつかる。天井には四角く切れ目がある。ここが出入り口なのだろう。軽く押してみたり、スライドするように動かしてみたが開く気配がなかった。外から鍵がかけられているらしい。

「アル君どうしよう？」

『見張り役は自由に出られなかったのかな？ となると定期的に外から開かれるのか、何か合図があるのか。……いつ開くのかわからないものを待っても仕方が無いしな。壊そう』

リーリアが掌を天井に設けられた扉に押し付ける。そのまま真上に力を入れると、分厚い石で出来た扉は勢いよく開いた。扉と天井の間には施錠のために金属で出来た門が行き交うような仕組みがあつたがそれはひしゃげてしまっていた。元通りに閉めることはもう

無理だろう。

入り口から顔だけ出して様子を見る。厨房のようだった。料理中の料理人と目が合う。リーリアは愛想笑いを浮かべた。

料理人達は予想外の出来事に身動きができなくなっていた。手を止めてしまった炒め物が焦げ臭い煙を立てている。

『どうだ？ 何がある？』

「レストランの厨房かな？ コックさんが5人ぐらいいるけど」
『無関係とは思えないな。敵だと思ったほうがいい』

リーリアはそのまま階段を上がると厨房に出た。先程からのアルのサポートで段々大胆になってきている。堂々としたものだった。

「あなた達も人さらいの仲間なんですか？」

その言葉で止まっていた料理人達は叫び声をあげて逃げ出した。

この態度から関係者であることは確定だろう。

リーリアは放つたらかしの料理が気になってしまった。このままでは火事になってしまいそうだったので慌てて火を止めた。

「逃げちゃったけど……」

『まあいいよ。レストランの厨房なら裏口みたいなのがないか？ 多分そこからさらって来た人たちを運び込んだと思うんだけど』

裏口は簡単に見つかった。食材の搬入口だ。リーリア達は食材の入った木箱に偽装されてここから運び込まれていた。念のため扉を開けてみたが、内側から鍵がかけられるようになっていた。外に出る分には問題はなかった。

あたりの様子を伺う。厨房には誰もいなくなっている。裏口とは反対側に行けばレストランの食堂だった。こっそりと覗き込むと、

コックが慌てふためいて飛び出したせいか少しざわついていた。誰も料理を作っていないのだから時間が経てばさらに混乱することだろう。

『一旦戻って中の女の子達を連れてこよう。外に出て大通りにでも出れば大丈夫なはずだ』

地下に戻ろうとリーリアは振り向いた。そこで何か違和感のようなものを感じた。何かがさつきと違っていている気がする。

「ねえ、アル君、なにか気になるんだけど……」

もう一度よく見る。気になるのは裏口だった。先ほどドアが開くかを確認した際に開けっ放しにしていた。閉めた覚えはないので開いているのは問題ないが、開き方が大きくなっている気がする。

「アル君……」

アルに相談しようとした時、何かが顔をめがけて飛んできた。リーリアは思わず目をつぶり手を交差させてその何かを防いだ。カランと音を立てて何かが床に落ちる。包丁だった。

「え？」

リーリアの服の腕の部分が切り裂かれていた。肌はアルが言うように強化されているせいか傷一つない。

調理台の陰から男が立ち上がった。北門でリーリアを誘い出した男だ。

「これはどういったことでしょうかね」

やはり特徴のない顔としか思えなかった。本当にこの男にさらわれたのかと言われるとリーリアも自信を持っては言い切れない。

「平民だと聞いていたんですが、間違いだったようですね。あなたどうやって出てきたんです?」

どうしたらいいんだろう。リーリアは戸惑う。攻撃自体はアルがやってくれるとしても、近づくのはリーリアの仕事だ。先ほどのように狭い廊下のような限定された空間ならアルにもやりようはあったが、障害物の多い広い空間ではそれも難しい。

「色仕掛けですかね? あの男はあなたにご執心だったようですよ。まあそれでもあの男がただやられるとも思えないんですが」

リーリアは試しに横に一步動いてみた。男は同じだけ横に動いた。一定の距離を保っている。油断はしていないようだ。

ならば地下へ誘いこむというのはどうだろう。警戒して近づいてこないということであれば地下へ逃げ込めるかもしれない。狭い廊下でなら闘いようもある。

しかし誘いについてのこなければまた閉じ込められてしまうかもしれない。そう考えるとためらわれる。

食堂側からなら逃げるのは出来るはずだがそうしてしまうと、地下の女の子達を置いていってしまうことになる。それは絶対に嫌だった。

「アル君どうしたらいい?」

つぶやいたがアルの返事は返ってこない。途端に心細くなった。

「誰かいる振りですか？ 無駄ですよ。この厨房に他に誰もいないことは確認していますから」

男はリーリアのつぶやきを聞きとがめたのかそう言ってきた。

リーリアは地下の入口へと走った。アルは返事をしないしあまりいい方法も思いつかない。

しかし先ほどまでであった馬鹿みたいな力を発揮することは出来ず足を滑らせた。

「あ」

リーリアのイメージでは一足飛びに入り口まで行けるはずだった。アルのサポートがあれば可能はずだ。だが何故か力が失われている。そして絶対に転けるなど言われていたことを思いだしパニックに陥った。

その様子を男は冷静に見ている。

リーリアは立ち上がるうとじたばたしたが混乱のためか足に力はいらない。このままではまずいと仰向けになり男の方を見る。男は慌てふためくリーリアをじっくりと観察していた。

男は何かを確信したのか、ゆっくりと近づいてきた。リーリアは必死に後ずさったが、何かにぶつかってそれ以上下がれない。

男はリーリアの足元までやってくると、それでも冷静に見下ろした。抵抗の様子がないと見るとリーリアの腰を両足ではさみ込むように馬乗りになった。そのまま両手を抑えつける。

「包丁で傷つかないんですから貴族なんでしょうが、私も貴族なんですよ。そして貴族同士なら男のほうが力は上です。ご存知でしょうがね」

「いやっ!」

リーリアは必死に身動きするも完全に抑え込まれていた、まったく動けない。

「私の依頼主はね、貴族の性奴隷は求めていないのですよ。ですのであなたは連れていけない」

平民の主人は貴族の奴隷を嫌う。それは完全に支配していたとしても何かの折に本人が意図せずに力を発揮してしまうことがあるためだ。戦奴隷としてなら慎重に運用すればいいが、性奴隷でそれはまずいと忌避されている。

リーリアは何故すぐに殺そうとしないのか不審に思った。極秘任務の内容をある程度知ってしまったのだ。始末されて然るべき状況だ。リーリアは男の顔を見た。そしてわかった。先ほどまでの商品を吟味するような商人の顔が、獣欲を滾らせた男の顔になっていることを。

商品としての価値を失った途端、男にはリーリアがひどく魅力的な自分個人の嗜好に合った獲物に見えてきていた。

「アル君！」

リーリアがもがきながら必死に叫ぶ。

「助けなど呼んでも無駄だと……」

リーリアの手が動いた。男が掴んでいる手をまったく無視した動きだ。

鈍い音がした。骨をへし折り、肉を押しつぶし、肺を破裂させた音だ。リーリアの右拳は男の左胸を陥没させていた。鍛えられた筋肉も肋骨も何の障害にもならない。見る間に左胸が萎んでいく。喀血がリーリアの顔を汚した。

『そつちから近づいてくれて助かったよ』

力の抜けた男の手をリーリアは左手で掴んだ。そのまま男を跳ね除けると逆に馬乗りになる。

男は右手を必死に伸ばし、首を振る。助けを求めているようにも見えた。

『悪いけど逃がすつもりはまったくないんだ。このままやられてくれよ』

無造作に振り下ろされた鉄槌が男の顔を打った。技でもなんでもなかったが力任せに振るわれたそれは男の顔の中心を捉え鼻を中心に陥没させる。

男が完全に沈黙したのを確認するとリーリアは立ち上がった。

『こいつが馬鹿で助かったよ。素のリーリアを見せれば油断するかと思っただけ、まんまとひっかかってくれた』

「な、何それ！ 私ほんとに怖かったのに！」

リーリアは怒りの声を上げた。なんの相談もなく勝手にそんなことをされてはたまったものではない。

『悪かったよ。でも、あいつから近づいてくれないとどうしようもなかっただろっ？』

アルはあくまで冷静だ。それがさらにリーリアの怒りに火をつける。

「アル君の馬鹿！ アホ！ 変態！ えーっと、カバッ！」

リーリアの罵倒の語彙は大したことはなかった。

貴族同士の戦いでは近接戦闘になる公算が大きい。アルはこれまでの戦闘からそう考察している。

初手の包丁でリーリアが貴族であると男が確信したように、飛び道具は役に立たないことが多いからだ。

故になんらかのタイミングで近づいてくるだろうとは思っていた。だが実際の所危ない賭けであったことには変わりはない。アルは胸をなでおろした。

ぷりぷりと怒るリーリアをなだめながら周囲の様子を強化した聴覚でうかがう。さらに援軍がやってこなさそうなことを確認すると、地下の女性たちを開放した。

裏口から出ると裏路地につながっており、そこから大通りに出られる。

『アル君、ここどこかわかんないんだけど！』

同調したアルの聴覚にリーリアの声が聞こえてきた。

「大通りなんだろう？ 城壁と反対側へ行けば広場だ。僕も広場へ行くからそこで合流しよう」

『わかった。みんなも連れていけばいい？』

「そうだな。役所にも行った方がいいだろう。一緒に行こう」

アルも大通りに出て、広場へと向かう。

雨粒が一滴アルの頬を打った。空を見上げる。珍しいことに灰色の雨雲が空を覆いつつあった。アルがマテウ国にやってきてから初めて雨だ。

マテウ国ではレガリアにより気象制御がされているため昼間に雨が降ることはまれだ。通常は耕作に必要な量の雨が定期的に夜間に降るように調節されていた。ただ降雨調節はある程度ゆらぎをもたせてあるため、にわか雨程度ならたまに降ることはある。

アルは足を早めた。広場にはほどなくして到着する。雨除けを求めてカフェの軒先に入ることにした。軒先はテント状になっていて、その下にはテーブルがいくつか置いてある。雨が降ってきたせい客の入りはそれほどでもない。端の方にいれば邪魔になることないだろう。

風が強くなり始めていた。広場の人影はまばらだ。その少数の人々も突然の雨に驚き足早に去っていく。しばらくすると広場には誰もいなくなっていた。滅多に雨の降らないこの国で傘を用意しているものはおらず、雨の中をうるつくような物好きはほとんどいない。

リーリアは大丈夫かな？

8名という大人数だ。雨宿りするのも大変だろうと思う。アルが感覚を探ってみると歩いていたのでこのままこちらへ真っ直ぐ来ているようだった。

遠くから雷鳴が聞こえてきた。ますます雨足が強くなり、風も強く吹き荒れる。

何かがおかしい。この国でここまで天気が荒れるのは異常事態とあっていい程だ。アルは周りを見渡した。広場も端の方はけづる様な雨にかすんでしまいよく見えないが何か動くのが見えた。

さつきまではいなかったはずの人影だ。はつきりとはわからないが、かなりの大人数がゆっくりと広場を横断している。東からやってきたそれらの影は中央の噴水までやってくるとばらけた。7つあ

る大通りにそれぞれ向かい始める。

明らかに不自然だった。この雨の中悠長に歩いているのはおかしい。アルはよく見ようと目を凝らした。

ずるり、と一人の人物の上半身がずれた。そのままばしゃん、と水たまりに上半身が落ちる。

「!?!」

近くにいた人影が上半身を拾い上げた。足だけで動き続ける下半身に追いつき、その上に上半身を置く。元の姿に戻った何者かは何事もなかったようにそのまま歩き続けた。

なんだこれは？ 何が起こっている？

「見つけました」

少女の声にアルは振り向いた。

衝撃。少女の拳がアルの脇腹にめり込む。振り抜かれた拳にアルは吹っ飛ばされた。店内のテーブルを派手に巻き込みながら壁に激突したが、まだ止まらない。

そのまま壁をぶち抜いてさらに中へと飛んで行き、反対側の壁にぶつかってようやく止まった。

激痛に声も出ない。地べたに這いつくばりながらアルは必死に状況を把握しようとしてめた。

わき腹に手をやる。あまりの衝撃に腹が爆発でもしたかと思っただが、感触はわき腹がその存在をとどめていることを伝えてきた。ただ内臓の状態はあまりよくない。口から血があふれてきた。

周りを見る。倉庫のような場所だった。カフェのバックヤードだろう。樽や木箱が整然と並べられていたようだったが、衝撃で崩れている。

背を壁にあずけたまま、なんとか立ち上がるうとする。足がふらついた。壁がなければ立ってはいられないだろう。

「殺すなど言われていたのを忘れていましたが、生きているようで助かりました。あなたも貴族ですか。私がそうなんですから、被験者は全て貴族と考えるべきでしょうか？」

大穴の開いた壁の向こうにまだ幼い少女が立っていた。髪は銀色で肩のあたりで適当に切られていた。前髪も眉の上あたりで適当にまつすぐに切つてある。服装もボロ布を巻きつけただけのような物で、何もかもがどうでもいいといった格好だった。

その背後には数人の男女が立っている。先ほど広場で不自然に歩いていた者達だ。近くでみればそれが生きた人間ではないことがはっきりと分かった。生気をまるで感じない。手足の長さが不揃いで歪なシルエットは、まるで一度ばらした後に適当にくつつけたかのようだった。

「テオバルト様にカテゴリーRの被験者5号を発見したと伝えてください」

少女は背後の者達に指示を出す。

アルは必死に呼吸を整えていた。だがそう簡単には動けるようにはならない。少女の一撃はアルをほぼ無力化していた。

「さあ、テオバルト様がおいでになられますよ。こんな薄汚い倉庫でお迎えするのは失礼でしょう？」

少女が近づいてきてアルの髪を掴むと引き倒した。支えを失ったアルは簡単に倒れる。抵抗する余裕すらない。

少女は倒れたアルをそのままずると引きずり、広場へと出る

と無造作に放り出した。

外は既に嵐と化している。横殴りの雨がアルを打ち付けた。なんとか起き上がるうと腕に力をいれ上半身を起こす。

目に入ったのは死者の群れだ。その死者の群れが2つに別れ道を作る。死者たちは次々とひざまずいていった。

死者が作る道を悠然と男が歩いてくる。それは千の悪魔を従える者、大魔導師テオバルトと呼ばれる男だった。

11話 対峙

首都ベイヤーの西門には検問を待つ馬車や人々で溢れかえっていた。

主に商人が多い。商売でやってきた者達はここで荷を検められ、商材に応じた税を徴収される。

そんな人々の最後尾に今にも壊れそうな異様な馬車が現われた。

人々の注目を浴びる中、車輪が外れ大きな音を立てて傾いた。車輪の反対側を支えていた少女は役目を終えた馬車の本体をゆつくりと地面に下ろす。

銀髪のまだ幼い少女だ。ボロ布のような服がその愛らしい顔とは不釣り合いに思える。

全身を腐らせ血を滴らせる馬は車輪のない馬車をそれでも引こうと、懸命に前へと進もうとしている。ギチギチと音を立て、引き棒に連結した胸当てが食い込むが車輪のない馬車はほとんど動かない。少女は馬との連結部を引き千切った。馬は抑えつけられていた力を開放しあたりの人をはね飛ばしながら進むと城壁に激突した。

反対側の連結部も同じように壊す。同じことが繰り返された。馬は再度城壁に激突する。この馬は前に進む以外のことが出来なくなっており用済みになれば放棄するしかなかった。

その場にいた者達はそれを呆然と見ていた。白昼夢のようだった。とても現実とは思えないことが起こっている。

「テオバルト様、街へ到着しました」

少女が馬車の中へと声をかける。

中から一人の男が現われた。全身黒尽くめの男だ。肩まである黒い髪、黒い目、黒いコートで全身を覆っている。手には節くれだつた杖を持っていた。

「何故こんなにも人がいる？」

「数百年もこなければ街も発展します。これぐらいの人がいるのはあたりまえです」

男が手に持った杖で少女を殴りつけた。少女はそれを黙って受け入れる。

男は少女に思ったことを包み隠さず全て口にするように命令している。ただそれはこの男の寛大さを示すものでない。その言葉が気に入らなければこのように殴りつけた。

ここに至って呆けたようになっていた人々が動いた。商団を護衛する傭兵たちが防御態勢を取る。商人たちはその身を馬車の影へと隠した。

誰何の声など誰もあげなかった。下手に声をかけるのも恐ろしい。男は余りにも美しすぎた。そしてそれは傭兵たちの本能が最大限の警鐘をかき鳴らす要因でもあった。魔法使い。ここまで美しい人間が魔法使い以外のわけがない。

傭兵たちは男の一挙手一投足に注目した。魔法使いが魔法を使うには魔器を通して悪魔を使役しなくてはならない。そこには必ずなんらかの動きがあるはずだ。

先制攻撃を考える者もいた。だが足を一步前に出すことすら出来ない。彼らの本能は逃げると叫び続けていた。

「邪魔だな」

男がそう言った。一陣の風が吹き荒れるとその場にあつたもの全てが同時にずれた。血しぶきをあげて上半身が落ちる。子供たちは頭部か胸のあたりを切り裂かれ、馬は足を、馬車は車輪と本体の狭間で分断されていた。大地は瞬く間に血で染めあげられる。門の前にいた数百人の人間がただ風が吹いたという、それだけで骸と化し

ていた。

魔法による攻撃だった。魔法で攻撃する場合にもっとも有力とされるのが空気を利用したものだ。空気は簡単に動くため魔力効率がいいし、どこにでもあるため事前準備もいらぬ。この場合は薄い刃状に固定した空気を大人の腰ぐらいの高さで広範囲にばらまいた。ただ殺戮を行いたいだけならほとんどの場合これで事足りると言えるだろう。

「テオバルト様、ここにターゲットがいた可能性も……」

殴りつけた。それが日常となっている少女はもう一々反応したりはしない。

小雨が降り始めていた。先ほどの魔法は狂嵐の悪魔ゼトによるものだ。この魔法を使うと大気を依代に具現化した悪魔本体が嬉々として暴れまわり始める。その動きは大気に乱れを生じさせ暗雲を呼び寄せた。魔法の行使自体は素直に受け付けるがそれ以外の制御はできない。気がすむまで暴れまわるにまかせるしかなかった。

「あれはどんな姿をしている？」

「はい、聞いた所では栗色の髪をしている15、6歳ぐらいの少年とのことです」

「ここにいないか一応確認しろ」

「はい、いないですね」

少女はさつとあたりを見回したただだったがそれだけで確認が済んだようだった。男もそれについては信用しているようで特に咎めることはない

「見つけられるか？」

「条件に該当するものはこの街に無数にいるものと思われぬ。グ

ラウシエル症候群の罹患者ですから目視出来れば判別は可能ですが」「ならばこいつらに探させよう。街中に放ち似たような者を全て確保させる。お前は検分を行えば良い」

「発見後はどのように?」

「拘束しろ。私が直々に見極めよう。殺すなよ」

血まみれの死体達が蠢き始めた。上下にわかれた死体がそれぞれ片割れを探し出し元に戻ろうとする。手近な所にあった人体の一部を接合して人の形となったものが次々と立ち上がる。

たまたましゃがみ込んでいた数少ない生き残りは、声を押し殺しその様子を見ていた。

先程からこの魔法使いは魔法を使っている様子をまるで見せていなかった。詠唱も印も陣もない。一言二言喋っただけだ。生き残りの傭兵たちにはそれが信じられなかった。彼らの常識ではとても考えられない。

立ち上がった死者達はそこかしこに落ちている武器を拾い始める。生き残り達は怯えあっさりと武器を捨て逃げ去った。そこには幼すぎたため攻撃のあたらなかった幼子達も取り残されている。

簡易的な武装を終えた死者たちは行進を始める。統率のとれたものではないが、全員が街を目指してゆつくりと動き始めた。

死者の行進が門を通過していく。咎めるものはいない。一部始終を目撃していた検問所の兵士達はそれを黙って見送った。異常事態だ。想定外の事態に何も出来ない。何か余計なことをすると、こちらにやってくるのではないかと思うと身じろぎすら出来なかった。

検問所の女性兵士ダフニーは、ほぼ全ての死者が通り過ぎたあとにやっと動き出した。受話器を取り上げると交換手を呼び出し王城への緊急回線をつなぐ。そして死者の軍勢の襲撃を一気呵成に伝えた。

アルはその男を数度しか見たことはなく、直接何かをされたわけでもない。だが見た瞬間からゆっくりと怒りが込み上げてきた。アルの中にあつたのは理詰めの怒りだ。自分の境遇について思いを巡らせるとこの男がその始まりにいる。全ての元凶だ。一時的な激情ではない。常にこの男に対する燠火のような怒りがどこかでくすぶっていた。

怒りに我を忘れる事はない。だが自然と痛みは抑えられていった。怒りを足に込め立ち上がるとその男を睨みつけた。

「そつちから来てくれるとはね。探す手間がはぶけたよ」

せいっぱいの強がりを言ったアルを、男は一瞥するとそれ以上の関心は見せずに隣にやってきた少女に目をやった。

「テオバルト様、被験者を発見しました」

「ふむ、私は何故これを見極めねばと思ったのか？」

その言葉に少女は呆れてしまった。わざわざやってきて目的を忘れているというのか。

「回収して解体するという話だったと思いますが」

「これをか？ 見たところ取るに足らん。解体するだけ無駄だが、研究の痕跡を残すのはまずいか。お前の意見を聞こう。こいつは4号までと何か違うか？」

少女がアルを見つめた。その鳶色だった瞳はいつの間にか真紅へと変わっている。アルの背筋を悪寒が走った。とても重要な、だが

自分には絶対気付けない何かが進行してしまっているという感覚。何かのきまぐれで簡単に首を落とされる、生殺与奪を握られてしまっている恐怖。このままではまずい。だが打つ手がない。

「これまでと違うのは死者の完全蘇生能力でしょう。ただこれは、完全に蘇生させないと動かせないという意味では劣化しているとも取れます。そして死者の支配が不完全です。直接操作出来るのは数体で、しかも操作している者以外は自由意志を持つため反逆すら許してしまいます。魔力量、有効範囲等は今までの被験者と大差ありません。カテゴリーRとしては完全な失敗作です。この場での消去を提案します」

「本来意図していた造魔としても失敗で、レイン・オブ・テラー君臨する者にもなれなかったか。ゴミだな」

言葉通りだ。ゴミを見るような目でアルを見下す。

アルは銀髪の少女を見た。今の自分はこの少女にすら勝つのは難しい。一撃でほぼ行動不能にされた。万全の状態でも無理だろう。周囲は死者の群れに囲まれていた。死者は愚鈍だ。現時点では襲ってくる様子はない。そして目の前のテオバルト。実力は未知数だが、この天候と死者の群れはこの男の力だろうし、千の悪魔を従えるというのだ。これ以上の強力なものをいくらかでも用意しているのだろうか。

最悪だ。アルはこの男と対峙する前に、なんらかの魔法に対抗しうる力を手に入れるつもりだった。そのために魔法の力を求めたのだ。だが、結局の所魔法についてはろくな手がかりも得ていない。死を覚悟した。ろくに走れない状態で死者の囲いを突破することなどとても出来そうにない。

リーリア……

覚悟とも思い浮かんだのはリーリアの顔だった。自分が死ねばリーリアも死ぬ。そんな単純なことにすら思い至れなくなってしまうていた自分に呆れる。

どうすればいい。リーリアはこちらに向かっている。リーリアだけを逃しても無駄だ。だが、ここに来れば死よりも恐ろしい無惨な事態になるかもしれない。

『リーリア！ 広場にはくるな！ 近くに建物があればすぐに入つてそこから出るな！』

自分が死ねばリーリアも死ぬ。それはわかっている。だがそれでもリーリアが死ぬところなど見たくはなかった。死者の群れに蹂躪され殺されるのは自分だけでいい。瞬時に決意しリーリアに伝えた。そしてリーリアが何か言う前に同調を解除した。

無理でもなんでも逃げる努力だけはするつもりだった。リーリアと同調しながらではるくに動けない。

一か八か、死者の群れに飛び込む。目の前の少女に適わない以上それしかない。後ろに飛びすさるうとタイミングを見計らう。

まさに動こうとしたその時、死者の群れが10人ばかり吹き飛んだ。アルから見て右側から飛んできた死者たちは、アルとテオバルト達の間に着ちて潰れた。元々接合が弱かったのか簡単にその身体をバラけさせる。

アルは死者の包囲が崩れた箇所を見た。白銀の鎧を身につけた男が猛然と剣をふるい死者たちを手当たり次第になぎ倒し、ふっ飛ばし、両断している。以前に広場で見かけたことのある勇者がそこで大立ち回りを繰り広げていた。

聖剣の一撃で死者の群れが切り裂かれ吹き飛ぶ。フォグは確かな手応えを感じていた。聖剣が通用するならこいつらは魔族と同様と考えていい。

アイゼンは率いてきた王直轄の首都防衛軍、その一隊に死者への攻撃を指示していた。痛みを感じず、多少の損傷をものともしない死者の群れを相手にするにはまず心構えが必要だ。それをわかっていたアイゼンは即座に全隊にそれを伝えた。矢や刺突攻撃はあまり効果がない。切断や打撃による押しつぶすような攻撃が有効であることを。

「アイゼン、こいつらは一体何だ？」

「アンデッドでしょう。マキノさんがいればよかったです」

マキノは中央正教の本拠地、聖都へと旅立っていた。信仰への疑問からか最近のマキノは様子がおかしく悩んだ末に数日前、信仰を見つめ直すと言い出し聖都へと向かってしまった。同じようにここ最近飲んだくれていたゲルンも何か考えがあったのか同行を申し出、道中の守護を担うこととなった。

アンデッドは自然に発生することもあるため、教会ではその対策も考えられている。神聖魔法はその有効な対策の一つだった。

「ですが、特別アンデッドが脅威というわけでもありません。ここにいるような者達なら一般兵でも対処出来るでしょう」

死者達は特別な能力を持っているわけではなかった。多少頑丈ではあるが、何度も切りつけ動けなくなるまでばらしてしまえば無力化出来る。燃やすのも効果的だったが雨の中ではそれは無理と早々に諦めた。

防衛軍の数は凡そ500人。死者も多いとはいえその動きは鈍く、

練度の高い防衛軍は慎重に着実に仕留めつつあった。

「うらあ！」

フォグが聖剣を振るう度に数十人単位で死者達が吹っ飛んでいく。修復の済んだ聖剣は本来の力を取り戻しつつあった。

アイゼンは少し後方から全体の指揮をとりつつ様子を見ている。

「しかし彼らは何故ここに現われたのでしょうか？ 幸い雨のせいか街の方への被害は出ていないようですが」

「んなもん知るかよ！ とにかく全滅させる！ つーか、そこにいるのが街の方じゃないのか？」

フォグが切り開いた死者の壁の間から3人の人間が見えた。アンデッドではなさそうだ。

黒尽くめの痩身の男に、銀髪の少女。その向かいには腹を押さえて、今にも倒れそうな様子の少年がいた。

「ありゃ、あっちの黒いのが悪もんだろう？ ん？ どうしたアイゼン？」

アイゼンは黒尽くめの男を見た瞬間から凍りついたようになっていた。

あまりにも動かないものだから、フォグがアイゼンのもとまでやってきて肩を掴み揺さぶる。

「おい！ どうしたんだよ！」

「あ、あれは……」

何度もゆさぶってようやくアイゼンは動き出した。

「あいつが誰か知ってんのか？ アイゼン？」

「テオバルト……千の悪魔を従える者、人界の魔王、殺戮と塵殺の貴公子など数多くの異名で畏怖されている、大魔導師ですよ！ 彼のきまぐれで滅び去ったという街の噂は数知れず、ただ一人で一国すら落としたことがあると聞きます！」

「そんなすげーやつなら俺でも知ってなきゃおかしくねーか？」

「彼は数千年を生きていると言われていきます。数々の逸話は数百年前のものですよ。ここ最近見かけたという話は聞いたことがなかったのですが……」

「フーか、アレは本当にそのテオバルトってやつなのか？」

「はい。あの美貌！ 一度見れば忘れることは出来ません。古い資料に残っていた絵姿で見たものと同一です。レガリアに逆らい嵐を巻き起こし、アンデッドの群れを操る強大な魔力、こんな存在が二人といえるとは思えません。間違いないでしょう」

「魔族か？ 魔王なんだろう？」

「いえ、彼は人間です。魔導の研究の果てに究極の理を見出したとも言われており、畏敬の念を込めて人から産まれし魔王、人界の魔王と呼ばれているのです！」

「チッ！ あいつがそれだとしてだ、どうする？ 勝ち目はあるのか？」

「撤退します」

「は？ ふざけてんのか？」

「ふざけてなどいません。彼が何の目的でやってきたかはわかりませんが、おそらくあの少年が関係あるでしょう。ならば、目的を達して立ち去るのをただ待つしかありません！ 下手に手を出せばこの街が、国が壊滅してしまいます！ これまでもそうだったのです！ 決して彼に関わってはならない！」

フォグがアイゼンの襟元を掴み睨みつける。アイゼンは真剣な眼

差しでフォグを見つめ返した。にらみ合いはしばらく続いたが、やがてフォグが目を逸した。

「ちっ、わかったよ。お前は隊を撤退させる。だが俺は逃げない」「馬鹿な！　あなたは何もわかっていない！　大魔導師の恐ろしさを！」

「どーみたってあいつが悪もんでガキがやられそうになってんだろぅが！　勇者だなんだとちやほやされて、おだてられてよ！　そりゃいざって時になんとかしてくれるってみんなが思ってるからだろぅが！　ここで退くような奴がどの面下げて勇者だなんて名乗れるってんだ！」

「わかりました、お気をつけて！」

そう言ったアイゼンの行動は速やかだった。すぐさま隊をまとめて退却の指示を出そうとしてる。

「いや、そこは、私もお供します！　みたいなシーンじゃねーのかよ！」

フォグがアイゼンの方を振り向き慌てて言う。それとガツンと言った音がしたのはほぼ同時だった。

顎だ。巨大な顎があった。それが閉じた音だ。閉じた顎には全身を甲冑で覆った兵士が啜えられていた。鋭い牙は甲冑ごと肉を貫いている。退却を正に始めようとした兵士たちが、食い殺されていた。顎が上へと伸び上がり、天を向く。それは甲冑もろともぐちゃぐちゃと咀嚼を始め、十分に噛み砕いた後飲み下す。

少し後ずさったフォグにその全容が見えた。蜥蜴だ。死者を押し混ぜ、形を無理やり整えた巨大な蜥蜴の様な物がそこにいた。

死者達はどれほど細切れにされようが関係無かったのだ。それはどのような姿になるう別の形で利用されるように出来ていた。

消化器官などない死肉の塊が肉を飲み込んでなにをするというのか、それはすぐに分かった。背から骨と鉄と肉で出来た翼がせり出し始める。それは取り込んだ血肉を元に、竜のような姿を形作るうとしていた。

「なんだあれはアイゼン！」

「ドラゴン……のようなものとか……しかし、何故我々が攻撃されるのです！ テオバルトは目的以外のことには目もくれないはずでは！」

その答えはテオバルトの側の少女から聞くことが出来た。

「テオバルト様……竜が目標をそれましたが」

テオバルトは杖で少女を殴りつけた。

少年を食い殺すべく創造された竜は、少年を無視して防衛軍を襲った。それだけの事だった。

フォグは竜に立ち向かうべく行動を起こした。この状況で少年を守るという選択はない。このままでは防衛軍500名が全滅してしまう。

状況は大して変わっていない。アルはこの僅かに訪れた好機を活かすことが出来なかった。

囲みが破られた時はそれに乗じて逃げようとしたが、思った以上のダメージで素早く動くことは無理だった。

眼の前で死体が組みあがり巨大な蜥蜴になる間も黙って見ている

ことしか出来なかった。その蜥蜴が自分には見向きもせず、やって来た兵士たちに向かったのはただの偶然だ。まっすぐ向かって来られれば、ただ食われるしかなかった。

手詰まりか。さっきのは勇者だったが、僕への加勢は無理なようだ。

勇者がいた所でこの局面が好転するとも思えなかったがさらに時間を稼げたかもしれない。

僕は馬鹿か。時間を稼いでどうなる。……いや、回復出来ればあるいは……。

今まで意識したことはなかったが目の前の少女が自分のことを貴族だと言っていた。あの馬鹿力で殴られて生きていたのだから確かにそうなのだろう。ならば即座にはいかなくても回復は可能はずだ。貴族は戦闘に特化した頑健な肉体を持っている。戦闘中の負傷をもともせず死ぬまで戦い続けることが出来ると聞いたことがあった。

アルは今までのような漠然としたものではなく、回復出来るはずだと信じて負傷した脇腹に意識を集中する。身体の中で何かが蠢いた。内臓が元の形に戻ろうと蠕動を始めたのが感じられる。

悠長にそんなことをしていいのかなどとは考えない。テオバルトが次にいつ何をしてくるのか分からない以上、今出来ることをするだけだった。

「私が殺しましょうか？」

少女がテオバルトに問う。

「そうだな。竜などと戯れが過ぎた。お前がやれ」

少女がゆっくりと近づいてくる。アルはギリギリまで回復に努めることにした。こいつらがその気になればいつでも殺せるのだろう。何を考えているのか遊んでいるというのならそれは最大限まで利用するだけだ。

少女が拳を大きく引いて顔の横まで持っていく。あからさまな構えだ。ならばカウンターだ。最も練習した中段突きを食らわせる。それだけを考えて。

少女がアルの間合いの一步手前で止まった。身体のサイズが違うため単純に殴り合えば、アルの攻撃が先に届く。流石にそこまでは油断していないようだった。

少女の目が赤く光っている。本気を出しているということか。先程と同じように覗き込むような目で何かを探っている。

「なるほど。私が相手でなければうまくいったかもしれないですね」

少女は振り向くとリーリアの拳をその両手で受け止めた。

アルの失策はこの少女の能力を推し量ろうとしなかったことだ。少女の赤い瞳は相手の能力を読み取る。発動状態の能力の構成までも把握することができる。アルが何者かを操作していることまで完全に把握されてしまっていた。

そして少女の誤算はリーリアとアルの力を見誤ったことだ。死者を強化し、操作して襲ってくる。それはわかっていた。どの程度強化され、どのタイミングで発動されるのか、それも手に取るように分かる。少女は振り向き自分めがけて繰り出された右拳を余裕を持って受け止めた。だが止まらない。それは突きのように見えるが実質体当たりに近い。足元から生み出された力は余すことなく前方への突進力へと変換される。完璧な構えが創り出す構造は突きの反動すら再利用しさらなる威力を加えた。受け止めるべく前に構えた両

腕が跳ね飛ばされた。拳はその軌道をまったく変えることなく心臓に叩き込まれる。

少女は崩れ落ちそうになる足元に力をいれ必死に踏みとどまった。反撃を考えたのだ。だがそれは悪手だ。素直に吹き飛ばされればまだ次の手もあったのだろう。リーリアがさらに右足踏み込む。腰を落とし体を開き右肘を繰り出す。それは再度身体を中心に突き刺さった。

少女はアルの後方へと吹き飛んだ。だがアルはそんなことはどうでもよく、リーリアを睨みつけると大声で叫んだ。

「馬鹿か！ 何しにきたんだ！ 隠れてると言っただろう！」

「だ、だって！ 絶対おかしかつたよ！ 何かあるって思うよ！ それに助かったでしょ？」

「全然だ！ なんにも状況は変わってないよ！」

リーリアの性格を考えていなかった。ただ来るなと言った所でこの少女が、明らかに慌てた様子のアルを見捨てるわけがない。冷静に論理的に説得すべきだった。

広場に駆け込んできたリーリアを見た時、アルは咄嗟に同調を開始しそのまま突っ込ませた。リーリアを逃がすために操作すれば自分の身動きがとれずただ殺されてしまう。そうなればリーリアも死ぬ為さほど意味はない。それよりも攻撃に参加させることで局面の打開をはかるほうが二人が生き残れる可能性が高いと判断した。

少女は倒した。確かな手応えがあった。だがアルが言うように状況は大して変わっていない。テオバルトにはなんの痛痒も与えていない。

そのテオバルトはアルの目前から忽然と消え失せていた。目を放したつもりはない。常に意識の片隅でテオバルトの動向に注目していた。

「え？」

リーリアが何かに驚いた。アルはリーリアの見ている方、先程少女が飛んでいった方を振り向く。無様に転がったままの少女の隣にテオバルトが立っていた。

「ア、アル君、あの人急にはって出てきたんだけど……」

アルの目前から消え、リーリアが見ている前に突然現れる。アルは戦慄を覚えた。瞬間移動。そんな事が出来る相手にどう立ち向かえと言うのだ。

「テオバルト様……、申し訳……ありません……」

少女がテオバルトを見上げ、きれぎれの小さな声を振り絞って謝罪する。

「あれは面白いな。……ところでお前はどっになった？」

テオバルトがリーリアを見ながら、あまり関心のないそぶりですぐに様子を尋ねる。

「心臓に致命的な障害が発生しました。余命は5分ありません」
「そうか」

どうでもいいようだった。少女に対する興味を失ったテオバルトはリーリアを見続けていた。

「それはもらっていいっつ」

アルはテオバルトの動きに全神経を集中させていた。瞬間移動などという馬鹿げた力でもそれが魔法なら、魔器を通して発動する必要がある。予備動作があるはずだ。

だがその期待はあっけなく裏切られた。

気づけば隣にリーリアがいない。テオバルトの足元、傷ついた少女の隣に横たわっていた。その身体には死者の骨で作られたと思しき拘束具が絡みついている。骨で出来た人間一人を完全に拘束する牢獄だ。

「な！」

驚きのあまりアルは声を漏らした。

わけがわからない。テオバルトは一切何もしていない。そして瞬間移動だとしてもここまであっさりとリーリアを奪われてしまうというのが理解出来ない。

アルはリーリアの身体を操作したが全く身動きが取れなかった。拘束具は全身に絡みつき可動箇所を完全に抑えつけている。これでは力が発揮出来なかった。

「お前はもういい」

テオバルトが初めてアルの目をまっすぐと見た。虫けらを見るような目だ。

アルはテオバルトへ向かって一直線に駆け出した。冷静さはかけらもなかった。今のアルにはリーリアを取り戻す、それしか頭にない。ただ突っ込んで一撃を喰らわせ、リーリアを手に離脱する。それ以外は全て意識の外へと追いやられた。

回復はある程度出来ていた。貴族の力を意識したアルが一撃を加えることができれば、一矢報いるぐらいは出来たのかもしれない。

「死ね」

ただ一言。つぶやくようなその言葉はアルの身体に劇的な変化をもたらした。

駆け出した足がすぐに止まった。力が入らなくなり足元がぐらつく、目の前が暗くなる、激しく打ちつける雨の音も小さくなっていく。

なんだこれは？ 何が起きている？

そう思ったのも束の間、アルの心臓が止まった。

12話 覚醒

心臓が止まった。アルは全身を凍りづけにでもされたような感覚に陥った。実際に体温がこれから下がっていくのだろう。いまこの瞬間からそれは始まっている。

だが直ぐには死なない。死ぬつもりもない。リーリアを取り戻す。思考はその一点に集約される。

身体はなんとか生きようともがいていた。心臓は強引にでも血液を送り出そうと震えるが、何かに掴まれてもしたかのようにそれ以上動かない。

貴族の身体はそれでも生き長らえようと全身の筋肉を収縮させ無理やり血液を押し流す。それによりかろうじて脳の機能を維持させていた。

どうすればいい。このままでは遠からず全身の機能が止まる。死ぬ。

死を意識した瞬間思考が加速した。この状況を打破すべく記憶を洗いざらいひっくり返す。

何かあったはずだ。なんのために魔法使いになりたいなんて思っていたんだ。こういう時のためだろう！

「魔力は存在力とも言ったよな。だから魔法を食らっても諦めるな。結局最後にモノを言うのは根性だ。魔法に対抗するのは気合だよ。直接魔法をかけられたとしてもだ、強力な自我を保っていればなんとかなる場合もある」

聞いた時はなにを馬鹿なと思ったキャシーの言葉だ。こんなもの

にでもすぎるしかない。気合、根性。だがどうすればいい？

自我の補強。今更なにか裏打ちのある自信でも用意しろというのか？ なんでもいい、思い出せ！ 自分を肯定出来る何かを！
自負を！ 誇りを！

そうだ、本を読んだ。何度も何度も、すり切れるほど！ 人間の子供と馬鹿にされ、罵られ、嘲られる他、何も無い森での生活で僕を支えたのは本だ。人の言葉で、魔族の言葉で、竜の言葉で、妖精の言葉で、様々な言葉で書かれた様々な本を読んだ。

そして見つけた。それは印刷物ではない、手書きの書物だった。武術について書かれたものだ。アルは魅了される。そこらの魔族の子供では到底及びもつかない、武の深奥を垣間見た。全てを一撃で屠る突きを。攻防一体の構えを。神速の歩法を！

それこそ飽きることもなく読みふけり、ほんの僅かな汚れも虫の食った後も全てを完全に記憶した。その本には曖昧な言葉と稚拙な図しかなかったため、ただ読んだだけでは表面的なことしかわからない。それを推量し、検討し、自らの身体を用いて再構成していった。

それを身に着けるべく練習を重ねた。同じ動作を何度も何度も繰り返した。家の裏手は何度も踏みつけられ、固められ、石のようになり、いまや雑草の一本も生えない。同年代の魔族たちはそのうち手を出して来なくなった。

「アルはすごいわねえ、何でも知ってるのねえ」

母の言葉が聞こえる。本で読んだばかりの知識を母親に繰り返しかせた。新たに知ったその知識を聞かせたくてたまらなかった。その度に母はそう言ってアルを褒めた。それがとても嬉しかった。

アルの他者との関わりはとても薄い。そんな中での数少ない母による肯定はアルの自信の一部だ。

他には？ もっと何か！

そう、野族を、勇者を圧倒的な力でぶち倒した。本で読み、アルの中で再構成された武術は通用したのだ。それはただ膂力を振るうしか能のない輩を、理と術で捺じ伏せた。

そう、僕は強い。僕達は強い！ 僕とリーリアが力を合わせれば！

そしてリーリア。

「アル君は度胸あるよね……」

なんてことのない一言。これはいつのことが、アルのささいな言動に感嘆するリーリアが思い浮かぶ。

「そうかな？」

素っ気なく返したが、リーリアから寄せられる無条件の信頼が心地よかった。

いつからだろう、リーリアの隣にいるのがこんなにも居心地がいと感じるようになったのは。

こんなどの誰ともわからないような奴をよく信用出来るものだと呆れもしたが、一緒にいるのが当たり前になっていた。

だけど、だめだ！ リーリアから向けられる想いは力には出ない。してはならない！ あれが歪められた気持ちでないとどうして見える？

そう思う。だがリーリアの無邪気な、疑うことのないアルにだけ見せた笑顔を思った時、心臓は応えた。ドクン！と一度脈打つ。右手が無意識に動いて胸を押さえた。

一度だけだった。心臓はそれ以上ピクリとも動かない。

だが僅かなチャンスを無駄にしたとは思わない。これには意味がある。

アルは生きようと喘ぎのたうつ身体を抑えつけると死をそのまま受け入れることにした。

意識が急速に薄れていく。これは賭けだ。

心臓が止まった。ならば僕は死んでいる。そして……死んでいるなら……。

アルは自らを死者と無理やり認識した上で能力を使用した。死者の完全蘇生と強化と操作。

心臓を強引に動かす。抵抗はあったが強化した肉体はそれを打ち破る。血流が戻ることににより意識がはつきりとしてくる。

奇妙なものが見えた。煤の塊のような黒い人影だ。小人のような真っ黒な影は目前に立っておりその手をアルの胸につき入れていた。

お前か！

アルは左手の裏拳を影に叩きつけた。ただ影のようなものが凝り固まったそれはあっさりとその身を散らす。アルは身の自由を取り戻していた。

テオバルトは動かなくなつたアルを観察していた。

心停止の魔法。対人であればこれほど有効な魔法はない。複数に向けて同時に使えないのが欠点だが使いようでどうにでもなることだろう。

相手の魔力に干渉し、心臓を強制的に停止する。生物の本能として多少の抵抗はあつてもテオバルトの魔力があればそれは些細なことだ。よほど魔法に精通して、対抗可能な悪魔と契約でもしていなければまず助かる術はない。

本来心臓が停止した段階で即死する。少なくとも立ってなどいられない。血流の止まつた身体は最大限生き長らえるために、生命の維持に全力を尽くそうとする。ただ立つだけに割く労力などなくなつてしまうはずだ。

だがアルはその場で立ち止まっている。

テオバルトは少々訝しく思った。あまりにも時間が経ちすぎている。本来ならすでにその場に倒れ込み屍をさらしているはずだ。

アルの右手が動き胸を抑えた。

しかしそれも最後の足掻きかと、テオバルトはそのまま経緯をうかがう。

「シッ！」

息吹と共にアルの左手が勢い良く横に振られた。まるで目の前にいる何かを殴りつけたようだ。

再び目が合った。呼吸は大きく乱れているが、目は光を取り戻している。

どうやら抵抗に成功したらしい。テオバルトはそう判断した。

アルがそこから一步踏み出した。完全に復帰出来ていないのか足取りが怪しい。

テオバルトの目が細められた。それは踏みつぶして殺したはずの羽虫の羽がびくりと動いたので注目したといった程度の興味でしか

なかったが、今までのゴミを見るような目からは変わりつつあった。テオバルトは傍らで倒れ伏している少女を蹴った。

「おい、あれはどうなっている？」

少女はもうほとんど意識を失っていたが、蹴られたことにより朦朧としながらも最後の力を振り絞り返事を返した。

「はい……あれは……自己参照によりループバックが形成されています。それにより自我、魔力を安定させ、ミクトラを打破したようです。……それに関係あると思われませんが魔力知覚野の拡張を感知しました」

「ほう、面白いな。眼球を奪えば使えるか？」

「いえ、魔力知覚野は脳の……機能です。そう単純には……」

「これなら造魔としてまだ期待出来そうだな、何が原因だ？」

少女は答えなかった。テオバルトは再度蹴りつける。だが少女がそれ以上口を開くことはなかった。余命を使い尽くしたようだ。そう判断するとただ邪魔なものをどかすように、大きく少女を蹴飛ばした。見た目どおりの軽い身体は簡単に雨に濡れた石畳を滑りアルの前までやってきた。

「もう少し追い詰めてみるか」

テオバルトはそう言うつとアルへと杖を向けた。

世界がまるで違うように見える。うすぼんやりとした紗幕が目の前を覆っているようだった。

その幕のようなものには濃淡がある。

天をみれば巨人のような影が駆けている。暴れまわる度に雷が辺りを照らし、雷鳴を轟かせた。

死者たちには黒い影が取り巻いていた。ぼんやりとした影は死者たちの手を取り、足を取りその動きを操っている。

そしてテオバルト。その内から闇を溢れ出させ、あたりを覆いつくさんとしているように見えた。

アルの目には今までとは違う光景が広がっている。

先ほどアルの心臓を鷲掴みにしていた黒い小人もこれらと同一なのだろう。そこから類推するに、魔力や魔法現象の元のようなものが形となって見えているように思えた。

テオバルトを睨みつける。同じ手は食わない。先ほどの小人ならもう怖くはない。あんなものを蹴散らすのはいまや造作も無いことだった。

テオバルトが杖をアルへと向ける。

空から影が奔った。

とっさにアルは避ける。魔力らしき影が見えるようになっていくのだ。発動タイミングを読むのは容易い。

だが中途半端に避けることに意味はなかった。影はアルの傍で一気に展開しあたりの大気を支配した。

「ぐッ！」

激痛に声が漏れた。アルの腕がみちみちと音を立てて肘からねじれていく。必死に抵抗したが無駄だった。強大な力で押さえつけられゆっくりと力がかかっていく。やがて右腕は肘からねじ切られ、水溜りにばしゃんと落ちた。その間まったく身動きが出来なかった。大気に生じた気圧差はアルの右腕をあっさり奪っていった。

苦痛は一瞬だ。出血もそれほどではない。貴族の身体は戦闘を続行するため、痛みを抑え、血流の制御を行う。

だが、問題はそんなことではない。まるで勝ち目がない。絶望的な気分でアルはテオバルトを見つめた。

今のはわざとだ。手加減して右腕だけを狙っていた。その気なら全身のどこにでも攻撃を加えることが出来るだろうし、大気を操れるのなら吹っ飛ばそうが、窒息させようが自由自在だ。そんなもの魔力が見えようがかわしようもない。

「見えているようだ。だが対抗手段がないか。これでは追い詰めるどころかあっさり死んでしまいそうだな」

テオバルトの目はあくまで実験動物を観察するようなものだった。不意に剣が現われた。目の前だ。拳ひとつ分も離れていない。慌てて首を傾げかわす。剣はアルの頬を掠めて飛んでいき、石畳の上にカランと転がった。

大した威力ではない。だが、突然現われた。アルはそれを誰かが投げた瞬間を確認出来なかった。

次に3本の剣が同時に目の前の空間に現われた時にその疑問はより色濃くなった。まさか、時間が止められている？ リーリアを奪われた時もそうだ。まったく知覚出来なかった。

3本の剣を前に、左腕を顔の前に掲げかばいつつ避ける。剣は、肩を腕を脇腹を傷つけ後方へと飛び去った。

「うっ！」

太もみに生じた痛みが止まる。背後からやってきたそれをアルは全く感知出来なかった。短剣が後ろから左の太もみに突き刺さっている。

全方位からの突然の攻撃。為す術がない。

「くそっ！」

アルは刺さった短剣を抜き取るとそのまま構えるか一瞬悩み、捨て去った。今更使い慣れていない武器に頼っている場合ではない判断したためだ。

「アル君、逃げて！」

めまぐるしく変わる状況に呆然としていたリーリアが叫んだ。

アルは石畳に横たわり雨に打たれ続けているリーリアを見た。泣いているように見えた。怪我をしたアルを見て、アルの身を案じて悲しみで顔を歪めている。

大丈夫、助けるから。それが身勝手に生き返らせたりした僕の義務だから。

一歩近づく。テオバルトは動かない。近づけばどうにかできるだろうか？ わからないが他に手段はなかった。

足が銀髪の少女に触れた。ぴくりとも動かない。事切れているのがわかった。手にかけてのは自分だが特に罪悪感はない。ただやり返したただけだ。相手が幼く見える少女だろうとそれは関係なかった。リーリアを見る。拘束されているためまったく身動きが取れない状態だ。だがその左手が動いているように見えた。必死に左手を開け閉めしている。合図だった。それに気づいたアルはリーリアとの同調を開始した。

「アル君、もういいから！ 私のことはもういい！ だから逃げて！」

「無理だよ、逃げる気はないし、こいつも逃がす気なんてないだろ

う

しかしなぜわざわざそんなことを言うために合図をしてきたのかと訝しむとリーリアが言った。

『作戦があるの!』

リーリアはテオバルトに聞かれないように声を抑え口だけを動かしアルにその作戦を伝えた。

「ふざけるな! そんなことが出来るか!」

『ほんとにいいの。だって私は本当はもうとっくに死んじゃってるんだから。今はただ何かのおまけみたいに生きてるだけなの。いつかこうなるって覚悟は出来てた。アル君が死ぬ必要なんて全然ない! アル君は生きて! だから……さよなら』

リーリアの作戦を聞いてしまえばもうそれ以外のことは思いつかなくなった。悩んでいる暇はない。テオバルトがいつまで遊んでいるのかわからない。

逃げるのは無理だろう。戦って倒すか、倒せずとも何とか隙を作らなくてはならない。

リーリアは覚悟を決めてぎゅっと目をつぶった。震えている。それ以上何もしゃべるつもりはないらしい。

二人共死ぬ意味はない。それは分かる。けど、その作戦にしても非常に危うい。成功した所で意味がないかもしれない。

「これ以上の変化が無いならやはりお前には意味がなかったな。終わりにするとしよう」

もう迷っていられない。アルは覚悟を決めた。傷ついていない右足で全力で踏み切るとリーリアがいる反対側、テオバルトの右側へと一気に飛んだ。

後半歩の間合い。アルはなくなった右腕を前へと構える。左手は引き腰だめにし、左足は前へ、体重を落とす。呼吸を整える。

テオバルトは一瞬遅れてアルの側を見た。ここまで肉薄されてもまるで焦る気配はない。何事でもない様子だった。

喰らえ！

銀髪の少女の一撃がテオバルトの腹部に襲いかかった。右足で踏み込み、左拳の縦拳を叩きこむ。

リーリアの作戦は単純なことだった。リーリアとのリンクを切つて、足元にいた銀髪の少女を操り攻撃する。リーリアが動けない以上、それが最大の攻撃力を産むことの出来る手段だった。

これが成功する確証はなかった。足で触れ、蘇生し、強化し、操作する。リーリア以外で成功するかはやってみるまで解らなかった。アルの構えはフェイントだ。死者の精密操作時に同時にはうまく動けない。構えを取った状態で後は銀髪の少女に任せることにした。それは成功した。だが、そこまでだった。

銀髪の少女の左腕はぐちゃりとひしゃげる。最大限の力が込められた攻撃に少女の腕は耐えられなかった。拳が突き刺さったはずのテオバルトの腹部には触れることすら出来ていない。触れる直前何かに遮られていた。

一拍おいて少女は吹き飛んだ。さらに一拍後、遠くで激突音がする。全てを込めた全力の一撃がそっくりそのまま跳ね返され少女を打ち据えていた。

アルはそれでも自ら一撃を繰り出した。半歩右足を踏み込み、左拳を叩きこむ。

ガツン、と壁の様なものにぶつかった。微動だにしない大地を殴

りつけたような感触。テオバルトまでの指一本分程度の距離が絶望的なまでに遠く感じた。それは加えられた攻撃をそのまま反射しアルを吹き飛ばし、意識も同時に消し飛ばしていた。

雨は弱まりつつあった。テオバルトが離れたからか、それとも魔法の効果が切れつつあるのか。

アルはゆっくりと目を開いた。あたりは暗い。既に太陽は沈み、雲の切れ間からは龍の月があたりを照らしていた。

夜空を彩る星以外の天体は、月と呼ばれていた。それらは巨大な生き物の姿で天をゆっくりと移動する。一定周期でその姿を変え、同じ姿でいる期間が一月とされていた。

アルは全身が砕かれたように感じていた。もう動けない。身体は回復すればいいのかもしれないが心が折れた。あんなものになうわけがない。

大気を操り、時間を止め、全ての攻撃を跳ね返す。大量の死体を操り、死竜を作り上げ、心臓を直接止める。

勝てるビジョンが全く思い浮かばない。しかもあれはまったく全力ではない。遊んでいただけだ。本気を出されればどれほどのことが出来るのか。アルの心を諦めが支配した。

自分が死んでいない理由はわからない。死んだと思われたのか、殺すまでもないと思われたのか。

アルは仰向けのまま天を見る。視界に端に短剣が映った。少し頭を起こして自らの胸部を確認すればそこには短剣が突き立っていた。

きっちり止めを刺したつもりだったか。

その短剣はゆっくりと筋肉の収縮によって押し戻されていき、やがてカランと音を立てて転がった。

短剣を突き刺し殺したと思ったテオバルトは去ったのだろう。だが、そう大した力で刺したわけでもない短剣は心臓には達していない。

あいつも適当な奴だ。しかし、どんどん人間離れしていく。この程度では死なないか。

自嘲する。たいした能力だとは思うが、テオバルトを前にしてこんなもの何の役にも立たないと思う。

首を動かしたりを見回す。月に照らされた広場には誰もいなかった。あるのは死体の山だけだ。用済みとなった屍は広場に打ち捨てられていた。

テオバルトも兵士達も勇者もどこかに行ってしまった。リーリアの姿もない。

自分は生きている。だが、リーリアは再び死に、その骸も奪われた。これはリーリアの思惑通りなのだろうか。自分はこのまま生き続けていいのかとぼんやりと思う。

復讐。何を考えていたのかと思う。あんなものに復讐。笑えてきた。何もわかっていなかった。あんなものが想定できるわけがない。不可侵、絶対に手を出してはいけない存在だ。それが身にしてみわかった。

復讐をあきらめ、リーリアも死に、では自分には何が残るというのか？ 今更のんびりと人間の世界を見て回りたいなどとぼざくというのか？

もう無理だ。何も考えられない。虚無が心を占めていく。自分がゆっくりと壊れていくのを感じていた。

「何を呆けている!」

アルは声の聞こえた方にゆっくりと目をやった。

血まみれの狼がそこにいた。血は雨に流され足元を真っ赤に染めている。元は灰色なのだろうが、赤ばかりが目についた。その目は月の光を反射し爛々と輝いている。

まさか、と思う。だが狼以外には誰もいない。

その狼は足元にあった、アルの右腕を加えると足をひきずりながら近づいてきた。側までやってくるとその右腕を放り出す。

「お前……どこから……」

「ベアくまと呼べ！ リーリア様から頂いた名だ！ お前などと軽々しく言われたくはないわ！」

「いや……お前、喋れたのか？」

「喋れないなどと言った覚えはない！」

「それはそうだけど……」

アルはますます呆然とした。考えがまとまらない。なぜここにあの狼がいる？ この狼とは街に入る前に分かれた。リーリアの言ったように犬の振りなど出来るわけがないからだ。

「わざわざ持ってきてやったのだ！ さっさとくっ付けて立ち上がれ！ リーリア様を取り戻しに行くぞ！」

「お前どうした、怪我をしてるのか？」

「あの魔導師にやられたのだ！ 貴様と同じくな！」

「さっきから、なんで怒鳴りっぱなしなんだよ……」

「不甲斐ない貴様に喝を入れてやっているのだから！」

「どうしろって言うんだ？ お前も戦ったのならわかっただろう？」

あれはどうしようもない」

「貴様！」

「それに今更リーリアを取り戻してどうするんだ。また生き返らせ

るのか？ 本人の意思を無視して。自分の都合のいい用に想いをねじ曲げて」

アルは力なく答えた。唸りを上げる狼を前にしても恐れを抱くことすらなかった。感情が麻痺している。狼が何を言おうと今更関係がないと思った。

「なるほどな。貴様のおかしな態度はそれが原因か。道中おかしいと思っていたのだ、いいだろう。貴様のその腐れた性根を叩き直してくれるわ」

そう吼えると狼はアルの肩口に噛み付いた。鎖骨のあたりに牙を突き立てる。身動きの取れないアルは苦痛に顔を歪めた。

「何をする！」

「まだわからんのか！ 私は貴様の支配下になどないということだ！ いつでも貴様の寝首をかくことが出来るぞ！ リーリア様も同じ事だ！ お前に支配されてなどいない！ あの方の想いはあの方だけのものだ！ 断じて貴様などにいいようにされたものではないわ！」

狼はアルに噛み付きながら叫んでいた。器用なことだが、元々狼の口で人の言葉が話せるとも思えない。発声器官以外の何かで会話をしているのだろう。

アルはそれをただ黙って聞いていた。意味がよくわからない。そんなはずはない。生き返らせた者は自然と忠誠を近い支配されるはずだ。アルはそう思っていた。

「……なら何故、お前は僕に従っていた」

「魔獣は元々魔力を操る術を持っている。故に蘇生され自らの魔力

が主により置き換えられていることを自然と悟る。主が死ねば自分も死ぬのだ。そんな状態で逆らうようなものがあると思うのか？人間であるリーリア様は魔力などまったく感じておられないわ！故に貴様の都合や、欲情など一切がリーリア様に関係がない！」「そんなわけがあるか……僕が試した動物たちは……いや、まさか……」

「あの森にいるのはほとんどが魔獣よ！そこらの脆弱な生き物と一緒にするでないわ！」

狼がアルの肩からその顎を放し顔を上げ、アルを見下ろす。まだごちゃごちゃ言うようなら今度は首筋にかぶりつくつもりだった。アルは左手を顔に持って行くと両目を覆った。

「あははははは、そうか、そういうことが、僕は馬鹿だな、少しは賢いつもりでいたんだが……馬鹿丸出だな」

「貴様が馬鹿なのは最初からわかっておるわ！」

「……僕はリーリアを侮辱していたんだな……ちゃんと謝らないとな……」

リーリアがアルの事を満更でもなく思っていることはわかっていた。だが、それは能力の支配下にあるため自然とそのような感情が発生しているものだとばかり思っていた。自作自演の感情になど意味はない。能力を使用して美少女をかしずかせ、好意を向けさせる。こんな惨めなことはないと思っていた。だから距離をおいた。それに流されてしまえば歯止めが効かなくなる。支配者と被支配者という関係などまっぴら御免だと思っていた。

リーリアの顔を思い浮かべる。とても綺麗だ。蘇生し初めて見た時からそう思った。蘇生時に自らの願望が入り混じったのかと思っただくらいだ。

その碧い大きな瞳で真っ直ぐにアルを見て、楽しそうに笑ってい

たのを思い出す。その純粹な眼差しを自分の邪な想いが創り上げたのかと思うと、己の低劣さにたまらなく嫌気が刺した。

だが、そうではないと言う。あれがリーリア自身の素直な感情の現われだというなら、とても幸せな想いに浸ることが出来る。

「やる気が出てきたよ」

「ふん！ 雄は現金だな！ リーリア様の想いがわかればそれか！」
「どうとでもいえ」

まずは回復だ。アルは石畳に転がる自分の右腕を見る。これは死体だ。そう思いながら左手を向ける。左手から黒い影が伸びた。アルの目にはそう見える。なんらかの魔力現象が黒い影のように見えている。影は右腕を包み込んだ。これまでは対象となる死体に触れる必要があつたが、少し離れた距離ぐらいなら問題なく能力を行使出来るようになっていた。

右腕がぴくりと動く。右腕は指を器用に動かして這いよつてきた。左手で右腕を掴み右肘に押し付ける。死体に対しての蘇生を行った。切断部の接合が行われ、その腕が死体ではなくなつたと、アルが認識した時点で能力の効果は切れた。

右手を軽く握り、開く。問題ない。

上体を起こす。全身を鈍痛が包んでいたが、動かすには問題なかった。先ほどまで動けなかつたのは精神的な問題だ。

「おい！ 私も回復させる！」

「えらそうだな」

アルは治つたばかりの右腕で狼の頭に触れた。足を痛めているよつだったが、その程度はすぐに修復が出来た。

「じゃあ死にいくか。ベアくま、お前も付き合え」

「無論！」

勝ち目はない。戦えば確実に死ぬ。だが、勝てないことは戦わない理由にならない。死ぬから戦わないなどということはありえない。ここで生きながらえてのうのうと余生を送るなど出来るわけがなかった。

リーリアのために死ぬ。本人は嫌がるかもしれない。だが自然とそう思えた。

「死ぬにしても何か手はないか？」

「知るか！ この牙を突き立てるだけよ！」

「そんなことだろうと思ったよ、お前、直情っばいからな」

膝を立てゆつくりと力を入れる。両手を膝において立ち上がった。空を見上げる。月の光と、弱くなった雨が降り注いでいた。

あたりを見回した。立って周囲を見回しても様子は変わらなかった。あたりにあるのは死体だけだ。

この死体を利用するか？

そう考えもしたが、先程散々やられたのだ。同じ事を繰り返すだけだろうと思われた。

これに似た状況を見たな……死体の山と龍の月。あの儀式だ。他には何がいるのか、地面に書いてあった図がいるのか？

アルは夢で見た情景を思い出していた。悪魔召喚の儀式。だが、地面に描かれていた円陣の詳細までは覚えていなかった。

天を見上げる。龍がこちらを見ている気がした。

アルは大声で叫んだ。

「おい！ 見ているのか！ 悪魔でも何でもいい！ 出てこい！
どんな代償でも払ってやる！」

「貴様！ おかしくなったのか？ 何をほざいている！」

「試してみたただだよ。もしかしたら悪魔に伝わるかもしれない」

「そんなもので呼べれば苦労はないわ！」

「呼びましたか？」

そんな声が背後から聞こえてきた。アルと狼はそろって振り向いた。

そこには黒衣の大魔王が穏やかな笑みを浮かべて佇んでいた。

悪魔だと言われてもそう信じるしかない。月の明かりに照らされた大魔王は人間離れた美しさだった。

いつからそこにいたのか、広場の端からゆっくりとこちらにやってくる。

「こんばんは、いい天気ですね」

いつもの大魔王だった。穏やかな口調だ。実際の天気などまるで頓着していない。

大魔王はこの雨の中まるで濡れていなかった。アルは雨つぶが大魔王にあたる直前に軌道を変えてしまう所を目の当たりにした。まるで雨粒自信に意思があり、大魔王を汚すのを恐れているかのように見えた。

「大魔王……何しに来た？」

「おや？ 先程呼ばれた気がしたのですが？」

「悪魔なのか？」

「大魔王ですよ？」

大魔王が可愛く小首を傾げる。いつも通り過ぎて調子が狂いそうだった。

「……まあいい、力を貸してくれるのか？」

「お父さんは常々、男は死ぬ！ 女は助ける！ と言っている人だったのですが、リーリアさんが連れていかれた以上助けられないわけにも行きませんね」

「なぜ、リーリアが連れて行かれた事を知っている？」

「見てましたから」

「なに？」

「あなたが戦っている所を最初から見えていましたよ」

当たり前のようにそう言われて、アルは頭に血が上りそうになったが抑えた。大魔王には助力するような義理は元々ない。

「ああ、何か誤解されているかもしれませんが言っておきますけどリーリアさんとアルさんの事はお友達だと思っっていますよ？ 戦いに横入りしないと云うのが私のポリシーだということですよ」

「なんだよそれは。魔界の流儀か何かか？」

「魔界にはそんなものはありませんよ？ 横入り、裏切り、不意打ちなんでもあります。このポリシーはお父さんのものですね。私もそれに従っています」

「……今なら助けてくれるのか？」

「ええ、戦いは終わりましたからね。それにリーリアさんをあんな男にいいようにされるわけには行きません！ きつとおっぱいが気

にいったのですね！ あんなのに触られたらリーリアさんのおっぱいが減ってしまいます。それは許せません！」

妙な所に力点がおかれている気がしたがそれは無視することにした。

「しかしリーリアは死んでるんだ。それでも助けてくれるのか？」

「死んでませんよ」

「何？」

「よく目を凝らして左手を見てください、うつすらと線のようなものが見えませんか？」

そう言われてもよく分からない。言われたように左手をじっくりと見てみた。

薄い、とても薄い墨で引かれたような頼りない線が左手から中空へと伸びていた。その線はそのまま広場の端、北門へと続く大通りへと伸びている。

「……これは？」

「魔力肢と呼ばれるものです。それがリーリアさんに繋がっています。ですのでリーリアさんとの絆はまだ切れていませんよ、ふふっ、愛の力でしょうか」

「恥ずかしいんだよ、大魔王」

「それとおめでとうございます」

「何が？」

「それが見えると言うことは魔力知覚が出来ているということ。魔力を見るのは、魔人への第一歩です。その調子でがんばってください」

のんびりした大魔王の言葉を聞いているとやはりおかしな調子に

なってくる。

こんなことをしている場合ではない。リーリアがどちらへ行つたか検討をしようと思つていた所で図らずもその方角を知ることが出来たのだ。速やかに追うべきだった。

「代償はどうする？ 大魔王に頼みごとをするには何が必要だ？」

「これは借りということにしてくださいませんか？」

「借り？ 貸しじゃないのか？」

「ええ、私がアルさんから借りるのです。アルさんの大事な敵と復讐の機会を私の都合で取つてしまうわけですからね」

「ははは、なんだそれ！ 優しすぎるんじゃないのか？ 大魔王！」

「そうですね？ きまぐれなだけだと思いますけどね」

大魔王が目を逸らしとぼけるように言った。素直じゃない、アルはそう思った。友達だと言つたのは本心だつたのだから。アルが勝てないのは大魔王もわかつているのだ。でもそうは言わなかった。代わりにやってやるとも言わない。借りなのだと、アルには不本意だろうが自分がその機会を奪うのだと言つ。

「その借りを僕はどうやって返してもらえばいいんだ？」

これではただ助けられているだけだと思つたアルは聞いた。借りだとは言つがこれは実質貸しではない。

「そうですね。では私でもかなわないような凄い敵があらわれたら、それを代わりに差し上げます。それで貸し借りなしです」

「大魔王の敵ってなんだよ」

「それはもう、物凄い敵ですよ」

「ははっ、わかつたよ。それでいい」

アルは即答した。もしそれがとんでもない敵だったとしてもその時は大魔王の代わりに死ねばいい。そう思った。

「では、行きましようか。あまりのんびりしていると、リーリアさんのおっぱいが減ってしまいます！」

「のんびりしてる原因のほぼ全ては大魔王のせいだと思っけど」

「少し急いで行きましようか。移動に力を使うのはポリシーから外れるのですが、今回はやむを得ませんね」

そう言つとアルの腰を左手で抱いた。右手は猫の子でも掴むように狼の首根っこを持っている。

大魔王に密着されアルは少し心拍数が上がった。大魔王の柔らかな感触に顔を赤くする。

「さあ！ 私のおっぱいを取り返しに行きますよ！」

「あれは僕のだ、お前のじゃない！」

「むう、仕方ないですね……たまには貸してください」

「考えておくよ」

そんな軽口を叩いていたかと思うと、次の瞬間には二人と一匹の姿は広場から消えていた。

雨の止んだ広場には死体の山だけが残っていた。

13話 対決

ゴミの中に、ゴミと見紛うようなバラックが立ち並んでいる。この一帯は夜になっても何かしらの人が蠢いていた。

そこかしこで篝火が焚かれている。その回りに集まり何かを焼いてそれを食すものや、ただふらふらと歩きまわるもの、何かを殴りつけ、切りつけ乱闘を繰り返すものなど様々だ。

ここはベイヤーの北門外、貧民街と化したゴミ捨て場だ。

ゴミの中、雨でぬかるんだ大地を異形の集団が行進している。

全身を欠損し、腐らせ、血をしたたらせる歪んだ身体を持つ死者が歩いて行く。

死者たちは一人の少女を数人がかりで掲げていた。

絹のようになめらかな金の髪が垂れ下がり、行進にあわせてさらさらと揺れている。その肌は青白くとても綺麗に見えたが生きているようには見えなかった。

少女は全身を骨で出来た拘束具に囚われていたが、それがなくとも動くことはないだろう。

その集団の先頭には黒衣の魔導師、テオバルトがいる。

北側へとやってきたことにはそれほど意味はない。自らの居城へ帰るつもりだったが、それはここから西側にある。ここで乗り物を調達して移動手段とするつもりだった。

高速移動魔法を使用してもよかつたが、それは一度使用するたびに再契約が必要となる面倒なものだった。それよりも、北門の外でうろつろしている人間を材料に乗騎を作成するほうがまだ簡単だった。

テオバルトは拘束されたままの少女を見た。面白い。そう思う。従者の少女を倒した一撃は、数千年の時を生きたこの男も思わず見惚れるようなものだった。

操っていたのはあの失敗作だったのかも知れないが、この少女の

美しさはそれを除いてもあるように感じた。自分が手を加えればさらなる芸術品として美しさを増すだろうと思いついて持っている。

周囲では死んだような目をしたスラムの住人たちが、遠巻きに見ていた。あからさまに怪しい集団を見ても逃げようとはしない。どうでもいいという様子だ。ただそこにいられるのが邪魔なのだろう。こいつらを利用してまた竜でも作るか。飛んでいくのが早いだろうとテオバルトが考えていると、不意に突風が吹き荒れた。

妙な風だった。それは上空から大地へと吹き降ろしている。

その場にいた者達でその不自然さに気づいた者が天を見上げた。

何かがやって来る。

そう身構えた時それは起きた。大爆発だ。貧民達は天から地をめぐらして放たれる巨大な槌を幻視した。そのようなものでしかこの有様はありえない。辻褄が合わない。

耳をつんざくような爆発音と共にそれはブラックを、ゴミの山を根こそぎ吹き飛ばし、大地を抉った。土と泥が柱のように上方へと吹き上げられ立ち上る。

土砂が雨のように降り注ぐ、その爆発の中心には何かが立っていた。それは抉られ、すり鉢状となった穴の底からゆっくりと上がってくる。

その手に少年と狼を抱えた少女、大魔王だった。

「大丈夫ですか？」

大魔王は、少年と狼を適当に放り出した。べしゃっとぬかるみに落ちる。一人と一匹は不快さに顔をしかめ猛烈に抗議した。

「死ぬかと思つたよ！　なんだあれは！」

「貴様！　殺す気か！」

「走ってみたのですが？」

「走ってない！ 一步でここまで飛んでくるのを走るとは言わない！」
「走ると歩くの違いをご存知ですか？ 両足が地面から離れることがあるのを走ると言うのですよ？」
「それぐらい知ってるよ！ その説明からは両足で交互に地面を蹴るっての抜けてるよね！」

アルと狼は何がなんだかわからないうちに瞬時に北門外までやってきていた。ただの人間と狼なら死んでいただろうという急激な負荷をかけられての高速移動だ。

だがアルにはそんなことに拘泥している暇はない。

「リーリア！」

アルがリーリアを見つけて叫ぶ。

「そうです、そうです、まずはリーリアさんですね」

大魔王がふわりと浮いた。軽く跳躍したのだろう。リーリアを担いでいる死者の頭部に降り立つと、リーリアをその手に抱いた。抵抗の様子を見せた死者の腐りかけた腕は簡単に引き千切られる。

リーリアを横抱きにした大魔王は、死者の頭を蹴り飛びたつと直ぐにアルの元へと戻ってきた。拍子抜けするほどあっさりとリーリアを奪還している。

大魔王はリーリアをそつとめかるんだ地面に横たえた。

その間テオバルトは何もしなかったわけではない。狂風の悪魔ゼトによる気圧操作を行い、大魔王に攻撃をしかけていた。だがそれは大魔王になんらダメージを与えてはいない。

テオバルトはさして驚かない。空気を操る魔法は攻撃手段として魔法使いの間で広く普及しているため対抗手段も無数に考案されて

いる。相手がそれなりの魔法使いなら通用しないことがあると知っているからだ。テオバルトは黒衣の少女をそれなりのレベルの魔法使いだと認識した。

「これは……ただのおっぱい好きの男かと思っていたのですが、なかなかいい趣味をしていますね」

大魔王がリーリアを見ている。骨で出来た拘束具は全身を絡めとっている。その骨の隙間から胸が押し出されるように強調されていた。

アルはリーリアの傍らにしゃがみ込むと骨の拘束具を外そうと力を込めてみたがびくともしない。

「おい！ これはなんとか出来ないのか？」

「少々惜しいですが、仕方ないですね」

そう言うで大魔王はあっさりと拘束具を引き千切った。ぶちぶちと数力所をちぎり取ると拘束具はぼろぼろと崩れ去る。

アルは呆然と大魔王を見上げた。まるでこよりで出来た紐でもちぎるようだった。まったく力をこめているように見えない。

「お前……何者だよ」

「大魔王です」

大魔王が腰に手を当て胸を張る。妙に子供っぽいしぐさだ。

「ああ、そうだな。聞いた僕が馬鹿だった」

「ではリーリアさんはお任せしますね。私はあちらのお馬鹿さんにお仕置きです。それとも一緒に戦いますか？」

少し考えこんでからアルは言った。

「いや、これはもう大魔王、あんたに貸した戦いだ。まかせる」
「まかされました」

大魔王はテオバルトの方へとゆっくりと歩き出した。

「おい、リーリア！」

いつもより青白い顔をしたリーリアを見てアルは焦った。首筋に手をあて鼓動を確かめる。微かに脈動を感じた。口の前に手をやると呼吸が感じられる。アルは胸をなでおろした。

ベアくまがリーリアの頬をぺろぺろと慈しむように舐めている。アルに対しての威勢のいい態度とはまるで違い、とても心配そうにしている様子だ。

アルは首の後ろに手をやりそつと上体を持ち上げ、頭を自分の太ももの上に置いた。意識を失っている人間をどうしていいかはわからなかったが、泥だらけの地面に横たえたままというのが可哀想に思えたからだ。

額に手をやりそつと撫でる。冷たかった。触れて直接能力を行使する。大丈夫なはずだ。

「う……」

リーリアが軽く呻いた。そしてゆっくりと目を開く。

「おい！ リーリア！ 僕だ！ わかるか？」
「……え、アル君？」
「そうだ、アルだ！ 忘れてないか！」
「忘れるって……なんで？」

アルの心配は、蘇生時にどこまで生前の状態が保持できているか
確証が持てていない所にある。今回の場合は、結局リンクは維持で
きていたようなので問題はなかったが、再度死んで蘇生させたとな
るとそこが不安な点だった。だがそれは杞憂に終わった。

「なんか……大げさだね、あれ、ベアくまちゃん？」
「わん！」

「お前……いまさら、わん！ はないだろ？」

「黙れガキが！」

「え？ え？ ベアくまちゃん？ え？ 夢？」

「こいつについては後で説明するよ。身体の調子はどうだ？」

「う、うん、別になんともない……と、思っ」

「そうか、よかった」

「私……どうなったの？」

「あの男に連れていかれそうになったのを、大魔王が助けてくれた」

「え、パエリアさん？」

「そうだよ」

「そっか……そうだね、大魔王だもんね」

「ああ……その、すまなかった」

逡巡した末にアルは謝った。どう切り出しているのかわからな
かった。リーリアの想いとアルの想い、どうまとめればいいのかわ
らなかつた。とりあえず謝った。

「え、何が？」

「リーリアを見捨てるような真似をした」

「いいよ、そんな、私なんてもういつ死んだって……」

「そんなことをもう二度と言つな！」

「だ、だって……私アル君に迷惑かけてるじゃない……私がいなかったらアル君だってもっと自由に……」

「迷惑なんかじゃない、いつまでだってリーリアと一緒にいる。そう言っただろう？」

「でも……それはアル君が責任を感じて……」

そうじゃない。そう言っただけの思いの丈をぶつけてしまうのは簡単だったがそれは躊躇われた。今ここで単に口にだして言った言葉にどれだけの価値があるというのか。

それはこれからの行動で示すべきだ。アルはそう思った。

アルが真つ直ぐにリーリアを見つめた。今までにない真剣な眼差しにリーリアの心拍数が上がった。じつと見つめられ続け、恥ずかしさで真つ赤になってしまう。

リーリアの心臓がますます早鐘を打つようになっていった。

こ、これは、まさか、でも、なんかそれっぽいと言つか。この状況がそういう感じって言うか……。それなりにロマンチックでもあるというか、助けられた囚われのお姫様的というか……。

リーリアはアルが口を開くのを今かと待ち構えた。これ以上焦らされると早くなりすぎた心臓が逆に止まってしまいそうだと思う。

「責任か。確かにそれもある。だから……その責任は果たす。リーリア、君をちゃんと生き返らせる。大魔王だとか、大魔導師だとか馬鹿げた連中がいるんだ。どこかにそんな手段もきつとある！ だから……それまではずっと一緒だ」

「……なんかビミョー……」

それはリーリアの期待していたものとは少し違っていた。これでは期限付だということになってしまふ。では、無事生き返ればどうなるのか。その先のビジョンがない。落胆に目を細めた。

「え？」

「もっと情熱的な……まあいいや！ わかったよ、ちゃんと生き返らせてね！ それまではずっと一緒なんですよ？」

「ああ」

「だったら今はそれでいいや！ これからもよろしくね！」

リーリアはまだアルの心の壁のようなものを感じてはいたが、それは随分ともろくなってしまっているようにも感じた。もう一押しでガラガラと崩れ去ってしまいそうだ。それを想像するとなんだか楽しい気分になった。

リーリアが微笑んで手を伸ばす。アルはその手を取って握りしめた。

その様子をベアくまは苦々しげに見つめていたが、リーリアが嬉しそうにしているのを見てそれはそれでよいかと思ひ直した。

「直接挑戦された訳でもないですし、普段ならあなた程度は無視すると思うのですが、今回はアルさんとリーリアさんの事がありますからね。申し訳ありませんが少しお付き合いください」

大魔王はテオバルトの前にやってきてそう言った。

テオバルトは目の前の敵を推し量る。魔法使いだろうと思う。そ

れならばそこにいる失敗作よりは多少警戒度は上がる。だがそれだけだ。魔法使いとしての実力で自分に適うものなどいない。そのことをこの男は数千年の生の中で確信している。

少々思いついていいる小娘に実力差を見せつける。そう思い軽く手を振った。まずは小手調べだ。

テオバルトの前に炎弾が現われ、高速で大魔王に放たれた。

拳大の炎の塊だ。大魔王はそれをなんなく右手で受け止めた。

「これは……何がしたいのでしょうか？ 意味がわからないのですが……これは燐の様なものを地中から集めて発火させ、投げつけたということだと思っんですが？」

大魔王は手の中の炎を不思議そうに見つめる。しげしげと見た後軽く握りつぶすと納得の顔をした。

「ああ、もしかして私を燃やそうとしたのですか？ でもそれならこんな回りくどいことをしなくてもいいんじゃないですか？ こうすればいいだけでしょ？」

大魔王のその言葉と、テオバルトの黒衣が炎を上げて燃え始めたのは同時だ。テオバルトはあくまで冷静だ。警戒レベルをもう少し上げる。思った以上の実力者らしい。

まず発動の瞬間が見えない。これには自分と同じような仕掛けを使用していると推測した。テオバルト自身は魔器を体内に内蔵することで発動手順が外部に悟られないようにしていた。具体的には眼球だ。眼球を魔器と入れ替えている。焦点を合わせる眼の筋肉の力で魔器を操作し、契約悪魔への指示を出している。他にもいくつか体内に予備の魔器も仕込んでいた。なので発動動作が見えないという事自体はテオバルトに取っては意外ではなかった。この発想にいたる者も少数ながらいることを知っている。

それよりもやっかいなのが、魔術防御を全てすり抜けられたことだ。テオバルトは常時様々な防御用の魔法を使用し続けている。それらが全く用をなさなかった。これも、幾重にも重ねられたそれぞれの魔法を識別し、それぞれに對しての對抗手段を取ることで可能ではあった。だが、そうなるはこの小娘の魔法使いとしての実力はかなりのものということになる。

テオバルトは黒衣の炎を打ち消した。特殊な炎というわけではなかったので、単純な延焼制御でそれは可能だ。

「あなた……もしかして今何故燃やされたのかわかってないんじゃないですか？」

大魔王は呆れたように言った。

テオバルトは少女のその言葉をはったりと決めつけた。炎を司る悪魔はそれこそ無数に存在する。テオバルトが知らないものもあるだろう、ただ燃やされただけでそこまで警戒する必要はないと考えた。対処出来るなら問題ない。

「その様子だと私から攻撃するとすぐに終わってしまいそうですね、いいですよ。お好きなようにやってみてください」

これまでの人生でテオバルトに對してここまで見下すような物言いをした者は数少ない。契約悪魔数が1000を超えてからの千年では皆無とっていい。

それはテオバルトの逆鱗に触れた。すぐに終わらせるつもりはない。まずは全く抵抗できずに為す術もなく襲われる恐怖を与える。それから数千年練り上げた魔の真髄と言うものを見せつけてやろうと考えた。

時を司る悪魔テス、その力を行使する。

テオバルトの主観において全てが停止した。これはテオバルトの

切り札でもあるし、常用している魔法でもあった。時間を止める。その効果は劇的だ。どんな強者であろうとこの魔法を前に太刀打ち出来るはずもない。他の魔法に比べて魔力消費が極端に大きいと言う訳でもないし、ほぼ不老を獲得しているテオバルトに取って自分だけ時を重ねてしまおうというのは大した問題ではなく気軽に使用できた。

テオバルトは動きを止めた大魔王へとゆっくりと近づいた。特にこの魔法の制限時間はないため焦る必要はない。

大魔王の前までやってきたテオバルトはじつくりとその美しい顔を眺めた。「い」と言った状態で口が開いたまま止まっている。そんな一瞬でさえ美しいというのは驚嘆に値した。

このふざけた小娘をどうしてくれようと、テオバルトは考える。この状態でただ殺すのは簡単だがそれでは気が済まない。たっぷりと恐怖をその身に刻み込まねばならない。

手足をもぐか、眼球を抉るか、内臓を引きずりだすか。それでは駄目だ。単純すぎると考えたテオバルトはまず辱めを与えることに決めた。ゆっくりと己の愚かしさを染みるように教え込みたい。そう思えば肉体に損傷を与えるのは後回しだ。

まず服を剥ぐ。そう決めたテオバルトは大魔王の胸元へと手を伸ばした。

「やっぱりおっぱいが好きなのですか？」

テオバルトの手が止まった。衝撃を感じていた。これまでの人生で最大の衝撃と言ってもいい。ありえないことが起きていた。ほぼ表情というものを失っているとすら見えたテオバルトの顔が驚きに歪む。

「なんだと？」

そんな単純な一言しか出てこない。

「私の支配した時の止まった世界で何故貴様が動ける！」

声を荒らげたことなど記憶の彼方だ。ここまで取り乱せる自分が信じられない。

「そう言われましても……時間が止まるなんてあるわけないですよ？」

「ふ……ふざけるな！」

激昂した。ただ怒りのままに叫んだ。

「テテスさんもお茶目ですよ。あなたの魔法は、高速思考制御と、流体制御、肉体強化、高速移動による衝撃の中和等の複数の魔法の合わせ技でしかないですよ。そもそも時間が止まった中であなただけが動けるってどんな理屈なんですか？」

テオバルトは声を失った。

「私は今、あなたの速度に合わせて動いているだけです。時が止まったふりというのもめんどくさいですね。間抜けな顔をしたままあなたが近づいてくるのを待つのは嫌な気分でした、こんな顔を見られたらファンが減ってしまうかもしれません。まあテテスさんは時を司るなんて引込み付かないこと言っちゃって後に引けなくなっただけでしょう？」

テオバルトは一步後ずさる。何も言う気になれない。

「では、そろそろこんな状態は止めにしましょうか。アルさん達が

見ていない前で決着がつくというのもつまらないでしょう?」

時が動き出した。時が止まっているように見えた世界からテオバルトは解放された。

思わず膝をついた。そのまま大魔王を見上げる。

「貴様! 何者だ!」

「そういえば名乗っていませんでしたか。大魔王、大魔王パエリアと言います。以後お見知りおきを。まあ、以後はないですけどね」

「そんなわけはあるまい……大魔王がエルシアから出てくるなどありえん、大魔王はここ千年以上代替わりなどしていない」

魔族国家エルシアの大魔王。幾度か謁見の機会があったためその姿には覚えがある。だがそれは、壮年の男の姿をしていた。このような少女とは似ても似つかない。

「ああ、またその話ですか。めんどくさいです。そのうちそっちの大魔王さんとも話をつけなさいといけませんね。私が大魔王だと言ってるんですからそれでいいじゃないですか」

大魔王は拗ねたように言った。

テオバルトは立ち上がる。この少女が何を言っているのかわからない。それは尽く己の常識に反している。

理解不能だ。ではどうするか? 己の理解が及ばないような存在なら消してしまうしかない。自我を保つにはそうするしかなかった。狂嵐の悪魔ゼトに再度指示を出す。だが何も起こらない。ここに至って最初に少女に対して行使した魔法が、防がれたわけではなく、ただ発動しなかったということに気づいた。

「なぜだ!」

己の支配下の悪魔がその命令に逆らったことなど一度もない。何かがおかしい。この少女が現れてから己の見ている世界が変質していくようだ。

「ああ、できたら西方系の方を使うのはやめておいたほうがいいですよ。西方の方はまず私に逆らいませんし、こちらが引くぐらい従順です。先ほどのテテスさんのように南方系の方がいいと思います。南方の方はいまだに私に逆らって何かと喧嘩売ってきますからね。喜んで戦ってくれるんじゃないですか？」

西方？ 南方？ なんのことだかわからない。悪魔をそのように分類する方法など聞いたこともなかった。

「なんだかわからないって顔ですね。単純なことですよ？ 魔界では同じような気性の方が集まることが多いですからね。地方ごとに固まっているんです。西とか南とかはそのままです。魔界のどの方面にその方達がおられるかということですよ」

テオバルトは悪魔との交渉過程で魔界についてもある程度の知識は得ていた。だがこの少女の知識は自分よりもより奥深いと感じる。それは認めることにした。自分が最強に近い存在だと自負はしているが、絶対の存在である時まで自惚れているわけでもない。

更に警戒度をあげる。ただ未だ相手は何もしてこない。その為その脅威をどの程度と判断すればいいのか、まだ確証がつかめない。だが今までで最強の存在だと仮定することに決めた。

この場で使用できる最大の魔法を考える。大規模な儀式や設備がいらず、即座に発動出来るなかで最強の魔法。一つ思い浮かんだ。星落とし。

天を彷徨う、小さな星を引きずり落とし敵にぶつける。小さいと

はいつてもそれは直径1kmを超える質量の塊だ。サイズによって威力は増減するが、直撃すれば首都といえども壊滅は間違いなく、国ですら危うい。

テオバルトは即座にそれを発動した。人間の営みになど興味はない。この程度の国がどうなるかと知ったことではなかった。

テオバルトは大魔王を見た。つまらなさそうにしている。暇を持て余しているようだった。

「やっぱり魔法なんてつまらないですよ。手が尽きたということなら終わらせませすけどいいですか？」

「その余裕も終わりだ」

テオバルトが無表情で言い放つ。先ほどまでの混乱はなりを潜めていた。最強に類する魔法の発動により勝算を得た。発動さえしてしまえば、後はただの大質量をぶつけるだけの攻撃だ。どれほどの魔法を使えようと今更この魔法を止めることはできない。それは発動したテオバルトにすら無理な話だ。

テオバルトの知る限りこの規模の物理攻撃を防ぐことの出来る魔法は皆無だ。

大魔王が何かに気づいたのか空を見上げた。龍の月と満点の星々。雨雲は既に去り眩しいほどに輝いている。そこに赤い点が一つ現われた。赤熱化した直径10kmの鉾石の塊。小隕石^{メテオ}。それは真っ直ぐに大魔王を目掛けてやってきていた。もちろんその被害は大魔王だけに留まるものではない。周囲一帯が壊滅するのはもちろん、激突時に発生する土砂は大気中に巻き上げられ百年単位で空を覆うだろう。それは陽の光を遮り寒冷の時代をもたらす。

「はあ、なんでこう面倒くさいことをするんでしょうか。人の迷惑を考えてくださいよ」

テオバルトは隕石の直撃の寸前に逃げ去るつもりだった。この場においてはテオバルトといえども無事ではいられない。直接攻撃を反射する魔術もこの規模の質量の直撃には耐えられない。

大魔王はテオバルトなど、どうでもいいようでゴミの山を漁り始めた。ごそごそとやっていたかと思うと何かを取り出す。

ずるりと引き出されたそれは金属の塊だった。アイロンストープと呼ばれるものだ。複数のアイロンを同時に熱するための設備で一抱えほどもある。

それを空めがけて投げた。下手投げだ。無造作にひきずるように持っていたアイロンストープを軽くぶん投げた。一切重さを感じさせない動きだ。大魔王を見ていると、重量や硬度に関する感覚が狂ってくるようだった。

テオバルトは無意識にそれを目で追ってしまった。

目視出来るほどの大きさになっていた赤熱化した塊は、テオバルトが見ている前で、ふっとその姿を消した。砕かれたのか、弾かれたのかそれはわからなかった。

「大体ですね、人の力を使って何かしようというのがいただけません。魔法使いなんて言っても自分で何もしていないじゃないですか」

大魔王は何事もなかったかのようにテオバルトに語りかけてきた。

「一々対応するのめんどくさいので、周りを巻き込むようなのはやめてもらいたいですね。他に私だけに効くような攻撃はないんですか？」

大魔王は本当に面倒くさそうにそう言った。

テオバルトは空の彼方を見たままだった。その衝撃は時の止まった世界で話しかけられた時以上だ。あれはまだ分かる。相手も同じような魔法を使ってきたとすれば、あの状況はありえる。大魔王の

悪戯によつて必要以上に驚愕したが今考えれば同じ程度の実力者同士であればありえたのだ。

だが、これはどうしたことか？ 星を砕いたにせよ、弾いたにせよそれは小隕石の質量に打ち勝つたということだ。それ程の魔法が存在するというのか？ テオバルトにはわからなかった。心当たりはある。星落としが最強の魔法というわけではない。ただそれらには儀式や設備が必要だ。より強力な悪魔を使役する為の準備を必要とする。

少女は特に何をしたようにも見えなかった。魔法を使ったようにも見えない。ただ何かの塊を投げつけただけだった。

ここまでくればテオバルトにもわかった。この少女は常識の埒外、とても今のままで適う相手ではないということがだ。そう、今のままでは。何も諦めたわけではない。負けを認めることなど出来ない。準備が必要だ。一旦仕切り直す必要がある。

テオバルトは大魔王を睨みつける。憤怒の形相。ここまで荒ぶったことはかつてない。必ずこの少女を蹂躪し、跪かせると心に誓った。

「いいだろう、この場は退いてやる」

忸怩たる思いだ。ここまで打ちのめされ、無様な気分になったのはいつ以来か。彼とて最初から最強の大魔導師として君臨していたわけではない。魔法使いとして歩み出してすぐの頃は何度も死にそうな目にあい、それを乗り越えてきた。

久しぶりのこの感覚をテオバルトは必要なものだと考えた。最近の退屈とすらいえる日常を思えば気概すら湧いてこようというものだ。

テオバルトの姿が掻き消えた。使用回数制限があるため使いあぐねていた高速移動魔法。それを使用した。

「え？ おい！ 大魔王！」

ここまでの戦っているのかそうでないのかよくわからない経緯を見ていたアルは叫んだ。これは不味い。逃げられてしまえば、今度いつ何時やってこられるかわからない。これからもその恐怖に怯えながら暮らすことになる。

「まあまあ、アルさん、これは私の戦いなんですから口出しは無用ですよ？」

大魔王はいつものように可憐に笑った。

そこは第一魔族領と呼ばれる地域のすぐ側だ。巨大な城がある。

第一魔族領の発生ともに廃棄された元王城だ。

周囲には城下街が広がっている。この城下街の半分程は魔族領の圏内だ。そこには魔族が生息している。

王城のすぐそば、魔族領圏外の城下街はどれほどの年月が経っているのかわからないがとうの昔に朽ち果てていた。

魔族は基本的には魔族領から出てこないとはいえ、目と鼻の先にある王城については何度も占領を試みていた。

だが、それは一人の人間によってことごとく退けられた。

大魔導師テオバルト、この男の手によってだ。現在では魔族とは同盟関係にある。魔族側もこの人間離れした大魔導師と敵対するより協力関係にあったほうが都合がいいと判断したためだ。元々人間側の立場かどうか怪しいテオバルトはあっさり魔族側についた。テオバルトは廃棄されたこの城を居城として使用している。

元々そう大した城でもなかったが、幾重にも重ねられた魔導的改良により異形の城と化している。無秩序に増築された城は歪で巨大な姿をしていた。

この城は魔族に対するためにこのような姿になったわけではない。目的は別のところにあった。テオバルトに敵対する7人の魔女。その襲撃から身を守り、撃退するためだ。その目的は4人の魔女を打ち倒した時点で半ば達成されていた。魔女たちもそれ以来沈黙している。7人で無理だったものを3人で襲撃したところで結果は目に見えているためだ。

テオバルトはその城の門前に現れた。高速移動魔法はどれほど早かるうが空間転移のようなものではない。建物内には入れなかった。自らの居城を見上げる。数千年をかけて改良に改良を重ねた伏魔殿。久々にその全機能を稼働させようと考えた。

「面白いですね。こういうの好きですよ。あなたを倒したら私のものということでもいいですよね？」

まさか、という思いとやはりという思いが半々だ。今日何度目の衝撃か。テオバルトはゆっくりと振り向いた。

大魔王が城を見上げている。天高くそびえる尖塔を追うように見上げていき、そり返りそうになっている。どこか楽しげだった。

「貴様……どうやってここに……」

思ったことがそのまま口に出た。取り繕うことも出来ない。

「知らなかったんですか？ 大魔王からは逃げられないんですよ？」

大魔王は当たり前のようにそう言った。

14話 光

「逃げられて追いかけてきたというのが正確な所ですが、場所を変えていただけるならありがたいと思ひまして便乗してみました。でも、本当に逃さないでおこうと思つたら出来たんですよ?」

テオバルトの形容しがたい表情を非難と捉えたのか、少し言い訳がましく大魔王が言った。

城門と城壁の間はちよつとした庭園になつている。月の光が異様な庭園を照らし出していた。

草花の類はあまりないがそれなりに手入れが行われている様子が見受けられる。異様なのは庭園の各所に設置された彫像だ。ほとんどが人の姿で苦悶の表情を浮かべていた。生きていた人間をそのまま固めたかのような生々しいオブジェだ。正面から乗り込んで来たものはこの異様な雰囲気に恐れをなすことだろう。

大魔王は見あげるのには飽きたのか庭園を見渡していた。テオバルトは少しずつ後ずさり距離を取ろうとしている。

テオバルトの帰還を察知したのか城が動きを見せた。

この城は土台となつている部分は、古い時代の物で石造りの砦のような武骨なものだ。その上に無秩序に増築された部分がついている。その増築部分に設置されていた彫像が動き出した。人と蝙蝠を混ぜあわせたような醜悪な容姿の怪物。ガーゴイルと呼ばれる魔導人形だ。それらが一斉に飛び立つと、テオバルトと大魔王の間に降り立つ。

それに呼応するかのように重厚な木製の城門も内側へと開きだし、中からは全身を甲冑で固めた兵士達が現われた。テオバルトを囲むように布陣する。

ガーゴイルの一体が大魔王に襲いかかる。突進してくると鋭い鉤爪を大魔王の顔目掛けて振り下ろした。

大魔王はその鉤爪を受け止めると、ガーゴイルをつかんだまま水平になぎ払う。石が砕け散る音が連続して発生し、ほとんどのガーゴイルが破壊されていた。大魔王の右手には、ガーゴイルの肘から先だけが残っている。

ガーゴイルの破砕で発生した破片はまわりの彫像をも巻き込んで庭園を瓦礫の山へと変えていた。

テオバルトはそのすきに兵士たちと共に城内へと逃げ去っている。大魔王はそれを見逃した。何かをするためにここまでやってきたのだろうから、それを見ずにここで決着をつけてしまうのもつまらないうちだ。

大魔王はガーゴイルの腕を捨てると城門へとゆっくり歩き出した。

「ちよつとちよつと！」

若い女の声が聞こえた。大魔王はその声の方を見る。城門手前にある一体の彫像からその声はしていた。

「こんばんは」

女の彫像だ。他と比べると穏やかな顔をしており、三角帽子にマントとおとぎ話に出てくる魔女のような姿だ。

大魔王は丁寧挨拶をする。

「はい、こんばんは。ついでいやあ、人と会ったの何年ぶり？ 10

0年以上ここにいると思うけどめったに人こないからねえ」

「ここで何をされているんですか？」

「見てわかんない？」

「修行？」

「どんな苦行よ、それ。なんで100年以上ここでつたつたってなきやいけないのよ。あいつよ、あいつ。テオバルトに石にされたの」

「石になりたいとは変わった趣味ですね」

「だから、好きでやってんじゃないって。あいつがたまに襲ってくるやつらを石に変えてこの庭に放置してんのよ。悪趣味だよねえ」

「ああ、ではこの彫像はみなさんそういう方ですか？ だとしたら悪いことをしましたね。大半壊してしまいました」

大魔王はあたりを見回した。ガーゴイルをなぎはらった際にあたりの彫像も巻き添えを食らって半壊している。

「大丈夫、大丈夫。私以外はみんな死んでるようなもんだし。私は魔女だからね。こうやって何とか意識も保ってるし話ぐらいは出来るってわけ」

「そうでしたか。それは退屈そうですね」

「もう死ぬほど退屈だった！ ああ、それはそうと何しに来たの？もしかしてテオバルトやりに来た？」

「多分そうですね」

曖昧だがそう答えた。大魔王の中では殺すかどうかはまだ決まっていなかった。

「そっかあ、でもやめといたほうがいいと思うよ？ 私ら魔女7人がかりでも駄目だったし。そりゃ倒してくれるなら私も元に戻るし嬉しいけどさあ」

「戻りたいんですか？」

「そりゃそうですね！ なんでこんなところでずっと固まってなきやいけないのよ！」

「じゃあ戻しましょう」

べたん、と魔女が転けた。

「はあ？」

いきなり地面に顔をぶつけた魔女は何がなんだかわからない。気づけば身体が動く。灰色だった体色が色を取り戻していた。

体を起こし、その場にへたり込んだ。呆然と大魔王を見上げる。手を開け閉めし、肩を回し動きを確認する。特に問題なく何事もないかのように普通に動いた。

「え？ え？ 何が起こったん？」

「石化していた方とあなたのリンクを切断しました」

「うそ！ そんなんでできるの？」

「うそじゃないですよ」

魔女は信じられないという顔をしながら立ち上がった。大魔王より頭一つ分背が低い。黒い三角帽子に、黒いマント。本人の申告がなくとも魔女のイメージだ。

「えーと、ありがとう」

「いえいえ、たいしたことはしていませんよ」

魔女は手を差し出した。大魔王はそれを握り返し握手を行った。

「あんたも魔女？ 私が石になってる間に増えた？」

「大魔王ですよ」

「うわあ、大きく出たねえ。それがあんたの二つ名？ まあ、私の妖炎の美姫つてのもひどいと思うけどさあ。あ、私はロベルティーンって言うの。よろしくね」

「はい、私はパエリアと言います」

「でさ、テオバルトやるってマジ？」

「マジ、ですよ」

マジという言い方が気に入ったのか、大魔王はそこに特に力を入れて言った。

「そつかあ、石化解除とか出来ちゃうんだから行けるのかもねえ。

……よし！ 私も一緒に行くよ！ 中を案内したげる！」

「中をご存じなんですか？」

「まあね。元々この城は3階建てなんだけど、その上に10階分増築されてて全部で13階。で、まあ10階ぐらいまでは攻め込んだかな」

「そう言えば7人おられるとか聞きましたが」

「そうそう、7人でね。何回も襲撃かけたんだけどね。何百年前だったかかなり本気で攻め込んだのよ。その時に10階まで行っただけどさ、3人やられちゃったの。で、3人はそれ見て逃げちゃった。で！ 私はそれでもやられた3人を見捨てられなくて、孤軍奮闘、獅子奮迅の活躍を……って、おい、一人で勝手に行くなあ。あんたが聞いたんだらうが！」

大魔王は一人、城門へと歩いていった。

ロベルティーネがその後を慌てて追う。

「ああ、話が長そうでしたので」

「いやいや、ちゃんと聞いてよ」

「それでそのやられた3人の方はどうされたんですか？ この庭におられるんですか？」

「さあねえ。ここにはいないみたい。まあ、あいつらは、むちむちっ！ って感じだったし、なんかエロいことでもされてんじゃないの？」

大魔王がロベルティーネを見る。平坦な体だ。憐れみの表情を浮

かべそつとロベルティーネの肩に手を置いた。

「大丈夫です。そのうちあなたもエロいことをされるようになりま
す」

「されたくないって！　つか、私の身体はずっとこんな感じだよ！
憐れむな！　同情すんな！」

そんな会話を繰り返しながら二人は城内へと足を踏み入れた。

ロベルティーネが言うように3階までは石造りの古式の城の作り
で特に何事もなかった。

4階への階段。その前に二人はいる。

「こつからが本番でわけよ。あいつの悪趣味なテーマパークってや
っ？」

そんな説明を聞いているのかいないのか、大魔王はあっさりと4
階へと登った。

4階からは周囲の雰囲気が一変している。床や壁が黒く艶やかだ。
天井も高く通路も広い。

「この階はここを真っすぐ行くと広間になってるぐらいかな。そこ
に敵さんがわんさかいるって感じ」

「そうですね。では行きましょうか」

二人は長い通路を歩き出した。通路には一定間隔で明かりが灯っ

ている。窓はないがそれなりの明るさが保たれていた。

やがてロベルティーネが言うところの広間に出る。

そこにいたのは巨人だった。巨大な金属の塊。2階建ての民家ぐらいの背丈がある。それが10体以上。広間を埋め尽くしてる。

「こりや凄いな。あいつも本気じゃん。アイアンゴーレム？ いや鉄じゃないのかな？ 光沢があるような」

「この方たちはずっとここにいるのでしょうか？ あんなにいと立ったりしゃがんだりぐらいしかできないんじゃないですか？」

「別に意思とかはないんじゃないの？ 入ってきた敵に襲いかかるぐらいで、って言うてるそばから入ってかないで！」

大魔王が広間に足を踏み入れた途端、巨大な拳が振り下ろされた。その影は大魔王をすっかり覆うほどの大きさだ。ロベルティーネは惨劇の予感に思わず目を閉じた。

だがその後を訪れると予想した床に叩きつけられる轟音は聞こえてこない。ゆっくりと目を開くと片手を上げ、巨大な拳を抑えている大魔王の姿があった。

「へ？」

ロベルティーネは間抜けな声を出した。だがただ見ているだけでは案内を勝手出た意味もない。ロベルティーネは叫んだ。

「ゴーレムの弱点は額の文字！ それを削るの！」

「そうですか」

大魔王の手がゴーレムの中指にみしりとめり込む。掴むには巨大だったので、適当に持ち手を作った状態だ。それをそのまま振り回した。庭園でガーゴイルに対してやったのと同じだ。ただ規模が違

った。

鉦石で出来たゴーレム達が次々と黒光りする壁に激突する。城が揺れる。それは壁とゴーレム双方にダメージを与えた。ゴーレムは半壊し、壁は砕け外の光景が見えた。

大魔王は倒れ動かなくなったゴーレムの頭へと近づき額の文字を確認する。掌を当て真下へと力を込めた。ゴーレムの頭部が粉微塵になりその動きを完全に停止する。

「おお！ 確かに止まりましたよ！ 面白いですね！」

大魔王がはしゃいでいる。ロベルティーネは呆れたようにそれを見つつ言った。

「ああ、いや、それ削るとかじゃなくてただ壊してるだけだと思う……」

その後もただ大魔王がゴーレムを壊していくのをロベルティーネは見続けた。人形遊び。そう思えた。それもままごとに乱入してきた弟のような所業に思えた。

ひと通り壊し終えた大魔王は広間の奥へと向かうと5階への階段を登り始めた。ロベルティーネもそれに続く。

「5階以降は迷路って感じかな。て、おおい、先先進まないでよ、もう！」

大魔王は進んだ先で高速で飛来する髑髏を蹴り返していた。カタカタと口を開きながら、着弾の際に哀れな獲物の肉を噛み千切つてやるうとするその異様な弾丸は大魔王の蹴りと手刀に粉碎されて行く。いくつかはその軌道を代え、壁、床、天井に激突していた。

廊下の端にある砲台からそれは発射されている。それを操るのは

骸骨の兵士たち。自らの頭部を砲台に込め次々と発射していく。

やがて全弾を撃ち尽くした砲台は沈黙した。骸骨の兵士たちはそれ以外のことは出来ないのか、首のない状態でただ、たたずんでいた。

大魔王は前方を見た。砲台のある通路の端までの間には十字路が数十ある。迷路になっているということだろう。どこを行けばいいのか。それはまるでわからない。

大魔王は腕を組み、あごに手をやった。何か考えているらしい。少しして考えがまとまったのか、その右手を上げ掌を上へと向けた。

ロベルティーネは嫌な予感に叫んだ。

「ストーツぷ！ ねえ、今何しようとしてんの？」

「迷路とかめんどくさそうなので、もうここから上、全部吹き飛ばそうかと思ひまして」

「やめてえ！ それはやめて、お願い！」

ロベルティーネは大魔王にすがりついた。それはまずい。とても困る。

「そうですね。何かすごく必死な感じなのでやめようかとは思いますが、何か理由があるのですか？」

「神獣！ もふもふ！ 私らがテオバルトと争ってたのは神獣のせいなの。それ奪い合ってるの！」

「なるほど。その方が上層階にいらっしやると？」

「そう、そうなの！ だから全部吹っ飛ばすとかそーゆーのはやめて！ 迷路の抜け方は知ってるから！ ちゃんと案内するから！」

「わかりました。もふもふにはあまり興味がないんですが、何か大事そうなのでやめておきます」

ロベルティーネはほつと胸をなで下ろす。何をする気かはわからなかったが、このまま放っておいたらその言葉どおりになっていたのだろう。

「こつち。ついてきて」

ロベルティーネが先導する。言うように迷路の構造は把握していられない。以前に辿りついた10階層以上も下調べはしていたようだ。迷いなく進み13階層、最上階へと辿りついた。途中、敵や罠は幾度か現われたのだが、鎧袖一触を文字通りに体現する大魔王の前には何の障害にもなっていなかった。

ただそんな事はテオバルトもわかっていた。彼らがやっていたのは時間稼ぎ。大規模な儀式が完成するまでに少しでも足止めになればいいというものだった。そしてその心もとない目論見は辛うじて達成された。儀式は成功したのだ。

ロベルティーネは13階層へと辿りついた時、満天の星空と龍の月の明るさに屋外へ出てきたのかと勘違いした。

最上階はほとんど何も無い巨大な空間だった。空はよく見れば微妙ながら星明りに歪みを感じることが出来る。ガラス状の物質で天井全体が構築されていた。複雑な面で構成された円蓋は星々と月の光を一点に集め、巨大な円陣の中心を照らしている。

その円陣の中心、その一身に光を浴びてテオバルトは立っていた。テオバルトの表情には余裕がまるでない。鬼気迫るものだった。その右目は眼窩を晒している。魔器である眼球は抉り取られていた。

「気づかれたのですか？」

大魔王が床に捨て去られた眼球を見て訊ねた。他にもいくつか血糊のベツタリとついた拳大の石のようなものも見受けられた。これらは全て魔器だ。

「そつだ。貴様……魔器に接続できるのだな」

「はい。あなたを初めて見た時びっくりしました。ここまで脆弱性をむき出しにしてこれまで生きてこられたとは驚きです。そのままでしたら、自決してください、とでも命令するつもりでしたが」

魔器を通じて悪魔へ指示を出す。魔法の基本だ。その際当然、悪魔側は魔器へと接続しその指示を受け取っている。当然それが魔法防御などで妨害されるわけがない。体内に内蔵してしまつたら尚更だ。大魔王はその経路を通じて安々と魔力をテオバルトへと行使することが出来た。

「……悪魔か。肉体をもつたまま人間界に現れるなどは……それとも傀儡か？」

「傀儡扱いは心外ですね。これは生身の私自身の身体ですよ？」

テオバルトは杖を両手で構え前方へと突き出した。魔法使いとして最初期から使い続けている最後に残された魔器だ。

詠唱が始まった。テオバルト自身が呪文を唱えたのはいつ以来か。それは巨大な空間に朗々と響き渡った。

「ち、ちよつとヤバイよ！ あれ止めないと！ つか私どうしたらいいの？」

「側にいてもらってかまいませんよ？」

ロベルティーネが大魔王に食ってかかる。

「いやいや、そんなのんきにしてる場合じゃないって！ あれマズイよ？ あれは魔界の3魔王、炎王ザミイ、蛇王バグラス、雷王ゾネの力を一気に開放するつもりなの！ 魔王って言っても魔族領にいるようなのじゃないよ？ 魔界の本物の魔王の力！ あいつ、魔王と契約してんの！ マジ化物なんだって！」

「魔王ですか？」

「そう！ 魔王と契約できたのは人間ではあいつだけ！ あんた一体なにやってあいつあそこまで怒らせてんの！ 一体の力でもこちら一帯、更地になっちゃうよ！ 3体同時なら大陸が消し飛ぶかも！」

「それは困りますね」

全く困っていそうには見えなかった。いや、困つていると言えば困っているのだが、その表情があまりに場違いだったためロベルティーネは呆然とした。大魔王は恥じらいの表情を浮かべていた。

「ちょ、ちよつと！ あんた何照れてんの！ なにも褒めてないよ！」

「うーん、これは……あの方も中々やりますね。最後に私に一矢報いることが出来たということでしょうか？」

「はあ？ 意味分かんないんだけど！」

「まあまあ、もうすぐ終わるみたいですから」

テオバルトの詠唱が終わった。

何も起こらなかった。

大魔王以外の二人はその結果に言葉もでない。この詠唱は暗号化されていない。これはテオバルトのみが契約している悪魔に対してのもののため、わざわざそんなことをする必要がなく、妨害出来る

魔法も知られていないためだ。

それ故ロベルティーネは魔法の詳細を把握出来た。意味のわからない単語も多いが、それらは定型文として大体パターンが決まっている。どのような結果が現出するかがありありと想像が出来た。詠唱に間違いはなく、儀式の手順や円陣の構築にも不備は見られない。発動しないわけがなかった。

テオバルトはその場にくずれ落ちた。膝をつき、うつむいている。

「なぜだ？」

そこには感情は見られなかった。ただつぶやいただけだ。

「褒め殺しというのは中々効きますね。すごく恥ずかしい感じですよ、なにかむずがゆいものを感じました。さすがこんなお城を持っているだけのことはありますね。あなたお名前はなんと言いましたっけ？」

テオバルトは答えない。一向に応える気配がなかったため大魔王はロベルティーネを見た。

「え？ あんたこいつの名前知らなかったの？ テオバルトってんだけど」

「ああ確かにそう呼ばれていましたね」

大魔王はテオバルトの名前を思い出した。今までの会話で出てきたような気がした。

「テオバルトさん、何か納得がいかないといった様子ですね」

テオバルトは応えない。いまだ自らの内に潜り込んでいる。

「私の名前は、パエリアと自己紹介させて頂きましたが、本名はもっと長いんです。パエリア・グネル・ガンボア・マカレナ・シエブROOM・スタゴリア……と、まあ全部言つと大変ですので端折りますが、前から513番目がザミイで、634番目がバグラス、713番目がゾネと言います……お分かりですか？」

テオバルトにはわからない。聞こえてはいたが意味がよく理解出来ない。

「魔界には名前について人間とはまた違う慣習がありまして、倒した相手の名前が後ろについていくんです。ですのであなたは先程から、私に魔法の使用許可を取っていたという次第です。しかしあそこまで持ちあげなくてもいいんじゃないんですか？ さすがに恥ずかしくなって来ました。ゾネさんは女は褒められて美しくなるとおっしゃってましたけど……」

テオバルトがのろのろと顔をあげ大魔王を見た。一気に老け込んだようにも見える。

「普段は魔王への魔術行使の依頼はそれぞれに委託しているので私は関係ないんですが、あの方達今回は何か面白がつて私に中継してきました。あなたやつぱりおっぱいに並々ならぬ愛情を注いでるんでしょうか。なにか私の胸の美しさをこれでもかと讃えておられましたか？」

「ふ、ふざけるな！ こ、この私が！ 4千年を生きたこの私が！ 魔の真髓を極めたこの私が！ 貴様などに！ 貴様などに！」

「4千年ですか。私は十数年しか生きていませんが……あなたが4千年頑張つてこの程度ということでしたら随分と無駄な時をお過ごしになったんですね」

大魔王が優しく微笑む。ロベルティーネはそれを見て随分とえげつないと思った。ここまでの短い道中、のんびりとやってきたがさすがに大魔王を名乗るだけのことはあると思った。

この言葉は大魔王の思惑通りに、テオバルトの心を折った。

「さて、これ以上何か出てくることはないですよね？ でしたら…
…どうします？ 人間はあまり殺さないようにしているんです。でも今回はアルさんの件がありますからね、今後手を出せないようにはさせてもらいますけど。ふふっ、大魔王の呪い。受けてみます？
「殺せ」

それがテオバルトの最後の矜持だった。このままおめおめと生き永らえることなど出来なかった。この先何千年生きようとこの存在にはかなわない。それが身にしみてわかった。

「……お前は……結局魔法らしい魔法を見せなかったな。ならば…
…」
「魔法が見たいですか？ そうですね。では私のお気に入りの魔法をお見せしましょう」

大魔王がテオバルトのそばに寄ると襟元を掴んだ。

「ちょっと地上で使うには不向きなのでこんなやり方になりますか」

大魔王がテオバルトを真上に向けて投げた。

テオバルトがプリズムとなっている円蓋を突き破りはるか彼方へと飛翔していく。砕かれた破片が星明りを反射しキラキラと輝いていた。

ロベルティーネは今までの確執を忘れ宙に行くテオバルトを美し

いとすら思う。これから確実に訪れる悲劇の予感も合わさってかとも幻想的に見えた。

空を飛び続けたテオバルトは少しずつその速度を落としやがて静止する。そこから先は重力に引かれ下降に転じるのみだ。

大魔王が空を見上げ、右手を掌を上にして上げた。

「フォトンボルト
光子魚雷」

大魔王がつぶやくように言う。光が立ち上った。

大魔王の手から生み出されたその熱量は収束し、天を駆ける。その光は直線上のガラスを、大気を焼き尽くすついでのようにテオバルトを消滅させた。

ロベルティーネはただ空を見上げあつげにとられている。気のせいだとは思うが龍の月の腕が欠けているように見えた。龍が身をよじっている様に見えるのは気のせいだと思いたい。

「名前がお気に入りなのです。トウで入った気合がピドで抜けるような感じがいいと思いませんか？」

「……えーと、大魔王……さんでしたっけ？」

「はい」

「今のは一体……」

「もう少し派手な方がよかったですでしょうか？ 1kg程、重水素を対消滅させるといってお手軽な技だったんですが」

「ジユウスイソ？ ツイシヨウメツ？ それは魔界語でございますでしょうか、大魔王様」

「そうですね。魔界でも一部地方で使われる言葉ですね。ところで、何か話し方が違うような気がするんですが」

大魔王が小首をかしげる。ロベルティーネは慌てて両手を前にだし振りながら答えた。

「いえいえ、めっそもございません」

「そうですか？　ところでお仲間やもふもふの方は探さなくていいんですか？」

「あ！」

「この階には何もなさそうですから、下の階でしょうか」

テオバルトの消滅により、城は全機能を停止していた。その為探索は簡単だったが魔女は見つからなかった。

「まあ、魔女つつつてもさ、別にそんなにつるんでるってわけでもないのよ。普段はそんなに交流もないしねえ。でも、なんかさみんな神獣好きみたいなのよ、で、テオバルトにさらわれた神獣を助けるために一致団結したってわけ。だからまあ、見つからないならそれはそれで仕方ないね」

結局ロベルティーネの話し方は元に戻っていた。取り繕っていてもすぐに地が出る性質らしい。

「で、この子よ。この子」

ひよこだった。背丈がロベルティーネと同じぐらいの巨大ひよこだった。

「ぴよ！」

神獣は大きめの部屋を与えられそこでなに不自由なく暮らしていたらしい。特に虐げられていた様子はなかった。

ひよこに家具は必要ないのだろう。端に机がおいてある以外にはなにもない部屋だった。

ロベルティーネはひよこに飛びつくと羽毛に顔をうずめ頬ずりする。ひよこもおとなしいものでされるがままになっていた。人なつっこい性格らしい。

大魔王は机の上にあるものが気になったのでそれを手にした。

ひよちゃん観察日記と書いてある冊子だ。ひよちゃんと名付けられていたらしい。ぱらぱらとめくってみる。

絵日記のようだった。子供の字と絵で小さな女の子がひよここと戯れる様子がそこにはつづられていた。

ひと通り目を通すと絵日記を机の上に戻しひよこを見た。そこには絵日記に書かれていたような光景がロベルティーネにより再現されていた。

「美味しそうですね」

「ぎゃーやめてー！ この子は食べ物じゃないー！」

ロベルティーネは食材を見る目の大魔王と、神獣の間に両手を大きく開いて立ちはだかった。

「ふふつ、冗談です。ひよこは食べませんよ。……ところでこの方は、成長すると大きな鶏になるんでしょうか？」

ロベルティーネは大魔王の目を覗き込む。

これは……鶏になったら食べたいなあ、という目だ！

「ううん！ この子はずっとこのまんま！ 神獣だからね！」

成長するとどうなるかなど知らなかったがでまかせを言った。

「そうですね」

大魔王が残念そうな表情を浮かべた。諦めたらしい。

「では私は帰ることにします。あなたはどうされるんですか？」

「うーん、とりあえずしばらくはここにしようかと思うんだけど…
…100年以上経つちゃってるし、今更うちに帰ってもねえ。あ、
ここって大魔王さんのものってことになるの？」

「そうなりますね。でも別にここにいてももらっても構いませんよ。
ところで…ここからベイヤーに戻るにはどちらに行けばいいです
か？」

ロベルティーネは大魔王が飛んでやってくるのを見ていたので、
てっきり同じように飛んでいくのかと思ったがなにかこだわりがあ
るらしい。

大魔王はマテウ国の西の端から1週間以上をかけて徒歩で帰った。

15話 その後

キャシー宅の裏庭。アルは日課となっている練習を早朝から行なっていた。

すでにゴミの山は片付いている

テオバルトの襲撃から一週間程が過ぎた。街は平穏を取り戻している。

アル達はあれからひどいありさまでキャシー宅へと戻ったが、ゴミ捨てるだけで時間かかりすぎじゃないか？ と軽く嫌味を言われただけだった。

一週間をかけてキャシー宅の掃除を行い完了させた。仕事は終了している。だが旅立つまでいいといわれその好意に甘えていた。

「おはようございます」

大魔王があらわれた。

「おはよう。ここでまた会えると思ってたよ」

アルが練習をやめ挨拶を返す。

「心配はしてくれなかったんですか？　もしかしたらもう2度と会えなかったのかもしれないよ」

「ないだろ。それは。あいつはどうなった？」

「消滅しました」

アルは聞いてはみたものの特になんとも思わなかった。もつと喪失感のようなものが生まれるかと思っていたが、出てきたのは「そうか」ぐらいのそっけないものだった。

あまりに自分に関係ない所で話が進んでいたせいかもしれない。

「ありがとう」

「お礼を言われるのはおかしいですよ？ 借りだと言ったはずですが？」

「ああ、そうだね。いつか返してもらおうよ」

そんな時がくるのか？ とも思う。大魔王をじっと見た。この大魔王が苦戦するような敵。想像が出来なかった。

「体で返せとおっしゃるんですか？」

アルの視線をどうとらえたのか大魔王がみずからを抱きしめ後ずさった。冗談だろうが、アルは少しドキッとした。

リーリアを見慣れたせいかさう思わなかったが、意外に大魔王も胸あるな……。

アルは周囲を見渡した。こういう時にリーリアがやってきそうな気がした。

「何かおさがしで？」

「いや、なんでもない」

あらためて大魔王を見る。確かに美しいがそれほど強いようにはまるで見えない。だがテオバルトを終始圧倒していたし消滅させたという。その底しれなさに寒気がするような思いもあるが、それならばと聞いてみた。

「なあ大魔王。リーリアが不完全な状態で生きているのはわかって

ると思うんだけどなんとか元に戻す方法はないか？」

大魔王は常識外の力を持っている。ならば何か知っているかもしれないし、あわよくば大魔王の力で元に戻すことが出来るかもしれない。

「リーリアさんをですか？ ……私では無理ですね。方法もわかりません。私の力は破壊一辺倒ですし、怪我を治してくれる方にも心あたりはありますが、死んでしまっていると無理ですし」

「そうか、それは自分で探すことにするよ」

「お役に立てなくて申し訳ありません」

大魔王でも無理となると厳しいのか？ とも思うが世の中は広い何かあるかもしれないと前向きに考えることにした。

旅に出てその何かを探す。アルの当面の目標だ。

「大魔王、魔法を教えてくださいませんか？」

リーリアを元に戻す方法として考えたうちの一つがアルの能力の成長だ。それにより可能になるかもしれない。自分の能力が魔法のようなものだとはわかって来たが詳細はわかっていない。

大魔王を名乗るぐらいだ。魔法には詳しいんじゃないかと思いたずねてみた。

「私に魔法を教わる。それは正しいとも間違っているとも言えますね」

「どついう意味だ？」

「正しいというのは、私は魔界で最強ですから当然魔法も最強なのです。ですので私から教わるというのは最強へ近づくには良い手だと思います」

臆面も無く最強と言ったのけた。事実大魔王には自らが最強であるという思いにまったくゆらぐ所はない。

「間違いというのは、アルさんではまだ無理だということですよ」

「無理？」

「そうですね、実際にお見せしましょう」

大魔王の腕が肩口から一つ増えた。黒い腕だ。それはアルの魔術視覚野に映し出された。

「これが魔力肢です。今のアルさんには見えていると思いますが」

「ああ」

その黒い腕が伸び、庭に落ちている石をひとつ取り上げた。はたから見れば、石が浮いているように見えるだろう。

「魔力肢は対象の構成要素を分析し状態を変化させます。このように」

石が崩れ落ち跡形もなくなった。

「アルさんもやってみてください」

「僕がか？ まあやってみるよ」

説明の一環として意味があるのだと思い従うことにした。右手で落ちている石を拾い、左手から大魔王がいうところの魔力肢を出す。それ自体は一度出来ていたので簡単に出来た。だがそれは随分と貧弱なものに見えた。腕などといえる程のものでもない。黒い糸のようなものだった。それを石に伸ばす。そこでアルはどうしていいか

わからなくなつた。

「どうです？ 魔力肢が触れた物質の状態がわかりますか？」

「わからない……何かある。ぐらいしか」

「それが解像度、粒度の違いですね。物質のもつと細かい単位で操作出来ないと魔法は無理です。ああ、落ち込まないでくださいね。そのうち出来るようになると思いますよ」

アルにはまるでイメージが出来なかったが、出来るようになると言われたのでそういうものかと思つた。

「それだけだと私が意地悪言つてるだけみたいですね。ではいいことを教えてあげましょう！」

大魔王がそのいいことを思いついたのか、いい笑顔でアルを見た。

「今のアルさんには細かな魔力操作は無理です。ですが、それで敵の魔法を妨害することが可能ですよ」

「どういうことだ？」

「アルさんの魔力肢を敵の魔力にぶつけて適当に魔力を発動させればいいのです。細かな操作はいりません。相手の魔法をぐちゃぐちゃにしてしまえばいいのです。それだけで相手は魔法を使えなくなります」

「そんなことでいいのか？」

「ええ、人間で魔力肢を使える方は少ないでしょうから、魔法使い相手なら無敵ですよ！ よかつたですね！」

「なるほど、使い勝手がよさそうだ。練習してみるよ」

「頑張ってください。熟練するには実践あるのみです」

テオバルトがどうなったか、その結果を伝えにくるのが目的だっ

た大魔王はアルの質問が終わったとみると去っていった。
残されたアルは練習を再開した。

「あははははははっ」

キャシーの笑い声が朝の食堂に響き渡る。掃除は完了してゴミの山は片付いたため、食事には食堂が使われていた。アルのしかめっ面がツボに嵌ったらしい。

「なぜお前らがここにいる！」

練習を終え朝食を食べにアルは食堂にやってきた。アルは食卓を見ている。一人暮らしにしては大きめだ。来客を想定しているのだろう。

そこには、リーリア、狼、銀髪の少女、キャシーが座っている。

「なんでしょうか、にいさん」

「にいさん！　なんだそれは、いや、待て！　お前と僕は血縁関係にあつたのか？」

「そんなわけないじゃないですか」

銀髪の少女が馬鹿をみるような目でアルを見た。

「じゃあ、なにが、にいさんだ！」

「これはおかしなことを。にいさん、あなたは血縁関係どころか種族すら違う魔族の母親をかあさんと呼んでいたのではありませんか

？ それならば、テオバルト様の実験体であるあなたと私を兄妹ととらえることになんの問題があるというのでしょうか？」

反論できない。いや、だからどうだというような問題だ。アルは矛先を変えた。

「おい、狼！ お前がなんで食卓で、椅子に座ってる！」

「私が主であるリーリア様のそばにいることの何がおかしい！」

「じゃなくて、床でいいだろ！ なんで椅子に座ってご飯食べてるんだ！」

「なぜ私がお前より、下で食事をせねばならんのだ！」

アルはリーリアを見た。リーリアも困り顔だった。どうしていいかわからない。想定外だ。なんだこれは。

「えーと、この子もあの魔法使いに無理強いされてただけで悪い子じゃないと思うんだけど……。ベアくまちゃんもおとなしくしてるし……」

「おとなしい？ これがか？ というか、リーリアが主というのはどういうことだ？ 主は僕じゃないのか？」

「貴様、ふざけているのか！ 私はリーリア様に名をいただいた。

それ故リーリア様が主だ。貴様などただの魔力の供給源にしか過ぎん！」

アルは途方にくれてキャシーを見た。

「どついつことなんですか？」

「どうもごうも……。アル君の妹だという娘と、リーリアちゃんの下僕だというのがやってきたんだ。歓待するだろうか？」

「しなくていいですよ」

アルはつつたつていても仕方が無いので食卓の席についた。頭が痛い。念の為と、魔力視覚野を発動する。3本の黒い線が自分からリーリア、銀髪の少女、狼に伸びていた。思わずため息をつく。既に問題はリーリアだけの事ではなくなっていた。

「お前どうやってここ来たんだ？」

狼はわかる。嗅覚が発達していそうだし匂いをたどって来たのだろう。

「にいさんは馬鹿なんですか？ 私には魔力が見えるんですよ？ これを辿ってきたにきまつているでしょう？」

銀髪の少女の瞳が赤くなり、アルから伸びている頼りない魔力肢を指さした。

「なにしに来た？」

「はあ……にいさん、あなたは私にもう一度死ねと。そうおっしゃるんですか？ 随分と冷たいんですね。こちらの巨乳には随分と甘いようですが、私のようなものはどうでもいいですか。そうですね、流石になんのためらいもなく私のような若い少女の心臓をうちぬくだけのことはありますね。おまけにテオバルト様に突っ込まされて……おかげさまで、動けるようになるのに今までかかりました。ところでこの左腕は修復してもらえるでしょうか？ 利き腕ではないとはいえ、さすがにこれはこれからの活動に支障をきたすと思うのですが」

そう言われると辛い。確かにあの時は敵対していたが、こうやってただ会話をしていると、ただの美少女だ。罪悪感に襲われる。

その姿をよく見てみる。銀髪の少女。前髪は真っ直ぐに切られている。自分で切ったのだろうか、処理が適当だ。後ろ髪などはもつと適当で肩のあたりでざくざくと鋏を入れただけのようだった。

格好はボロ布を巻きつけただけのような姿で、ちよつと前のリーリアを彷彿とさせる。

左腕はそのボロ布が巻きつけてあつたが捻くれたまままで痛々しい様子だ。

アルの少女を見る視線に気づいたのか、キャシーが答えた。

「ああ、流石に子供物の服はなくてな。すぐに用意は出来ない。後で買って来てやったらどうだ？」

「髪は私が切つてあげるよ、これ自分で切つたの？」

「余計なお世話です。服は着てあげてもいいです。にいさんなら妹にプレゼントぐらいするでしょう？」

銀髪の少女はリーリアは一言で切つてすて、アルに向き直る。上から目線でたかる気満々だった。

「えーつと、アルくん？」

リーリアが情けない顔でアルを見た。アルは首を横にふる。諦めた。受け入れるしかない。受け入れないならそれは殺すということだ。こつやつて話をしてしまった上で今更それは出来ない。

アルは右手を少女の左腕にそつと添えた。しばらくすると少女の左腕は元のように動くようになっていた。

「おお、そりゃすごい。信じていないわけじゃなかったが目の当たりにするとな」

キャシーがその様子を見て感嘆の声を上げた。

「お前、名前は？」

「ありませんよ」

「は？」

「テオバルト様には、お前としか呼ばれていません。あなたもさつきからそう呼んでいるんです。それでいいんじゃないですか？」

「あ、いや……それは悪かったよ。じゃあ何かないのか？ 自分で付けるとか」

「そうですね、では……にぃさんがアルですのでイルでいいです」

「適當すぎるだろ？」

「あ、だったら私が！」

リーリアが元気よく手を上げた。

「リーリア……君がつけるのだけは勘弁してくれ。いくらこんな奴でもそれは可哀想だ」

リーリアが慥然とした顔をした。納得がいかないらしい。

アルは一応聞いてみた。

「ちなみにどんな名前だ？」

「さるモンキー」

「いくらなんでもひどすぎるー！」

アルとキャシーが珍しく同時に突っ込んだ。銀髪の少女も恐ろしいものを見る目でリーリアを見ている。ベアくまは特に疑問には思わなかったようだ。ペるペると水のはいった皿をなめていた。

「こんなおんな気な顔をしながら、さりげなく私を人間扱いしないで……若干この方に対する認識をあらためないといけませんね……」

「あー、リーリアにそんなつもりは全くない。ネーミングセンスが壊滅的なのだ」

「えー、そうかなー」

リーリアはやはり納得がいかない様子だ。

「しかしなんだな。人が多いと食事も楽しいもんだな」

キャシーが楽しげに言う。

「全然楽しくないですよ！」

「そうか？ 一人の食事など味気ないものだぞ？」

「それはそうかもしれませんが……」

アルは口をにごした。母親と二人で過ごしていた時のことを思うと、楽しくないとも言い切れない。

「しかしあれだな、ハーレムと言うやつだな」

「は？」

アルは聞きなれない言葉を耳にした。なんだそれは？

「なんだ気付いていないのか？ ここにいるのはアル君以外は全員女だ。果報者だな！」

「え……っと、こいつもか？」

アルはベアくまを見た。

「貴様！ 私を雄だと思っていたのか！ ふざけおつて！ 噛み殺すぞ！」

「いや……そう言われても狼の性別なんてわからないよ！」

そんなことで非難されても困るとアルは思った。多分見た目では無理だ。ひっくり返して股間でも見ない限りはわからないだろう。そしてわざわざそんなことをしてまで確認する理由もない。

「え、ごめん、私も男の子だと思って、ベアくまってつけちゃった……」

「ごめん、ベアくまが男の子の名前だつてところからわからない」「リーリア様……」

銀髪の少女はしょんぼりしているベアくまを見た。リーリアの名付けの被害者だ。そう思うと可哀想に思えてきた。おっかなびっくりベアくまに手を伸ばすと頭に手をのせなでた。ベアくまもされるがままになっている。

「話は戻りますが、ハーレムってなんですか？」

「ああ、まあ定義にはいろいろあるのかもしれないが、広義には一人の男が複数の女を囲うようなことを言うな」

「これが……そうなんですか？」

「ああ、死姦、幼女姦、獣姦、熟女姦……よりどりみどりだな！というかこう言つとアル君が凄い変態に聞こえるな！」

キャシーが凄い笑顔で言う。アルは全く笑えなかった。

「それは……私もテオバルト様には様々な虐待を受けてきましたが……そこまではされませんでした。しかし……命を盾にとられ、体の自由までも奪われてしまうような状況では逆らうことも……」

銀髪の少女が椅子ごと後ろに下がる。引いている。不審者を見る

目つきだ。

「いや……それはお前……一応だな私にも番つがいがいてだな、操を立てているのだが……貴様、獣か！ 見境なしか！」

ベアくまが困った末に吠えた。

「アル君……」

リーリアが何か言いたげにアルを見ている。

「お前ら……キャシーさんが勝手なこと言ってるだけだろ？ まに受けるなよ……」

アルは机に突っ伏す。なんなんだこの状況は。対処がたい。

「まあそれは半分冗談としてだな」

キャシーの決まり文句のようだ。アルはそう思う。

「これからどうするんだ？ 掃除はもう終わったし、給金も支払った。ああ、いや別に出て行けと言っているわけじゃないぞ」

「そうですね。とりあえずはリーリアの実家のある街へと行くこと思っています」

「なんだ？ 娘さんを僕にください！ とか言いに行くのか？」

「そんなわけないでしょ」

即答するアルにリーリアが少し落胆したようだが、それには誰も気付いていなかった。

「まあ旅を続けるなら実家の許可もいるかもしれませんが。リーリアを人間に戻す方法を探しに行きますのでリーリアも一緒に来てもらう必要がありますし」

「人間に戻す……か。あてはあるのか？」

「それがまったく。とりあえず旅をして各所で情報収集を行おうと思っっていますが」

「あてならありますよ」

銀髪の少女が言う。

「なに？」

「グラウシエル博士。テオバルト様と共同で研究を行なっていました。カテゴリーR、君臨するものについて造詣の深い方です」

「なんだそれは？」

「詳しい話は端折りますが、現在カテゴリーRは5名。そのうちの一人があなたと同じような能力ですが、さらに規模が大きく死者の軍団を形成しています。その能力範囲に制限はないということですので、何かのヒントになる可能性はあります」

銀髪の少女に言われるまで考えもしなかった。なぜ自分がいきなりテオバルトに襲われたのか？ テオバルトを目にした時に考えたのは復讐だけだった。それ以上の事情について考察していなかった。

「にいさん、人間に戻れるというなら私も協力しましょう。幼い妹に欲情するようなにいさんから離れる事ができないというのはお互いに不幸なことです」

「……いや……妹とか言ってるのはお前だけだし、幼女がどうかはキャシーさんが勝手に言ってるだけなんだけど……」

なんだろう。嫌な予感しかしない、とアルは思う。これから先ず

つとこんな感じだからかわれ続ける気がしてきた。

「で、その博士はどこにいるんだ？」

「セプテム王国とティアル王国の間にある小国ビヘド。そこにおられます。レガリアを所持する7大王国には数えられていませんが中々発展している国です。レガリアに対抗するための魔導の研究が盛んですね」

「なるほどな。ここから行くとしたらどうしたらいいんだ？」

「さあ、私は地理には疎いので……」

「リーリア？」

「えーっと、私はマテウ国内でも怪しい感じなんだけど……」

アルも大陸の大体の位置関係は本で読んで大体わかっていたが、具体的にどう行けばいいのかはわからなかった。

誰もわからない様子だったのでキャシーが助け舟を出した。

「ああ、ビヘドへ行くなら大きくは2つだな。セプテム王国経由かティアル王国経由だ。セプテム王国はマテウ国とは国交がない。バリバリの敵対国家だな。こっちへ行くなら無理やり押し通る必要がある。ティアル王国はまあ、比較のおだやかな国だから入国自体は問題ないが……こちらは経路が問題だ。第1魔族領を通る必要がある。なんとかという冒険者が行路を開発していたはずだ。詳しくはしらんが調べればわかるだろう」

「セプテム王国……ですか。あれは中々無茶な感じの国ですね」

「ああ、そっちはお薦めしない。下手すれば洗脳されて二度と出て来れなくなるな」

「そうですね。魔族領を通るほうがまだなんとかなる気もします」

魔族領ならなんとかなる気がした。だが少しアルは誤解している。魔族領と聞いて今まで自分が住んでいたような森だと思ってしまっ

ていた。森ならどこにでも隠れながら進める気がしていたが、第1魔族領はほぼ平原と捨てられた都市部で構成されている。

「えーっと、とりあえず、名前はイルでいいか？」

今更のようにアルが銀髪の少女に聞く。名前についてうやむやになつてた。

「はい、にぃさんがそれでいいのなら」

「そのグラウシエル博士つてのはどんな奴だ？ テオバルトと共同研究していたつて聞くと警戒心がわくんだけど」

「あの方はまともな方ですよ、テオバルト様に比べれば」

わざわざまともだと説明するのが逆に怪しく思える。アルは会う時には最大限注意を払おうと心に誓った。

アルは今後の計画を大雑把に心に描いた。ならば準備だ。

「今日から旅の準備をしようと思う。しばらくは買い物をして装備を整えたり、情報収集だ。それからリーリアの街へ向かう。その後は第1魔族領を通してティアル王国を経由してビヘドだ。いいか？」

「わかりました」

イルが無表情でそう言う。

「ついていくしかなかろうが！ リーリア様もおられるしな！」

ベアくまが吼える。

「うん！」

リーリアが嬉しそうにうなずいた。

アルは思う。森を出ようと決意した時にはこんなことになるなんて想像もつかなかった。まだ森を出てその日にちも経っていないのにこんな状態だ。これから先どうなるのか。

期待と不安がないまぜになった気持ちでアルは仲間たちを見渡す。仲間、これも森にいたままでは望むべくもなかったものだ。まだ出会ったばかり。仲間としては不安な点多々あるし、アルの力によつて結びついているというのは、純粋な仲間としては歪にも感じる。イルとベアくまなどまだどのような者達かはつきりしないところもある。

だからこそ仲間たちを必ず元に戻す。そう決意をあらたにした。

一つの伝説がある。戦場に現れるという化け物の話だ。

それは死霊の王とも、魔法殺し、異能殺しとも呼ばれる五身一体の怪物だ。

それは五つの体を駆使し、からみつき、結びつき、わかたれ、まるでひとつの生き物のように戦場を蹂躪する。

それが現われた後には何も残らない。全てを喰らい尽くした後、喰い残された無惨な骸達は自らの足で起き上がりいずこかへ去るといふ。

それは千年を生きる大魔導師が創り上げたとも、魔界の大魔王が創り上げたとも言われている。

それは三人の異能の王の三つ巴の戦いに介入し、その全てを滅ぼ

したと言われている。

そして……それは一人の少年と三人の少女、一匹の狼の姿をしていたと伝説にはうたわれていた。

幕間 脅威分析

男が一人そつとその部屋に入ってきた。その部屋には既に何人かの男が着座している。重厚な木製の大きな机の上には資料が散乱していた。

その机から少し離れた位置にいる男が立ったまま資料を手に何事かを説明している。

既に会議は始まっているようだ。

その説明をしている男が侵入してきた男に気がついたが、侵入者は人差し指を口元に当てた。黙っているということらしい。男はそれに従った。

侵入者は机の端の椅子を静かに引くと、気付かれないように腰掛けた。

「はいはい、では次にソードドラゴンの幼生についてです」

説明をしている男、諜報部のルーカスが資料を見ながら言う。

「貴様！ その態度はなんだ！」

セプテム国の軍服を着た男が言った。着座している者は將軍と上級将校だ。この中で諜報部の男だけがかなりの格下ということになる。

「あー、さつきまでは頑張ってたんですけどね、思わず地がでちゃいましたね。まあいいじゃないですか、口の聞き方ぐらい」

「なめているのか！ 規律をなんと心得る！」

「別に命令違反をしているわけでもないじゃないですか。死ぬと言われりゃ死にますよ？ それが命令系統に従った正式な命令ならね」

「まあまあ、ドルエン將軍、いいではないか。彼は態度にはまあ、問題はあがるが、言えばそれだけだ。少々しゃくにさわるかもしれないが我々の忠実な部下だよ」

一人の男がとりなした。ドルエンと呼ばれた男もそれ以上些細なことにこだわっても器を疑われると思ったのか黙り込んだ。

「で、ソードドラゴンの幼生なんですが、うちの第3王子様が殺してしまいました」

「な！」

「馬鹿な！」

「あの馬鹿王子め！ 何を考えている！」

「いやー、馬鹿王子はないんじゃないかなあ。仮にも一国の王子だよ？」

その場にいたものが一斉に部屋の後方を見る。そこには今話題となっていた第3王子が座っていた。

「い、いや、……何故ここに？」

「これは秘密会議です。あなたを呼んだ覚えはないのですが」

「僕がそのソードドラゴンについて直々に説明してあげようとしてきたんだよ？」

第3王子は隠れている必要がなくなったため、將軍たちの席の近くにまでやってきて座りなおした。

「国境を越えてやってきたソードドラゴンですが、当初の予定では餌などで誘導し追い返す計画でした」

「それをこの馬鹿が……」

「いやいや、面と向かって言われると僕もさすがに傷つくよ？」

傷ついているようにはまるで見えない。その美しい口の端を上げ笑みを浮かべている。

「で、これがソードドラゴンの角だよ」

そうやって王子は腰にさしていた剣を抜いた。それは剣というにはかなり複雑な構造をしている。薄い刃状になっているのだが、ところどころ歪み、突起が飛び出している。角といわれればそのように見えた。その角に持ち手をつけて剣として使えるようになっていく。

この形状では通常の鞘に収めることが出来ない。鞘は側面が開いた状態になっており、留め金でとめるようになっていた。

ソードドラゴン。その特徴は額にある角だ。これが刃状になっておりとても鋭い。戦闘時には首を振り回しこの角を主要な武器として使いこなす。

「くっ！ …… お前！ これが欲しくて暴走したのか？」

「馬鹿とかお前とかひどいよね、みんな」

「ソードドラゴンの成体がやってくるぞ！ あれに勝てるだけでもおもっているのか！」

「そうかな？ 幼生であんなもんなら、成体でもたかがしれてると思っただけだね」

まったく悪びれる様子なかった。

「はいはい、脱線はそれぐらいにしておいてください。そういうことですので、ソードドラゴンの幼生の脅威度は0に。その分ソードドラゴンの成体の脅威度が上がりました。3です」

ルーカスは議題を次に進めた。

「えーと次はですね、ちょっと変わってますね。異世界人だと主張する少年ですね」

「なんだそれは？ ただの馬鹿じゃないのか？ それがなぜこの会議の議題にあがる？」

「まあまあ、それなりに理由があるんですよ。ね、ドルエン將軍？」

話題を振られたドルエンは苦虫を潰したような顔になる。

「ああ……見た。うちの孫娘が拾ってきたのだ」

「資料をみてください。写真がついてますね、この少年です。モノクロの写真ではよくわかりませんが、黒髪黒目の少年です」

「……なんといか平凡な顔だな」

「ドルエン將軍のところのお孫さん。お名前はクラリーネさん。この方の庇護下にあります。クラリーネさんがドルエン將軍さんちに伝わる馬鹿馬鹿しい成人の儀式のため森に出向いたところで出会ったそうです」

「貴様！ 愚弄するか！」

「えー？ 馬鹿馬鹿しくくないですか？ 成人の儀式に魔獣の蔓延る森にある塔に登ってくるって。死んじゃったらどうするんですか？」

「武門の一族だ！ 武を示せずしてどうする！」

「で、まあ、そのクラリーネさんはその武を示しきれずに死にそうになるわけですが、そこにたまたま通りかかったこの少年。えーと、名前はコーイチですね。このコーイチに助けられたようです」

「まあまあドルエン將軍。そういきりたたずとも」

ルーカスは資料をめくると少年の脅威について語った。

「この少年は魔法を使うようです。本人が言うには記憶喪失らしい

ですが、様々な魔法を使うようですね。他にも森の木を一撃で折ったり、その森の塔ですか？ その最上部まで飛び上がったりしますね。クラリーネさんを助けた際には、子鬼ですか。その群れを吹き飛ばしています。後は、ロータス家の次男と決闘まがいの争いがあったようなんですが、その際には数100本の剣を召喚したとあります」

場がざわめく。途中まではそれほどのものではないと思っていたが、剣を数100本召喚というのはそれまでとは少し毛色が違う。

「幻術の類ではないのか？」

「その可能性は否定できません。結局次男の方はその剣に恐れをなして降伏してしまいましたので、それが使用されたわけではないようです」

「支配の王錫による洗脳はしないのか？」

「それについては保留となっていますね。強力な個人に対しては王錫の副端末では対応できません。今のところクラリーネさんには従順なようです。現在の脅威度は1。要観察ですね」

「ふーん、面白そうだね。ドルエン將軍のうちにいるのかい？ 会いに行ってもいいかな？」

王子がこの少年に興味を示した。舌なめずりをせんばかりの様子だ。

「好きにしる！ ただ無闇に戦おうとするなよ！ 何がおこるかわからんからな！」

「えー、そんな人を戦闘狂のようにならないでくれるかなあ」

「はい、次行きます。えーと、次は皆殺しの一族です。最近動きがありました。代替わりがあったようです。頭首が12歳の少年になったと」

「ねえ、ルーカス。僕はその皆殺しの一族と言つのはよく知らないんだけど……なにが脅威だというんだい？」

「そうですね、脅威がわからないという点が脅威というところですか」

「へえ？」

「何かの武術を伝承しているらしいんですが……どのように戦うのか見たものが誰もいないですよ、これが」

ルーカスは王子に対しても特に口調を変えることはなかった。どこかなめたような口調だ。

「目撃者は必ず殺すらしいんですよ。ですので誰もこの一族がどのように戦うのか知らない。恐ろしいまでの秘密主義ってわけです」

「へえ、それは強いのかい？」

「そうですね。誰も知らないんですから、戦った相手はかならず殺されてるってわけです」

「そりゃ……面白そうじゃないか！」

「馬鹿王子が！ 少しは自重しろ！」

ドルエン将軍が吠えた。そう何度も暴走されてはたまらない。

「しかしだ、そこまで秘密に出来るものかね？ どこか遠くからでも見てしまつというのはあるのではないか？」

「独自の諜報組織を持っているようですね。市井の噂レベルでもかぎつけて密かに始末していくことらしいです。それを執拗に繰り返すわけですね。いずれだれも皆殺しの一族について噂しなくなる……というわけです。ですのでこうやって議題に出るのもうちの諜報部の優秀さを示しているというわけですが……まあ、褒めてくれとはいいませんよ。脅威度はこちらも1。要観察です」

「その皆殺しの一族ってのはどこにいるんだい？」

「聞いてどうする!」

「まあまあ、別にあちらさんも居場所までは隠しているわけではありませんが。隠しているのは技だけです。住処はマダー王国の山間部ですね」

「そうか……まあ他国なら仕方ないね」

国内なら絶対に襲撃していると、ドルエンは確信した。

「はい、では次です。えーと、こちらは中央正教の動きです。12神官の一人、マキノが聖都へと向かっています。それに関係するのが聖都の北の守護者が動き出しました。これらを合わせると、どこかでこの二人が合流するのかもしれない」

「どういうことだ?」

「素直に考えると、マキノの里帰りを北の守護者が迎えに出た。ということかも知れません。北の守護者は二人組です。守護者はヤグラム、もう一人は交渉人として名高いビクターという男です」

「ん? 何が脅威なんだい? よくわからないんだけど」

王子が口を挟む。王子はこの会議への出席は初めてだ。前提となる知識が抜けている。

「ええとマキノは12神官の一人で聖女とも呼ばれてるんですよ。戦闘能力もそうですが、信者に対しての影響力が凄い。支配の王錫の副端末での洗脳を解除してしまう可能性があるということとで監視対象に入っているというわけです。我が国にとってこれが非常にやっかいなことになるのは王子もわかると思いますが」

「へえ、それはまずいねえ。始末しといた方がいいんじゃないの?」

「貴様……馬鹿だ馬鹿だと思ってたがそこまで馬鹿か! 中央正教と事を構えてどうする!」

「中央正教は建前として軍を持っていません。その代わりとなるの

が聖都を守る守護者です。これが9人います。四方の守護者とも呼ばれていまして、各方面に2名、中央に1名ですね。5名は常に聖都の守護に回るわけですが、4名はいつでももうって出られる状態にあります。この方たちが……まあ、いわゆる化物ということですし、一軍に匹敵すると言われています」

「つまり、中央正教と事を構えるとそいつらが出てくるってことかい？」

「まあそういうことですね」

「面白そうじゃないか！　なんで君たちは僕にこんなおいしい情報を隠しているんだい？」

そりゃ教えるとあんたが首つっこもうとするのが目に見えてるからでしょうが、とルーカスがぼやく。

「さて次です。今一番ホットな話題ですね。大魔王です。これについては別資料が用意してあります。そちらをご覧ください」

大魔王に関しての資料、その1ページ目には何枚かの写真が貼り付けてあった。

「その写真の少女が今話題の大魔王です」

どこからともなく、ほう、と感嘆の声が漏れた。

「これはなんとというか目を見張るような美しさだな。孫にでもいればとても自慢できそうだ」

大魔王が街中を歩いている写真だった。いつものように黒いドレスを着ている。

「とても信じられんな、この写真からは何も脅威は感じられんが」
「これはどうやって撮ったのかね」
「マテウ国に潜入してる諜報員が街を歩いている所を撮影したものです。特に警護の者がいるわけでもないので簡単だったようです」
「これもか？」

そう言って指さされた写真は大魔王を真正面から撮影したものだ
った。

「それは写真を撮らせてくれと頼んだようですね」

「馬鹿な！ 危険ではないのか！」

「いえ、街の者は結構気軽に撮影しているようで、平民に偽装している諜報員が頼むのは特に不自然ではないようです」

ドルエン將軍はろくに話も聞かずにその写真にただ見とれていた。

「では2ページ目を御覧ください。大魔王のこれまでの足跡についてまとめてあります」

ぱらっ、というページをめくる音が間をおいて続く。そこにはこの場にいるものが初めて知る情報が記載されていた。

「これは……ツトモス平原の戦いに現れるまでのこともわかったのか？」

「はい、ではわかる範囲で最初から説明いたしますと、一番最初に大魔王を発見したのは、ジェルボー魔族領の監視の任に当たっていた兵士です。ジェルボーの監視塔の最上階で待機していた兵士が、鶏の月の20日の昼頃、魔族領から出てきた少女を目撃しています」

セプテム国では魔族領を領地の名称でそのまま呼んでいた。

「ほう、ということはこの少女は国内を通ってツトモス平原へ行ったのか」

「はい、その後国内でも数件目撃例がありますが、それらを総合しますとほぼまっすぐツトモス平原へ向かったようです」

「その最初に発見した兵士とやらは魔族領から現われた魔族と思しき存在を見逃したのかね？　それは君、問題だろうか？　何のための監視だね」

「時を同じくして魔物の襲撃が会ったようですね。監視塔の人員は出払っていたようです。人員の増強等はこの会議の議題ではありませんのでそれについては場をあらためてお願いします」

「まあいい、続けたまえ」

「はい、少女はツトモス平原にある、ロクス村へ向かいました。ツトモス平原はマテウ国と我が国で領有を争っている中立地帯であるのはご存知かと思いますが、ロクス村はその境遇から堅牢な防壁を村一帯に築いているのですが、少女はその防壁内には入らず、防壁から少し距離をおいた場所にある小さな小屋へ向かったようです」

「何のために？」

「その小屋には村から追い出された母娘が二人で住んでいます。こちらを訪ねたようです。少女はそこで一月程暮らしていたようです。この母娘と少女の関係についてはわかっていません。そして猫の月の2日目なのですが、マテウ国軍の1部隊が略奪のためロクス村に向かったようです。作戦行動の一巻かと思われませんが、中立地帯ゆえか防衛意識も高く防御も堅いロクス村に手を出しあぐねそのまま引き返したようです。その後、その部隊は消息を断ちました。引き返す途中で少女の住む小屋に目をつけて全滅させられと推測されます」

「にわかには信じがたいが……ツトモス平原での行動は聞いている。やれるのだろうか」

「はい、その2日後。ツトモス平原で戦闘開始の直前にこの少女は現れました」

「ツトモス平原か。別に大した土地でもないらしいじゃないか」

王子がぼやくようにいう。手に入れた所で特に益するところはない土地だと聞いていた。

「マテウ国に取られてしまうのもまずいのでな。小競り合いを続けているといった状態だ。向こうも本気ではなさそうだが」

「現われた少女は魔法でその場にいた全員を攻撃しました。研究所からは今までに知られていない魔法と報告を受けています」

「それはどのようなものだね？」

「資料の5ページ目を御覧ください。少女の戦闘能力についてまとめてあります。1番の項目です。上空に光の球を浮かべ、そこから雷を落とすという魔法です。被害状況から推定して射程は1kmです。この戦闘では、両軍合わせて2000名が同時に攻撃を受けています」

室内が一気にざわめいた。

「なんだ、それは！ ありえんだらう？ 戦闘どころではない、戦いようがないぞ！」

「そしてここにも注目していただきたいのですが、少女は明確な魔術発現行動を行っていません。最初に光の球を出す際にも手を上に上げただけです。その後、詠唱や手印等それとわかる魔術発現行動を取っていませんが、雷の攻撃を発動させています」

「無詠唱自体はありえんことではないな、精霊魔法などはそうなんだろう？ 精霊との意思の疎通だけで発動出来るとも聞いたが」

「精霊魔法でこの規模の魔法がありえるのか？」

「他にも香を使うなど、わかりにくい発動方法はあるな」

ルーカスは話が落ち着くのをしばらく待ちそれから続きの説明に入る。

「では話を戻します。ツトモス平原での戦闘後、少女はマテウ国に向かいました。この時点から7日後にマテウ国にあらわれ、これは既に広く知られています。レガリアの奪取に成功、大魔王の支配を宣言しています」

「しかし、マテウ国側には特になにもないな」

「そうですね、マテウ国の体制は今まで通りです。我が国としても今まで通りの対応を継続しています」

「そう言えば、最初に住んでいた小屋というのはどうしたのだね、戻らなかったのか？」

「はい、レガリア奪取後は、首都ベイヤーに滞在しているようです。ロクス村の小屋も調べてみましたが母娘は健在でした」

「では、大魔王はわざわざマテウ国を支配し何をしているのかね？
というかね、大魔王という名称はなんなのだね。ふざけているようにしか思えないが？」

「本人がそう言っていますね。まあ、大魔王という自称に何かの認定があるわけではありませんし。次に大魔王が現在何をしているのかですが、5ページ目を見ていただいているので、先に大魔王の戦闘能力についてご説明致します」

大魔王の日常について説明するのは気がすすまないため、ルーカスはそれを後回しにした。

「1番目の項目の続きですが、先ほどご説明した魔法以外は今のところ使用した形跡がありません。2番目の項目が大魔王の身体能力です。マテウ国内で知られている限りでは3回の戦闘を行っていませんのでそこから得られた情報です。まず移動速度についてはよくわ

かりません。街中ではかなりゆっくり歩いている姿しか見られませんが、戦闘中も立ち止まったままがほとんどです。次に腕力ですがかなりのものです。人を2km投げ飛ばした記録があります」

「待て！……人間を2km投げただと？」

「聖剣の勇者と戦闘を行っているのですが、その戦闘前のことです。投げ飛ばす瞬間を目撃した者もおりますし、広場に激突した勇者も確認されています。次に武装と戦闘方法ですが、これまでの戦いは全て素手で行っています。ホルスという冒険者と戦っているのですがその攻撃力は寒気のするようなものでして、素手で鎧ごと体を引き裂いたそうです」

「……聞き間違いか？ 鎧ごとだと？」

「はい、古代遺物の鎧だったそうですが、あつけないものだったようです。他にも、聖剣をへし折ったとか、天使を両断したとの噂があります。2回目の戦闘は先程の話に出てきた勇者と行っているのですが、目撃者が途中で逃げ出しています。詳細はわかっておりません」

3回目のテオバルトとの戦闘についても、それが北門外で行われたこと自体は把握していたがその詳細は得られていなかった。

「次に、防御能力ですが……」

「もついい。どうせ何も効かんのだろう？」

「はい、その通りです。今までの所、大魔王に有効な攻撃を加えたものはおりません。では、次に大魔王の現状です。3ページ目にお戻りください。基本的には日中は街中をうろついでいて、夜は適当な家や宿屋に泊まっています。王城に向かったことはこれまででありませんでしたので、政局には無関心のようなようです」

資料3、4ページには大体の大魔王の行動パターンが街の地図と共に記載されていた。

「何がしたいのだ？」

「わかりません。大魔王の行動原理は謎です。戦闘も挑戦されれば受けて立つようですが、その場合も本気で戦っていないようです。相手の攻撃をわざわざ待ってみたり、隙だらけの相手を放置したりと自由気ままです」

資料の内容はここまでだった。

ルーカスが報告を終えると各自がてんでばらばらに話し始めた。凡そ会議の体をしているとは言えない状態になる。

「極めて不味い事態ではないか？」

「ああ、その大魔王とやらが攻めてきた場合対抗する術がない」

「マテウ国とはお互い様子見とはいえ交戦中だ。いつ何が起きるかわからん」

「とにかくだ、今のところは下手に刺激しないほうがいい」

「そうかなあ、そう大したものでもないんじゃない？」

王子が疑念を呈する。今までの話からはそう大したものでもなさそうだと思っていた。

「なんだと？」

「この世界には伝説的な存在なんて山のようにいるじゃないか！

カロン迷宮の殺戮機械、佳き者達、昏き舞姫、古き巨人、魔獣王、封印されし神。それらと比べてどうだい？」

「そんなおとぎばなしのような話を持ちだされましても……」

「じゃあ僕でもいいよ。今の報告の内容なら僕でも勝てそうだと思いますけど？」

静寂が訪れた。全員が王子に注目する。このいい加減な、だが常

識はずれのこの男ならどうにかするのではないかと皆が思った。

「王子……はひとまず置いておくとしてだ。我が国に大魔王に対抗できそうなものは何かないのか？」

「いくつかは思いつくが国内でしか使えんし軍部から介入出来んな」

「後は、我が国のレガリアだな、支配の王錫の本体。あれならば大魔王だかなんだか知らんが支配下における」

「いや、余計な色気は出さんほうがいい。確かに大魔王をこちらに引き入れられれば、この上ない戦力だが、下手をすともう一つレガリアを差し出すことになる。それに王族に、特にレガリアに関しては口出しできんぞ」

「そうだねえ、お父様はうんと言わなそうだよねえ」

王子がそれとなく口を挟んだ。王がレガリアの本体を持ち出すことは滅多に無い。

「そういえば、魔族との関係はどうなのだ？」

「大魔王と連携して事を起こしている魔族は今のところいないようだな」

発散している議論をドルエン将軍がまとめた。

「今のところ情報が不十分だな。諜報活動をさらに徹底させる。大魔王の好物、性癖、趣味なんでもいい、詳細に調べる。研究所には対抗策を出させる。可能性だけでもいい。話を聞く限り想像以上の化物だ。出し惜しみるなと伝える。そして現状維持だ。下手にマテウ国を刺激するな」

まあ、そうだろうなとルーカスは思う。直接大魔王を見たこともあるこの男は放っておいても特に問題ないのではと思っていた。

大魔王は毎日楽しそうにしているのだから。このままならセプテム国に目を向けることは多分無い。

だが……こいつらは何か余計な事をするんだろうな、と漠然と思っただ。

1 話 神

薄暗い部屋の中、少年がまず注目したのは大きな柱時計だった。一定周期で揺れる振り子の音が静かな部屋の中ではひどく目立つ。

時計の針は11時59分を指していた。それだけでは今が昼なのか夜なのかも不明だ。

少年にはここがどこなのかわからない。直前まで何をしていたのかも思い出せなかった。気づけばこの薄暗い部屋の中だ。いつものように学校に行ったはずだがその後のことが頭に霞がかかったようになって思い出せない。

明かりは所々に置いてある年代物のランプだけだ。かろうじて窺える様子から少年は骨董屋のようだと思った。部屋の中は西洋アンティークで溢れている。

少年はあたりを見回した。昼間だとすると暗すぎるしカーテンでも閉めてあるのかと思うがそれも違った。窓自体が存在していない。壁面はこれらも骨董品なのだろう、装飾過多なキャビネットで埋め尽くされている。

まさかと再度見回すと扉すらないことに気づく。途端に恐怖にさらされた。ひどく奇妙なことに巻き込まれていることを今更ながら自覚した。

どうしたものかと内心焦っていると、時計が時報の音を鳴らした。ポーンという低い音だ。

「わっ」

いきなりの音に少年は思わず声を上げた。その低い音はとても不気味に聞こえる。少年はその不気味な音が12回なるのを黙って聞いていた。

「ん？ 気がついたか？」

声が出た。部屋の奥だ。重厚な木製の机があり、その上であくらを書いてある少女がいる。さっき見回した際には気づかなかった。

少年は少し迷ったがとりあえず近づいてみることにした。この狭い部屋の中で何か事情を知っているとしたらその少女ぐらいのものだろう。

少女は真っ白の貫頭衣を着ている。その身体には不釣り合いな膨らみがその白い服を押し上げていた。髪は金色で側頭部でくくって垂らしている。

「ははっ、知ってるぜ。最近の日本語は便利なんだ。こーゆーのは、金髪ツインテールロリ巨乳ってゆーんだよ」

少年はとりあえず思ったことをそのまま口に出した。雰囲気は飲まれまいと強気に出る。

「なんじゃ、失礼なやつじゃの。最近の若もんは礼儀をしらんの」「訂正だ。金髪ツインテールロリ巨乳ババアだ」

「まあ、あまり細かいことを言うつもりはないがの。節度つてもんはあるからの。ほどほどにしとくんじゃな」

少女は机の上に何かを転がしていた。先程から話しながらも何度もそれを繰り返している。

「ああ、これが気になるかの？ まあおぬしにも関係あることなんじゃがな」

「まあ気になるね。こんなとこに二人つきりでロクに目も合わせずにそんなことされてちゃな」

「これはな神のサイコロじゃよ」

少女はにやりと笑いながらそう言った。手には数個のサイコロがある。それを見せつけるかのようにジャラジャラと振っていた。近づいて見てみるとそれがサイコロとは思えない。歪だ。六面体と言われるとかるうじてそうかもしれないが、それはただの小さな骨のようなものに見える。

「なんだそりゃ、神のサイコロ？」

「なんじゃアインシュタインの有名な話を知らんのか？ 神のわしがこうやってサイコロを振つるといふ諧謔であるといふのに……ま、これ自体はヤギの踵の骨じゃな、こいつは神の力をもつても出目を操作することが出来んようになってな。神の遊戯でよく使われる。だがこのように歪じゃからの。振り方でそれなりに出目を調整出来るんでこうやって練習しとるんじゃ」

「なあ……ここはどこだ？ 俺はなんでここに居るんだ？ あんた何か知ってるのか？」

「知つとるよ」

少女はサイコロを何度も振りなおし、首をかしげながらもそのように答えた。

「なんせおぬしをここによんだのはわしじゃから」

「はあ？ どういうことだよ？」

「簡単に言うんじゃなぬしは死んだ。で、神のわしがおまえを呼び寄せた。こういうわけじゃな」

「意味わかんねーよ！ なんだよそりゃ」

「まあわかるように努力はしたほうがいいの。ごちゃごちゃ言つようなら説明なしで放りだすことになるぞ？」

少年は黙り込んだ。ここでつかかっても仕方がない。何もわか

らないのだ。出来るだけ少女から話を聞いたほうがいい。

だがこの少女が信用できるのかはわからない。自分でもこの状況について考察するべきだった。少年は記憶の片隅からこのような境遇と似通った話を掘り起こした。

「なあ、こんな感じの話を読んだことがあるんだが。確か、トラックに跳ねられて死んだら、それは神様のミスでお詫びに、凄い能力をもらって異世界に転生するとかいう話なんだが……」

「ふむ、当たらずとも遠からずということところかの」

「マジで！」

とても信じがたい。だが、この状況そのものがすでに信じがたいことだった。

「まあ落ち着くんじゃ。まずわしはミスなどせんよ。仮にミスでおぬしを死なせたところで詫びることなどせんじゃろうな。なにゆえに人間などに詫びねばならんのだ？」

「じゃあどこが当たってるんだよ」

「おぬしは埠頭でぼーっとしておったところ、サイドブレーキを引き忘れた軽トラックに押されて海に落ちた」

「……そんな死因かよ……」

少年はなぜ埠頭などにいたのかまるで覚えていない。どうせなら跳ねられそうになった子供の身代わりとかそういうのがいいと思った。

「で、わしはいなくなっても特に影響なさそうな死にかけのものを探しておったので。おぬしを選んだわけだ」

「どづいことだよ」

いなくなっても影響ないとはかなりの悪口に聞こえる。少年はあからさまに不機嫌な顔になった。

「海に沈んだなら死体が出てこなくてもそういうものとして処理されそうじゃろ？ 殺人事件の被害者やら轢死体やらが急に消えたら大騒ぎじゃ。それはまずい」

「よくわからないんだが……俺は異世界に行くのか？」

「うむ、それも当たつとる部分じゃの」

「なぜ俺だ？ いなくなってもいい……ってのはこんな言い方はあれだが、ホームレスのおっさんとかでもいいんじゃないのか？」

「ふむ、まあ別に説明する必要はないんじゃないが……。まず転送方法に問題があつての。ぴんぴんしとる人間はまずいんじゃない。かといって死体も困る。死にかけがよい。さすがに神が生きとるものを殺すわけにもいかん。なので死にそうになつていて、死体がなくなつても不自然ではなさそうな状況にあるものを探していたわけでそれがおぬしじゃ。まあ世界中を探せば該当者は何人かはおるがおぬしが選ばれたのは偶然じゃの」

「偶然か……俺どうなつちやうわけ？」

「そうじゃな……いくつか説明しとかんといかんことがある。それを言つておこつ。まず異世界に行く方法じゃが再構築とでも言う方法になる。異世界へ行くのもなかなか難しいんじゃない。人間サイズのものを転移させるには莫大な力が必要でな。そこでわしらが異世界に人間を送り込むのに、こちらの人間の情報を読み取つて、異世界の物質で人体を再構築するといった方法を取つているんじゃない」

「え？ 俺ここにいるじゃん？ ここにその、転移？ っつてのしてきたんじゃないの？」

「んむ、おぬしそこらにあるものをなんでもいいから触つてみるといい」

なんでもいい。そう言われて躊躇せずまっすぐに少女の胸元に手

を伸ばした。なんでもいいと言ったのだ。揉みしだいてやるうと意気込んだのだがそれは失敗に終わった。少年の手は少女の胸をすり抜けてしまっている。

「あ、あれ？」

ならばこの少女は幻なのかもしれないと、手近な所にあつた彫刻の施してあるガラス壺を取ろうとした。これも同じだ。少年の手は壺を掴むことなく素通りした。何度繰り返しても何にも触れることは出来ない。ではこれはどうかと右手で左手をつかもうとしたがこれも同じだ。右手と左手が同じ場所に重なっている。奇妙な光景だった。

「と、いうわけじゃ」

「どういうわけだよ！」

「おぬしは今ここにいるようでここにはいない。その姿はわしと話をするために投影されただけじゃな。おぬしの身体はわしの神的ニュートリノ風走査光線を照射されて全身の分子構造を解析された。その際におぬしの身体はぐずぐずになってしまつとる。ま、今頃は魚の餌じゃるな」

「はあ？」

「おぬしアホそうじゃから、ニュートリノ振動とか位相とか言われてもわからんじゃる？ まあこれが死にかけの人間を探していた理由じゃな。解析を行えば対象は死ぬのでな、放っておいたら確実に死ぬという相手にしか使えんのじゃ」

「俺死んでるの！？」

「最初にそうゆうたじゃる。で、次じゃ。異世界に行くにあたつてじゃな、いくつか能力を与えることになっておる。まあおぬしのようなひ弱そうな人間がそのまま行つても死ぬだけじゃるうからな。ある程度はがんばつてもらえるようにはせんとの」

「……なあ、嫌だつて言つたらどうする？」

少年は控えめに言つてみた。異世界に行けなどと言われてもすぐに覚悟など決められない。

「嫌……とは異世界なんぞには行きたくないということか？」

「そつだよ！　なんでこんなわけのわからんことに巻き込まれなきゃいけないーんだよ！」

「ふむ……まあ嫌だというなら無理にとは言わん」

「え？　じゃあ元の世界に戻してくれるのか？」

「少々めんどくさいがそれ自体はまあやってやれんこともない。おぬしを構成している情報はあるわけじゃから、元の世界で再構築を行えばよい。が、その場合おぬしは海の底じゃな。軽トラの下敷きの状態に戻すことになるが頑張つて生還しておくれ」

「……あー、それはなんだ、結局拒否権はないということだな？」

「選択肢はあるじゃろ。異世界なんぞに行くよりは死を選ぶというのも悪くはないと思うが」

「地上でその再構築つてやつをやってくれればいいだろ！」

「なぜそこまでせねばならんのじゃ？　いやだというなら元の状態に戻す。それ以上のことをする義理はなかるう？」

筋は通っているような気はした。だが今から元に戻すから海の底だと言われても死ぬ覚悟などとても出来ない。

結局の所この神を自称する少女の言つとおりにならないうようだった。

「わかつたよ。続きを説明してくれ」

「で、先程から振つとるこのサイコロじゃな。この出目でおぬしに与える能力が決まる。わしに与えられたサイコロは5個じゃ。これを一度に振る。出目は最大20じゃな」

「30じゃないのか？」

「このサイコロは直方体に近くての。1から4の数字しか出ん。歪ゆえに1がもつとも出やすく、4がもつとも出にくくなっておる。というわけで今から振るからの。楽しみにしておれ」

あつという間もなかった。少年が意を決する間もなくいきなりサイコロが振られた。それは軽い音を立てて転がりすぐに止まる。自らの運命を決めるサイコロがどんな目を出したのかと目を凝らすも、サイコロには数字らしきものは書いていない。何が出たのかさっぱりわからなかった。

「18じゃな。これはよいの」

「なあ……適当なこと言ってるだけじゃねーのか？」

「失礼なやつじゃの。ほれもつと喜べ。あ、いや、あまり喜びすぎても鬱陶しいだけじゃが……」

少女は苦々しい顔をした。何か含むところでもありそうだった。

「ああ、すまんの。おぬしのひとつ前の奴のことを思い出しての。

そいつはなんと20が出たのでかなりの能力を与えたんじゃが、チートだひゃっほー！などと馬鹿騒ぎしておつての。あまりに鬱陶しかったので本来予定していたのとは別の世界に送り込んでしもうた」

「……そいつどうなった？」

「ゲームの世界に行きたいなどいっておつたので希望通りにはしてやったぞ、これじゃな」

そう言うと少女は机の引き出しからゲームのパッケージらしきものを取り出した。薄暗くてタイトルはよくわからない。黒地に赤が目立つパッケージだ。少女は中から説明書を取り出した。

「ゲームの世界を堪能してもらおうと思つての。難易度はインフェルノじゃ。「達人ですら生き残れない、悪夢のような難易度です。無理に挑戦せず、インフェルノの存在はそつと心のなかにしまっておきましょう」と書いてあるの。まあ……今頃アウズンブラにでも踏み潰されとることかの。なんとか生き残つたとしてもラグナロクじゃからなあ」

「自重するよ……」

あまり怒らせるのはまずいようだった。

「さて18をどう割り振るかじゃな。ここは……魔法に全振りで行きたい所じゃが……最低限の身体能力がないと魔法を使う前に死にそうじゃなあ」

「えーと、俺の意見とか聞く気ある？」

「ない」

「あーそうっすかー」

例えどんなに文句があつたとしてもなにも出来なかつた。なにせ身体すら存在しないのだ。

「こうじゃな。異世界言語翻訳魔法に1。身体強化に2。残り15で万能魔法を取る。これはかなり強力じゃ。よかつたの。万能魔法はひとつしかなかつたんじゃが取られてなかつたようじゃ」

「あんたが喜んでるのはわかつたけど、俺にはさつぱりだよ」

「んむ、今から説明してやる。さっきから脱線ばかりしておるでさつさといくぞ。まず1つめ。異世界言語翻訳魔法じゃな。これがないと始まるんの。これは音声なら耳に届くまでに日本語に変換されるし、文字なら翻訳された日本語が字幕のように見える。話せば勝手に相手が理解できる言葉となるぞ。文字を書くのは少し面倒じゃが、書きたい言葉を口に出せばそれが字幕となって出るのでそれを

書き写せば良い。これは永続魔法で後で説明する万能魔法とは別じや」

「……俺がその異世界言語を理解できるようになるわけじゃないのか？」

「うむ、おぬしの馬鹿な頭はそのままじゃ。耳や目に届くまでに日本語に変換されるだけじゃ。それとあくまで言語翻訳ではない。動物の鳴き声を理解できるとかはないぞ。で、ふたつめ。身体能力強化。これはまあそのまんまじゃな。おぬしの身体が強くなる。3つめ。万能魔法が使える。以上じゃな」

「……なあ……もしサイコロの目が5だったら……」

「うむ、言葉がわかるようになって、ちよつとばかり身体強化された程度で異世界に放り出されるところじゃったな。よかったの。最低でも10は欲しいところじゃ。ま、18はかなりよいぞ。しかも万能魔法がとれたのが大きい。これがあればどうとでもなる」

「魔法つて言われてもなあ……そんな使えるようになる気がまるでないけど」

「なに、簡単じゃ。おぬしは魔法で起こしたい事象を口にするだけでよい。ただそれだと口にしたことがなんでも実現してしまうでの。合言葉を決めてもらう」

「合言葉？」

「テクマクマヤコンとかアブラカタブラとかあらびんどびんはげちやびんとか、まあなんでもよいぞ。おぬしが好きな言葉にするとい

い」

「なんだか古くさいことを言うなあと思いつつも少年は考えてみた。

「……じゃあ、我は命ずる。つてのはどうだ？」

「……まあ、おぬしがそれでいいのなら……それは翻訳されんようにしてやるう。ささやかな心遣いじゃ」

少女は呆れたような顔をした。内心よくは思っていないようだ。

「魔法に関してじゃがその合言葉とともに一息で口に出された言葉が実現する。曖昧なものいいでもそれなりに処理されるんじやが、例えばこの場にいる人間は全員死ぬ。と言ったとしよう。この場という曖昧じゃがまあその辺はうまく処理される。しかし全員死ぬこれはまずいの。この場にいる人間にはおぬしも含まれるのでおぬしも死ぬ。というわけじゃ。じゃから対象設定と効果はよく考えたほうがよいぞ。まあこのあたりはやってみんとわからんじやろ。あまりに無茶なことは実現できんこともあるからの。何が出来て何ができないかはいろいろ試してみるとよい。さて、後は目標と注意点じゃな」

「目標？ 何かしろつてののか？」

「まあ聞くが良い。これから行つてもらおう異世界にはおぬしの他にも同じようなものがある。わし以外の神々の手先じゃな」

「……それは俺と同じような能力を持つてるののか？」

少年はすこし落胆した。神から与えられた能力で好き放題にやれるのかと思つたら自分と同じようなものがあるらしい。

「まあの。だが幸い18が出たものはおらん。工夫次第でどうにかなるじやろ。で、その他の手先どもに先んじて大魔王を倒す。それがおぬしの目標じゃな」

「……何のためにそんな異世界の大魔王とやらを倒すんだよ。関係ないだろ？」

大魔王を名乗っているのだ。さぞかし邪悪なのだろうが全く関係もない異世界とやらでどれほど悪行三昧していようがこちらの世界にはまったく関係ない。異世界がどれほど悲しみに満ちていようと少年にもこちらの世界の人間にもまったく関係がないと思える。

「まあこのう。本来の目的は異世界の偵察なんじゃが、それだけじゃ面白くないと言いだしたものがおつてのう。各自で手下を参加させて何かを競わせようということになったんじゃ。その異世界で魔族を率いて人間の領土を侵略しておる大魔王というものがおるといふのわかつたので。それを倒した者が勝ちということになったんじや」

「待てよ！ 何か？ 俺はその神々のゲームの駒扱いか！？」

「うむ、まさに駒じゃな。まあ無理はせんでも良いぞ。適当にうるついでおるだけでも本来の偵察の役には立つでの。わしはあまり乗り気ではないんじや。まあ……大魔王を倒せば、褒美は望みのままじや。元の世界に帰ることも出来るぞ」

「……帰れるのか？」

「うむ、帰りたいならそれ以外には方法がないの。まあ、目標はそれじゃな。で、注意点じゃが魔法を使うには依代が必要じゃ。異世界に行った時に手に握らせておくので大事にするんじや。なくすと魔法が使えん。それと魔法は口に出さねばならんからの。喋れなくなる状況はまずいので注意するんじや。後は他の神々の手先というやつじゃな。わしなんかはどうでもいと思つとるんじやが、中には本気で勝ちに行こうとしとるものもおるでの。大魔王討伐は早い者勝ちじゃし何をされるかわからんの。せいぜい気をつけるがよい」

「気をつけるって言われてもなあ……」

他の神々やら手先やらが目の前にいるわけでもない。薄暗い部屋の中で小学生のような少女の話しを聞いているだけではあまり実感がわかなかつた。

「そういや、そのサイコロの18はいないって話だけどよ、何か注意しといたほうがいい能力の持ち主とかいないのか？」

「そうじゃな、13で不死身を取つた奴がおるの」

「……あっさり言っただけどとんでもねーじゃねーか！ そんなのに襲われたらどうしろってんだよ！」

「まあ、不死身だけじゃしな、攻撃はさほどのものでもないじゃろ。それに魔法でも似たようなことは出来る。どんな大怪我をしても喋れるなら魔法でどうとでもなるじゃろっ」

サイコロを振り終えたためか少女はどこか手持ち無沙汰にしながらも、言うべきことは言い終えたのか一仕事終わったという満足気な顔をしていた。

「説明はこんなもんじゃ。そろそろ行くかね」

「いや、ちよつと待てよ。俺にも心の準備つてもんがだなあ」

「こんなところにずつとおつても仕方なかるうが？ それにおぬしの情報をいつまでも保持はしておけん。これを見よ」

そう言って少女は自らの背後にある水槽のようなものを指さした。そこには一抱えほどもある大きな球状の物体が浮かんでいた。桃色をした妙に生々しい塊だ。

「これは、三つ首竜の脳を八つ組み合わせで作った記憶装置なんじやが、おぬしの情報はこいつが記憶しておる。今おぬしが考えたり手足を動かしたような感覚を覚えるのも全てこの中で模倣演算された結果なんじやが……こいつ生き物じゃからの。だんだん忘れていきよる。なのではよせんと、再構築に失敗する可能性が高まってだな……」

「わ、わかった！ 行く！ 行くから早くしてくれ！」

「ふむ。では、いつてくるがよい！ 達者でな！」

少女が両手を振り上げ大声で言った。

その言葉を聞いた瞬間少年の意識はなくなった。

気がつけば少年は硬い地面の上で仰向けに横たわっていた。両手をつきゆっくりと上体を起こすとあくらになる。

身体をあちこち触ってみる。確かに実体があるようだった。特に不調も感じない。

あたりを見回してみる。鬱蒼と生い茂った樹々が乱立する森の中だった。

「森から始まるってのは定番なのか？」

少年は神を名のる少女が着ていたのと同じような白い貫頭衣を着ていた。

「まあ再構築つてのが本当なら裸で始まってもおかしくなかったけど、サービスなのか？　つかこの格好からするにあいつギリシヤ系の神様なのか？」

生い茂った枝葉が空を覆っている。あたりは薄暗いが木漏れ日から察するに日中なのだろう。

少年は握ったままの右手を開いた。そこには複雑な意匠の凝らされたコインのようなものがある。鎖がついているのでネックレスなのだろう。

「これが依代か。まあ、首からかけろってことだよな」

少年はネックレスを身につけながら立ち上がった。

「そーいや、俺結局どーしてたんだ？　なんで海になんて行ったんだ？」

もう一度よく思い出してみる。最初から。

「よし。俺の名前はマキセ・コイイチ。高校1年生」

それは覚えていた。ここは問題ない。別に記憶喪失とかいうわけではないので当然だ。

コイイチは問題の日の記憶を順に思い出していった。

「学校には行った。一学期の終業式に出た記憶はある。その後……」

思い出せた。けれど思い出さないほうが良かった。そう考えながらコイイチは頭を抱えた。

学校からの帰り道で幼なじみのヨーコに思い切って告白してみた。家は近所だが普段はクラブ活動などで一緒に帰ることはあまりない。いい機会だと思った。今でも付き合ってるようなものだしはつきりさせておくのもいい、そう思った。これから夏休み。恋人同士ということになればますます楽しく過ごせるはずだ。

はあ？　あんた何言ってるの？　いまさらあんたとそんなの無理に決まってるじゃん。

ヨーコの蔑むような視線を思い出しただけで心拍数が上がる。仲良くやってきたつもりだったし、それなりに成算があるつもりだった。全く脈もないのにいきなり告白をするほどコイイチも大それたはない。

けどそれは勝手な思い込みだったようだ。

コーイチは一目散に逃げ出した。その足で電車を乗り継いで海まで行った。今思い出してもなぜそんな行動をとったのかよくわからない。傷心旅行と言えば海というイメージでもあったのだろうか？そして埠頭でボーっとしていた所を軽トラックに押されて海に沈んだということなのだろう。実際に海に落ちたあたりは曖昧だった。パニックになったということかもしれない。自分が溺れ死ぬ所など覚えていてもトラウマだろう。これは思い出さなくてもいい、そう考えて思索を中断した。

コーイチはひとしきり悶えるとやがて落ち着きを取り戻した。もう元の世界は関係ない。ヨーコと会うこともない。そう思うと異世界に来たというのも悪く無いと感じた。

「しかし……どうしろってんだよ。うーん、……まずは人のいるところまで行く……かな」

いきなり森の中ではどうしようもない。コーイチは歩き出した。どこへ行けばいいのかはまったくわからないのでまっすぐ進んで見ることにした。

「まあ……どこまで行っても森っぱいな」

かなり歩いてみてもあるのは樹々だけだった。このままではただ迷うだけになりそうだ。

「そついやもらった能力つてのでどうにかなるかもな。翻訳は人がいないと意味がないとして、身体能力と魔法か」

試しにあたりの木の幹に手を当ててそのまま掴んでみる。ミシリと音をたてて何の抵抗もなく表皮がえぐれた。

「おお！　すげえな。……　つてかバルサ材なんかできてんじやねーだろうな、これ？」

次に殴りつけてみる。殴った樹木は根っこから持ち上がりその場に大穴を開けて倒れた。あたりでは鳥たちがギャーギャー鳴き声をあげ、ばさばさと飛び立っていく。

「はははっ、すげえ！　無敵じゃね、これ？　んー、ならちんたら歩いてなくても……」

少し腰を落とし一気に飛び上がった。樹々の枝葉を瞬く間に通り過ぎ遙か上空へと辿り着く。

「はははははっ、なんだよこれ。すごすぎんだろ。っーかこれで身体強化2つてどついうことだよ。身体強化全振りならどーなっちまうんだよ！」

こうやって上空から見てもあたりは一面森だった。だがどちらへ行けばいいかはこれで分かる。街らしき影が遠方に見えた。

「んー、っーか飛びすぎたな。滞空時間がすげえ。で、あっちへ行けばいいとしてだ、他には……んー、あれだ異世界っーたらほら、月が二つあったりするんじやねーの？」

コーイチは空を見上げた。元いた世界では昼間でも条件によっては月が見えた。異世界がどのような法則に支配されているのかはわからないが、今のところさほど異世界という実感はなく、同じように月が見えるかもしれない。そう思っただけの行動だったがその期待は見事に裏切られた。

天にあったのは巨大な鶏だった。

距離があまりに離れすぎているため、どれぐらいの大きさなのかはまるでわからないが天空に鶏がいるというのだけは確実だった。

鶏らしく首を振りながらゆっくりと歩いている。歩いているといつても地面があるわけではなさそうなので空を飛んでいるのかもしいれないが、翼を広げたりはしていない。とさかの大きさから見て雄なのだろう。鶏は優しく光っていた。

「え？ アレ？ 月？ ははっ、さすが異世界って感じだな。うん、これは間違いなく異世界だ！」

コーイチは落下しながらひとり納得した。

そろそろ着地の事を考えないとまずいかと考えて真下の森に目をやる。多分地面に激突しても強化された身体能力のおかげで無事なのだろうがどうせならかつこよく着地を決めたいと考えた。

視界の端に何かが見えた。そちらに目をやる。馬車らしきものが見えた。戦いの喧騒らしき音が聞こえる。どうやらその馬車が何者かに襲われているようだった。

「はははっ、つーか助けに行くしかねーよな？ 魔法も試してみたいしな！」

コーイチはあっさりと決断した。

検問所の女性兵士、ダフニーは目の前に置かれた紙幣の多さに戸惑った。

その金を出した相手は目の前の大男だ。にやにやと笑いながらダ

フニーを見つめている。

「あの、通行料はこんなにいきりませんか？」

「ああ、多い分はねえちゃんがつといてくれていいぜ」

ここはマテウ国の首都ベイヤーの検問所だ。街に入る際の簡単な検査と通行税の徴収を行なっている。

相手が商人なら商品に応じた税をさらに徴収する所だが、この男はそう大した荷物も持っていない。

「ちよつとな、話をきかせてもらいたいんだけどよ」

「……賄賂のつもりですか？ あの、この国でそういう真似はやめておいたほうがいいですよ。この国の役人はちゃんと給料もらってまじめに仕事してますからね。相手によってはそれでもめたりするかもしれません」

ダフニーは男をよく見てみた。中年とっていい歳だと思う。黒髪に黒目でのっぺりした顔の大柄な男、この国ではあまりみられない特徴だ。検問所の兵士にいきなり鼻薬をきかせようという所からしてこの国の人間ではないのだろうか

まあ、大魔王様も黒髪黒目ですけどね。

ダフニーは男の後ろに控えている女性に目をやった。こちらは栗色の髪に緑がかった瞳、目鼻立ちのはつきりした美人だ。マテウ国の国民だと言われて違和感はない。ただ首に付けられている首輪が異様だった。ファツシヨンの類ではない、見せしめのための首輪だ。ダフニーは顔をしかめた。奴隷なのだろう。この国には存在しない制度だ。他国から奴隷を連れてやってくるものもいるが、その場合は奴隷であるとわからないように隠すのが通例だ。マテウ国が奴

隷を肯定していないことは公にされている。わざわざ問題が起こりそうなことは普通しない。

「私でわかることならお答えしますよ。もちろんお金はいりません」「まあいらないうてならいいけどよ。じゃあ聞くがこの国には大魔王ってのがいるんだろう？ どこにいるんだ？」

そんなことか。とダフニーは思った。しょっちゅう聞かれていることだ。だがなんだろう、この嫌な感じは。いつもこの手の質問をしてくる人たちはもっと興味本意というか怖いものみたさのような気軽な感じを受けるのだが、この男からは邪な真剣味とでもいうものを感じる。

「大魔王様ならもう少ししたらアレがヤバイ亭という町外れの酒場にいらっしやいますよ。ここからなら歩いていけばちょうどいい時間につけるかと思えます」

大魔王の居場所について一番よく知っているのがダフニーだった。あまりに聞かれるので大魔王の行動パターンを大体覚えてしまっている。

「そうかい、ありがとよ。おら、いくぞ」

男は女に乱暴に声をかけ街へと入っていった。奴隷の女は慌ててその後についていく。

女は通り過ぎる時にダフニーと目が合うと軽く会釈をした。ダフニーは嫌なものを見てしまった気がしてその後少し機嫌が悪くなった。

「こんにちは」

夕方、検問所の業務が終わるころ大魔王がやってきた。

「え、あの、大魔王様？」

「はい」

大魔王が検問所にやってきたのはこの国にやって来た時に押し通って以来だ。ダフニーはまさか大魔王がやってくるとは思ってもいなかったためあわてふためいた。

「少しお願いがあるのです」

「は、はい、なんでしょう」

「実はここ最近私に挑戦してくる方が増えているのです。今日も一人アレがヤバイ亭にやってこられました」

「あ！もしかして、黒い髪の大柄な方でしょうか……大魔王様のいどころについて聞かれたので答えたのですが……」

あれから後も何人かに大魔王について聞かれたが、何か嫌なものを感じたのはやはりあの男だけだった。

ダフニーは今ままであまりに気軽に大魔王について答えていたことを後悔した。今まで特に問題がなかったのだが、こういう事態も想定されてしかるべきだった。

「別に責めているわけではないのです。そんなに困らないでください。その方は酒場で暴れ始めたのでゴミ捨て場に捨ててきました。ですから何も問題はないのです」

「ゴミ捨て場って塔の大穴ですか？」

人は捨てないで欲しい。ダフニーはそう思いながら大魔王を見る。あんな大男を捨てるとはどうやったんだろうと思う。そんな力がありそうにはとても見えない。

その大魔王の後ろには、首輪を付けた女がいる。その捨てられたという男に突き従っていた女性だ。紙のように真っ白な血の気の失せた顔をしている。何か恐ろしいものでも見たのだろうか？

「はい、挑戦されれば応えるのですが酒場で戦い始められるのは迷惑なのです。そこでですね、そう言った方達は別の所へ案内してもらえないでしょうか？」

「了解いたしました。どちらへ案内すればいいのでしょうか？」

「旧首都に私の城がありますので、そちらへ案内してください」

「はい。その……そう言った方というのは……大魔王様に挑戦しようという方の事ですよ？ どうしたらいいでしょう？ あなたは大魔王様に挑戦するのですか？ と聞きづらいのですが……」

「そうですね。それについては今日やってこられたような方だけで結構です。黒髪黒目の方が多いですね。後、サイコロがどうこうと言っていました」

「サイコロ……ですか？」

「よくわからないのですが、俺は15だ、17だとおっしゃっているのです。そこで私はその方たちを「さいころりん」と名づけました！」

「すごいいい笑顔で言われてしまった。会心のネーミングなのだろう。」

「さいころりん……ですか」

「ええ、さいころりんです！」

「わかりました。そのさいころりんらしき人は旧首都へ案内すればよろしいですね」

「よろしく願います。ところで……この方がずっとついてくるのですがどうしたらいいと思いますか？」

「えーと、その方ですか？」

大魔王が奴隷の女を指さし聞いた。ダフニーもそちらを見て答える。

「どなたなのでしょう？」

「さあ？　さいころりんは挑戦してきたので丸めて捨てたのですが、この方はその後黙ってついてくるのです。挑戦してこないのを捨てるわけにもいきませんし」

そう言われてダフニーは困った。どうしていいのか皆目見当もつかない。ダフニーはとりあえず声をかけてみることにした。

「あの、あなたお名前は？」

「あ……あの……丸めないでください！　ごめんなさい！」

「いや……人を丸めたりしませんよ？」

この女性は一体何を見たのだろうか？　ダフニーは不安になってきた。どうも丸めたというのは修辭的表現ではないようだ。

「む！　私が話しかけても返事をしなかったのにこれはどういふことなんでしょうか。地味に傷つくのですが」

「あの……大魔王様……ここは一旦私にまかせてもらえますか。どうも大魔王様に怯えているようなんですが」

「だったら、ついてこなくてもいいと思うのです」

大魔王はふくれている。すねていた。子供っぽい所があると噂では聞いていたがこういふことなのだろうか。ダフニーは思った。

「大丈夫。誰もあなたを傷つけたりしないから。落ち着いてね」

立ち話を続けるのもどうかと思ったダフニーは、大魔王と女性を応接コーナーに案内した。部下に命じて飲み物を用意させる。

しばらく待っていると落ち着いたのかぼそぼそと女性が話した。た。

「私……。ナタリアと言います。セプテム国の奴隷です……」

ダフニーはセプテム国という名に反応した。セプテム国は敵対国家だ。現在も交戦を続けている。ではあの男もセプテム国の人間だったのだろうか。通してしまったことを悔いるも、それは首都の検問の仕事ではない。国境警備の管轄だろう。

ナタリアはダフニーの微妙な変化を捉えたのか慌てて付け足した。

「あの！ 元はマテウ国とセプテム国の間にあるロクス村の出身なのです。小さな頃に奴隷狩りにあってセプテム国に連れていかれました。ですのでセプテム国の国民というわけではないのです」

「あ、ごめんなさいね。別にそれをとやかくいうつもりはないの。それでどうして大魔王様についてくるのか聞かせてもらいたいのだけど」

「はい……。私はタブチ様にお仕えしていたのです。タブチ様がそちらの方……。大魔王様？ にその……」

ナタリアが言いよどむ。今までの話から察するに大魔王が殺してしまったということなのだろう。

「うん、無理しなくていいからね。でそのタブチさんがいなくなったのはわかるんだけど、それであなたはどうしたの？」

「私の支配権がその……大魔王様に移ったので……」

「んー？ ちよつとよくわからないんだけど……私はセプテム国とかの奴隷制度に詳しいわけじゃないから見当はずれなことを言うてるかもしれないけど……。その奴隷って財産の一種と考えていいのかしら？ だとすると別に所有者がその……死んだとしてもね。殺した相手に所有権が移るってのはおかしくない？」

「はい、その財産としての奴隷というのは私有奴隷ということになると思いますが、私は公共奴隷なのです」

「はあ」

そう言われてもダフニーにはさっぱりだった。やはりセプテム国とはわかりあえない気がする。

「公共奴隷は国の所有物ということになっていまして、建前としてはセプテム国民が公平に自由に扱うことができます。ですがその……自分でいうのもなんですが、私のような美人は人気がありまして独占しようというかたも出てくるのです」

うん、自分で言っちゃったよ、この人！ 確かに美人だと思うけど！

「そういう場合にものをいうのがやはり腕力といいますが直接的な暴力なのです。公共奴隷の奪い合いは決闘のような形で行われます。慣習的になんらかの勝負で公共奴隷に対する優先的な支配権のやりとりが行われているのです。タブチ様も前のご主人様を殺害する形で私の支配権を得られたのです」

「はあ……じゃあ大魔王様がそのタブチ様に勝ったからあなたは大魔王様のもの……と考えたのかしら？」

「はい……」

ダフニーは首をひねった。どうしたものかと思う。奴隷にどう接すればいいのかわからない。

「あのね、まずここはマテウ国だからね、セプテム国の慣習とかは関係ないと思うの。それにそのタブチさんて方がいなくなったのなら、あなたは自由になったということでもいいんじゃないの？ そりゃいきなり知らない国に放り出されても困るかもしれないけど、うちは難民の受け入れとかはゆるいほうだから多分大丈夫よ。身の振り方が決まるまで面倒みるぐらいはしてくれと思うし」

「でも……私どうしていいのか……」

子供の頃からずっと奴隷だったのだろう。いきなり奴隷でなくなったと言われても困るのか、とダフニーが思っていると今まで黙って聞いていた大魔王が口を開いた。

「先程から聞いていたのですが……そもそも奴隷とはなんなのですよっ？」

「えーと、そこからですか、大魔王様！？」

まさかの質問にダフニーは驚いた。そんなところから説明しなければいけないのかと思うとげんなりする。

「まあ、私もさほどセプテム国に詳しいわけではないのですが……」

とダフニーはナタリアの方を見た。当の奴隷が一番詳しいだろうと思っただ。

「はい……奴隷とはモノとして、国民の所有物として扱われる人間

のことです。セプテム国民に絶対服従を強いられ、消費財として扱われます。文字通り死ぬまで働かされるのです」

「ん？ 私も詳しくはないんだけど、奴隷ってそれなりの値段がするものじゃないかしら？ そんな使い捨てるような使い方は……こんな言い方はあれだけでもつたいないんじゃない？」

「いえ、セプテム国では奴隷はまさに湯水のように使われるのです。詳しくはわかりませんが中立地帯や他国で奴隷狩りをしていて、常に補充されてくるのです」

「……なんか国として破綻してる気がするんだけど……」

「そうですね。多分奴隷がいなくなれば一日ともたないんじゃないかと思います。それに私の目からみてももう限界に近いんじゃないかと。奴隷を補充し続けるというのも無理がありますし……」

「あー、なんか国境方面できなくさい話聞こえてきてるけど、やっぱうちを狙ってるのかな？ 一番近い大国だし……」

最近は国境方面での動きが慌ただしくなってきたという噂だった。ドナート領主ブルーノが謁見に訪れていたことから、なんらかの問題が発生しているのだろう。

「でも、あなたそんなにひどい扱って感じでもないようだけど？」

ナタリアは首輪をつけているという以外はごく普通の格好だ。どちらかといえば一般女性としては着飾っているようにも見える。

「その……私は男の方の身の回りのお世話や夜のお相手などが仕事でしたので……運よく、嗜虐趣味のご主人様ではなかったというのもあるのですが」

「ごめんなさいね、変なこと聞いちゃって」

「ですが、女はまだましなほうなんです。男の奴隷などは悲惨なものです。私も今はいいですが、年を取ればどうなることか……」

妙な空気になってしまい、ダフニーとナタリアは押し黙った。すると代わりとばかりに大魔王が話した。

「大体はわかりました。しかし理解出来ません。なぜあなたは奴隷という立場に甘んじているのでしょうか？ 話を聞いている限りでは、タブチという方とあなたが戦って負けたというわけではないんですよ？」

「そんな！ 戦うなんて！」

「勝者が敗者を支配するのは分かるのですが……あなたはなぜ戦わなかったのですか？ 奴隷でよかったですか？」

ひどい質問だとダフニーは思った。普通は無理だろう。環境や立場に流されてしまうものだ。

「大魔王様、それは無理じゃないですか？ そりゃ大魔王様はお強いかもしれませんが、ナタリアさんにそう言っても……」

「私も昔から強かったわけではありません。幼く非力だった私はとても可愛いのでさらって隷属させようとした方もおられますが……」

この人も自分で言っちゃったよ！ なんたる、この調子なら私も自画自賛してもいいんじゃないかな！

「ひきちぎって、くわえさせてあげました」

「何を！」

いや、聞きたくないけど！

「人にくわえろと言うのですから、さぞおいしいのでしょう。まず自分で味わえばいいと思います」

「あー、その可哀想な人は別にいいんですけどね、その、大魔王様、セプテム国には支配の王錫というレガリアがありましてですね、奴隷は逆らえないんですよ。ね、そうですね、ナタリアさん」

「はい、どのようなものも心を支配され逆らうことは出来ません」

「あ、でも国外だと関係ないですよね？」

「はい。ですので基本的に奴隷は国外には出られません。ですが、タブチ様の作られたこの首輪があるため国外へ行くことが可能となったのです」

「ふむ……支配の王錫ですか……それは初耳ですね。そんなレガリアがあるとは知りませんでした」

大魔王が顎に手を当てなにやら考え込んでいる。

「あの、大魔王様？」

「ああ、少し考えていました。レガリアの性質からするとおかしいと思ひまして。精神支配系のレガリアというのがありえるのかと。

私の知っているのは、春風の外套、凶王の修練場、救済の王冠ですね。どれも物理的な効力しかありません」

「んー、私の知っている残りは、召喚の印章、誓約の天秤、侵食の宝玉ですね。それでレガリア保有の七大王国とされています。確かに心に作用するのは支配の王錫だけのような気がします」

「あ、すいません。あまり関係ありませんでしたね。それでその首輪というのは？」

大魔王が話を元に戻した。

「はい、タブチ様には魔法の道具を創り出す不思議な力があつたのです。この首輪もタブチ様がお創りになられました。この首輪には支配の王錫と同等の力がこめられていて国外でも奴隷を支配することが出来るのです。ですので私はこれから先も奴隷として生きるほ

かはないのです。この首輪が自動的に大魔王様を新たなあるじとして仕えるようにと強制するのです」

「ああ、そういうことなら少し言い過ぎましたね。戦うにも戦えないという状況を失念していました。すいません。ですがまあこの程度のもは」

そういうと大魔王はナタリアの首元にそつと手をやり首輪にふれた。金属製の見るからに重々しい首輪だ。魔法で創りだしたもののためか継ぎ目がない。

ぶちん、とナタリアの首元で音がした。

「ええー！」

ダフニーが素つ頓狂な声を上げた。ダフニーは大魔王が無造作に首輪を引きちぎるところを見ていた。まさかいきなりそんなことをするとは思ってもみなかった。

「え？」

もつと信じられないのはナタリアの方だった。この首輪はそんな簡単に破壊できる生やさしいものではない。あのタブチが不変と支配の効能こめ、全身全霊で作上げたものだ。ナタリアはタブチ本人がそれほど強くないことは知っていたが、その能力の理不尽なまでの強力を全く疑ってはいなかった。

「どうですか？」

ナタリアは大魔王の声で我を取り戻した。

「あ……はい。なんだか頭がすつきりしてきました……」

「よかったですね。これで自由ですよ」

「え、でもタブチ様は絶対に壊れないように特大の魔力をこめたと

……」

イミュータブル

「不変オブジェクトでしたが、絶対なんてないです。世の中そんな
ものですよ」

「はあ……」

ナタリアにはとても信じられなかったが首輪の呪縛から解放されて
いるのは事実だった。

「では後はおまかせしてもいいですか？ 昏間の騒ぎであまりご飯
を食べていないのです」

大魔王が立ち上がった。帰るらしい。

「あ、はい。わかりました。ナタリアさんは関係部署と連絡の上適
切な処置を行います」

「ちよつと待つてください！ 大魔王様！ わ、私が大魔王様にお
仕えるのは駄目でしょうか？」

ナタリアも立ち上がると大魔王にすぎるように言った。

「ナタリアさん、何言っちゃってるんですか。せつかく解放され
たんですよ？」

「大魔王様は奴隷は必要ありませんか？」

あちゃー、奴隷根性丸出しだよ、この人。だめじゃん。

いきなり奴隷じゃないと言われても無理なのかもしれない、そう
は思っても微妙な感情にダフニーはとらわれる。

「必要無いです。ですがまだついてくるといふのなら好きにしたらいいと思いますよ。それはあなたの自由です」

大魔王は出口へと向かうと扉の前で振り向いた。

「さいころりんの件はよろしくお願いしますね」

そう言って大魔王は去っていき、ナタリアがその後を追った。

2話 不変（前書き）

少しわかりにくいですが、異世界の少年が出てくるパートは時系列的には若干過去となっています。

あと、今回調子にのってルビ振り過ぎました。……見づらい気もするので後で手直しするかもしれません。

それと、今回今まで番外編にしか出てなかった人が出てきてたりします。あまり説明いれてませんので、気になったら番外編をお読み下さい。

2話 不変

「ここは相変わらずだな、雑然としてまとまりがない」
「人の趣味にけちをつけるでないわ」

雑多な骨董品であふれたこじんまりとした部屋の中、自らを神と称する者たちが向かい合っていた。

一人はこの部屋の主。貫頭衣を来た小柄な少女だ。机の上であぐらをかいている。

もう一人は中肉中背の男だ。こちらも少女と同じような格好をしている。机の前に立ち少女を見下ろしていた。

「で、なんじゃ？ まさか人のコレクションに文句をつけに来たわけでもあるまい？ ピュティアスよ」

「ああ、いやイシュタル、お前に聞きたいことがあってな。しばらく前からなのだが、タブチからの連絡がない。なにか心当たりはないかと思つてな」

「タブチとはなんじゃね？」

「ん？ うちで用意した駒だ。お前も参加しているだろう？」

「あああれかの。すっかり忘れとつたわ」

イシュタルと呼ばれた少女は目を見開いた。そういえばしばらく前に少年を異世界に送り込んだ。

「おいおい、しっかりしてくれよ。ゲームなんて体裁は取っているがこれはかなりの重大事だろう？」

「ふむ、でタブチとやらがどうした？」

「ああ、生存報告が途絶えた。三日に一回の定時連絡ボーリングもない。これは憂慮すべき自体なのだ」

「ふむ、定時連絡かどれどれ、うちのはどーだったかの？」

そついうとイシユタルは懐から取り出した手帳をパラパラとめくりだした。

ハートビート 生存報告は一時間に一回送られてくるただ生きていることを伝えるだけの通信だ。対して定時連絡はそれまでの活動記録を圧縮して伝えてくる。あまり高濃度の魔力を頻繁にやりとりするわけにはいかず、通信量を抑えるためにこのような方式を取っていた。

「ふむ、うちのからは定時連絡が来とるし生存報告もあるの。今のところ生きとるようじゃな。そーいえば、あれはなんと言ったか…
…ああ、そういえば名前も聞いたらんかったな」
「お前、本当にやる気なかつたんだな……」

ピユティアスは呆れたように言った。

「やる気はあつたぞ。サイコロを振るのは面白かつたしの。で、それがどうしたね？ あの世界はそれなりに過酷じゃる？ 死ぬこともあるやもしれぬ」

「それが考えにくいのだ。タブチが得たのは魔導具生成だ」

「それは……ずるいのう。うちの万能魔法よりずるいぞ？」

「やつには不変属性や、魔法を込めたアイテムを数多く身につけ用途に応じて使い分ける方法などを教えておいた。サイコロは17だったが全て魔導具生成の取得に使った。翻訳や身体強化は生成した魔導具で補えるしな」

「……まめじやのう。わしは魔法の説明なんぞろくにせんかつたぞ」
「お前勝つ気ないだろ？」

ピユティアスはますます呆れた。

「うちの万能魔法とは言うが結構な制限があるからのう。一度に使えるのは一つの魔法だけじゃし、効果時間は短い。が、そっちの魔導具生成なら予め魔法を設定した魔導具を数多く用意しておけば複数を同時に発動出来るし、永続効果も持たせられる。まあこっちは口に出すだけじゃからの。機転を利かせばなんとかなるやもしれんが」

「万能魔法ならあるいはと思ったが……やはりタブチが死ぬとは考えられん」

「なぜじゃ？ 衣服を不変にしたところで、顔など素肌が出るとこ狙えばいいじゃろ？」

「それがだな、イミュータブル不変化を施した強化外装を隠蔽状態にして常に身につけているのだ。死角はない」

「んー、ならあれじゃ、女を抱く時は裸になるじゃろ？」

「それも言い含めておいた。女を抱くときは必ず相手が逆らえないように魔導具で支配してからにしろと。あいつは下卑た男だが、猜疑心は強い。これは守っているはずだ」

「そうじゃな。じゃあ毒ガスなんかはどうじゃ？ いくら全身を鎧で包んどったとしても息をせんわけにはいくまい？」

「タブチは生成した再生蟲を体内にひそませている。全身の八割までなら失っても瞬時に再生が可能だ。毒ガスに蝕まれたとしてその部分の組織は瞬時に再生する」

「お主そこまでして勝ちたいのか？」

最初は適当に聞いていたイシユタルだったが徐々に真剣味を帯びだした。タブチとやらがおいそれと死ぬようには思えなくなってきたのだ。

「参加する以上、最善は尽くしたい」

「やりすぎじゃろ、ほれあれじゃ、最近聞いたんじゃが、ずるといチートうやつじゃ」

「まあ再生能力はおまけだな。あくまでタブチの無敵性は^{イミュータブル}不変属性にある。これが破れるわけがない」

不変。不壊と言い換えてもいい。この属性を与えられたものは壊せなくなる。

「ふむ……ではどう考えるね？」

「まず二通りある。一つは死んでおらず通信を断った。もう一つはまあ、死んだということになるが」

「通信を断つのは無意味じゃな。肝心の魔導具生成やらなにやら能力が使えなくなるしの。その場合の可能性としては我ら以上の後ろ盾を用意した……ということじゃろうがそれもないじゃろ。我らが貸与えた力がなければただのひ弱な人間であるゆえに利用価値はないしの。あやつらには情報は与えておらんから何も引き出すことはできんし」

生きている方向で考えるのは早々に切り捨てた。生きているとするならとりあえず問題はないからだ。

「では死んだというのか？」

「んむ、その場合はどのようにして^{イミュータブル}不変を破ったかが問題となる。お主が心配しとるのはこれじゃろ？」

「ああそうだ。我らが、^{イモータル}死の運命から逃れし者、などと呼ばれるのはひとえにこの^{イミュータブル}不変があつてこそだ。^{イミュータブル}不変が破れるならそれが根底からくつがえることになる」

「ふむ……ではお主がタブチを殺すとするならどうする？」

ピュティアスは少し考え込んだ。様々な可能性を考慮する。

「……俺なら奴の力を全て取り上げてから殺す。まともに戦っては

決着がつかんな。お互い不変イミュータブルで身を守っているからな……イシユタル、お前なら出来るか？」

「可能じゃな。今回参加者に与えた能力は、新たに立ち上げた魔導サ供給機レバから供給しておるし、資源は各自の持ち寄りじゃ。つことるのは共通書庫コモンライブラリじゃしその秘密鍵なら知っておる」

「秘密鍵を知らなければ不変イミュータブルは破れないという前提でいいか？」

「そりゃそうじゃろ。総当りでは世界が終わるまで試しても無駄じゃぞ？」

「では……秘密鍵が漏れた可能性があるな。何人が知っている？」

「共通書庫コモンライブラリの開発に参加したものなら誰でも知つとる。今回の参加者10名は全員知つとるじゃろつが……まさかやつらを疑つとるのか？」

「他にどう考える？」

「いや、そりゃないじゃろ。秘密鍵が漏れたならゲームの勝ち負けどころの騒ぎではなくなるぞ？ そんな馬鹿はおらんと信じたいがのう……ああ、馬鹿がひとりおつたの」

馬鹿という言葉から一人の神をイシユタルは思い浮かべた。

「誰だ？」

「今回の件の根本原因様じゃよ。異世界で行方不明になった我らが主神デウスじゃ。奴なら秘密鍵も知つとるし、どれだけ能力を与えられていようと人間ごと殺せるじゃろ」

「確かに主神デウスなら殺せるだろう。だが、俺たちはまさにその主神デウスを探すためにこんなまわりくどいことをやっているんだ。主神デウスがなんのためにそんなことをする？」

「……帰りたくない……のかのう？」

「いやいや、異世界から出られなくなつたと救難信号を出してきたのはその主神デウスだ。それだと根本からおかしいぞ」

考えが行き詰まってしまったようで二人は沈黙した。

「深淵に至りし者……」

ぼそりとイシユタルがつぶやいた。

「なんだそれは？」

「わしもよくは知らん。ただ我らは以前それらしきものに滅ぼされかけたことがある……らしい。それは魔導の深奥に到達したと者だと言つことらしいの」

「らしい、とかい加減だな。そいつなら不変イミュータブルをやぶれるというのか？」

「さあおう、ただその襲撃で半数以上の神が滅した。ならば不変イミュータブルは通用しなかつたんじゃろうな」

再び押し黙る。そのうちイシユタルが何かを思いついたのか手帳を確認する。該当する情報を得たのかすぐに顔を上げた。

「うちのがタブチとやらと会ったことはあるようじゃ。このあたりから何かわからんかの？」

「ふむ、うちの記録にはなかったな。本当か？」

「嘘つくほどのことでもなかるうて。つまりうちのと会ってから、ボーリング定時連絡までの間になにかあつたんじゃろ？」

イシユタルは疑われたことで若干不機嫌になった。

「そいつと連絡が取れないか？」

「こちらからあちらへの通信は無理じゃ。フィルタリング選別で弾かれるし、あちらの神に我らの行動がばれる可能性大じゃ。クエスト向こうからの要求にレス答を返すということならそれは正当な手続きプロトコルじゃ。堂々としておれ

ばよいのじゃが、こつちからはさすがにのう」

そう言うとイシユタルは机の上から下りキャビネットの中をこそごと探し始めた。

「しかしそれを言えばあちらへ人間を送り込むというのはそもそもどうやってしているんだ？　こちらから関与出来るのだろうか？」

「なんじゃ、そんなことも知らんでやっつたのか。主神デウスがあちらリピーターに中継局を用意したのじゃよ。そいつがこちらにアクセスしてきるので、我らはその応答レスポンスとして魔力を送り込んでおる。それが確認出来るだけで十個じゃ。手先共に依代だとゆーて与えたのがそれじやの。定時連絡ボリリングもそいつがやっちやる」

イシユタルは目的のものを見つけると机の上にそれを置いた。上面の開いている小さな箱だ。

「なんだそれは？」

「箱庭じゃな。ここにうちのやつの活動記録を展開しようかと思つての」

その何もない箱庭の中に森が出現した。その中心には一人の少年が倒れている。枝葉で隠れている部分は見やすいように半透明になっていた。

「ここからじゃな」

二人の神が見守る中、箱庭の中の小さな少年が立ち上がった。

コーイチは戦いの喧騒がする方へと走った。近づくにつれその音は大きくなりはしたが、喧騒自体は次第に収まっていくようだった。戦いが終わりつつあるのだろう。

ある程度近づいた所で慎重に歩を進める。いきなり戦場へ飛び込むほど馬鹿ではなかった。

ひどい匂いがする。血の匂いなのだろうが、日常で血の匂いなどそう嗅いだことはない。鉄臭いやな匂いだがそれだけではなかった。忍び寄るにつれその異臭はますます強まる。排泄物の匂いが混じっている。ここまで強烈な匂いは今まで嗅いだことがない。

コーイチは吐き気を我慢しながら、戦いの場をこっそりと覗き込んだ。森の中を通る舗装されていない道だった。そこに馬車が止まっている。その馬車に黒い子供のような大きさの獣がとりつき、手に持った剣や、棍棒をガンガンと叩きつけている。

大きめの猿のように見えた。ただの猿と違うのは鎧を身につけ、手に武器を持っているということだ。それなりの知能があるのだろう。猿は全身を遠目から見ると微妙に歪んでおり見るものを不安な気分にする。頭には角のように見える瘤が突出していた。

馬車の周りを見ると猿と人間が何人かと馬が倒れていた。倒れた人間は全身を切り刻まれた上に腹をさかれ臓物を掻きだされている。その中身は馬車とは別の場所で踊り続けている猿達の手にあった。

勝利の踊りなのだろうか、血まみれになった猿達は体中に腸をまきつけ、内臓や人の生首を剣の先に刺して掲げ陽気に踊っている。踊り狂う猿たちは馬車を襲っているものに比べると大分大きい。人間の大人と変わりなかった。

生きている人間の姿は見当たらない。勝負はすでに決していた。

「うえ……これ無理だろ」

コーイチは木の陰に隠れた。

意気揚々とやって来たコーイチだったがいきなり怖気付いていた。負けるとこのような目に会うとまざまざと見せつけられたのだ。どこの誰とも知らない人間を助けるのに危険をおかす必要はどこにもない。このまま引き返そうかと思った。

馬車を見てみる。猿が執拗に叩き続けているのだからまだ中には人がいるのだろう。

微かなうめき声が聞こえたような気がした。踊り狂う猿たちの足元だ。まだ生きている人間がいたのかと木の陰から顔を出してそっと見てみた。男だ。弱々しく喘鳴がする。手足には剣が突き立てられ地面に貼りつけられていた。他の犠牲者と比べると手ぬるい処置だ。わざわざこんなことをする必要はない。弄んでいるのだ。その歪んだ獣性のはつきりと感じられた。

コーイチはその男と目があつた。男がすぎるような目付きで少年を見る。微かな希望がそこにはあつた。

やめてくれよ

コーイチは後ずさつた。そのまま立ち去ろうと思う。いきなりこれは無理だ。異世界にもう少しなれる必要がある。撤退に移ろうとしたときだ。地に貼りつけられた男がコーイチにとって信じられないような暴拳に出た。

「助けて……」

まずい！

興奮し踊り狂っていた猿たちがその動きをとめ男の視線をたどる。猿たちの狂乱に濁った目がコーイチの姿を捉えた。

どうする？ 逃げるか？ いや、俺には身体能力と魔法がある！

「わ、我は命ず」

逃げるか戦うか。その逡巡は命取りだった。二匹の猿がコーイチに向かってくる。速い。強化されている視覚で追うことは出来たが体が即座に反応しない。

猿達はコーイチの脇を通り過ぎ背後へと回りこんだ。

ボトリと何かが落ちた。こんな状況なのにコーイチはゆっくりと視線を地に落とした。人の腕が転がっている。それが自分の肩から先の腕だと気づくのに少し時間がかかった。

右腕だ。左腕で右腕を確かめようとすると左腕も動かない。左腕は肘から先が無くなっていた。両腕から血があふれ出ている。嘔き出すほどではないのは筋肉が収縮しているせいだろうか。

「げふ、げふ、げふ」

猿たちが奇妙な声を上げた。笑っているのだろう。コーイチはのろると猿たちの方へと振り向いた。

一匹の猿は血まみれの剣を振り回していた。あれで切られたのか。もう一匹は左腕をその大きな口でくわえている。噛み千切られたらしい。

不思議と痛みはなかった。あまりのショックに痛覚が麻痺しているようだ。まるで現実感がない。

猿たちはコーイチの実力を見切ったと思ったのだろう、それ以上の攻撃は仕掛けて来なかった。げふげふと笑い続けている。このままゆっくりと鬨るつもりなのだろう。

何がおかしい！

コーイチの内に怒りがこみ上げてきた。

「……我は命ずる……爆ぜろ……」

猿たちの頭がポンという軽い音を立てて爆ぜた。びちゃりと血と脳漿があたりの木々にぶちまけられる。あっけないものだった。猿たちにはなすすべはまるでなかっただろう。頭部を失った猿の体はどさりと地に倒れびくびくと痙攣している。

コーイチはその結果を見届けるとうずくまり激痛に転げ回った。麻痺していた感覚が戻りつつある。

痛い、痛い、痛い、ちくしょー！　なんだよこれは！

「うう……我は命ずる……癒やせ！」

コーイチの体が光に包まれる。一瞬にして両腕は元の姿を取り戻していた。寝転がったまま両手を何度もさすりその感触を確かめる。傷は完全に治ったようだがまだどこかが痛いような気がした。

「ははは……なんだよこれ……。なんだよこの世界……」

神から与えられた能力でなんでも出来るのかと思っていたがそうではないのだと突き付けられたように感じた。魔法でなんでも出来ると言っても今の猿のように呪文を唱えるより早く攻撃されてしまえばそれで終わりだ。今の場合も猿がすっかり油断しきっていたから助かったのだ。そのまま一気に殺すつもりでこられていたなら終わっていただろう。

「どうする？　……勝てるのはわかった。けど、これ以上関わらな

くてもいいんじゃない……」

すっかり弱気になっていた。だが、逃げるにしろ戦うにしろここに居続けるのはまずい。猿たちは十匹以上がすぐそこにいる。二匹は森の少し中で死んだためまだ気づかれていないのかもしれないがそれも時間の問題だろう。

コーイチはまた迷った。逃げるか戦うか。だが様子が少しおかしかった。そろそろ異変に気付いた猿たちがこちらに来てもよさそうだったが特になにもおこっていない。

「なんだろう、この猿は。見たことないな。イルは何か知ってるか？」

そんな声が聞こえてきた。馬車から人が出てきたのだろうか？
まだ若い男の声だった。

「魔獣の一種です。猿が魔獣化して幾世代も交配を繰り返す歪な形状となっています。この地方では子鬼と呼ばれているようですが、親鬼がいるわけではありません」

こちらは少女の声だ。凄惨な殺戮の現場を見ているはずだがとても冷静に聞こえる。

「ア、アルくん！ ひ、人が死んでる！」

こちらも少女の声。先ほどの少女よりは年上のようだが、上ずった声だ。

「見たらわかるよ」

「なんでそんなに冷静なの！」

「まあ、この場で慌てるのはリーリアだけだろうね」

コーイチは馬車のあたりがよく見える位置に移動しまたもや木の陰から顔を出し様子をうかがった。

アルと呼ばれた少年が二人の少女をかばうようにして馬車の側に立っていた。

「おや、大魔王ちゃんどこいくんだい？」

魚屋の呼び込みをしていた恰幅のいいおばさんが声をかけてくる。

「こんにちは。ごはんを食べに行きます」

挨拶に困るような時間帯だ。あたりは夕焼けに染まりつつある。

「いつもの酒場に行くのかい？ 魚でよけりゃあげるよ。さばいてもらいな」

「ありがとうございます」

ここは生鮮物を取り扱う商店が立ち並ぶ商店街だ。ひっきりなしに声をかけられる大魔王をナタリアは信じられない思いで見つめていた。

ナタリアは大魔王の後ろを控えめに歩いていた。邪魔者扱いはされていないので付いていつていいのだと勝手に思っている。

ナタリアは自分の仕事だとばかりに前に出て魚かごを受け取った。川で取れた新鮮な魚だったのだろうがこの時間帯では大分くたびれ

ているように見える。

「くらえ！」

一際高い声に驚きナタリアは反対側の青果店に目をやった。少年が何かを投げようとしている。大げさなモーションから林檎が投げつけられると大魔王はそれを片手で受け取った。

「いつもありがとございます。でも林檎は飽きたのでそろそろ別のがいいです」

「くっそー！　なんであたんねーんだよ！」

悔しそうに言う少年の頭を隣にいた親父がどついた。

「林檎の分は小遣いから引いておくからな！」

なんなのだろう、これは。ナタリアには意味がわからなかった。そもそも大魔王というものがわからなかった。大魔王とは魔族の頭領だと聞いている。こんなところにいるというのがわからない。

それに大魔王だというのならこの町の人たちの扱いはなんだというのか。畏怖も敬意も尊敬もまるでない。気軽に話しかけ、ものまですぶつけてくる。

大魔王は林檎をもしやもしやとおいしそうに食べていた。大魔王は大抵のものはおいしそうに食べる。見ていて気持ちが悪くなるような食べっぷりだ。そのためか、大魔王の無銭飲食に対して本気で怒る気になれない人も多かった。

大魔王は芯の部分を残して食べきると、それを適当に放り投げた。ナタリアは思わずそれを目で追ってしまう。その芯は地面に到達するまえに、どこかから飛び出した黒い影が奪い去りそのままどこかへ消えてしまった。

「え？」

ナタリアは知らなかったがそれは大魔王ファンクラブと呼ばれる者たちの仕業だった。この後、大魔王が食べ残した芯をめぐって死闘を繰り広げることとなるだろう。

「あの、大魔王様、どちらに向かわれているのでしょうか？」

ナタリアがおずおずと問いかける。大魔王はお腹がすいたと言っていたがこの商店街は目的地ではないらしい。

「アレがヤバイ亭です。先ほどあの方が暴れたのでひどいことになっていますが厨房は無事でしたので何か食べさせてくれるかもしれません」

そう言われるとナタリアは自分が暴れたわけでもないのに申し訳ない気分になった。

商店街を抜け、広場に出てそのまま町外れの方へと向かう。ゆっくり歩いていたため酒場に到着したのは日が暮れた頃だった。

アレがヤバイ亭は無惨な姿になっていた。壁には大穴が開いている。いつも大魔王が座っている窓際の席のあたりだ。そこから見える店内はあちこち焼け焦げてもいた。幸い構造的に重要な部分は無事だったのか建物が倒壊するような気配はなかった。

だが瓦礫や木っ端が散乱して店内はとても食事が出来るような環境ではない。

「ああ……戻ってきたのか……」

大魔王が大穴から店内をのぞくと、しゃがみこんだデリクが瓦礫

をまとめていた。大魔王に気づくとのろのろと顔を上げる。死んだような顔をしていた。

あたりではデリク以外にも常連客が片づけを手伝っていた。瓦礫やら割れたテーブル、砕けた椅子やらをまとめている。

デリクはそのまま立ち上がると手伝ってくれている客たちに声をかけた。

「みなさん、今日はもう暗くなってしまいましたのでここまでにしたいと思います。ありがとうございます」

デリクが深々と頭を下げる。いつになく真摯な態度だった。

客たちもそれに「気にすんなよ」「お互い様だ」「またうまい飯くわせるよな」と優しく応える。

「……とてもごはんを食べに来ました。と言える雰囲気ではありません……」

「言ってるじゃねーか!」

しょんぼりと言う大魔王にデリクは反射的にツッコんだ。ツッコミはもう習性にすらなってきた。

「あ、いや大魔王。半分ぐらいあんたのせいな気もするが、助けてくれてありがとう。おかげで誰も死なずにすんだ」

「オカミさんは大丈夫ですか?」

「シヨックで寝込んだよ。だから飯を出すのは無理だ」

デリクは先程から大魔王の後ろからちらちらと見え隠れする人影が気になった。

「その人は?」

タブチとかいう男と一緒にこの店にやってきているので見ているはずだが、襲撃に気を取られ一緒にいた女性のことなどまるえ覚えていなかった。

「ナタリアさんですよ」

紹介されたからかナタリアは大魔王の影からあらわれた。

「こんばんは。ナタリアと申します。この度大魔王様の奴隷をさせていただくことになりました」

突然の奴隷宣言にデリクが驚いていると、背後で何か落ちる音がした。まとめていたゴミを帰る前に片付ける途中だったがそれを落としてしまったようだ。ゴミをばらまいてしまったのは王城で近衛兵をしているディートヘルムという男だった。ディートヘルムは目を見開き大口を開け何かに耐えるように震えていた。

「大魔王様の……奴隷……だと!？」

そう言うところめき壁にもたれかかる。何かにつけ大げさな男だった。

「おい、大丈夫か。ディートヘルム」

一緒に来ていた近衛兵の仲間たちがディートヘルムを介抱するために近寄った。

「王城へ行かねば……」

「何を言っている？ 今日是非番だろうが」

「暇を乞わねば……近衛兵をやめるのだ……」
「おい!？」

デイトヘルムは差し出された手を払いのけた。

「大魔王様の奴隷! なんとという甘美な、魅惑の響きか! どけ!
! 私も大魔王様の奴隷となるのだ!」
「おい、落ち着け、頭を冷やせ!」

またあいつかよ。

そんな騒ぎがまきおこるのをデリクは呆れたように見ていた。
大魔王もそんな騒ぎにはまるで興味がなかったようだ。

「おなががすいたのでご飯を探しに行きます。これはデリクさんにあげます」

そう言つと魚の入ったかごをナタリアから受け取り、デリクに渡して立ち去った。

大魔王は広場の屋台で串焼きをもらっていた。人の頭ほどの大きさの肉のかたまりを五個並べて長い鉄串で刺したものだ。この店はないにもこんなものばかり売っているわけではなく、小、中、大、特大、超特大と様々なサイズバリエーションを用意していた。大魔王はもちろん超特大に目を付けた。

店主はやけくそ気味に一番値の張る串焼きを差し出し写真を撮ら

せてもらうことにした。巨大串焼きを手くにこやかに微笑む大魔王はとても絵になる。

広場は夜だというのに明るく喧騒が耐えない。広場の照明は実驗的に電灯とガス灯が併用されていた。おかげで昼のように明るくここ最近の街の活動時間は伸びつつある。

大魔王は肉を手には歩き出した。ナタリアもそれに続く。大魔王は歩きながらもしゃしゃと肉を食べ始めた。ナタリアはそれを呆けた様に見ていた。とても食べきれるようなサイズではないと思っていたがあつというまにかたまりを一つ平らげている。

ナタリアの視線に気づいた大魔王は肉を隠すようにして言った。

「む、これはあげませんよ。欲しかったら自分で買ってください。それともお金を持っていませんか？」

「いえ、日常的に使用する分はタブチ様にいただいていましたが……」

「あなたは私の奴隷だと言っていますますが私にはそのつもりはありません。食事まで用意するつもりはありませんから自分でなんとかしてくださいね」

「え？」

ナタリアは大魔王を思わず見つめ返した。なんとなく大魔王の屋敷のようなものがあり、そこで衣食住が保証されるような気になっていたがそれは勝手な思い込みだ。

「どうしますか？ 何か買ってくるなら待っていてもいいですけど」「わ、わかりました。すぐ戻ってきますので！」

ナタリアは慌てて引き返し、先ほどの串焼き屋で手のひらサイズの小さな串焼きを買ってきた。

「少食ですね」

そう言う大魔王の手にはすでに串焼きはない。食べきってしまった。ナタリアはあんな量がどこに入ってしまったのかと大魔王のお腹をみてみたが、すらりとした均整のとれた体型を保っている。ナタリアが戻るのをちゃんと待っていた大魔王は再び歩き出した。食事は済んだ。ではどこへ向かうのだろうとナタリアは怪訝なおももちでついていく。

大魔王に特に目的はないのかふらふらと適当に歩いているようだ。つたが、突然目標を定めたのかある民家へ向かった。

「あの……大魔王様。もしかしてこちらがご自宅なのでしょうか？」

二階建てのこの街中ではごく一般的な家屋だ。大魔王と名のるようなものが寝泊まりする所とはとても思えない。

「違いますよ？」

民家の庭に入るときよろきよると何かを探している。庭の隅にあった目的のものを見つけるとそれを持ってきて民家の壁に立てかけた。梯子だ。

ナタリアは一体なにをされているのだろう、とぼーっと見ていた。大魔王はあたりまえのように梯子を登りだした。

「えーっと……大魔王様？」

「はい？」

大魔王が梯子の半ばで振り返り地上のナタリアを見る。ナタリアは見上げながら、スカートの中は微妙に見えないんですね。などとどうでもいいことを考えていた。

「その……何をされているんですか？」

「梯子を登っているんですが？」

「それはわかるのですが……」

「ああ、それはですね。今日はこちらで寝ようかと思ったのです」

意味がわからなかった。どういふことかと考えていると大魔王は梯子を登りきって屋根の上へと姿を消した。

ナタリアも慌てて梯子を登りだしたが、今までの生活で梯子を登った経験などほとんどない。下をみないようにながら震える思いでなんとか登り切った。

屋根の上には仰向けに寝そべっている大魔王の姿がある。

「あの……痛くないんでしょうか？」

テラコッタで出来た屋根瓦はごつごつとしてとても寝れるような場所とは思えない。

「大丈夫ですよ。でもナタリアさんには辛いかもしれませんね。別にあなたもここで寝なくてもいいんですよ？」

「いえ……私もここで寝ます！」

試されているような気がしてナタリアは意地になった。

ナタリアは斜めになっている不安定な屋根の上をおっかなびっくり歩いて大魔王の側にやってくると隣に座った。想像どおりにごつごつとしている屋根は座っているだけでも痛い。

「なんだかつらそうですね」

「大丈夫です」

「わかりました。少しおまちください」

そう言つと大魔王はごろりと回転してうつ伏せになった。そのまま這つようにして屋根のへりまでいきそのまま身を乗り出す。ナタリアがあっけに取られているとつま先だけを屋根の端にひっかけて逆さになった。

コンコンと音がする。様子はわからないが、すぐ下の窓を叩いているようだった。

「ぎゃああああ」

悲鳴が聞こえてくる。

「こんばんは。お楽しみの所すいません」

すこし経つて窓が開く音がした。中からは男の声が聞こえてくる。

「大魔王さんじゃねーか。いきなり逆さで窓の外に現れたらびっくりするでしょうが！」

「何か毛布のようなものを貸していただきたいのです」

「あ、ああちよつと待ちな」

毛布を受け取つた大魔王はいつのまにか屋根の縁に立っていた。ナタリアにはあの態勢からからどのようにして復帰したのか、見ていたはずなのによくわからない。

大魔王はナタリアの側にくると毛布を手渡した。

「これで大丈夫でしょう」

「はい、ありがとうございます……」

大魔王が非常識なのはわかってきたが、街の人間もたいがいと

思った。なんなのだろうこの国は。疑問ばかりがわきあがる。

ナタリアは毛布を敷いてその上に座った。毛布は柔らかく尻が痛むことはなくなった。ここで寝るのも可能だろう。

大魔王も再び横になった。

「この国の人たちはみんなこうなのでしょうか……」

「そうですね。楽しい方ばかりですよ」

マテウ国は比較的裕福で人々の暮らしにも余裕があるし、常春の季候は人々をおおらかにするのだろうか、最初はとまどったものの大魔王の存在にはすぐに順応している。

「ですからナタリアさんもここで暮らせばいいですよ。みんな仲良くしてくれます」

ナタリアの目から涙が自然とこぼれ落ちた。

「あ、あれ？」

涙の理由は自分でもよくわからなかった。親切にされたからだろうか？ それともセプテム国とマテウ国のあまりの違いに驚いてだろうか？ だが悪い気分ではなかった。

大魔王はナタリアが泣き止むまでぼうつと空を見ていた。空には優しく光る猫の月がある。それに向かって手をふったりしていた。

「ところでナタリアさんはロクス村の出身なんですよね？ コーデリア先生がどこにいらっしやるかご存じないですか？」

「コーデリア先生をご存知なんですか？」

思わぬ名前にナタリアは驚いた。ロクス村で子供たちに勉強を教

えていた女性だ。ナタリアも奴隷狩りに会うまではコーデリアに読み書きなどを習っていた。

「げへへ、ねえちゃんいい尻してんじゃねーか！ こっち来てよく見せてくれよ！ ああ、触ったりしねーよ、見るだけだって！」

ナタリアは突然おかしなことを言い出した大魔王をぼうぜんと見つめた。

「と、私のお父さんはこんな話し方だったので、私も似たような感じの喋り方でした。それでは駄目だと思ったのか、お父さんが女の子らしい話し方を教えてもらうようにコーデリア先生に頼んだのです」

「そうだったんですか…… 奴隷狩りにあって以来のことはわかりません。セプテム国でコーデリア先生にお会いしたことはなかったのでもうまく逃げられたのだと思いますが……」

「そうですか。ロクス村には行って見たのですが知らない人ばかりでした。じゃあ私のお父さんは知らないでしょうか？ アンセムという名前なのです。とても大きいので目立っていたと思うのですが」

ナタリアはその名前には覚えがなかったが大男ということ思い出した。確か村のはずれの小屋に住んでいた。大きな体を揺らすようにして歩いていたのを覚えている。足をひきずるようにしていたので足が悪かったのだらう。その大男の後ろを小さい女の子がとてととて、ついて歩いている光景が目につかんだ。

「もしかして足が悪かったのではないですか？ たまに見かけました。その方の側で小さい女の子を見ましたけど…… あれが大魔王様だったのでしょうか？」

「はい！ そうです！」

大魔王は元気いっぱい笑顔でこたえた。女のナタリアでもほれぼれとするような笑顔だ。なぜか顔が赤くなるような気すらした。

「そういえばナタリアさんはこれからどうするのですか？ 私についてきても仕方ないですよ？」

「それは……何かお役に立てればと……」

「私は自分で出来ることは自分でします。出来ないことや他の人が得意なことはお願ひしてやってもらいます。ですので別に奴隷は必要ないのです。ナタリアさんは何か得意なことはありますか？」

「それは……その……」

得意なこと。そう言われても困った。ナタリアはその美貌ゆえに男たちの間でやりとりされてきた。そしてその男たちの相手を務めるのが仕事だった。

自分の価値を示さねば見捨てられる。そう思うと焦った。そうすると答えはひとつしか思い浮かばなかった。

「美人です！ 男の人にもてます！」

「そうかもしれませんが、私の方が美人ですから私の役にはあまり立たないですね」

ある意味似たもの同士とも言える会話だった。お互い自分の美貌に一片たりとも疑いを持っていない。

「あの……訓練は受けましたから女の人が相手でも大丈夫です！」

その……大魔王様のお相手も出来ます！」

時には女の主人の相手をしたこともある。性奴隷としてひと通りの訓練は受けさせられていた。

「なるほど……デリクさんをおちよくるのに使えそうですね……」

大魔王はろくでもないことを考えていた。

「ナタリアさんが面白い人だということはわかりました。ですが、やはり自分のごはんは自分で手にいれなければなりません。働かざるもの食うべからずです！」

デリクあたりが聞いていれば、つばを飛ばしながら盛大に突っ込んでいることだろう。

「そこで！ 私にいい考えがあります」

「なんででしょうか？」

「乳マツサージ師のレオポルトさんが後継者不足に悩んでおられました。ですので、あなたが弟子入りすればいいと思うのです」

「乳マツサージ師……ですか？」

聞きなれない言葉だったがなにか淫靡なものを感じる。

「はい、乳づまりを治す仕事です。前職を活かしてちょうどいいと思います！」

前職。性奴隷であったことをここまで軽く扱われるとは思いませんでした。ナタリアはなにか清々しい気分にならなってくる。

「わかりました……。大魔王様がそうおっしゃるのです。見事にやってのけてみせます！」

ナタリアは拳を握りしめ気合を入れた。

ナタリアは乳マッサージ師としてデビューすることとなった。

2話 不変（後書き）

週一は無理でした……。

3話 奴隸

「イル、こいつらは見た目通りってことでいいか？」

「どういう意味でしょうか？」

「何か特殊な能力を持っていたりは？」

「それはないですね。猿ということと道具を使用する程度の知恵はあるようですが、基本的には膂力をふるうのみです」

「そうか、イルはリーリアを守ってくれ。ベアくまは……いないな。まあ勝手にやっつてるだろ」

アルは背負っていたバツクバツクをイルに渡すと一歩前に出た。

馬車を襲撃していた小猿たちは動きを止め、突然あらわれた三人を睨みつけている。少し離れた所で勝利に酔いしれ踊り狂っていた猿たちも敵愾心をむき出しにして囲みを作るように動き始めていた。

こちらは大人の猿なのかアルよりも巨大なものもある。だが、それぞれの猿のフォームにはあまり共通点はないため、大小もただの個体差なのかもしれない。

アルは敵意を受け流しゆっくりと猿たちに向かって歩き始める。

その動きに焦れたのか胴鎧を着込んだ大柄な猿がアルに向かって駆け出した。手に持った長剣を上段に振りかぶり叩きつける。

アルは一步踏み込んで半身になり内に入るようにしてそれをかわした。かわすと同時に猿の手首を左手で取り右肘を金属製の鎧の中央に真っ直ぐ打ち付ける。胸を打たれ動きの止まった猿の重心を崩すと関節を決めたまま背負うようにして投げをうつ。猿は頭から地面に叩きつけられた。それだけでも致命傷だろうが、アルはさらに接地の瞬間に猿の頭部を踏みつけるように蹴り、その勢いを利用して同時に肘を捻りちぎった。

結果的に猿は頭部を粉碎され、肘をねじ切られた。かわし、打ち、極め、投げ、蹴り、ねじ切る。それらが一瞬の間に行われた。猿は

何をされたのかわからなかったらう。

一匹目の動きに呼応して背後に回り込んでいた猿が、少し遅れて襲いかかってきた。だがアルには無意味だ。魔力肢を死角に配置し常に周囲の状況の把握に務めている。アルは手に持っていた猿の手を剣ごと投げつけた。

顔面にくらってしまい視界を奪われた猿の懐にアルが入る。左足で踏み込み、右拳を胸にまっすぐと突き入れた。鎧が陥没し、その変形した鎧に押しつぶされたのか、中でぐしゅっつと嫌な音がした。鎧ごと肋を潰され肺が空気を漏らした音だ。猿はその場に崩れ落ちた。

それを黙って見ていた猿たちは警戒心をあらわにした。猿たちにはそれなりに知恵がある。この少年の強さを認識し、このまま戦いを続けることの不利益をはっきりと自覚した。

だが知恵があるゆえに彼らは迷った。ただ逃げるのではこの襲撃の意味がなくなってしまふ。久々にやってきた人間達だ。持ち帰り食料として保存しなければならぬ。それに女だ。馬車の中には女がいるし、新たにあらわれもした。

人間の女は繁殖に利用できる。彼らにとってそれはとても重要だった。この集団のリーダーも女を連れ帰ることが出来ればコミュニケーション内での地位が格段にあがるだろう。これほどのチャンスを見す逃すことは出来なかった。

「にいさん、今のは初撃で決まっています。後の投げは無駄な動きです。それが無ければ二匹目にはもつと余裕を持ってあたれました」

「まあそうなんだけど、実戦で試してみたかったからね」

アルは悪びれもせずにそう言った。猿にはまるで脅威を感じていないようだ。

「アル君て……おとなしそうな顔して意外と好戦的だよな」

「そうですね。出自のせいもあるのでしょう。魔族の間で生きるにはそれ相応の対応が必要だったはずです」

「私よくわかってなかったんだけど、アル君て強かったんだね」

リーリアが感心したように言った。そう言うのはアル自身が戦っている姿を見たのはテオバルト戦だけだったためだ。アル自身がどの程度強いのかはよくわかっていなかった。

「そうですね。テオバルト様……テオバルトのような規格外の化物が相手では誰にもどうしようもないですが、この程度敵ではありません。私はいさんの家の裏庭を見たことがあるのですが……踏み固められ石のようになっていました。かなりの歳月を鍛錬に費やしているはずですよ」

二人はのんきに話していたが、そんな彼女らに猿が襲いかかってきた。横手の森から猿が飛び出してくる。

だがその襲撃も失敗に終わった。さらに後ろから飛び出してきた狼が猿の喉笛に食らいついたからだ。

狼は喉笛に食らいついたままぐるりと回転すると喉笛を噛み干切った。猿は絶命しその場に屍をさらす。

「大丈夫ですか！ リーリア様！」

狼が食いちぎった肉片を吐き出すと慌てて声をかけてくる。

「うん、ありがとう、ベアくまちゃん」

リーリアがベアくまと呼んだ狼の頭を撫でる。狼は嬉しそうに尻尾を振っていた。

「貴様！ 何をのんびりとやっておる！ さつさとこの程度の者たち片付けぬか！ リーリア様にもしものことがあつたらどうする！」

周囲の様子を確認し、それ以上の攻撃がないと見たベアくまがアルに対して吠えた。

「逃げ出すかと思つただけ……こいつらまだ迷いがあるな」

アルの闘法は一对多も想定してはいるが、それは受けに関してのこと、大量の敵をまとめて蹂躪するような技の持ち合わせはない。そのため見せしめの意味も込めて過剰な攻撃を行なつてみたのだがあまり効果はないようだった。

さて、どうしようか？

アルはあたりを見回した。

コーイチは森の中からその戦闘を見ていた。

少年が猿に真っ向から向かつていくその姿に戦慄すら覚える。

少年が相手にしたのは人間と対して変わらない大きさの大柄な猿だ。鎧を着込んでいて、大振りな長剣を手にしている。

先程コーイチに襲いかかつてきた小猿などよりずっと強そうに思えた。

それをアルという少年はまるで問題としていない。

気持ち悪いぐらいなめらかに動いてあつというまに猿の息の根を

止めた。

見えないはずの背後からの攻撃にも余裕で対応している。

「なんだアレ？ 中国拳法？ 合気道？」

少年は武術に関してはそう詳しくない。格闘ゲームで知っているぐらいだが、攻防一体となった動きや相手の力を利用した投げなどからそんな感想を抱いた。

他人の戦いを見ていたせいにか心に余裕が戻ってきていた。いきなり襲われて泡を食ったが、離れて冷静に見ていれば猿程度なんということはないと思えてくる。

そう、重要なのは距離だ。一方的に攻撃できる距離を保っていい。近接戦闘など、ろくに喧嘩をしたこともないようなコピーチにとつてどだい無理な話だ。本気で殺しにかかってくる敵と、息遣いがわかるような距離では動転してしまつて勝負にならない。それは身に染みた。

そして魔法なら遠距離で対応できる。猿にも通用した。だがこの魔法にどこまでのことが出来るのかわからない。実戦の前にもう少し試しておけばよかつたと後悔したが、その時あることを思いついた。

「我は命ずる……俺の魔法について詳細を知りたい！」

さつそくその思いつきを試してみる。要はこの魔法自体に魔法の説明をさせるということだ。猿たちの戦闘は膠着状態に陥っているし、あのアルという少年にまかせておけばよさそうだ。今となっては猿たちも自分のことなど眼中に無いだろうと思つ。

ポンと軽い音を立てて煙が立ち上がった。その煙の中から青っぽいものが現れる。イルカのように見えた。

「は？」

「何について調べますか？」

「えーと。お前を消す方法。……じゃなくてなんだよお前！」

イルカがふわふわと目の前に浮いていた。デフォルメされたアニメチックなフォルムだ。つぶらな瞳が愛らしい。

「私は魔法のヘルプ機能です」

「だろうな。ヘルプ機能って顔してるよな。えーと、魔法について知りたいんだけど」

「具体的におっしゃってください」

鼻で笑われたように思えた。そんな表情をする機能はなさそうだが、口調にあざけりを感じられる。コーイチはむかついたが、こんなマスコットキャラクターみたいなもの相手に怒るのも馬鹿らしいと自重した。

具体的にと言われても何を聞いていいのかわからなかった。漠然とどんな魔法が使えるのかを知りたかっただけだ。

「えーと、じゃあ俺の魔法の制限について知りたい」

万能魔法。そうあの神は言っていた。なら出来ることを聞くより出来ないこと、限界や制限について聞いたほうがわかりやすいだろうと思つてのことだ。

「制限事項について説明します。魔法の効果時間は最長一分です。魔法の効力の及ぶ範囲は術者の視界の範囲のみで、視界の範囲内であつても術者を中心に半径100mが有効範囲となります。視界と組み合わせると、術者の前方に扇状に有効範囲があるとお考え下さい。同時に使える魔法は一つです。これは呪文を唱えることにより

使用するため当然のように思われるかもしれませんが、口が複数あったとしても同時に使えるのは一つです」

万能って言う割には制限だらけじゃねーか！ 神もこれぐらい説明しとけよ！

「ただ、複数の魔法を時間差で使用することで擬似的に同時使用のような効果を期待することは出来ます。防御魔法を使用してから、攻撃魔法を使用するようにすれば、防御と攻撃を同時に行えます。ただあまり重ねて使用しすぎると管理が複雑になりますのでご注意ください」

「んー、じゃあ魔法で出来ることと出来無いことの違いについては？」

「万能魔法という名の通り、ありとあらゆる魔法が使用可能です。ですが、なんでもできるわけではなくあくまで魔法の範疇に限りまです。魔法を実際に行使するのは神の作り上げたシステムですので神の力を超えるような事は出来ません」

「……そもそもどんな魔法があるかもわからないのに、使いこなせないんじゃないか？ 今から勉強でもしろってか？」

「ですので私がいるのです。先ほどのあなたが使用された魔法も、あなたの言葉を私が解釈して適切な魔法を選択したのです。念の為に申しますと、出来るだけあなたに不利益がないように解釈は行なっています。猿の手のような悪意に満ちた曲解は行いませんのでご安心ください」

「わざわざそんなこと言われたら逆に勘ぐっちゃうだろうが」

「まあ私次第ということですから、あまり偉そうにはしないほうがいいですよ？」

イルカがその場でぐるりと回転した。些細なことだがそんな動きですらコーイチはしゃくにさわった。

「ははっ、イルカに脅迫されてるよ……俺……」
「魔法について簡単に説明しますと、魔法とは確率の操作です。物理的に無理な現象は再現出来ません。それとあくまで魔法ですので、魔法抵抗、魔法無効、魔法反射等の魔法に関する魔法の影響は受けません。ご注意ください」

確率の操作のくだりはよくわからなかったが、魔法反射には気を付けようとコーイチは思った。必殺の一撃をそのまま返されてはどれほど強力な魔法が使っても意味が無い。いきなりの大技は避けた方がいいな、と心に留めた。

コーイチが魔法について考えていると、ポンと音を立ててイルカが煙の中に消えた。先ほどの話からすると制限時間の一分が経ったようだ。再度呼び出そうかとも考えたが、魔法についての注意点については大体わかった。また疑問があれば呼び出せばいいだろう。

「んー、じゃあどうするかな。とりあえずさっきの二の舞はゴメンだ。まず、防御魔法を使って、身の安全を確保してから攻撃。まあこれが基本か」

このままどこかからあらわれた少年にまかせっきりというのでもよかったが、せっかく助けに来たのだ。初っ端でつまづいてどうすると、コーイチは己を奮い立たせた。

「それにまあ、フラグはこーゆーので立つんだろ？ だったらやらなきゃな！ 我は命ずる！ 俺に対しての攻撃を無効化しろ！」

防御の魔法を唱えながら少年は飛び出した。

アル達は囲まれていた。猿たちは大きめの円を描いて布陣している。あまり近づいてこないのはアルに脅威を感じているためだろうが逃げる気配はなかった。

「向こうから来るつもりはないみたいだな。持久戦でもするつもりか？」

「にいさん、提案があります。ここには死体が山ほどあります。それを操るといのはどうでしょうか？」

イルが足元に倒れている猿を指さして言った。

「これ以上愉快的仲間たちを増やすつもりか？ 勘弁してくれ」

アルは心底嫌そうな顔でそれに応えた。アルには死体を使い捨てるように操るつもりはないし、これ以上やっかいごとを抱え込む気にはなれなかった。

「誰が愉快的仲間か！」

ベアくまが吠える。リーリアがそれをなだめた。

アルはベアくまを見て、まさかと思いつつも物は試しと猿たちに向かって話しかけた。

「なあ……お前ら人間の言葉がわかるんだろう？」

猿の間に動揺が走った。一瞬全員がびくりと動く。必死に取り繕おうとしたがすでに遅かった。アルの言葉に反応してしまった時点

でそれは明らかだ。猿たちは人語を解する。

「やっぱりね。狼が喋るぐらいだ。より人に近い猿が喋れても不思議じゃない」

猿たちが顔を見合わせばそばそばと喋りだした。猿たちが人語を解することを隠すのはそれが有利に働くと考えてのことだ。猿が人語を理解しないと思いついて入っている人間が不用意に何か有用な事を漏らすこともある。

「言葉が通じるなら早い。交渉できるな。僕達はあるんだより強い。けど、別にあんた達を全滅させた所でこっちにメリットはない。引いてくれないかな？」

一番大きな猿が一步前へと歩みでた。この集団のリーダーなのだろう。

「女を一匹よこせ。それで引こう。お前の仲間からとは言わん。その馬車の中にいるものでいい」

猿がはつきりと言葉を口にした。低い男の声だ。

「無理に決まってるだろう？ わざわざ助けにやってきたんだ。それで済む話ならここに来ないよ。あんたらは何も得ずに帰るんだ」

「……わかった。なら死体ならどうだ？」

「まあそれならいいんじゃないかな、馬車の中の人はどう思うかは知らないけど」

猿達にとってこれはそれなりの結果だった。少なくとも人間の死体を持ち帰れば面目は立つ。

アルがこんなものかなと交渉を終えようとしたところ、森の中から何かが飛び出した。黒髪黒目に白い貫頭衣を着た少年だ。

「我は命ずる！ 猿どもふつとべ！」

その少年がそう叫ぶと暴風が吹き荒れた。小型の竜巻が馬車の周囲に無数に発生するとそれぞれが猿だけをとりえる。竜巻に巻き込まれた猿は高速で回転したかと思うと空の彼方へと吹っ飛んでいった。

「……………なんでしょう、あの空気を読んでない感じのバカそうな方は……………」

イルが少年を見て呆れたように言った。

「うーん、まあこれはこれでいいんじゃないかな？ あいつらが引いたあとでしつこくこちらを狙ってくるって可能性もあったし、全員まとめて倒せるならそれはそれで……………」

アルも少年を見ている。注目しているのは少年の背後だ。青くてまるっこい魚のようなものが浮いていた。

「なあ、あれなんだと思う？」

イルはアルが何を言いたいのかを察すると魔力視覚野を強化した。その瞳が赤くなる。

「悪魔ですね。正確には魔術補助装置ヘルパーです。首にかけているネックレスが魔器のようですし、魔法使いなのでしょう」

アルもイルもイル力などという海洋生物は知らなかった。そもそも海に対する知識も曖昧だ。

「随分と単純な呪文だったけど、あれってどうなんだ？ キャシーさんは暗号化したりしてたみたいけど」

「悪魔によつては、術者の声を認識するようです。ただ、声の識別は悪魔側のコストが跳ね上がりますので、そういった形での契約は難しいと思います……そうは見えませんが高位の魔術師なのかもしれません」

突然出てきた少年は、両手を振り上げ大喜びしていた。魔法の効果がよほど満足いったのかあたりをはばからず今にも踊り出しそうなほどだ。

アルはその少年に近づいた。こちらを攻撃してこなかったし、見た限りでは危険はなさそうだ。

「やあ、助かったよ。僕はアル。こっちの子はイルだ。君はどうしてここに？」

声をかけられた少年はキョトンとした顔でアルを見た。

「えーと、俺はマキセ・コーイチ。……んー、苗字と名前とどっちを先に言えばいいんだ？」

「一般的には名前が先だね。じゃあコーイチ、かな？」

「そうそう、コーイチ、よろしく！ で、えーっと……」

コーイチはどう言ったものか迷った。言葉は通じているので翻訳魔法は作用しているらしい。だが、異世界から来たと言ってその意味が正確に伝わるかは疑問だし正直に言ってしまうっていいものか。だがごまかすにも、この世界のことは何も知らない。

「ごめん、なんにも覚えてないんだ。気がついたらこの森にいたんだ」

「覚えてない？ ……いや、別に詮索するつもりはないんだ。そうか、それなら仕方ないね」

アルは出来るだけ猜疑心が表に出ないようにしてそう言った。記憶喪失ということだろうか？ それにしては名乗るのがおかしい。ごまかすにしても下手すぎる。それに魔法を使用している。今もコイチの顔の周りには蜂のような小さな魔法補助装置ヘルパーが空気の振動を操っている。言語翻訳をしているようだった。この北大陸では人間の間に使用される言語は方言程度の違いはあれはば共通と聞いていい。人間同士で翻訳が必要になるはずがない。いろいろとチグハグに思えたがアルはその疑念は保留することにした。

「で、なんだか猿が暴れてるみたいだったしさ。助けないとヤバいかなあーって思ってたさ……」

「そうか。ありがとう。おかげで助かったよ」

アルとしてはそもそもこの馬車への襲撃事件など、どうでもよかった。リーリアが助けようと言い出したのだ。なのでめんどくさいことになったと思っていただけだが、それは一気に片付きそうだった。アルは何もかもこいつに押し付けよう。そう思い始めていた。

「アル君、さっきのすごかったね、猿がびゅーって飛んでっちゃったんだけど」

そう言いながらリーリアとベアくまもやってきた。

「ファンタジー万歳！」

コーイチはそう言ってリーリアをまじまじと見つめた。金髪碧眼で巨乳。幼さの残る顔立ちも美人と言っている。元の世界でこのクオリティの美少女などいるはずもない、そう思えるほどだった。まさにファンタジーの世界にしか存在しないような美少女。それが目の前に立っている。

「ああ、この子はリーリア。で、こちらがコーイチだ。さっきのはコーイチの魔法らしい」

アルが手早くお互いを紹介する。

「へえすごい魔法ですね！」

キラキラとした尊敬混じりの眼差しがまぶしい。コーイチは見とれてしまい呆けたようになっていた。

「リーリア様！ こいつ発情しておる！ 離れてください！」

ベアくまがリーリアとコーイチの間に割って入ってうなりをあげた。

「え、あ、いや、そんなんじゃない、すげえ可愛いなあって……
って狼が喋るのかよ！」

コーイチが頭を掻きながら照れたようにそう言ったかと思うと、大げさに驚いた。

「アル君！ 可愛いって！ ねえ！」

リーリアがはしゃぐようにアルにそう言った。狼が喋る件については説明する気はないらしい。

そんなやり取りには加わらずイルは周囲の観察をしていた。結局この襲撃はたまたまやってきた馬車を猿が襲っただけなのだろうか？ 現場を見ながら考えていたが、馬車に目をやったところでその動きが止まった。

無骨でもあるが装飾の施してある豪華な馬車だ。戦闘を想定しているのか、大げさな鋸がそこかしこにあり、棘のような突起が生えている。窓は小さなものがいくつかあったが全て内側からシャッターが降ろされていた。籠城も可能なようになっていたのだろう。

イルは馬車そのものにはそれほど興味をひかれなかった。問題は、馬車の外壁に描かれている紋章だった。

「にいさん、馬車を見てください。セプテム国の貴族の紋章です」

「イルはそんなことまで知ってるのか？」

「有名所は大体記憶しています」

「……まずいな。あまり関わらないほうがよさそうだ」

セプテム国に対していい気はしない。さらわれかけたリーリアもそうだろう。やはりここは退散するに限る。そうアルは決断した。

「コーイチ、何も覚えていないということだけど、ここがどこかもわからない？」

「いやあ、さっぱり」

何しろいきなり森で倒れていたのだ。わかるわけがなかった。

「ここはマテウ国とセプテム国の間の中立地帯にある森だ。このあたりは魔獣や妖精エルフが出るので危険だとされている。……もしかして

「国名もわからない?」

「うん」

「そうか、まあそれはいいとして、僕達はマテウ国の人間でこの森にいる妖精エルフに会いに来ただけで先を急いでいるんだ。後はまかせでもいいかな?」

いきなりそう言われてコーイチはとまどった。

「え! いや、まかせるとか言われても!」

「うん、それがね、その馬車はセプテム国の物なんだ。僕達マテウ国とは敵対している国なんだよ。このままここにいるのはまずいし関わりたくないんだ。でも、コーイチなら何も覚えてないってことで特にわだかまりはないだろう?」

わだかまりもなにも、本当に何もわかっていない。何をどうしろって言うんだ。そう言い返そうとしたところ、アルのアイコンタクトを受けたリーリアがコーイチに話しかけた。

「お願いします。妖精エルフの人に会う用事で急いでるんです」

両手を組んで上目づかいにおねだりするように言う。至近距離でそんなことをされるとコーイチは何がなんだかわからなくなった。

「お、おう! まかせとけ!」

「ありがとうございます!」

「助かるよ」

そう言つとアル達は道をそれ森の中へと姿を消した。ぐずぐずしているとコーイチが何か言ってくるかもしれないと恐れたのか迅速な行動だった。

すぐさま静寂が訪れた。人や馬や猿の死体の山と馬車だけのある、嫌な匂いで満ちあふれた空間にコーイチは一人取り残されたようになつた。

馬車は猿たちが散々叩きつけたせいか所々へこみがあつたりもするが、それでも頑健さは損なわれていない。まだしばらくは持ちこたえられるように思えた。

コーイチは馬車に近づくと扉をノックしてみた。扉は拍子抜けするほどあっさりと開かれた。

「おお、勇者殿！ そなたの活躍に感謝する！」

そう言つて扉を開いたのは全身を銀色の甲冑に身を包んだ少女だった。もっとも少女らしいというのがわかるのは、まだ幼さが残る声色と兜のスリットから微かに見える眼差しぐらいのものだった。

「えーと……」

開口一番感謝されてしまつてコーイチは困惑した。さつきまで取り囲まれて襲撃を受けていたのだ。もっと警戒されるのかと思つていた。

「ああ、先ほどのあなたの活躍を窓の隙間から見ていたのです。森の中から颯爽とあらわれ、凄まじいまでの威力の魔法であつさりと敵を殲滅する。あれほどのものは見たことはありません！」

話を聞く限りではアルの戦闘は見えていないようだ。コイイチが出てきた側の窓からでは見えなかったのだろう。それならそれでわざわざ言うことはない。コイイチは判断した。事後処理を勝手にまかせられたのでその程度はいいだろうとひとり納得した。

「ところで外に生き残っていたものがいたのでしょうか？ 先ほど、どなたかと話されていたようですが」

「あー、えーっと、なんか通りすがりの人？ がいたなあ、そういや！ 殺戮の現場に恐れをなしたのか逃げていったよ。それ以外で生きてる人はいなかったけど」

どうせ二度と会うことはないのだろうから構わない、そう思ってコイイチは口からでまかせを言った。

「そうですか……それは困ったことになりました。馬も真っ先に殺されてしまいましたので身動きが出来なくなっていました……あ、すみません、自分のことばかり。私はクラリーネと申します。よろしければお名前をお聞かせ願いたいのですが」

「ああ、俺はマキセ・コイイチ。コイイチと呼んでくれ」

「コイイチ殿ですか。ふむ、不思議な響きですね。当世はこのような名前が流行ってきているのでしょうか。同じような響きの名前を最近聞きました」

同じような響きと聞いてコイイチはすぐさま思い至った。他の参加者だ。同郷だとしたら、参加者の選定は随分と狭い範囲で行われていることになる。

「なあ、そいつの名前ってわかる？」

「ええ、タブチ・マサヒロとおっしゃっていました。今回の遠征に際しても協力いただいています」

名前を聞く限りは、神のゲームの参加者だと思えた。自分より先に行しているものだろう。注意するべく記憶に留める。

「ああ、感激のあまりとはいえ、こんな所で立ち話とは大変失礼をいたしました。馬車の中にお入りください」

促されコーイチは馬車の中へと足を踏み入れた。中は豪華でそれなりに広い。中央にあるテーブルの席へと案内された。

中にいたのはクラリーネの他には侍女らしき女性が二人だけだった。この三人を残して他はすべて死んでしまったのだろう。

クラリーネが合図をすると、侍女達が飲み物を用意した。

「申し訳ございません。このような状況でして火が用意できませんでした。冷たいものになります」

そう言うのはエプロンドレスに身を包んだ、黒く長い髪の似あう清楚な雰囲気的女性だった。クラリーネよりも年長なのだろう。落ち着きを感じられる。

もう一人の侍女が飲み物を持ってきた。こちらの侍女も同じような格好だがまだ子供だ。短く切りそろえられた金髪のせいかどこか少年のようにも見える。

この二人に共通するのは同じような服装というだけではなかった。どちらも首輪をしている。首輪をしている人間などを見たことのないコーイチは少し落ち着かない気分になった。

金髪の少女は飲み物を置くと黙って会釈をした。用事が済むと二人の侍女は壁際まで下がる。

「さて……正直に申しますと私ではもうどうしようもない状態なのです。いきなりこんなことを言われてもお困りでしょうが力を貸し

てはいただけないでしょうか？」

「そりゃまあ……別にいいけどさ、どうしてこんなことになってるわけ？」

「はい、私は成人の儀式のためにこの森までやってきたのです。魔獣が蔓延ると噂される森へと行くわけですから最善の準備を行いました。傭兵を十名とそれにあてがう奴隷も同じ数だけ用意しました。私を含めて全員で二十一名ですね。この人数で移動していればおいそれとは襲われまいとそう思っていたのですが……」

思惑通りに行かずあっさりと襲われたということらしい。ちらりと侍女の方を見る。奴隷という言葉が出てきた。やはりあの首輪はそういうことなのだろう。

「えーと、儀式ってなんなの？」

「はい、この森の中にある塔へとおもむき、最上階の祭壇に掲げられた文章を写してくるというものなのですが。おい、エイミ！ 地図をもつてこい！」

エイミと呼ばれた金髪の小柄な少女が地図を持ってきてテーブルの上に広げた。作業を終えると黙礼してまた壁まで下がる。コーイチは地図よりもこの少女が一言も喋らないことが気になった。

「えーとエイミちゃん？ って無口なのかな？」

言うてから変なことを、デリカシーに欠けることを言ってしまったのかも知れないと後悔した。もしかしたら喋れない病気なのかもしれない。

「ああ、そうではないのです。まったく……おい、エイミ！ コーイチ様が黙ってばかりのお前を不審に思われているぞ！ ちゃんと

喋らないか!」

「え、いや、別にそんなつもりじゃ……」

「すみません、ごふかにさせるかとおもひまひて」

舌足らずとも違う妙な喋り方だった。なんだろうと口元を見てみると開いた口の中が妙に赤いように感じた。すぐに歯が無いせいだと気づく。怪我でもしてこうなったのかもしれないがとても不自然だ。

異世界だから……とか？

何か自分にはわからない異世界の常識に関するのかも知れないと思いつくが、そうだとしても素直に納得できない。

「ああ、わかりませんでしたか。コーイチ様はまだお若い様ですのでこのような遊戯にはご縁がなかったのでしょうか。エイミは口淫用奴隷なのです」

「え？ コーイン？」

言葉の意味がわからない。翻訳機能が働いていないのだろうか？疑問に頭を悩ませていると、もう一人の侍女が前に出た。

「エイミはまだ体ができておりませんので、口でご奉仕させていただいています」

え、口で……ってそういうこと!？

啞然として説明をする侍女を見上げた。

「申し遅れました。私はアニッタと申します。私もエイミと同様今

回の遠征において殿方へのご奉仕をお役目とさせていただいてます」

説明不足と感じたのかクラリーネが口を挟んだ。

「傭兵を雇う際の条件が一人ずつ専用の奴隷をあてがうことだったので。その中に少女趣味のものがいたのですが、歯が当たると嫌だと言う者がいましたので抜いておきました」

「え、抜いたの？ あんたが？」

「抜いたのは私です」

アニッタが言う。

ここは異世界だ。ここにはここの常識があるのだろう。奴隷制度もあるのかもしれない。元の世界のような人権意識はないのだろう。だが、そうは思ってもこれはひどい。一時の快樂の為、そんな程度のことで、こんな小さな女の子を痛めつけるようなことが当たり前の世界などまっぴらだ。

コーイチは立ち上がった。そのままエイミの前まで行くと少しかがんでエイミの頭をなでる。そして言った。

「我は命ずる！ エイミの歯を元に戻せ！」

光がエイミを包み込んだ。

「あ……」

エイミは呆然としている。目の前が白く輝いたと思ったたら口の中に違和感があった。そつと舌で口内をなめるとそこには以前と同じように歯がある。

何度も繰り返し歯の存在を確認するエイミをクラリーネは驚きと

共に見つめていた。

「勝手なことしちまったかな？」

コーイチが挑戦的な目付きでクラリーネの方を見た。

「いえ、奴隷を壊そうと問題ないように、治そうと問題ありませんが……。それにしてもすごい魔法ですね……」

クラリーネは感極まったといわんばかりだ。コーイチが批判的な眼差しで見ているのをまるで気にしていない。

エイミが泣き出したかと思うとそのままコーイチにしがみついた。

「大丈夫？ 痛くなかった？」

コーイチはそう問いかけるもエイミはわんわん泣いてぎゅっとしがみついただけだった。

「エイミ！ なんといいはしたないことを！」

「まあまあ、俺なら気にしないから」

コーイチはしがみついてくるエイミを優しく撫で続けた。

3話 奴隸 (後書き)

4話も投稿しています。

4話 神託

「なあ」

ピュティアスが、箱庭を食い入るように見ているイシュタルに呼びかけた。

「なんじゃね？」

「これいつまで見続けられればいいんだ？ 最初から見ないといけないのか？ タブチはいつ出てくるんだ？」

「タブチなら少し話に出てきたらう？ この奴隷の女共の首輪はタブチ製じゃし、関係ないともいえない？」

「いや……ほとんど関係ないだろ？」

「なんじゃ、お主、話題になつたら最終回だけみるような奴じゃったのか？」

「……どうにかならんのか？ タブチが出るところまで飛ばせないか？ もうあまり時間はないぞ？」

「時間？」

イシュタルが小首をかしげた。

「なんだ知らなかったのか？ 元老院でかの世界への攻撃が可決されそうな勢いだ」

「ん？ わしは知らんぞ？」

「前回さぼつたらう？」

ピュティアスが呆れたように言う。

「ああ、だが、攻撃とは性急な……主神デウスがおるじゃろうに」

「元老院ではその主神デウスがそもそもの原因ではないかというものもいたな」

「……まさか、主神デウスを消すためにこれほどの大掛かりなことを仕組んだ……などということはあるまいな？」

「この性急さを考えるとないとは言えないな。しかしその場合、主神デウスをかの世界に閉じ込めた者が我らの中にいるということになるが……」

考えにくかった。主神デウスが出られないという状況を他の神々が作れるとはとても思えない。

そもそもかの世界がどのような状況かはまるでわかっていなかった。通常経路である、天軸を通ろうとしたもので帰ってきたものは誰もいない。内側に転移させた者達を利用して内部の情報は得られなくてもそれだけでは、なぜ天軸が通れなくなったのかはわからなかった。

それに主神デウスを滅するのが目的だとしても影響が大きすぎる。そこまでして主神デウスを消す必要性はどこに誰にもなさそうに思える。

「ふむ……かの世界は複数の天盤をつなぐ結節ムツ点じゃからな。このまま封鎖されたままでは影響が大きいが……」

「その影響を真っ向から受けているのがエルメスだな。このままではやつは破滅だろう。かの世界を経由しない場合の経路では効率が1万倍は違う。商売あがりたりだ」

エルメスと言うのは文字通り世界を股にかけて手広く商売をしている神だった。どの世界に行くとしてもほとんどが結節ムツ点を経由する。商売をするものにとって死活問題となっていた。

「やつほどではなくてもどの神もかの世界を通れんのでは支障がでるわな……いつまでもこの状態を座してみているわけにもいかんか

……わかった。早送りにしてみよう」
「出来るなら最初からそうしてくれ……」

イシユタルは箱庭に触れると何やらいじりはじめた。箱庭内の時間が一気に加速した。

あれからいろいろとあった。

コーイチは現在セプテム国の首都、アスタラにあるドルエン將軍の屋敷で食客となっていた。森で助けたクラリーネはドルエン將軍の孫娘だ。コーイチに惚れ込んだクラリーネが祖父に頼み込んでこのような形におさめた。

食客とは客として饗もてなされるかわりに何か問題が起きたときにそれを手助けするような立場だ。

幸いコーイチの魔法があればほとんどの問題は瞬時に片付いた。ドルエン將軍は孫娘を誑かしたコーイチについては苦々しい思いを抱いていたが、即効性のある問題解決能力としては評価していた。今更手放すのも惜しいところだ。

今のところ大魔王が倒されたという話は聞いていない。大魔王が倒れるなどということがあれば世界中で話題になるだろうから気づかないということはずまない。大魔王が倒されたなら神々のゲームは終わりだ。自分がやるにせよ他の者がやるにせよそれはなんらかの節目となるだろう。

コーイチはあれから様々な経験を積んでおりそれなりに自信を持てるようになってきている。魔法の使い方にも熟達した。今なら何と戦っても負ける気はしない。

そろそろ頃合いかと思いはじめた。まだ他の誰にも大魔王が倒せて

いないなら自分ならやれるのではないかと思えてきた。

コーイチは毎日のほとんどをアスタラをうるつき回ってすごしている。その過程で大魔王についての情報収集も行う。それによると、大魔王というのは魔族国家エルシアの奥深くにいるらしい。

そのことを知ってから旅の準備を始めていた。エルシアは北大陸の西の果てだ。かなりの長距離を移動することになる。入念な準備を行うとそれだけでもかなりの時間がかかるだろう。

そんなある日のことだ。コーイチが食堂で昼食を取っていると男がいきなりやってきた。

その男はコーイチの隣にやってくると、椅子を斜めにして回転させ反対向きに座り込んだ。組んだ両手を背もたれにかけたその姿勢にはまるでやる気が感じられない。

コーイチはその男をまじまじと見つめた。いきなりやってきてこの態度はなんなのだろう？ 食堂で食事をしているのはコーイチだけだった。他には召使や奴隷も控えているが、この国においてそれらは空気も同様だ。コーイチに用があってやってきたのだろう。

貴族が着るような豪華な服装だったが着崩しているためだらしく感じる。そう思うとブロンドの長髪も切るのが面倒で伸ばしているだけにも見えた。ただ、それらを割り引いたとしてもこの男の美貌は損なわれるものではない。コーイチは少しむかついた。

「なんか用か？」

コーイチは食事を再開すると男の方を見ずにぶつきらばうに反応した。

「やあ、君がコーイチかい？ はじめまして。僕はアレン。この国の王子さまだよ」

王子。その言葉に反応してコーイチはアレンをふたたび見た。訝

しげな表情をしている。ここが將軍の屋敷であつたとしても王子がやってくるとは信じがたい。

「ああ、その顔は信じてないって感じだなあ。まあ別に信じてもらわなくてもいいんだけど、第三王子なんだよ?」

「それで? その王子様とやらが俺になんの用だよ?」

王子であつたとしてもコーイチの態度は変わらなかつた。例え王が相手でも変わらないだろう。様々な戦いはコーイチに自信をもたらしした。王だろうが軍隊だろうが取るに足らないとそう思えるようになっていた。

「異世界から来たと聞いてね。どんなのか見に来たんだよ。けどあんまり僕らと変わらないね。それはちよつとがっかりかな」

最初は記憶喪失だと言い張っていたがそのうちボロが出始めた。そのため異世界からやってきたということは交友関係のあるものには伝えるようにした。余計なことを考えずによくなったのですつきりした気分だったが、噂を聞きつけてやってくるものがあるとは思つていなかったのでコーイチは少し後悔した。

「用がそれだけなら帰ってくれないか? 食事の最中なんだ」

「ああ、本題はこれからだよ。君強いんだって? 僕と勝負しないか?」

「死にたいのか?」

コーイチは強がつてみせたが、アレンはその態度をどう取つたのか笑い始めた。

「あはは、僕にそんなこと言うやつは久しぶりだよ。それだけでも

来た甲斐はあったな。もちろん、殺せるようなら殺してもらっていないよ」

「きさま！」

コーイチにとっても嘗めた態度を取られるのは久しぶりのことだった。怒りに我を忘れて立ち上がる。

「おお、やる気出たかい？　じゃあ何で勝負する？　君は魔法使いらしいし魔法で勝負かな。僕も一応使えるんだよ魔法。そうだな、君が何かしゃべり始めたら勝負開始だ。そう決めたよ」

勝手なこと言いやがって！　コーイチは勝負を受けた。腕の一本も吹き飛ばしてやる。そう決めた。相手は王子だがそんなことは関係ない。それにどんな怪我だって魔法で治せる。負けを認めて惨めに命乞いでもしたら治してやろう。暗い愉悦が眼に宿った。

「我……」

コーイチは一言も発することは出来なかった。激痛に身をよじる。顔の側面で発生した激痛に言葉を失った。

アレンを見る。椅子に座った姿勢はそのまま、右手をゆっくりと顔の前で振っている。その手にあるのは人の耳だ。

コーイチは痛みの発生源を確認するべく手を耳へとやったがそこには何も無い。血で濡れていた。鋭利な刃物で削ぎ取られたかのようになり平面になっている。

「詠唱魔法はダメだね。時間がかかりすぎる。コーイチ、君は詠唱魔法以外には何かできないのかい？」

失敗した。距離が近すぎる。これでは駄目だ。そう思ったが、で

は離れていればなんとかなったのだろうか？　それがわからなかった。アレンに何かをした様子はなかった。コーイチはこれまでの戦いで強化された身体能力にも慣れた。どんなに早い動きだろうとその兆しぐらいは読み取れるはずだが、まるでわからなかった。

コーイチがあれこれ悩んでいると、途端にアレンはつまらなさそうな表情になった。椅子から立ち上がるとコーイチに近寄りその手に耳を握らせる。

「これは返すよ。やりすぎちゃったかな。ここまで弱いとは思わなかったんだ。じゃあ帰るよ。食事の邪魔をして悪かったね」

そう言うとアレンは来た時と同じ唐突さであっという間にいなくなった。

コーイチは怪我を魔法で治療すると、両手をテーブルに叩きつけた。ただの八つ当たりだ。

「くそつたれが！　あんなやつを通したのは誰だ！」

これも八つ当たりだがその言葉に食堂に入ってきたばかりのエイミが反応した。エイミとアニッタはクラリーネの成人の儀式を手伝った報酬としてコーイチが譲り受けており、この屋敷でコーイチの身の回りの世話を行なっている。

「コーイチ様……申し訳ありません。止める間もなく入って行かれました……その」

「ああ、エイミか。ごめんな。別にエイミに言ったわけじゃないんだ」

「あの……申し上げにくいのですが、コーイチ様に会いたいというお客様が……」

「ん？　それはさっきの王子とかじゃなくてか？」

「はい、お通ししてもよろしいでしょうか？」

正直苛立っていてそれどころではなかったが、通すなど言うのもエイミが困るだろうしそれも出来なかった。

「いいよ。入ってもらってくれ」

もう食事が続ける気分ではなかったので、エイミには応接室に通すように命じて自分も応接室に向かった。

コイチが先に応接室でソファに座り待っていると、男が一人現れた。見た瞬間わかった。自分と同じように異世界からやってきた者だ。

「よう！ その感じの顔を見るのは久しぶりだ。こんな外国人みたいたのばかりいるところだと、お前みたいなしよっぱい顔のやつでも懐かしいもんだな」

開口一番それだった。大柄な男だ。黒髪黒目でのっぺりとした顔はコイチと同じ民族であることをあらわしている。年齢は大分上なようだ。コイチは四十歳ぐらいだろうと当たりをつけた。

男の背後には首輪を付けた女が一人付従っていた。かなりの美人だ。この国の流儀に慣れ始めたコイチは手に入れるのは大変だったろうなと思った。

男はコイチの正面のソファに腰を下ろした。大きく足を開いたその座り方は男の喋り方とあわせて、とても下品に見える。

「あんたも神の手先か？」

「ああ、俺はプレイヤーと呼んでいるがな」

「なんの用だよ？」

先ほどの王子の件もある。十分に警戒していた。大魔王を倒すのは早い者勝ちで神の手先同士はライバルだと聞いている。神からも注意しろと警告を受けていた。

「何大したことじゃない。そうあからさまに警戒するなよ。とりあえず様子見だよ。こんなところでおっぱじめるつもりはない」

男は苦笑気味にそう言った。

「そうだな、まずは自己紹介から始めるか。俺はタブチ・マサヒロ。能力は、サイコロ17だ」

タブチと言う名は聞いたことがあった。奴隷の首輪の作成者だ。これまで奴隷を国外へと連れだすのは色々大変だったと聞いているがこのおかげで国外でも国内と同様に扱うことが出来るようになったらしい。

名前の他にも気になることがあった。サイコロのくだりだ。一瞬間があった。ノイズのようなものも聞こえた気がする。

タブチはにやりと笑うと説明した。

「知らなかったのか？ 能力について口に出すと、サイコロの数値に変換されるんだ。まあ俺の能力は有名になっちゃったから、わかると思っけどな。で、お前は？」

「……マキセ・コイチ、能力は、サイコロ18だ」

万能魔法と口に出したつもりだったが、変換された。この事については嘘は言っていないようだ。

「おー、18かよ、おっかねーなー。いきなり喧嘩売らなくてよかったぜ！ と、まあこういう理由もあるんだろっよ。能力を明らか

にするのはお互い不利益だが、何もわからないんじゃないか？ 無駄な戦いをするはめにもなるしな」

「そんなことをわざわざ教えに来たのか？」

「まさか！ 様子見だと言っただろう？ まあそうは言っても初対面だ。話が弾むわけもないな。そうだな俺たちの共通の話題と云えば……大魔王。これだろうか？ お前は大魔王を倒す気はあるのか？」

コーイチは訝しげにタブチを見た。それはわざわざ確認する必要のあることなんだろうか？

「ん？ ああ、中には早々に諦めた奴もいるんだよ。それならあまり警戒しなくて済むしな。ちなみに俺は倒すつもりだ。そのための準備も進めている」

「……俺もそのつもりだ。大魔王を倒すと叶えられる願いで奴隷制度を撤廃する」

やはり奴隷制度というのは人権意識の発達した国で育ったコーイチにとって馴染めないものだった。これまで様々な人に出会い、戦ううちにこの国は間違っていると思いはじめた。だが、いくら神から与えられた能力があるからと言って人々の意識をそう簡単に変える事は出来無い。そこで思い至ったのが大魔王退治の報酬だ。確かどんな報酬も望むがままという話だ。今さら元の世界に帰る気もなくなっていたコーイチはその報酬でこの国を変えるつもりだった。

「はあ？ なんだそりゃ？ アホかお前？ ガキかよ」

タブチはあきれ果てたといわんばかりの態度になった。

「奴隷をなくしてどうするよ？ 素晴らしいだろうが！ 自分と同じように感じ、考える人間をモノのように扱って使い捨てられるん

だぞ？ 考えうる限り最高の娯楽だろう！ それにこの国は奴隷なくしては成り立たないぞ？ それはどうするんだ？」

「それは……皆が対等になれば力をあわせてやって行けば……」

「呆れたね。頭がお花畑かよ。……まあいいや。お前はお前で頑張ってくれ。ちなみに俺の願いは、他のプレイヤーの能力剥奪だ。この世界で力を振るうのは俺だけでいい。俺に従うなら早めに言うんだな。それなら少しは優遇してやってもいいぜ？」

コーイチはタブチを睨みつけた。この男とわかり合うのは無理だろう。

「そう睨むなよ。というかな、お前だって奴隷で楽しんでるんだろう？ ん？」

「お前と一緒にするな！ 俺達は……通じ合ってる、理解し合ってるんだ」

タブチが吹き出した。

「なんだそりゃ、ギャグかよ。奴隷と通じ合うってお前バカか？

あいつらはレガリアとかいう得体の知れない力に支配されてんだぞ？ 主人が気に入るような行動をさせられてるだけに決まってるだろうが！ はあ……あ、そうだ。一ついいことを教えてやるう。奴隷はな、実は心まで完全に支配はされてないんだ。あえて自由意志は残してる。で、行動としては主人に絶対服従だ。考えることが下衆だよなあ。こんなこと考える奴らって最高だろ？ 今度その奴隷に本心を見せて命令してみる。楽しいぜえ」

「喧嘩売りにきたのかよ！」

コーイチは我を忘れそうになったがかるうじて思いとどまった。先程も王子の件で失敗している。激情にかられての行動はまずい。

「ああすまんね。怒らせるつもりはなかった。で、大魔王だが……どの程度調べた？」

「……居所がわかったぐらいだ」

コーイチは不承不承といった様子で応えた。大魔王がどんな姿でどれほど強いのかはわからなかった。そもそも魔族についてわかっていることは殆ど無い。街の噂程度では何もわからないに等しい。万能魔法で調べようとしたが、効果範囲が視界内で100mではどうしようもない。

「そうか、俺の方も大してわかってないんだ。だったら丁度いい。こんなものがあるんだが」

そう言うとタブチは腰に付けられた袋から板のようなものを取り出した。その光景は少し異様だった。その袋に入るはずもない大きさのものがずるりと引き出されてくる。

「ほらよ」

そう言うとタブチはコーイチの前にそれをおいた。金属製の板でこの世界にはありえないようなものだ。幅は50センチ程で、真ん中にマイクとしか見えないものが突き出ている。マイクの前には四つのボタンがあり、左端にひととき大きな赤いボタン。その隣からは少し小さめのボタンで順に1, 2, 3と書いてある。板の両端には細かい穴が円状に開いていた。スピーカーのようだ。無駄にステレオらしい。

この世界の者にはなんなのかわからないだろうがコーイチとタブチにはわかる。これはクイズ番組で使われるようなコントローラーだ。

「なんだよこれ？」

「三択の神託という魔道具だ。どんな質問にでも回答が得られるというものだが……魔力が足りないのか俺には起動出来なかった。コ
ーイチなら動かせるかと思ってな」

「どうやって使うんだ？」

「左端の赤いボタンを押しながら、マイクに大魔王と言ってみてくれ」

コーイチは言われた通りにやってみた。全てのボタンが内側から光る。起動出来たらしい。

「で、どうなるんだ？」

次にどうするかを聞こうとタブチを見た瞬間、自分があまりに考えなしかったことに気づいた。タブチはニヤニヤしながらコーイチを眺めている。

「ギャハハハハ！ レディース&ジェントルマン！ 大魔王クイズ
シヨーへようこそ！ 今から！ クイズを出し続けるぜ！ もちろん
ん！ 不正解で！ お前は死ぬ！ お前が死ぬまで！ クイズはや
めない！ ギャハハハハハ！」

起動したかと思えばコントローラーは大音量で騒ぎ始めた。愕然
とした表情でタブチを見やる。

「お前が馬鹿で助かったぜ。こいつは失敗作でな。不変で壊しよ
うがないし、捨てるに捨てられない。困ってたんだ」

「ハ、ハメたのか！」

「ろくに調べもせず、魔道具に触れる方が悪いな。まあ今から説明してやるよ。そいつは三択の神託。設定したキーワードに対するクイズを出題してくる。そのクイズは三択中には必ず正解が含まれる。正解すりゃ問題ないが、不正解だと死ぬ。正解しても次の問題が出題される。全問正解すりゃいいんだが、何問あるかはそいつの気分しだい。ま、そういうことだ」

これはタブチの作成した魔道具だ。もちろんこんな馬鹿みたいな仕様を意図したわけではない。魔道具作成能力は必ずしも思い通りの物が作れるわけではないためだ。

「くっ、我は命ずる！ 砕け散れ！」

コントローラーには何もおこらなかつた。そのまま狂ったように笑い続けている。

「何したかわからんがそれがお前の能力か？ 無駄だ。そいつは不変属性イタブルを持つてる。どんな手段でも壊せない」

「な、なんだつてこんなことを！」

「ん？ ああ自分で使う気にはなれないが、能力自体は魅力的だろう？ 起動には神の魔力がいるんで奴隷に使わせるわけにもいかない。ダメ元でお前に使わせてみたんだが」

「く、くそ！」

混乱してまともに言い返すことも出来無い。そうするうちにコントローラーがびたりと鳴り止んだ。そして問題が出題される。

「第一問。大魔王はどこにいるでしょう？ 1、魔族国家エルシア

2、常春の国マテウ 3、奴隷王国セブテム」

「ああ、もちろん、無回答でも死ぬぞ。猶予は30秒。正解だと思

「ボタンを押すんだ」

問題は単純だった。それにこの答えならわかる。安堵の気持ちとともに1のボタンを押した。

「1だ！ 大魔王はエルシアにいる！」

「ハ！ズ！レー！ 残念！ でしたあ！ ギャハハハハ！」

コントローラーは無情な返答を返した。三択の神託には不正解の場合に正解を教える機能はない。残念なクイズ番組のような仕様だった。

「ふむ、1は外れか。となると、セプテムにいる気配はないからマテウにいるわけだな。助かったぜ、これで無駄足を踏まずに済む。

俺もエルシアにいるとばかり思ってたからな」

「お、俺どうなるんだよ！」

コーイチがすぐるようにタブチに問いかけた。

「さあな、使ったことがないしわからん。じゃあな、俺は行く。女ならいいが、男が悶え苦しむところなんて見たくもないしな。そいつはお前にやるよ。もっとも回答者が死んだ時点でガラクタになるんだけどな。ああ死んだら関係ないか？ ははっ」

そう言うとタブチは陽気な足取りで応接室を出ていった。タブチに仕える奴隷も痛ましげな表情で会釈をし部屋を出ていく。その視線が忘れられそうになかった。

「ギャハハハ！ じゃあお待ちかねの罰ゲームだ！ 死のカウントダウン！ 5！」

いきなり5から始まった。ほとんど猶予がない。

「4

「3

「2

「1

「我は命ずる！ 不死と化せ！」
「0

心臓を鷲掴みにされたようだった。何か胸の内を、腹の中を這いまわるような感覚。それは散々心臓や内蔵を弄んだがどうしようもないと気づいたのかそのうち消えていった。

コイチはその場に膝から崩れ落ちた。ぎりぎり間に合った。

「ノー！ それはなしだぜ！ あんまりだ！ ずるはよくないぜえ！」

コントローラーは負け惜しみをがなりたてた。

冷や汗で体中が濡れている。立ち上がる気力もない。何かを言い返したかったがそんな余裕もなかった。

助かった。ほっとするもクイズは死ぬまで続くと言っていた。油断は出来無い。

「死なないのはつまらんが、大魔王クイズショーはまだまだ続くぜ！ 楽しみにな！ ギャハハハ！」

プツン、という音がすると音声は唐突に途切れた。電源が急に落とされたような感じだ。テーブルの上のコントローラから灯りが消えている。すぐさま次の問題が出題されるということではなさそう

だ。

それを確認するとコーイチは気を失った。

「このタブチと言っちゃつはろくでもないのう」
「ああ、はつきり言つと下衆だな」

イシユタルとピユティアスが勝手なことを言っていた。

「お主の記録に残っているのはどこまでじゃった？」

「ああ、このコーイチに会いに行く直前ぐらいが、最後の記録だな」

「定時連絡ホーリングが三日おきじゃからこれから三日以内になにかあったわけかのう。生存報告ハートビートの最後は？」

「それから三日後だな。ふむ……箱庭を見るかぎりでは大魔王の所在を明らかにしてそこに向かったようだな」

「大魔王にやられたのかのう？」

「まさか！ こんな程度の世界の大魔王ごときにタブチが遅れをとるわけがない」

二人が考え込んでいる間も箱庭の時間は進み続けていた。タブチ登場近辺をクローズアップするように設定していたためタブチがいなくなった後、再生は加速している。やがて再生の終端、前回の定時連絡時点に達するとその動きを止めた。

「ふむ、どうやらコーイチもマテウ国に向かうようじゃな」

再生の終わった箱庭を片付けながらイシユタルが言う。再生の終

盤あたりでそのような展開になっていた。

「結局大したことはわからなかったな」

「じゃが、マテウとやらに何かあるのかもしれん。そうじゃな、ロングポールを仕込むことにしよう」

「なんだそれは？」

「うむ、向こうからの要求に対して応答を遅らせることで常時接続しておるように見せかけるやり方じゃな。一応これなら正当な手続きの範疇じゃし問題あるまい。これで今後のコーイチを常時監視しようと思つがどうじゃ。ただこれをやると儂はそれにかかりつきりになってしまふんじゃが」

「やり方は任せる。元老院はどうする？」

「儂が出ても変わらんじゃろうし、コーイチを監視し続けるから無理じゃな。結果だけ教えておくれ」

イシユタルの返答を聞くとピュティアスは姿を消した。

イシユタルはコーイチを監視する準備を始めた。

大魔王の顔を見た瞬間、ダフニーは顔をしかめた。ばつが悪いといった様子だ。

「えーと……」

久しぶりに大魔王が街の入口の検問所にやってきた。ダフニーはすっかり忘れていた。サイコロリンの件だ。

あれから数人それらしき者達がやってきた。その者達には大魔王

の指示通り旧首都に向かうように促した。本当に向かったのかはわからないが少なくともそう伝えはした。

そして、その事を大魔王に伝えるのを忘れていた。日々の業務に忙殺され、そんなに大事な事なら問い合わせがあるだろうと勝手に思い、そのうち伝えればいいと考えているうちにかかりの時間が経過していた。

「こんにちは」

大魔王がにこやかに言う。それだけで検問所内に歓声が上がった。今はまだ昼間で検問所の内にも外にも列が出来ている。大魔王とは知らないものもいるのだろうが、その可憐さに皆が見惚れ感嘆の声を上げる。

大魔王は列に向かって手を振りながら、検問所の奥の応接コーナーへと向かった。

ダフニーはそれを見ると、受付の前に休憩中の札を立て、書類を手に取るとあわてて応接コーナーへと向かう。

「えーと、大魔王様？ どのようなご用件で？」

「用件ですか？ 別にないですよ？」

大魔王は不思議なことを聞いたかのように小首を傾げる。

「そうですかあ」

怒られるのかと思っていたダフニーは胸をなでおろした。ただきまぐれにやってきただけらしい。ただそうだとしてもこのまま大魔王を一人でほうっておくわけにも行かない。ダフニーは自らお茶を用意すると、大魔王の正面のソファに座った。

「あの……大魔王様は覚えておられるでしょうか。その……サイコロリンという方達の件ですが……」

「サイコロリン？ ……ああ！」

少し考えた後、思い出したのか両手をぱんと打ち合わせる。

「そんな人達もいましたね」

「はい、大魔王様のご指示どおりに旧首都へ向かうように伝えました。こちらがその方達のリストです」

そう言っつて書類をソファテーブルの上においた。

リストと言っつても大したものではない。三名の名前が書いてあるだけだった。

「クニタチ・リョーコ、トーマ・カガリ、マキセ・コーイチ、この三名です」

「どんな方たちでしたか？」

「そうですね、大魔王様がおっしゃったように、黒髪黒目でした。見た感じも同じ民族なのか似たような雰囲気でしたのでわかりましたね。サイコロについて聞いてみるとひどく驚いておられました」
「なるほど……では引き続き同じようにお願いします」

大魔王はどうでもよさそうな感じだった。それが気になったダフニはそのことについて聞いてみた。

「あの……この方たちはどうされるのでしょうか？」

「そうですね、最初は旧首都で戦えば他の方に迷惑がかからないと、そう思ったのですが……旧首都まで行くのが面倒になってきましたので、もうこのまま放っておけばいいかな？ と今思いました」

とてもいい笑顔でサイコロリン達の放置が決断されてしまっていた。

「そうですね、結構遠いですし面倒ですよねぇ……ってそれは今さら思われたんですか!？」

「はい」

その返事も澁澁とした元気いっぱいのものだった。

大魔王様の放置プレイ……

そんなどうでもいいことをダフニーは考えていた。

5話 ひよちゃん

デリクは眼を疑った。

大魔王が来て以来いろいろとあった。客が増えたり、ついでに変態が増えたり、王女がさらわれてやつてきたり、赤ん坊が拾われてきたりした。この間など大男の謎の襲撃だ。おかげで酒場はボロボロにされてしまった。今のところ補強工事をしてなんとか再開にこぎつけたが、それでもまだ襲撃の傷跡は色濃く残っている。その中でも最たるものは壁に空いた大穴だ。女将などは、もうここも入り口にしてしまおうか、などと言っている。そんないろいろに新たなケースが追加されたらしい。

今、デリクが凝視しているのは襲撃によって空いた大穴だ。そこにひよこが詰まっていた。意味がわからない。

「ぴよ！」

鳴いている。

巨大なひよこが壁に空いた大穴にぴつたりとはまりこんでいた。

なんだろう、酒場に大穴が開いているのを不憫に思って自らの体で穴を塞いでくれている親切なひよこなのだろうか？ デリクは混乱のあまりそんなことを考えていた。

デリクは振り返って店内を見た。昼時ということでもそれなりに混雑している。大魔王はいつもの席が使えなくなったため最近では酒場の真ん中あたりを定位置にしていた。大魔王はこの異様な状態にもかかわらず、いつものように料理に舌づつみを打っている。他の客も同様だ。食事に夢中なのか壁の異常に気づいている様子はない。

まさか、と思う。ひよこで穴を塞ぐなどというのは大魔王の発想以外にありえないのではないか？ いや、そもそもなんでこんなにひよこがかいんだよ！ 思考がまとまらない。

「なあ……お前なにやってんの？」

デリクはひよこに話しかけてみた。正直ひよこに話しかけてる俺が何やってんだよ、と思いながらだ。

「ひよっ？」

なんとなく話は通じている気はした。ひよこが首をかしげている。

「ひよひよー！」

ぼぶんぼふんと、ひよこが揺れた。さわり心地のよさそうな羽毛が波打つ。揺れるたびに、ちりんちりと音がする。ひよこのくせに首輪をしていて、それに拳ほどの大きさの鈴がついていた。それがひよこが動くたびに軽やかな音を鳴らしている。

ひよこが何を言いたいのかはわからない。ただなんとなく困り顔のような気もした。

ひよこ鑑定士じゃないからそんなことわかんないけどな！

って、ひよこ鑑定士ってひよこの表情読めるのかよ！

心の中で自分につっこむ。もうどうしたらいいのかわからなくなってきた。

額に手をあて考えこむ。別に入り口が塞がれているわけじゃない。このままでも問題ないんじゃないか？ そうだ、別に問題はない！俺はいつも通り仕事をしていればいい！

そうそう、俺は忙しい。そうつぶやきながら厨房へ戻ろうとしたとき、みしみしという音が聞こえてきた。

慌ててふりむく。ひよこがもぞもぞと動いていた。どうやら店内

に無理やり入ろうとしているらしい。そのたびに壁がきしむような音を立てていた。

「問題大ありだよ!」

デリクは大魔王の元に向けよった。

「おい、大魔王!」

「なんですか?」

「あれ! あれを見ろ!」

大穴に挟まっているひよこを指さす。

「美味しそうですね」

「この状況で言うことがそれかよ!」

デリクはいつにもまして大声でつつこんだ。

「あれ! あれ、お前がやったんじゃないのか?」

「さあ? デリクさんが知り合いのひよこさんを詰めたんじゃないかな? デリクさんにしてはいいアイデアだと感心していたのですが」

「ひよこの知り合いなんていねーよ!」

どうやら大魔王はこの状況に気づいていたらしい。

「なんとかならないか? このままじゃ店が崩れるかもしれん!」
「む、それは困りますね。わかりました」

大魔王は立ち上がるといつものようにのんびりと歩き出した。デ

リクも一緒に壁に埋まっているひよこの元へと向かう。

ひよこは大魔王を見るとさらにもぞもぞとしはじめた。

「ぴよぴよぴよー！」

何を言いたいのかはデリクにはわからなかったが嬉しそうに見えた。

「おや？ ひよちゃんさんではないですか」

「ぴよー！」

「もしかして私に食べてもらおうとやってきたのですか？ 感心ですな」

「ぴよ！？」

「違うんですか？」

「ぴよぴよぴよー！」

大魔王がひよこに話しかけている。大魔王ならひよここと会話出来ても不思議じゃないな、とデリクは思った。

「やっぱりお前の知り合いかよー！」

「デリクさんの知り合いだとばかり思っていたので気づきませんでした」

「……ひとつ聞いていいか？ こんなのが何匹もいるのか？」

「そういえばひよちゃんさん以外で知りません」

「だったら、気づけよー！」

そんなデリクの事は無視して大魔王はひよこをなでていた。ふわふわとした羽毛が逆立つ。ひよこは気持ちよさそうに目を細めていた。

「知り合いなら店を壊すなって伝えてくれよ！」

「デリクさんは何を言っているんですか？ ひよこと話せるわけがありません」

「さっき話してたよね!？」

「なんとなく話しかけてみただけです」

「意味ないことすんなよ！」

言い合っている間もひよこはもぞもぞと動いている。早急になんとかしなくてはならなかった。店の外がざわついているのがわかる。酒場の壁からひよこの尻が突き出ているのだ。さぞ目立つことだろう。

「なんとかしてくれ！」

「わかりました」

大魔王はひよこを蹴り飛ばした。もちろん手加減はしているのだろう。ひよこは道路の反対側の建物に激突していた。

「お、おい！ 大丈夫なのか？ あれ？」

「大丈夫なんじゃないでしょうか。神獣らしいですし」

壁の穴を通ってデリクと大魔王はひよこへと近づいた。やじうまがひよこを遠巻きにしている。ひよこは少しぐったりとしていたがすぐに立ち上がった。

「ぴよー!!」

ひよこは力強くそう鳴くと、短い羽を大きく広げた。喜んでいるのだろうか？ デリクにはもうわからなかった。

見物している人達の中から拍手が巻き起こった。立ち上がったひ

よこを讚えているのだろう。こんな事態にも動じないこの街の人達にデリクは少し感心した。

「まあとりあえずなんとかなったか」

「そうですね。しかしデリクさんも無用心です。あんな穴が空いていればひよこが挟まってしまいます」

「そんな事態が想定できるか！」

立ち上がったひよこは大魔王に近づくと体をすりよせてくる。微笑ましい光景とも思えるが、ひよこの大きさを考えると異様ともとれる。

「なあ……さつきから、ひよこひよこって言ってるけどさ、これひよこじゃないよな？　つーか、ひよこひよこ言いすぎて何がなんだかわかんなくなってきたけど」

「神獣らしいですよ。これは幼生で大きくなると巨大な鶏になるのです。そして空へと浮かび上がり、空の月となるのです」

「え？」

まさか、とひよこをマジマジと見つめる。これがそうなのか？

世界の神秘ともいえるような夜空の月が、酒場に空いた穴にはさまって身動きが取れなくなっているものなのか？　だがそう言われるとこのまるっこいひよこでも神々しく思えてくる。

「と、いう妄想をしました」

「妄想かよー！」

『ああ、いや、それが妄想でもないんだよね』

声が聞こえてきた。少しくぐもっているような感じの女の声だ。声はひよこの方からしている。

「え？」

突然の事に驚いてデリクはひよこを見た。まさか人の言葉を話せるのか？ よく見てみるとどうもその声は首輪についている鈴からしているようだった。

『前に神獣だからひよこのままとか言ったけどさ、やっぱり気づいてた？』

「いいえ、知りませんでした。そうですね、残念です。デリクさんをからかおうと思ったのに、本当のことを教えてしまったようで悔しいです」

大魔王が顔をしかめていた。

「そんな悔しそうにすんなよ！ そんなに俺をおちよくりたいのかよ！」

『それはそうとパエリアちゃん、おひさー！』

鈴はかなり適当な感じで挨拶をしてくる。

「こんにちは、妖炎の美姫ロベルティーネさん」

『その二つ名は忘れといてよ……』

「しかし、空に浮かぶ月ほど大きくなるということでしたら、少しぐらい食べても問題ないんじゃないでしょうか？」

『あるよ！ かわいそうだからやめてあげて！』

ひよこは怯えて後ずさっていた。やはり言葉はわかっているらしい。

「えーと、何？ つーか誰？」

ひよこだけでもわからないのに、鈴まで喋りだした。誰かちゃんと説明してくれ！ そう思いデリクは大魔王に聞いた。

「ああ、この方はロベルティーネさんといいます。私の別宅に住んでいるのですが、えーとなんといいましたか、そう！ 穀潰しです」
「違う！」

「タダ飯喰らい？」

「あー、そう言われるとなあ。確かにこの城にあるご飯食べてるんだけど。けど城の手入れとかちゃんとやってるよ？」
「そういうわけです」

大魔王がデリクに言った。それで説明したつもりらしい。

「なんか知らんけど、別宅に住んでるんだな。で、このロベルティーネとか言うひよこは何しにきたんだよ」

「違う違う、ロベルティーネは私。その子はひよちゃん」

「はあ、すいません」

「いいよー、気にしないでー」

デリクはひよこに謝った。俺何やってんだろう？ デリクはぼやくように思った。

『そうそう、でね、わざわざこんなことしてるのはもちろん意味があるのよ。パエリアちゃんに連絡取りたかったんだけどさ、うまいやりかた思いつかなかったんでその子に行ってもらったわけ』

「何かご用ですか？」

『それがね、最近変なのがやってくんのよ、大魔王はどこだ！ っ
て』

「ああ、私への挑戦者はそちらに行くようにしてもらっているのです」

『いや、それちゃんと説明しといてよ。びっくりするじゃん!』

「それでどうされました?」

『だいたい追いつ返しといた』

少し沈黙が訪れた。

「それはかわいそうに……わざわざそんな辺鄙なところまで訪ねてくださった方を無碍に追いつ返すとは……」

『ええー! そんなこと言われたってさあ! 急に来て大魔王を倒しに来た! どこだ! とか言われてもさあ、で、パエリアちゃん、ここにはいないわけだし? どうしろってのよ』

「お茶でもお出しして歓談していればよかったのではないでしようか?」

『ムリムリ! あいつらやる気満々だったよ!』

「そう言えば……サイコロリンの方を追いつ返せたのですか?」

サイコロリンは大魔王にとっては取るに足りない者達だったが、ロベルティーネで追いつ返せるのかは疑問だった。

『サイコロリンて?』

「黒髪黒目の人たちです。サイコロがどうこうと言っておられました」

『ああ、なんか言ってたなあ。あ、そうそう、でさあ、私魔王と契約したんだよね! 炎王ザミー! パエリアちゃんの名前出したら一発OK! 私今世界一強い魔法使いなんじゃない?』

得意げな顔が見えるような喋り方だった。よほど自慢したかったのだろう。それならばと大魔王も納得した。ロベルティーネは妖炎

の二つ名からわかるように元々炎系の悪魔と相性がよかったようだ。

「ではご用とはなんなのでしょうか？ サイコロリンの方は追い返したのですよね？」

『だいたいね。けど、一人強いのがいたのよ。コーイチとか名乗ってたかな？ 調子にのってゴーレムとか壊しまくってんの。後で掃除する身にもなれっつーの。あ、そうそう、でね、こっちの攻撃があまり効かない感じだったからさあ、幻術でごまかしてんの。五階の迷路ですつとろろろらせてるんだけど……多分自分が幻術に捕らわれてるって気づかれたら破られちゃうね。時間の問題。だからさあ、戻ってきて、ちょちよいつてやつつけてくんない？』

「そうですか。そういうことなら仕方ないですね。私のおうちを壊されてしまうわけにもいきませんし。歩いて行くと一週間以上かかると思いますが持ちそうですか？」

『無理。でね、だからわざわざ、ひよちゃんに行ってもらったわけ。ひよちゃんに連れてもらってきてよ。それならいいでしょ？』

ロベルティーネは大魔王が移動に力を使いたがらないのを知っていた。そのためこんな手段を取っている。

「そうですね。ではそうしましょう。デリクさんちよつと出かけてきますね」

そう言うで大魔王はひよこを持ち上げて足をつかんだ。簡単そうにやっているが、この巨大なひよこはかなりの重量だろう。

「びよー！」

ひよこは一声鳴くと羽ばたき始めた。大魔王ごとふわりと浮いたと思うと一気に加速して空の彼方へと飛びさる。その場にいた者た

ちはそれを目で追い歓声を上げた。

ひよことは思えない速さだ……。

デリクは思ったが、すぐに独り言のようにつっこんだ。

「そもそもひよこが飛ぶってどついつのことだよー」

6話 お茶会（前書き）

最近タイトルが適当です。

後、言い訳ですが風邪でくらくらしながら書いてましたw 何か変
かもしれません。

えーと、前回の前書きで愚痴っぽいこと書いてたのを見られた方、
忘れてくださいw もういいません。

6話 お茶会

「なにをやつとるんじゃあやつは」

箱庭を覗き込んでいたイシュタルは呆れ混じりの声を上げた。

箱庭のなかには自分が送り込んだ少年、コーイチとつき従う奴隷の少女が二人が映しだされていた。コーイチは机を並べて作りあげた台の上に横たわっており、その体には人ほどの大きさの蠅や螻蛄、蜘蛛といった蟲の類がまとわりついている。そのような状況にもかかわらずコーイチはまんざらでもなさそうな、にやけた顔つきをしていた。

奴隷の少女たちは、コーイチのいる部屋の外で手持ち無沙汰にしている。

イシュタルはコーイチの状況を常時監視するための準備がようやく整い、現在の状況を箱庭に再現してみたところだった。

コーイチは石造りの壁で出来た部屋の中にいた。その外は複雑に入り組んだ迷路のようになっていた。だが、コーイチはその迷路を探索するわけでもなく、その迷路の一室で蟲の体をまさぐっていた。そこは大魔王の本拠地のはずだ。前回までの定時連絡で旧首都とやらへ向かうところまではわかっていた。能力を駆使して移動すればとつくにたどり着いている頃だ。だとするとこれはおかしい。万能魔法を使えば迷路を抜けるぐらいわけはないはずだし、とつくに大魔王を倒していてもいいぐらいだ。不審に思ったイシュタルは箱庭の表示を俯瞰視点から主観視点へと変更した。これでコーイチが見ているものがわかる。

肌の乱舞、肉の饗宴。そんな言葉をイシュタルは思い浮かべた。コーイチの目に写っているのは肌もあらわな女達だ。思ったとおりだった。まやかしに捕らわれている。

コーイチ視点で見ると、蟲の化物が艶やかな美女としてその目に

写っていた。豪華な寝室のベッドの上でその美女たちがコーイチにまとわりつき、濡れた瞳でせがんでいる。

「勇者様……お願いです。大魔王の呪いで苦しいのです。早く……早くお情けを……」

「ああまかせてくれ！」

コーイチがやにさがった顔で二つ返事をしている。奴隷の少女達はその寝室の外で呆れたような顔で嬌声を聞いていた。

「ふむ……なかなかやるもんじゃのう」

イシユタルは感心したよう言った。今のコーイチはほぼ無敵だった。あれからコーイチは自らの魔法の効果時間が短いという弱点を克服していた。魔法を唱える魔法を使うことで、効果が切れる直前に自動的に再使用が出来るようにと工夫した。それとタブチに出会ったことで不変についても知っている。そのため、今のコーイチは、不死の魔法や不変の魔法を永続的に使用し続けることが可能になっていた。ただ、幻術の類をまったく考慮していなかったためにまんまと術中にはまっている。

このまやかさも単純に出られない迷路を演出するのではダメだったろう。その場合業を煮やしたコーイチが万能魔法で無理やり突破しようとするかもしれない。

そこで、大魔王に捕らわれている美女達という設定を用意したようだ。大魔王の呪いで苦しんでおり、男との交わりで解けるといったところだろう。そんな呪いぐらい、万能魔法で解けばいいはずだったが、コーイチは魔法で無理やり解くと副作用があるかもしれない、などと都合のいいことを思っているようだ。

「しかしこれでは時間稼ぎにしかならんとも思うがのう」

はよきづかんもんかのう。そう思っていた所にピユティアスが現れた。

「まずいことになった。かの世界への攻撃が可決された」

とは言うもののそう慌ててもいない。想定していた事態になったというだけのことだった。

「と、いうとやはりエルメスのやつかね？」

「ああ、事前に根回しは済んでいたんだろうな。どれだけばらまいたのやら。あっさりと決まったよ」

「ふむ……なら、もうこやつらはどうでもいいかも知れんのう？」

そう言って箱庭を見た。コーイチが女たちと乳練り合っているところだった。イシユタルには本当にどうでもよく思えてきた。

「いつ進軍するんじゃ？」

「すでに出た。可決前から準備してあったんだろうな。天上艦隊がほぼ全軍だ。エルメスは飽和攻撃だ、と息巻いておったよ」

「にわかには聞きかじった感じじゃのう。そりゃ相手の戦力がわかつたらんと成立せんじゃろ？ まあ……全軍ということであれば、六億艦ほどじゃったか？ 過剰すぎるほどじゃとは思うが……で、その艦隊は何するんじゃ？ 天蓋を包囲して砲艦外交といったところかの？」

「最後通牒はすでに付きつけてあると判断しているようだ。全面攻撃により天蓋ごと天盤を砕く。我らからすれば天軸さえ使えばよいらな。天盤自体はどうでもいいということなのだろう」

「強引じゃが……まあ、全く交渉に応じないのでは仕方ないのかのう」

神々にすれば他の世界のことなどどうでもよかった。今回の件も主神デウスがそこにいるからやっていることだ。それがなければもっと早くこの決定はなされていただろう。辺境の天盤世界が身の程知らずにも天軸を閉鎖するなどあってはならなかった。

「主神デウスは……まあ、ギリギリまで探す努力はしてみようかの。こうなつては偽装工作など無用じゃし、コイチに連絡を取つて、とつとと大魔王を倒させて、その後攻撃開始まで主神デウスを探させるかのう」「そのコイチとやらも可哀想にな……しかしそれならもう大魔王など放つておけばいいのではないか？」

「大魔王退治の報酬があればその後の探索も捗るじゃろう。しかし人間に同情かね？」

「それはそうだろう、こちらの都合で放り込んでおいて、その世界を消すのだからな。まあ、運命とはこんなものかもしれないが」「とりあえず、コイチには夢からさめてもらうとしようかの」

イシユタルは箱庭を操作しはじめた。

コイチは精根つき果てベッドの上で仰向けに寝ていた。体力自体は魔法で回復出来るのだが、それでも気だるさが残る。精神的なものなのかもしれない。

相手をしていた囚われの美女たちは去っていた。呪いが解けたということで後は自分で帰れると言い、何度も礼をしてから階下へと降りていった。ここまでに出てきたこの城を守る魔物共はあらかた倒していたがそれでも危険はあると思い、送っていくことを提案し

たがそれは断られた。

「コーイチ様にはまだ捕らわれている女達を助けていただきたいのです。一刻も早く大魔王の哀れな犠牲者達をお救いください。あ、それと、上の階にはまだまだ女達がたくさん捕まっていますので、上層階を一気に破壊するというようなことはやめてくださいね」

セリフの最後がなんだかとって付けたようではあったが、コーイチは素直にだったら順に探索しながら登っていかないと、と受け取った。

「コーイチ様……この様なことをお続けになるのでしょうか……」

エイミが寝転がるコーイチにおずおずと問いかける。

「ああ、これも勇者の努めだろう。しかし大魔王もひどい呪いがかかるな」

「その……なんだかおかしくありませんか？ そんな呪いで誰も得しないような気がするんですが……」

「大魔王なんだから、人を苦しめて楽しんでるんだろうさ。やはりそんな奴はさっさと倒さないとな！」

そう言うわりにはのんびりとしたものだった。顔がまたにやけている。上層階にいるという女たちに思いを馳せているのだろう。

コーイチが休憩を続けていると、足元で突然煙が立ち上がった。出てきたのは三択の神託という魔道具だ。コーイチは上半身を起しそのクイズコントローラーの姿をした魔道具を手取る。

「ハイハイハイ！ クイズの時間だぜ！ このヤロー！」

「お前もしつこいな……もう俺に死の罰ゲームなんて効かないって

十分わかってるだろう?」

「オー！ そいつは仕方ないぜ！ 全問終わるまで自動的だからな！」

コーイチは持ち物を収納しておく収納魔法で荷物を管理している。おかげで今もほとんど手ぶらと喋っていい状態だ。この魔道具もそうやって収納しているのだが、使用者が死ぬまで問題を出し続けるという魔法の方が収納魔法より優先度が高いようで、クイズだと言つては勝手に出てくるようになっていた。

「じゃあいくぜ！ 第五問。大魔王が言ったことのあるセリフはどれでしょう？ 1、味方になれば世界の半分をお前にやろう 2、この我のものとなれ勇者よ 3、知らなかったのか？ 大魔王からは逃げられない」

「なあ？ なんか問題がしょぼくなってないか？」

知ったからといってなんの役にも立たない情報だった。こんなものに命をかけるのは馬鹿げているだろう。

「そりゃしかたねーだろー！ リターンはリスクに応じるんだぜ！ 死なないお前にはなんのリスクもねーじゃねーかよー！」

「まあな、だから大魔王の好物だとか、セリフだとかどーでもいいことに気軽に答えられるな……3だ」

コーイチは3のボタンを押した。

「アタリだぜー！ じゃあな！ おーつとまだ問題は続くぜー」

そう言つと三択の神託は沈黙した。コーイチはそれを魔法で収納する。

「まったく……休憩の邪魔しやがって……」

再び横になろうとした時だ、煙がまた立ち上った。続けてクイズでも出すのか？ そう思ったが煙の中から出てきたのはイルカだった。

「ん？ ヘルプ機能か？ 久しぶりだな、どうした？」
『久しぶりじゃのう、いつ以来かのう』

女の声だった。口調は変だがまだ幼い感じの声だ。以前に聞いたことのあるヘルプ機能の声ではなかった。

『わしじゃよ、お主をその世界に送り込んだ神じゃ』
「いまさら何の用だよ」

コーイチは神はこの世界にまったく干渉しないものだと思い込んでいた。ゲームにも興味がないと言っていた気がするし、実際自分がどんなにピンチに陥ろうと全くなにもしてこなかった。

『なに、助言をしてやろうかと思っただのう、お主いま大魔王の城におるんじゃろ？ まぼろしにとらわれてそこから出られんようになつておるぞ』
「なに？」

蟲とまぐわっていたことについては黙っていた。どうせ死ぬとしてもそれまでは気分よく指示に従ってもらわないと困ると思つてのことだ。

「我は命ずる！ まぼろしを打ち消せ！」

幻術を解除した。途端に豪華な天蓋付きベッドは姿を消し、薄汚い机をいくつか連結したものと変わる。部屋そのものもなんの装飾もない灰色の石壁の部屋へと早変わりした。そしてコイイチをあげ笑つかのように上階へと続く階段まであらわれる。コイイチは間抜けにも階段を目の前に狂宴にふけていたということになるのだろう。

「ほんとだ……大魔王め！ 姑息な手を使いやがって！」

『まあそういうわけじゃ。後は安心するがよい。周囲の状況はこちらでわかるから最短経路を教えてやるっ』

「もうちょつと休憩したらな！ 俺疲れてんだよ」

コイイチが動き出したのはそれからしばらく経ってからだった。

「あちゃー、もう来ちゃったかー、思ったより早かったなあ」

現在大魔王の別宅として使用されている城の最上階、そこにロベルティーネはいた。本来この最上階にはきらびやかなガラスで作られた天井があつたがそれは大魔王に壊された。再建するのも難しかったので綺麗さっぱり取り払われている。そのため最上階は野ざらしの屋上と化していた。

穏やかな日差しの中、ロベルティーネはテーブルセッティングを行なっていた。階下からテーブル類や玉座、飲食物の入った樽や箱などをガーゴイルやスケルトンに運び込ませている。ロベルティーネはテーブルクロスをかけたり、ティーカップなどの食器の配置に

夢中になっているところだった。これらは大魔王の指示によるものだ。お茶でも出して歓談すればいい、と言っていたが本気だったらしい。

コーイチはその様子にとまどった。大魔王との決戦と意気込んできたが思っていたのと様子が違う。

「もうちょっと待ってくんない？ それぐらい余裕あんでしょ？ 勇者様ならさあ」

「どついうことだよ！」

「大魔王様、今いないんだよね。帰ってくるまで待ってて欲しいんだけど」

「お前が大魔王じゃないのか？」

コーイチはそう問いつつも違うみたいだな、と思っていた。ロベルティーネは大きな三角帽子に黒いローブ、手には杖といったいかにも魔女といった格好をしていて、小柄で威厳もない。大魔王にはとても見えなかった。

ロベルティーネはサイコロリンの撃退を不意打ちのような形で行なっていたため、コーイチと直に顔を合わせるのはこれが初めてだった。

「違うんだよねえ。これが。あれ、お仲間はどうしたの？ 後二人いたよね？」

「お前に言う必要はないね」

エイミとアニッタの二人は階下に置いてきた。決戦の場においては危険だと思ったからだ。それならば最初から連れてこなければよかつたのだが、二人は是非ともお供させてくれと言い半ば無理矢理ここまでついてきていた。だが最終決戦にまで立ち合わせる訳にはいかない。

「その二人の分も準備してたんだけど、ま、いないならしょうがないね。大魔王様がさ、お茶会しようって言ってたから付き合ってたよ」「なんだそりゃ？ お茶会？ ふざけてんのかよ」

そんなものに付きあう必要は感じなかった。ここにいるのは大魔王の手先だ。ならば倒すまで。人間のように見えるが構いはしない。これまで何人もこの手で殺してきた。

「我は命ずる！ 爆ぜる！」

ロベルティーネの姿がかき消えた。

「やっぱりねえ、それ対象がはつきりしてないと使えないでしょ？」

その声は背後から聞こえてきた。慌てて振り向く。そこにはロベルティーネが5人立っていた。

「あんたに攻撃は通じないみたいだけど、それでも色々観察はしてたんだよね。それ、目の前にしか使えないでしょ？ ってことはさ、はつきりと対象を認識しないと使えないんじゃないかなあ、とか思ったんだけど、当たった？」

その声は前方から。気づけばコーイチは複数のロベルティーネに取り囲まれていた。

「……幻術を使ったのはお前か……」
「そ。で、まあ、いきなり攻撃されちゃあ、私もちよつとむかついちやっただけだ」

ロベルティーネが敵意をあらわにする。二人の緊張が高まった。一触即発という状態だが、お互い決め手に欠ける。ロベルティーネの攻撃はコーイチに通用しないし、コーイチは今までにない状態にとまどっている。万能魔法なのだから、何か応用を思いつけば打開出来る可能性はあるが、瞬時にそれを思いつけなかった。

「びよー！」

そんな二人の緊張を間抜けな鳴き声が打ち破った。何か空からやってきていた。

コーイチは上空を見上げた。その鳴き声は空から聞こえてきている。

逆光を背に何かが降りてくる。それは影になってよく見えないが羽ばたきの音から鳥の類だと思われた。

何かが軽い音を立てて着地する。ようやくその姿が確認できた。ひよこだ。まずひよこが目に入った。ばかでかいひよこだった。大人の背丈よりも大きく、抱えることも無理なほどの巨大なひよこだった。

その隣には黒衣の少女だ。黒衣の少女はねぎらうようにひよこをなでている。このひよこがこの黒衣の少女を運んできた。そうしか思えない状況だった。

コーイチはその姿を視認した瞬間にその美しさに見とれた。

「パエリアちゃん、おひさー」

「はい、おひさしぶりです」

一人固まるコーイチをよそにのんきな挨拶が行われていた。

「この方が挑戦しにやってきた方ですか？」

「そう、お茶用意してたのに飲まないって、ひどいよねえ」

二人はコーイチを見ながらそんなことを言っている。コーイチはしばらく呆然と大魔王を見つめていたがやっと口を開いた。

「お前が……大魔王なのか？」

「はい、こんにちは。お茶を一緒にしましょう。それともお茶はお嫌いなのでしょうか？」

大魔王がにこやかに微笑みながらお茶に誘う。

「は、はい」

コーイチはテーブルにつこうとふらふらと歩き出した。

『こりゃ、何をやっとなるんじゃ！』

「え？ 神？」

コーイチにのみ聞こえるように調整された会話だった。この声にコーイチは我を取り戻した。

「お主の意識レベルを下げた。これでとりあえず大丈夫じゃろう。気をつけんか！ 相手はまがりなりにも大魔王を名乗る相手じゃぞ？ 油断するでない」

目の前が少しぼやけるように感じた。聞こえる音もすこしくぐも

ったようになってる。

『しかし精神干渉系の魔法の対策は取っとるはずじゃのにどうしたんじゃろな』

これは魔法でもなんでもない、コーイチはただ大魔王の美貌に魅了されていただけだ。

「くっ、さっきも言ったが、誰が茶なんぞ飲むか！」

立ち直ったコーイチは強がった。これでは駄目だ。戦うなら戦うでさっさと始めるべきだ。そう思った。

「ほらね、この調子なのよ」

「まあ、嫌だというものを無理に誘ってもしかたないですしね。わかりました。ではどうしましょうか？」

「あ、パエリアちゃん、あれ用意したんだよ。座ってみない？」

そう言ってロベルティーネは運びこんできた玉座を指さした。人骨を組み合わせて作り上げた悪趣味な代物だ。この城に残されていたものでテオバルトが使用していたものだろう。

「そうですね、せっかくですし」

そう言って大魔王は白骨で出来たいかにも座り心地の悪そうな玉座に腰掛ける。

「うーん、似合わないねえ。あ、足組んでみてよ。で、これ持って」

ロベルティーネは赤い液体の注がれたワイングラスを大魔王に渡

した。大魔王も言われたとおりにする。

「やっぱ悪っぽくないねえ。かわいすぎるよパエリアちゃんは」

「やはり猫でもなでるべきでしょうか？」

「うーん、ひよちゃんは大きすぎてひざには乗らないしねえ」

そのひよちゃんは、テーブルに用意された専用席に座っていた。平皿に入れられた水を美味しそうに飲んでいる。黒糖入りの特別製で、長距離移動をねぎらうべく用意されたものだった。

「では、ロベルティーネさんが乗ってください。あなたなら小柄ですし大丈夫だと思います」

「えー？」

不満を口にしながらもロベルティーネは帽子を脱ぎながら大魔王の膝に乗った。大魔王がワイングラスを片手にロベルティーネの頭をなでる。悪い気分ではなかった。

「では……よくぞ来た！ 勇者よ！」

芝居がかった声で大魔王が言う。

「何がしたいんだよ！ おちよくってんのか！」

『これ！ いちいちとりあうでない！ 相手のペースに巻き込まれるな！』

「せっかくこんな辺鄙な場所までご足労いただいたわけですし、大魔王らしい感じのおもてなしをしようかと思っただけですが、ご不満ですか？」

コーイチはわけがわからなかった。大魔王を倒すべくこうしてや

つてきたが、とても大魔王に見えないし、戦うような雰囲気でもない。ここでいきなり襲いかかる方が悪としか思えない状況だ。

「ロベルティーンネさん、この椅子すわり心地悪いです。今後はこれはやめにしましょう」

大魔王は道端で寝たりするぐらいだ。これぐらいは平気なのだろうと思われるが、椅子のすわり心地が悪いのは気に入らなかったようだ。

「まあねえ、テオバルトどんな趣味してただよ！　って感じだしねえ。もうちょい、いいの作っとくよ」

「お願いしますね。では……そうですね。一応聞いておきましょうか。勇者さんはどのようなご用件でしょうか？」

そう言うとき大魔王はコーイチを見つめた。

「お前を倒しに来たんだよ！」

「なぜでしょうか？　私はあなたの恨みを買うような覚えはありませんよ？」

大魔王は小首をかしげながら不思議そうに問いかける。

「お前は、人類の領土に侵攻して、世界支配を目論んでるんだろうが！　それだけでお前は世界中の人類から恨まれてるんだよ！」

「なるほどわかりました。ここで私が侵攻してない、世界支配など目論んではいないと言っても当の本人が言うことですから信用してはもらえなさそうですね。でもあなたが言うのはおかしくありませんか？　あなたこの天盤世界の人じゃないですよね？」

コーイチは驚きのあまり何も言えなくなった。なぜそんなことを大魔王が知っている？

「ああ、簡単ですよ。あなたの使ってる魔法の接続線コネクションが外を向いているからです。この世界の魔法はこの世界で完結してますからね。よその世界の力を使用する魔法はほとんどありませんから、あなたがよその世界の関係者だというのはそれでわかります」

「だからどうした！ 俺も今ではこの世界の住人だ！ 大魔王を倒して世界を平和にする！ どこが悪い！」

「そうなんでしょうか？ あなたを含めたサイコロリンの方はこの世界においては歪な力を持っています。それで果たしてこの世界の住人と言えるのでしょうか？」

「何が言いたい！」

「いえ、私などより、あなたの方がよっぽどこの世界にたいして迷惑なんじゃないかと、そう思いましたので。気を悪くされたならすみません」

そう言われるとコーイチも考えこんでしまう。タブチのような奴が好き放題暴れたとして誰にも止めることは出来無い。今の自分もそうだ。気に入らないものを何でも好きなように叩き潰せる。自分が正義だとは思っているがそれを他者が認めるとは限らない。

「ああ、すみません。柄にもないことを言つてしまいました。まあこれはただ時間を潰しているだけの戯言ですのであまり気にしないでくださいね。私も久しぶりにこちらに来ましたし、来てすぐ帰るのも慌ただしいです。なにせ戦いを始めたらすぐに終わってしまいますから」

大魔王は相変わらずロベルティーネをなでながらそんなことを余裕たっぷりにしゃべっていた。よほどの自信があるようだ。

これを見ているイシュタルは埒があかないと思った。コーイチはいちいち大魔王の言葉に反応し惑わされている。これが作戦なのかもしれない。

イシュタルはやむを得ないと判断し、コーイチに対して若干の操作を行うことにした。アドレナリンの分泌を促し闘争心を煽る。大脳皮質の特定部位を麻痺させ、美醜、善悪の判断を鈍らせる。より原始的な脳が機能するように調整を行った。

『さあ、行け！ コーイチよ！ 大魔王を倒すのじゃ！』

「我は命ずる！ 大魔王！ お前は死ね！」

その言葉から戦闘は始まった。

「いやです」

大魔王は一言で切って捨てた。

大魔王にはなんの変化もおこらない。コーイチの魔法は効果を発揮していなかった。

「は？」

「ああ、私はですね、様々な世界のいろんな人達に散々悪口を言われたのです。死ねとか殺すとか犯すとかクソアマがとか腐れビッチがとか酷い事を言われました。お陰で大抵の言語での悪口はわかるようになってしまったのです。悲しい事です」

まったく悲しそうではなかったが、大魔王はコーイチの疑問を言葉の問題ととらえた。コーイチの呪文は翻訳されずに元の言語そのままだ。この世界の人間には理解出来ない。

だがコーイチは単純に魔法が効かなかったことに驚いていた。

『コーイチ！ 一旦離れるんじや！』

コーイチはイシユタルの指示に従った。距離を取る。幸いこの屋上にはお茶会のために様々なものが持ち込まれていたので隠れる場所には困らない。コーイチは木製の巨大なコンテナの陰に隠れた。

「かくれんぼですか？ 戦う気がないなら帰ってもらってもいいです、戦う気があるなら出てきてください。それまではお茶でも飲みましょう」

大魔王はロベルティーネを膝から下ろすと、玉座から立ち上がり、お茶会用に用意された席につく。

ロベルティーネは紅茶の準備を始めた。ひよちゃんは水を飲み尽くして、今は豆をつついていてる。

『万能魔法はあくまで魔法じゃ。相手に魔法抵抗やらがある場合は効かん場合もある。忘れたのか？』

「じゃあどうしろってんだよ！」

『殴りかかってみてはどうじゃ？ お主もそれなりの身体能力はあるろっつ。』

「ギヤハハハ！ クイズの時間だぜ！ 準備OK？」

いつものように唐突に三択の神託は姿を表した。

「お前は……空気よめよ。今まさに大魔王と戦ってるどころだろう

が！」

「そつちの都合なんざ関係ねー！　いくぜ！　第六問、大魔王は闇の衣とよばれる服を着ています。この闇の衣の効果はなんでしょう？　1、即死無効　2、魔法抵抗　3、凍てつく波動」

「1だろ。さつき見た」

1を押す。

「ハズレだよ、ばーか。特別に正解を教えてやる！　1と2だ。こいつは正解を続けて調子こいてる奴をはめるために用意してあるんだが、お前にはもう関係ないしな！」

正解が必ず含まれると言っていたとコーイチは思い出した。確かに正解が一つとは言っていない。だが今さらの話だった。死なないコーイチには関係ない。

「じゃあな、あ、そうそう次で最後だ。名残おしいがな！」

そういつと三択の神託は沈黙した。

「なんなんだよ、こいつは……しかし魔法抵抗っ魔法が効きにくいってことか？　それならこれしかないだろ」

コーイチは覚悟を決めた。何をやるかはつきりとイメージし、それを実現するべく飛び出す。

「おや、戦うことにしましたか？　まあやりたいことを、めいっばいやってください」

コーイチの姿を見た大魔王は席を立った。テーブルから少し距離

を取る。

「我は命ずる！ 俺が耐えられる限界まで身体能力を強化しろ！」

コーイチの結論は単純なものだ。相手に魔法が効かないなら、自分に魔法をかけて強化すればいい。

強化した脚力を全開にして床を蹴る。床がえぐれて吹き飛び、その勢いで一気に駆け寄ると大魔王の顔面めがけて拳を放つ。だが、それは大魔王がすこし身を振り足をだすことで簡単にかわされた。コーイチは大魔王の足につまづき無様に転倒する。

「なんと言いますか……足元がお留守ですよ？ そういうの向いてないんじゃないですか？」

大魔王がかわいそうなものを見るような目でコーイチを見た。コーイチに格闘技経験などない。付け焼刃ではいくら身体能力を強化しようという意味はなかった。

コーイチはそれでも立ち上がると何度も大魔王に殴りかかった。だがそれはかすりもしない。このままいくら続けようと結果は変わらない、そう思わせる光景だった。

自らの限界を悟ったコーイチは一気に後ろに飛び距離を取った。大魔王もそれは見逃した。そもそもいまままで手すら出していない。何をしようともどうでもいいという様子だった。

コーイチは奥の手を出すことにした。

「我は命ずる！ 出でよ！ 王者の剣、必中の槍、山を断ちし剣、
不滅の刃、貫くもの、天叢雲剣、嵐の剣、魔弾、無敵の盾、龍殺し、
小人の剣、炎の剣、報復者、眩ます剣、琥珀の首飾り、命奪の剣……」

コーイチは知る限りの伝説の武器の名前を唱え続けた。途中からは、魔法を唱える魔法の補助も加えてだ。それは元の世界の情報を検索し、ありとあらゆる武器の名前を付け加えていく。

大魔王を取り囲むように空中に無数の槍や剣や弓や盾が現れる。十重二十重と層をなしていく。それらは魔王や神を倒したと言われる伝説の武器の能力を再現したものだ。本物があるかどうかもわからないが、能力だけなら伝説通りといえる。それらがすべて大魔王へと向けられていた。

これがコーイチが考える限り最強の攻撃手段だった。

大魔王はそれを黙って見ていた。相手の攻撃準備が終わるまで退屈そうに待っている。

「刺し貫け！」

その言葉が合図なのだろう。用意された全ての武器が一斉に大魔王へと襲いかかった。

大魔王は両手を左右に大きく開くとぐるりと回転した。舞うような動きだ。くるり、くるりと数度回転する。

大魔王の舞から一拍遅れて全ての武器が崩壊した。砕かれ、裂かれ、押しつぶされてキラキラと輝きながら消滅していく。

「借り物の力では所詮こんなものなのでしょうか？」

全てを出し切ったコーイチは呆然となった。こんな自体は全く想定していない。これで殺せない可能性もあるとは思っていたが傷一つ付けられないとは思ってもみなかった。

「なんだよ……それは……」

「このことでしょうか？」

そういつと大魔王は軽く手首を振った。何かがコーイチの耳を挟んで背後へと飛んでいく。背後を見やるとそこには一直線に挟られ、傷つけられた床があった。

「斬撃はある程度のレベルに達すると翔ぶのです。覚えておくといいでしょっ」

勝てる気が全くなかった。肉弾戦でもまるで歯が立たず、切り札の魔法もあっさりと破られた。不変と不死で防御をしてるはずだが、耳は簡単に飛ばされている。逡巡しているとまた、三択の神託が飛び出してきた。それは中空に出現し床にぶつかって硬い音を立てた。コーイチには拾いあげる気力もない。

「ギャハハ！ 最終問題だ！ ん？ なんか顔色悪いな？ どうしたよ！」

「だからお前は空気読めつつってんだろっが！」

「お友達ですか？ 面白そうな方ですね。あなたよりよほど面白そうですね」

大魔王はその魔道具を興味津々といった様子で見つめている。何か面白そうなものが出てきた。そう思っているようだ。

「最終問題です。大魔王は変身し、変身ごとにその強さを増します。さて、何回変身するでしょう？ 1、1回 2、2回 3、3回」
「は？」

まさかの問いだった。ゲームに出てくるようなラスボスなら一度ぐらいは形態を変えるものだ。だが、まさか現実に存在する大魔王までが変身するなどは思いもしない。

「3……」

最悪のケースを選択した。ハズレてくれればいい。そんな願いが込められていた。

「アタリー！　じゃあな！　これでお別れだ！　それなりに楽しかったぜ！　お前を殺せなかったのが心残りだが、最後の嫌がらせとしては上出来だったか？　ギャハハッ！」

そういつと三択の神託はボロボロと崩れだし、砂の塊のような状態になった。これでもう二度と起動することはないだろう。

コーイチは絶望とともに大魔王を見た。変身してまだ強くなる。今の状態でもまったく勝ち目がないというのにどうしろというのか？

「変身を知ってるとは思いませんでした。まあ公開情報ですし、隠しているわけではないのですが」

大魔王がゆっくりと歩いてくる。コーイチは逃げることも出来ずにただ立っていた。

「さてどうしましょうか？　死にたくないということでしたら見逃しますよ。でも、その場合余計な力を持った方がうるちよろすることになりますし、サイコロリンの方はまだ何人が残っているようですね」

「見逃してくれるのか？」

コーイチはすぐるような目付きで大魔王を見た。大魔王には殺意は見られない。のんきな顔に見えた。

「しかし、先程から不愉快な視線を感じますね。これが元凶でしょ

うか。やはり元から絶たないとダメですね。わかりましたそうしましょう。せつかくですし、変身も一部お見せしましょう」

コーイチには大魔王が何を言っているのかわからなかった。元凶、元から絶つ、なんなのだろう？

大魔王が右腕の袖をまくり上げた。肘のあたりまで素肌をさらす。しなやかで白く美しい手だ。

その右腕が爪の先から徐々に黒く染まっていく。手首を通過して肘のあたりまでが闇に染まる。完全な闇と化したそれは光を全く反射しないため平面的に見えた。

その右腕を大魔王は目の前へと突き出した。空間が水面の様な波纹を立て、その中へと右腕が吸い込まれる。右腕が消えたように見えた。

大魔王はその右腕をなにかをまさぐるように動かしている。その姿はスキだらけにも見えたが、コーイチには何もできなかった。スキがどうこうというのなら、この大魔王は最初から今まで、ずっとスキだらけだ。

「深淵を長く覗くならば、深淵もまた等しくおまえを見返す、という言葉を何かで聞きましたが、この場合私とその深淵ということでしょうか？ 観察が対象に影響を与えるということを忘れるからこのようなことになるんです。女は視線に敏感なのですよ？」

しばらくそうやっていたが、その言葉と共に右腕を引き出した。再度空間が波紋で波打つ。その手には何かがかまれていた。大魔王はそれをコーイチの前に投げ捨てる。ポテン、という音とともにそれは倒れた。人の姿をしている。

「お前は……ロリ神！」

それはイシュタルと呼ばれている神だ。貫頭衣を着た幼い少女の姿で金色の髪を側頭部でくくって垂らしているのが印象的だった。ただそれ以上に目立つのが、元は純白であったであろうその衣服だ。血まみれだった。

イシュタルはのろのろと体を起こした。わけがわからない。そういった顔をしている。コーイチの呼びかけにもろくに答えなかった。きよろきよろとあたりを見回すうちにある一点に目が止まる。その先にいるのは大魔王だ。

大魔王はイシュタルと目が合うといつものようにおだやかに話しかけた。

「こんにちは。人任せで高みの見物というのはよくありません。今回の件はあなたに責任を取ってもらいましょう」

大魔王はにこりと微笑んだ。

6話 お茶会（後書き）

伝説の武器は大体、斬撃のレギンレイヴから持って来ましたw
そういえば、エクスカリバーとカラドボルグは同じものだと聞いた
こともある気もしますが、その辺は気にしないでください。

7話 代理（前書き）

一気に3章最後まで書こうかと思ったんですが長くなってきたので切りのよさそうな所で区切って投稿します。

あと、今回も番外編の人が出てくるので出来れば番外編を読んでおいてください。まあ、本編だけでわかるようにしとけよ、ってのはあるんですが。

7話 代理

彼が目を覚ますとそこは見知らぬ場所だった。きよるきよると見回すもまったく見当がつかない。あたりはかなりの広さの間だ。壁は真っ白で染み一つない。床も磨き上げられ鏡のように周囲の光景を反射している。柱一つとってもそれだけで芸術作品と呼べるような精緻な彫刻が施されている。見あげれば天井には煌びやかなシヤンデリアが眩しいぐらいに輝いていた。彼は身がすくむ思いだ。とても自分のようなものがいていい場所ではないと寒気すらしてきた。

その部屋の中で彼のいる場所は一段高くなっている。彼はこれもまた豪華な椅子、玉座に載っていた。その玉座の前から広間の入り口には豪華な赤い絨毯が伸びている。

彼は思った。なるほど、ここは謁見の間のようなようだ。だとしても自分がなぜここにいいのか？ それがわからない。

彼は自分の棲家である洞窟で寝ていた。その洞窟は大魔王より与えられたものでそこに侵入して拉致しようなどという愚か者がそうそういるとは思えないのだが、どうも寝ている間にさらわれてしまつたらしい。

大魔王がいなくなつてからの平穩の日々が音を立てて崩れていく予感がする。崩壊の序曲が聞こえるような気がしてきた。

彼は違和感を感じたため触手を胴体の上へと伸ばした。胴体とは彼の頭のように見える部分だ。蛸の胴体はよく頭と勘違いされている。頭は触手と胴体の間だ。脳もそこにある。彼は蛸だ。ただし触手は四本しかない。

胴体の上には何かがのつていた。つかんで目の前に持つてくる。王冠のように見えた。胴体のサイズに合わせてあつらえたかのような大きさの物だ。続けて胴体に巻きつけられている紐のようなものも探してみる。胴体の背部にマントのようなものがつけられている

のがわかった。

まるで王様みたいだな。

そう思った。

しかしそうだとしても意味がわからない。なぜこのようなことになっているのか？ 起きる前の事を思い出す。夢を見ていたような気がするがそれが夢だったのか判然としない。

「さすがつす！ テデスコさんさすがつす！」

「さすが、テデスコさん、マジばねえ！」

「大魔王代理だなんてすごすぎつす！」

「信じらんねえ！ テデスコさんは格がちげえ！」

いつものように舎弟たちが騒いでいる夢だった。だが、これは本当に夢だったのだろうか。何か聞き捨てならない単語が含まれていた気がした。

かなりまずいことになっている。そう思った。今なら誰もいない、逃げるなら今だ。彼は即座に行動に移したが少し遅かった。玉座から降りようとした瞬間、広間の出入り口である大きな両開きの扉が開かれ、ぞろぞろと何者かが入ってくる。

それを見た瞬間全てを諦めた。化物の中の化物、魔界の王者達、魔王と呼ばれる者達だった。俺の人生は終わったのかも知れない。彼、テデスコはよるける体を玉座の背もたれに預けた。

「よう、目が覚めたか。大魔王代理兼大元帥兼魔界統括本部長もどきのテデスコさんよ」

そう言うのはほとんど裸の筋骨逞しい男だ。申し訳程度の布で腰を覆っている。全身が傷だらけだがそれを隠そうともしない。顔面

も含めてあらゆる所に傷がある。力王ゴルバと呼ばれる男だった。

「は？」

テデスコは間抜けな声しか出せなかった。テデスコには一応大魔王から与えられた肩書きがある。大元帥というのがそれだ。だがこれは名目上のものでしかない。そもそも大魔王が軍隊など保有していないのだ。よって彼が指揮するような軍勢もない。大魔王はきまぐれに肩書きを与える。そのため、おいしいお肉大臣やら、新鮮お魚大臣などどうでもいいような肩書きは枚挙にいとまがない。

だが、大魔王代理兼大元帥兼魔界統括本部長もどき。などという肩書きには覚えがなかった。

「ああ、殺してえ。この蛸殺してえ。大魔王様、『新鮮な魚介類が食べたいです』とか可愛く言ってくれねえかなあ。そしたらこの蛸切り刻んで、お造りにしてさし出すのになあ」

テデスコに対して殺意を隠そうともしないのが、蛇王バ格拉斯。人の姿と格好をしているが、蛇の名が表すように全身は鱗で包まれている。眼の瞳孔は縦に長く、舌は二股にわかれていた。全体的に細長いシルエットなのも蛇ゆえだろうか。

「この蛸に手を出してみる。ただではすみません。大魔王様の命令は絶対ゆえにな」

バ格拉斯を睨みつけるのは、炎王ザミイ。炎の塊だった。かろうじて人の姿をしているとも思えるが、外炎部が広がりはつきりとはしない。

「この方向もわかっておられないようですよ？　まず説明してあげ

てはどうです？」

そう言うのは、巨大な水晶玉だ。その玉に飾り程度の短い手足がついている。球王タマちゃん。大魔王より愛称タマちゃんを賜った際に本来の名を捨てた。

「わかりました。私が説明いたしましたしょう。大魔王様が魔界を旅立たれる際一つの問題が発生しました。つまり、大魔王様不在の際の代わりが必要だということです。そのことを大魔王様にお尋ねしたところ『だったら、テデスコさんでいいです。大魔王代理兼大元帥兼魔界統括本部長もどき、ということはどうでしょう？』とのことでした」

説明をしたのが、賢王フェルディナダ。異形共の中では逆に目立つ極普通の人間の女のような姿だった。かつしりとした軍服のような服を着ており、眼鏡をかけている。視力矯正が必要な悪魔などいないのでこれは飾りだ。

テデスコはその説明を聞きながら、なんでこいつら大魔王のものまねがうまいんだよ。などとどうでもいいことを考えていた。

「えーと……謹んでお断り……」

「ああ！」

魔王が一齐にテデスコを睨みつけた。魔王五人の射るような視線に縮み上がる。彼らがその気になれば視線ですら敵を打ち砕ける。今死なないのは大魔王の任命したという肩書き。それだけの理由だろう。

怖すぎる。こいつらに比べたら大魔王の方がなんぼかましだ。睨まれただけで死にそうだよ……。

「今断ろうとしたかあ？ ああ？ 出来るわけねえだろうが！ お前が大魔王代理なんてありえねえのは百も承知なんだよ！ こっちはためえが俺らの上に立つっただけで、発狂して死にそうだよ、わかってんのかあ！」

「例え狂い死のうとそれが大魔王様のご命令だ。潔く死ね！」

さらに文句をつける蛇王を炎王が諫める。

ははっ……大魔王がいなくなつて平和になつたと思つたら、むちゃくちゃすげえ嫌がらせを置いていきやがった……

胃が痛い。今すぐ触手を全て食べちぎりたい衝動に駆られる。

「まあまあ、これでは話が進みません。テデスコさん、実は今少々問題があるのです。それでご足労いただいたのですよ」

タマちゃんがそう言う。なんとなく名前のせいか穏やかに感じたテデスコは少しだけ安心した。

タマちゃんの水晶の表面が黒く染め上げられる。その黒の中に点々と白い輝きが無数に現れた。夜空の星々のようにも見える。

「これは領界の外端あたりの映像です。映しだされているのは、1765天盤世界の駆逐艦ですね。15978天盤世界のガナー社製で兵装の置換が行われていないなら主武装は光子魚雷です。領界に侵入済みの艦数は一億ほどです」

「へえー」

まるで現実感がない。そんな説明をされても困るとテデスコは思った。それと今自分がこんな目に合っていることとの関連が見えてこ

ない。

「これは明らかに協定破りの侵略行為に他なりません。このタイミングでの侵略で思い当たる原因は一つ。天軸の閉鎖です。彼らはこれに業を煮やしたのでしょう」

「ほおー」

だからどうしたとしか思えない。

「ただ、天軸の閉鎖自体はその天盤の主権に基づくものです。とやかく言われる筋合いはないのです。ですがここでいくつか問題があります。まず、我が世界の交渉窓口である神が機能していません。恐らくかの世界からの問い合わせは神にあったのでしょうが、神は返答しなかったようです。それと……それに関連して偵察にやってきたと思われる艦艇があつたのですが、それをゾネさんが『やつておしまい!』とかなんとか部下の方に命じたようでことごとく破壊してしまつたのです。それで話がこじれてしまつたようですな」

徐々に話は核心に迫っている。嫌な予感が増していく。

「本来外世界からの侵略に対応するのは神ですが、神は動こうとはしません。仕方ありませんので、天軸を領土内に持つ我々が対応しようということになりました。そこでゾネさんには先走つた件の責任をとつてもらつたということで、天蓋の外で待機して防衛にあたつてもらっているのです。ここで問題になるのはさすがに勝手によその天盤世界と交戦してしまつていいものか? ということです。我々にはそのような権限がないと思われますし」

「で?」

もうわかつた。多分胃の中は血まみれだ。ストレスで急性潰瘍だ。

「あなたには、大魔王代理として天盤戦争の引鉄を引いてもらいたい。そういうことです」

一瞬目の前が真っ白になった。ひどすぎる。ここまでひどい仕打ちがあつていいのかと思う。俺が何したつてんだよ！ そう叫びだしたくなった。

「その……神様になんとかしてもらおう方向で努力したほうがいいんじゃないですかね、ほら勝手にそんなことやってもまずいですし……」

「その神がな、引きこもつて出てこねーんだよ。何回か会いには行つてみたんだけどよ」

がははと笑いながら力王が言う。この傷だらけの顔のおっさんに呼ばれても出て行きたくないだろうなあ、などとテデスコは思う。

「えーと……そう、この王冠とかマントとかはなんですかね？」

話を先延ばしにしたいくてどうでもいいことを話題にした。

「それは大魔王様があなたのために特別に手配されたものです。粗末に扱うことは許されません。しかしその姿は人間の描く風刺画などにありそうですね。蛸が王の扮装をする間抜けな姿。タイトルは……王様は蛸でしょうか？ もちろんこの蛸という部分には馬鹿とかアホとか間抜けとか能なしとか様々な意味がこめられています」

賢王が言う。この女もテデスコに対する憎しみを隠そうともしない。ゴミを見るような目だった。

「あまり時間がありません。何、簡単なことです。ゾネさんに一言、やれ。そうおっしゃればいいのです」

タマちゃんが事もないように言う。その一言にどれだけの責任がかかるのか。想像もできない。

「待ってくれ！ 一億とかの命を奪う決断を俺にしろって……しなさいということですか」

「一億というのは今見えているだけで後続はもちろんいるのでしよう。ああご安心ください、ほとんどが遠隔操縦で生物が乗っているのは指揮艦ぐらいのもです」

尻込みするテデスクにタマちゃんが優しく説明するがそう聞かされてもなんの慰めにもならなかった。結局戦端を開く責任が全てテデスクにふりかかってくる。

テデスクも日常的に生きるために他者を殺し食らっている。魔界はそのような世界だ。ただ必要以上に殺すことはない。この場合は襲ってきそうだから先に倒すというのは必要の範囲にも思えるがそれでも規模が違いすぎる。

「た、頼む。一度でいい！ 大魔王と話をさせてくれ！」

「あなた……ゴミ、いえ、蛸の分際で大魔王様の手を煩わせようというのですか？ 身の程知らずにも程がありますね？」

賢王は辛辣だ。テデスクのことがよほど気に入らないらしい。

「わかった。幸い俺は大魔王様の下僕の知己を得ている。それを通じて大魔王様に連絡が取れないかやってみよう」

炎王が言う。この男はテデスクに対して嫌悪感をあまり持ってい

ないようだ。だがそれが逆に恐ろしくもあつた。この男は他の者達よりも大魔王への服従度が遙かに高いのだ。大魔王がきまぐれにおかしな事を言い出してもそれをそのまま実行するのだろう。その対象がテデスコになる可能性は十分にある。

針のむしろとはこのことなのだろうか。いたたまれない。テデスコは祈るようにして大魔王と連絡がつくのをはたすら待ち続けた。

何が起こつたのかわからない。イシユタルは混乱のうちにいる。

イシユタルはピユティアスと共に箱庭を眺めていた。大魔王に太刀打ち出来無いコーイチにイラついていたところだ。大魔王のあまりの強さを不審には思ったがそれ以上にコーイチの不甲斐なさばかりが目についた。それに計算が狂つてもいる。これでは主神デウスの探索を行えない。こんな戦いはやめさせ探索に移るべきか。そう考えていた。

そこに箱庭から何かが出てきた。闇だ。闇の奔流が溢れ出て天井に激突した。それはガリガリと音を立てて天上を掻き回すと、ぞつとするほどの深い傷跡をつける。黒い巨大な鉤爪のようなものだった。五指を備えた闇の刃は天井には何も無いと悟つたのか、部屋中を暴れまわつた。それは箱の中に手を突っ込んで何かを探す、そういつた動きだ。イシユタルの骨董コレクションが片つ端から砕かれキャビネットが粉微塵にされる。無事と言えるのは箱庭とそれが載っている机ぐらいのものだった。箱庭から闇の手が伸びているためだがこの暴れようでは箱庭自信も危ういだろう。

呆然とそれを見ていたピユティアスがその手に掴まれた。為す術もない。イシユタルの目の前でピユティアスは握りつぶされた。手の隙間から鮮血が飛び散り部屋中を朱に染める。全身を全方向から

一度に圧迫され原型を留めていない肉塊が開かれた闇の掌からこぼれ落ちた。べちゃっという濡れたものがへばりつくような音を立てて床にぶつかる。

付いた血を振りはらうように闇の手が軽く振られた。力加減を確認しているようにも見える。何度かその動作を繰り返した後、再び部屋を掻き回すように暴れ始めた。

その部屋は狭い。逃げまわる程の広さもない。動転したイシュタルは部屋を出ることも出来ずその手に掴まれ、全身を逆らいようのない力で締め付けられたまま箱庭の中へと引きずり込まれた。

イシュタルはそこまでを呆けたようになりながら思い出していた。では、この服を染めている赤はピユティアスの血ということか。信じられない。神がこのようなことで死ぬわけがない。いや、死んだ事を確認したわけではない。神であるからあれで死んだとも限らない。だがそれ以前に神が血を吹き出すなどあつてはならなかった。

「もしもし？ どこか具合でも悪いのですか？」

イシュタルの目は大魔王の方を向いている。だが焦点があつていない。虚ろな瞳をしていた。大魔王は心配そうに声をかけている。

「力加減を間違えたでしょうか？ 最初につかんだ方はあっさり潰れてしまいましたので、次はそつと掴むように心がけたのですが」

「おい、ロリ神！ どうした！」

コーイチは床にへたりこんだままのイシュタルにかけより肩をつかみ揺さぶった。人を小馬鹿にしたようないつもの不遜な態度などまるでなかった。イシュタルはただ揺さぶられるがままになっている。

「しっかりしろ！」

「お主……なぜここに……」

「しつかりしろよ！ 俺はずっとここにいる！ お前が来たんだよ！」

「なん……じゃと？」

イシュタルの瞳に光が戻りつつあった。ようやく自我を取り戻し始める。現状の把握がおぼろげながらに出来る。ここは主神デウスがいなくなったと思われる世界。これからまさに攻撃をしかけている世界だ。イシュタルは凍りついた。

「空間転移……じゃと？」

「いえいえ、そんなに大したものではありませんよ。多少空間をねじ曲げはしましたが、私は手を伸ばしただけです。ひつつかまえてひっぱってきました。まあ力ずくということですよ」

大魔王はこともなげに言うがそれができないからこそ、イシュタルはコーイチを送り込むのに再構築などという面倒な手法を取っていたのだ。イシュタルはその事実にとだ驚愕した。

「よし！ ロリ神！ お前が神パワーで大魔王を倒せ！ 俺にはもう無理だ！ お前ならなんとか出来るんだろ！」

コーイチは期待に満ちた眼差しでイシュタルを見つめた。

「ああ、わしとしたことがぼーっとしておったわ……ふざけた真似をしおって……」

イシュタルは完全に立ち直った。ゆつくりと体を起こすと立ち上がりあらためて大魔王と対面する。イシュタルは子供のような姿だ、当然見上げる形になる。

「さて、どうしましょうか？ お話をしましょうか。それとも戦いますか？」

「なめくさりおつて！ 消えてなくなるがよいわ！ 神的ニユート
リノ風走査光線！」

コーイチを異世界に送る際に使用した術だった。対象をニユート
リノの照射により塵に変える。イシュタルは右掌を大魔王に向け光
線を放った。大魔王の全身を覆いつくすかのような極太の光の奔流
だ。

「大魔王的アンチニユートリノ風位相反転防御壁！」

大魔王が右の掌を前へと突き出す。神の光線はその手のひらの前
に生じた輝く壁のようなものにぶつかる。それ以上進まない。かな
りの時間その光線は照射され続けたが、力尽きたのかその光線は徐
々に弱々しくなっていくやがて途絶えた。

最終的には両手を使って必死になっていたイシュタルはそのまま
の姿勢でかたまっていった。

「面白い技名ですね。私も適当に言ってみました。こんな感じでよ
かったですか？」

「貴様……この世界の神か！」

イシュタルはそう判断せざるを得なかった。神の力を打ち砕くの
は神以外にありえない。

「あんなわからずやでひげ面のおじいさんと一緒にしないでくださ
い。私は大魔王です。そもそも神などと自称するほど思いつ
てはいけません。まあその観点から言いますと、神を名乗るような

方達はどなたも思い上がっているということになってしまっていますので、あなたを面と向かって非難していることになってしまおうのですよ。よろしいか？」

「貴様！ 神を愚弄するか！」

「そう言われましても。今までお会いした事のある神という方々は、所詮血肉を備えた生き物でしかありませんでした。多少他の生き物に比べて優越した能力を持っている、その程度で万物の創造主や、全知全能などと詐称するのはやりすぎだと思えます。もう少し地に足をつけて生きてたほうがいいですよ？」

コーイチの顔色が青ざめてきた。この流れはまずい。明らかに大魔王の方が格上に見えた。何で神が大魔王に説教されてんだよ！
コーイチはあわてて会話においても押されぎみのイシュタルに話しかけた。

「何、大魔王になめた口聞かれてんだよ！ 神だろうが！ なんとかしろよ！」

「いや……わし、美と性愛の女神じゃし……戦いとか実は向いとらんのかもしれない……」

今更の告白にコーイチは愕然とした。イシュタルはその力を適当に振るうだけでどんな戦いにも勝利してきた。その為自分の力の及ばない敵と戦った記憶がない。その場合にどのように立ち振る舞えばよいのか思いつけなかった。イシュタルは自分が強いのかどうかわからわかっていなかった。

「じゃあ！ ほら戦の神とか武の神とか！ そーゆーのに助けてもらえよ！」

「！……そうじゃ！ ピュティアス！ あやつは太陽と勝利の神！ あやつなら……」

そこまで言っただけでイシュタルは血まみれの肉塊と化していたピュテ
ィアスの姿を思い出した。まだ混乱していたらしい。

「貴様！ な、なんとということ……太陽神を殺しおったのか！
いや、死んだとは……」

「もしかして一緒におられた方のことですか？ 死んでいると思っ
ますよ。動かなくなっていましたし」

「な、なんと……どうしてくれるのじゃ！ 奴は太陽を管理して
おった！ このままでは太陽が停止してしまう！ 暗黒と極寒の世界
と化してしまうぞ！」

「おや、それは災難でしたな」

大魔王はまるで他人事のようにそう言った。

「ちょっと待て！ どういうことだよ！ 太陽ってそんなんで止ま
るのかよ！」

コーイチがあわてた。元の世界など関係ない、そう思っていた。
だが今の話では元の世界が壊滅するということだ。両親や妹、友達
の顔がそして幼馴染のヨーコの顔が苦痛にゆがむ様が思い浮かんで
しまった。まだそれなりの未練はあったらしい。

「まあ、あなた達が私たちの天盤世界などどうでもいいと思っ
て変な人達を送り込んできたのと同じようなものだと思いますよ？ 私
もあなた達の世界などどうでもよいです。で、なにしてみましたし
ょうか？ そうそう、戦うんですか？」

「いや……わしでは勝てん……降伏する……」

「そうですね！ それはよかったです。無駄な戦いをする必要はな
いですよ」

大魔王は嬉しそうに両手を合わせた。あっさりといシユタルに背を向け、ロベルティーネに話しかける。

「ロベルティーネさん、この方たちの分のお茶を用意してください」
「おけー！ ちよいとまっつてねえ」

そんな話をしている。そのあからさまなスキをイシユタルは見逃さなかった。その両手に力を溜め始める。

スキありじゃ。

背を見せた大魔王へとイシユタルは襲いかかった。直接接触して力を注ぎ込んで分解してくれる！ 瞬時にそう判断した。

腰か足のあたりにでもしがみつけばいい。タツクルのような形でイシユタルは突進したがそれは空を切った。

大魔王がいない。そう思ったときには大魔王はステップバックしてイシユタルを向いていた。左足を軸に回転し、右足は大きく振り上げられている。大魔王の黒く長い髪が体の動きに遅れてたなびいている様が静止画のように見えた。こんな状況にもかかわらずイシユタルはそれを美しいと思ってしまうた。

次に何が起こるのか理解したのと、みぞおちにつま先がめりこんだのは同時だった。

大魔王はそのまま足を思い切り振り切って地の果てまで飛ぶような勢いで蹴り飛ばし、イシユタルは一瞬でその場から姿を消した。

その場にいたものにはそう見えた。だが、イシユタルは大魔王の右手にその細い首を掴まれていた。蹴り飛ばされたイシユタル自身にもその意味がわからない。急激に加速し目の前の景色が一瞬で遠ざかっていったと思ったら大魔王に掴まれている。

大魔王の細くしなやかな指がイシユタルの首へとめりこんでいっ

た。

「そういう楽しくない嘘をつかれるのは気分がよくないです」

そうは見えなかったが怒っているらしかった。だがイシュタルは自らの身に加えられた深刻なダメージによりそれどころではない。常に神の身を守るはずの不変の魔力がまるで効果を発揮していない。意識が朦朧としていた。

「なにを……した？」

「飛んで行かれると後でめんどくさいと思いましたので手を伸ばして掴んだだけです」

飛んでいくイシュタルには城の全景が見えていた。それほどには飛ばされていたが手が届くという。理解が出来無い。

「なぜ……不変属性イシュタルが……効かぬ……」

「先ほどから何か不思議そうにされていると思っていたのですがそんなことでしたか。それは効きませんよ。あんなものはただのマーキングです。壊さないでね。って書いてあるだけのことですから、それを私が守る必要はありません」

「馬鹿な……」世界”の理は絶対じゃ……」

「なんと言いますか……その”世界”に捕らわれたままでは私に勝つことは無理でしょう。私どころか魔界の中堅所の方にも勝てないと思いますよ?」

イシュタルは愕然とした。全ての物は”世界”の上で動いている。だからこそ、”世界”に不変と認められたのならそれを覆す術はない。あたりまえすぎてそんなことが出来るなどとは思えない。だがこの大魔王は”世界”を通さずにその影響を行使している。イ

シユタルはそんな存在を今まで見たことがない。だがここで思い至った。深淵に至りし者とはこのような存在をさすのではないか？

「助けてくれ……」

「うーん、どうしましょうか？ 一回嘘つかれましたからね。これも嘘でないと言えないじゃないですか？」

「そ、そうじゃ……人質じゃ……わしを人質にするがいい……殺しては人質にならんぞ……」

「どういうことですか？ 特にメリットがないように思いますけど」

「今この天盤を攻めるために艦隊が向かっておる、わ、わしがいると知れば交渉に応じるはずじゃ」

むろん、そんな事で攻撃が中止されるわけはなかった。主神デウスすら見捨てて攻め滅ぼそうというのだ。その程度の事で止まりはしない。イシユタルはただ助かりたい一心で希望交じりの嘘ともいえないあいまいなことを言った。

「この人達を送り込んできた件もそうですが、なぜそのような事になっっているんです？」

「この世界の天軸が閉じておる！ この天盤が通れんと困る奴らがおるんじゃ。この世界の神はその事についてまったく交渉に応じようとせんので、こいつらを送り込んで調査をしたりしたんじゃ。だが結局なにもわからんかったので、われ等が天上艦隊六億を持って天盤を砕くことになった。おぬしがいくら武勇にすぐれていようと天盤ごと砕かれてはなす術があるまい？ だが、わしがいれば攻撃は止められる、わしを生かしておく意味はあるじゃろ？」

「……天軸を通りたいだけで、天盤を砕くというのは調子にのりすぎではないですか？ その場合天軸を制圧すればいいだけでしょ？ 砕いてから領界を制圧するなどというのはなんでしょ？ 見せしめのつもりなんですか？ やはりあなたたちは思いがりすぎ

だと思っています」

「何がじゃ！ 辺境の蛮族どもが天軸を閉鎖などという方が思い上がっておるわ！ 二度とこのようなことをさせぬように徹底的な措置が必要に決まっておる！」

イシユタルは下手に出ているつもりだったがその化けの皮もすぐに剥がれた。今の理不尽な状況を腹立たしく思うも、自らが神でありそれだけで他者に優越するのだという思いにはまったく変わりが無い。

大魔王はその会話をどうでもいいと思いはじめたのか、つかんできたイシユタルをコーイチに向かって放り投げた。コーイチはイシユタルをあわてて受け止める。

「パエリアちゃん、ザミイツちから連絡入ってるんだけどつないでもいい？」

「ぴよ！」

ロベルティーネとひよちゃんが側までやってきていた。大魔王が了承するとひよちゃんの首についている鈴が声を発した。低い男の声だ。

『大魔王様のご尊顔を拝謁する栄誉に浴せぬこの不幸、どのようにしてあらわせば……』

「前置きはいいので本題に入ってください」

『はっ！ 実は大魔王代理兼大元帥兼魔界統括本部長もどきのテデスコ殿が大魔王様に申し上げたいことがあるとそのように言っておるのですが』

「おお、テデスコさんですか、いいですよ。代わってください」

『はっ』

しばらく雑音のようなものが鈴から聞こえてきた。ただ話者が変わるだけであるのになにやら向こうは騒がしくしているようだ。

『大魔王！ お前！ ……いや、大魔王様……代理ってどういうことですかね？ 嫌がらせですかね？』

「いろいろと思いはあるのですが、それらをまとめて総合的に考えて簡単に端的にあらわすとそうなりますね」

『やっぱりか！ いや、それにしてもやりすぎだろ！ 戦争始めるってどういうことだよ！ どういうことですか……』

テデスコがいちいち言い直しているのは、魔界側で言葉遣いに対して文句が出ているからのようだった。背後から脅すような声が聞こえてくる。

「今艦隊が攻めてくるという話を聞いたところだったのですが、そういうことですか。すみません、そこまでの事態をテデスコさんにお任せするつもりはなかったのです。せいぜい、孫が生まれたので名前を決めてくれ、とかそんな程度の仕事ぐるぐらいだと思っていました」

『大魔王ってそんな事やってんの！？』

「大変重要です」

『俺死ぬよ！ ストレスで死んじゃう！ 殺す気ないならなんとかしてくれ！ してください』

「わかりました。その件についてはこちらで引き継ぎますので、テデスコさんは足を嚙んだりせずにそこから寝てください。では、そうですね、現在の状況についてわかる方どなたかに代わってください」

どなたか。その言い方がまずかったのだろう。鈴からは轟音が聞こえてきた。あまりに大きな音のため鈴の最大音量に達したようだ。

それは何か争う音だった。

『ぎゃー、死ぬ！　せつかく助かりそうだったのに死んでしまう！』

テデスコの悲痛な声が爆音と破壊音の合間に聞こえてきた。

しばらくして静寂が訪れた。誰が代わるかが決まったのだろう。彼らが何かを決めるというのは大抵こんなものだ。意見が分かれれば戦って決める。それが魔界の流儀だった。ここだけを見られれば蛮族と罵られようと仕方がないとも思える。

『お久しぶりです、大魔王様』

「おお、タマちゃんさんではないですか。お久しぶりです」

大魔王に報告する権利を勝ち取ったのは球王タマちゃんだった。

『さつそくご報告を。天軸の上位方向から天軸に沿った形で他の天盤世界の艦隊が侵攻しており現時点で二億の艦隊が領界に進入しています。総数は六億程です。迎撃の為に雷王ゾネが天蓋の外で待機していますがいかがいたしましたでしょうか？』

「では、ゾネさんに代わってください」

『了解しました』

またしばらくの間が空く。この会話は大魔王がひよちゃんと向かい合う形で行われていた。他の者はそれを取り囲むようにして黙って聞いている。いくらスキだらけに見えようと、もうイシユタル達には何をする気にもなれなかった。

イシユタルは平然としているようではあったが内心驚いていた。

これほど早く侵攻してくると思っていなかったのだ。このままではこの世界ごと滅ぼされてしまう。不変のため死にはしないだろうが、天盤が碎かれるようなことがあれば、虚無に等しい天蓋の外

世界へと放り出される。その場合元の世界に戻るのはほとんど不可能となるだろう。

『久しぶりだねえ、大魔王様』

女の声が鈴から聞こえてくる。

「お久しぶりです、ゾネさん。さっそくですが、やっちゃってください」

『やっと攻撃許可が出たのかい、長々と待たせるんだからあいつらは』

「ああ、そうそう全滅させてくださいね。逃げるようならどこまでも追いかけて必ず一艦残らず全て塵に変えて下さい。彼らはどうやら見せしめがお好きなようですし、こちらもそれぐらいはやっておきますんと見せしめになりませんか」

『まかせときな！』

イシュタルは何を馬鹿なことを言っているのかと苦笑した。規模が違いすぎる。この天盤世界に天上艦隊に匹敵するだけの戦力がないことは、天盤の規模から見て明らかだ。この世界は天盤の上にくつつかの大陸と海を備えている。それだけだ。対してイシュタルの世界の天盤に乗っているのは太陽系だ。太陽を中心に冥王星あたりまでが彼らの領域だ。天軸は太陽を貫通するようにして存在し、天蓋は太陽系全てを覆う巨大なものとなる。

戦力比を考えると戦いにすらならない。イシュタルにとってそれは自明なことだった。

「この世界に対抗できるだけの艦隊などありはすまいに、おろかなことを言いおつて……」

「艦隊は神が持つてるのかもしれないけど確かに数はなさそうで

すね。でもまあ、ゾネさんだけで十分でしょう。そうですね、映像を見られないでしょうか」

「んー、そうだね、テオバルト物持ちいいからね、何かあったかもちよっと探してみる」

ロベルティーネが階下へと何かを探しに行く。すぐに手下のガーゴイルを複数引き連れて戻ってきた。ガーゴイル達は協力して大きな鏡を抱えている。

「これ使えるんじゃない？」

人の全身が映る大きさの鏡だった。何の飾りもないただの丸い鏡で支えになるようなものがない。それを立てた状態でガーゴイルが支えた。

「ではそれに中継されるようにしてもらってください」

ロベルティーネが予め準備をしていたのかすぐにその鏡に映像が映し出される。

真っ暗な空間に一人の女が浮いていた。

7話 代理（後書き）

力王とか蛇王とか話に関係ない適当な感じの魔王が色々出てくるのは、単に、球王タマちゃんって言いたくて、そんな流れにしたかっただけですw バレーのマスコットのバボちゃんみたいなもんだと思ってください。

後、不変についてわかりにくいかと思ったので補足しますと、Windowsで言えばファイルの属性の「読み取り専用」あんな感じですよ。あれは読取専用っていうフラグが立っているだけだったりしますよ、それを無視するようなアプリなりファイルシステムがあれば読み書きは可能になります。そんな感じですよw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2219w/>

大魔王が倒せない

2012年1月14日13時46分発行